静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第26集

原　川　遺　跡

Ⅳ

平成2年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書

本　文　編

1991

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第26集

原　川　遺　跡

Ⅳ

平成2年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書

本 文 編

1991

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

原川遺跡は、静岡県掛川市の西方、国道1号線と原野谷川が交差する同心橋一帯に位置している。今も豊かな水量で流れる原野谷川を始め逆川・垂木川といった中小河川は、氾濫や洪水を繰り返しながらも古代から多くの恵みを人々にもたらしてきた。また絶えず東西交通路の大動脈の中で生活文化が生み出されてきた地域でもあった。東には領家遺跡が、弥生時代から奈良・平安時代にいたる遺物を散布する地域として戦前から注目された。その西北にあたる原川地区一帯も広く遺物が散布する地域として知られていたが、その実態は不明のままであった。近年袋井バイパスの着工に伴う埋蔵文化財の発掘調査が対岸の袋井市側の坂尻遺跡でも行われ、遠江国佐益郡衙跡である事が明らかになった。掛川市側についても同心橋の掛け替え工事に伴い、埋蔵文化財の事前調査として本調査が計画され、この地域に初めて本格的な発掘調査が行われた。

5年間にわたる調査の結果、遺跡は弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の各時代にそれぞれの特色を持った複合遺跡で在ることが明らかになった。今回の『原川遺跡Ⅳ』は室町時代から幕末を対象とし、全国的にも調査例の少ない在郷町を報告できた。近世の原川遺跡は原川町と呼ばれる東海道に沿った集落で、今回、原川町に居住した庶民の生活ぶりについても考古学的に明らかにした点は注目されよう。

さらに、出土した陶磁器については肥前、瀬戸・美濃を中心に、地元初山焼や志戸呂焼が数多く出土し、近世における陶磁器の流通を考える上で良好な資料を提示できた。

幸いにも執筆に当たった足立順司主任調査研究員は、かねてから陶磁器研究にとりくんでおり資料を丹念に整理し、その記述もまた精緻である。

近世考古学は全国的にも緒についたばかりの分野だけに、本書刊行の意義は大きいものと考えている。

調査並びに本書の作成に当たっては、建設省・掛川市教育委員会・静岡県教育委員会を始めとする関係機関各位に多大な援助・協力を得ている。この紙面をかりて深くお礼を申し上げるしだいである。また調査を暖かく見守って頂いた地元の方々、寒暑にめげず発掘にあたった作業員の方々、地道な資料整理にあたった研究所の職員、多くの助言・指導を頂いた方々にも深くお礼申し上げたい。

1991年3月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長　斎藤　忠

例　言

1．本書は静岡県掛川市領家字原川に所在する原川遺跡の調査報告書の第４分冊である。

2．調査は昭和57年度～昭和62年度まで袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部地方建設局からの委託を受け、調査指導機関　静岡県教育委員会・調査調整機関掛川市教育委員会とし、調査実施機関は57年度に始め財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所、昭和59年５月１日からは財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が引き継いで実施した。

3．現地発掘調査は昭和57年９月１日から昭和62年12月30日まで行った。整理作業は62年度　弥生時代、63年度　古墳時代、平成元年度　奈良・平安時代を中心に、平成２年度　中・近世を対象に報告する。なお、62年度現地調査を行った領家遺跡については別に報告した。

4．各年次毎に調査概報を提出している（『原川遺跡』概報Ⅰ～Ⅴ）。各概報と本書の記述に差がある場合、本書の記述をもって報告とする。

5．原川遺跡の全体を通しての「位置と歴史的環境」「調査の方法」「調査の経過」「層位的観察」「遺跡の概観」等については『原川遺跡』第１章～第５章に述べたいので参照されたい。

6．本書の遺物写真は池田洋仁氏に撮影を依頼した。

7．本報告書の作成にかかわる資料整理・図版作成等については、佐々木富士子、望月節子を中心としながら、伊藤えり、鈴木和代、榊原久美子、岩辺友子、杉山暁子、中村由美子、愛野まき江、外岡みつ子、藤川みどり、葉山安子、堀　八重子、小野間薫子、杉山久子他の協力を得た。

8．本書は調査第三課長　佐藤達雄の指導のもとに調査研究員　鈴木基之の援助を得て整理を担当した足立順司が編集・執筆した。

9．漆器の鑑定は元興寺文化財研究所の北野信彦氏に依頼し、特論の原稿をいただいた。

10．本書作成に当たって楢崎彰一、大橋康二、村上伸之、柴垣勇夫、仲野泰裕、藤沢良祐、伊藤嘉章、小野正敏、関口廣次、寺島孝一、古泉　弘、橋口定志、小林　克、小川　望、森　伸一、長佐古真也、森本伊知郎、後藤建一、大隅信好、坪井俊三、松浦友司、磐田市埋蔵文化財センター、港区郷土資料館、上磯町教育委員会、龍華院の諸先生や諸機関の指導や協力を得た。

目　　次

序

例　言

第1章　中・近世の遺構・遺物の整理とその方法 …… 1

第1節　本書の構成 …… 1

第2節　報告書の記述 …… 2

第2章　各区の遺構 …… 5

第1節　6区の遺構 …… 5

第2節　1区の遺構 …… 10

第3節　3区の遺構 …… 16

第4節　4区の遺構 …… 19

第5節　9区の遺構 …… 22

第6節　12区の遺構 …… 30

第7節　10区の遺構 …… 35

第8節　14区・15区の水田 …… 44

第3章　出土遺物 …… 49

第1節　土器 …… 49

第2節　文字資料 …… 137

第3節　石製品 …… 146

第4節　木製品 …… 148

第5節　金属製品　1　銭貨 …… 158

2　煙管 …… 171

3　鉄・銅製品 …… 171

第4章　考察 …… 175

第1節　遺構の変遷 …… 175

第2節　歴史の中の原川 …… 178

第3節　カワラケと内耳鍋について …… 187

特　論　原川遺跡出土漆器資料の製作技法　北野信彦 …… 193

挿図目次

第 1 図　原川遺跡調査区配置図……2
第 2 図　地籍図による幕末・明治期の原川町概念図……3
第 3 図　6区遺構全体図……6
第 4 図　土坑・SH601・SH602　実測図……7
第 5 図　溝状遺構　SE601　実測図……9
第 6 図　1区遺構全体図……11・12
第 7 図　SH103・SH104　実測図……13
第 8 図　SH105・SH106　実測図……14
第 9 図　SE101・SE102　実測図……15
第 10 図　3区遺構全体図……17
第 11 図　溝状遺構　その他　実測図……18
第 12 図　埋甕実測図・銭貨拓影図……19
第 13 図　4区遺構全体図……20
第 14 図　溝状遺構　土坑　実測図……21
第 15 図　9区遺構全体図……23
第 16 図　SH901・SE901　実測図……25
第 17 図　SF901　集石墓・集石・埋甕　実測図……27
第 18 図　溝状遺構実測図……28
第 19 図　SX901・SX902・SX903・SX905　実測図……29
第 20 図　12区遺構全体図……31
第 21 図　溝状遺構実測図……32
第 22 図　土坑実測図……34
第 23 図　SX1203・SX1206・SX1207・SP12130　実測図……35
第 24 図　10区遺構全体図……36
第 25 図　SH10C01・SH10B01　実測図……38
第 26 図　SH10B02実測図……39
第 27 図　土坑実測図……41
第 28 図　土坑実測図……42
第 29 図　土坑・その他実測図……43
第 30 図　14・15区遺構全体図　全体図ほか……45・46

第 31 図　6 区出土遺物　その 1　ＳＤ601 …… 51
第 32 図　6 区出土遺物　その 2　ＳＤ601 …… 52
第 33 図　6 区出土遺物　その 3　ＳＤ601・ＳＤ602 …… 54
第 34 図　6 区出土遺物　その 4　ＳＤ602・ＳＥ601　土坑ほか …… 55
第 35 図　6 区出土遺物　その 5　土坑　包含層 …… 57
第 36 図　6 区出土遺物　その 6　包含層 …… 58
第 37 図　6 区出土遺物　その 7　包含層 …… 60
第 38 図　6 区出土遺物　その 8　包含層ほか …… 61
第 39 図　1 区出土遺物　その 1　ＳＥ102　包含層 …… 63
第 40 図　1 区出土遺物　その 2　包含層 …… 65
第 41 図　1 区出土遺物　その 3　包含層 …… 67
第 42 図　1 区出土遺物　その 4　包含層 …… 69
第 43 図　1 区出土遺物　その 5　包含層 …… 70
第 44 図　1 区出土遺物　その 6　包含層 …… 71
第 45 図　1 区出土遺物　その 7　包含層 …… 72
第 46 図　1 区出土遺物　その 8　包含層 …… 73
第 47 図　1 区出土遺物　その 9　包含層 …… 75
第 48 図　1 区出土遺物　その 10　包含層 …… 77
第 49 図　1 区出土遺物　その 11　包含層 …… 79
第 50 図　1 区出土遺物　その 12　包含層 …… 80
第 51 図　1 区出土遺物　その 13　包含層 …… 81
第 52 図　1 区出土遺物　その 14　包含層 …… 83
第 53 図　1 区出土遺物　その 15　包含層 …… 84
第 54 図　1 区出土遺物　その 16　包含層 …… 86
第 55 図　1 区出土遺物　その 17　包含層 …… 87
第 56 図　1 区出土遺物　その 18　包含層 …… 89
第 57 図　1 区出土遺物　その 19　包含層 …… 90
第 58 図　1 区出土遺物　その 20　包含層 …… 91
第 59 図　1 区出土遺物　その 21　包含層 …… 92
第 60 図　3 区出土遺物　その 1　溝　包含層ほか …… 95
第 61 図　3 区出土遺物　その 2　包含層 …… 96
第 62 図　3 区出土遺物　その 3　包含層 …… 97
第 63 図　4 区出土遺物　その 1　溝　土坑 …… 99

第 64 図　4 区出土遺物　その 2　土坑 …… 100
第 65 図　4 区出土遺物　その 3　土坑　包含層 …… 102
第 66 図　4 区出土遺物　その 4　包含層 …… 104
第 67 図　4 区出土遺物　その 5　包含層 …… 105
第 68 図　9 区出土遺物　その 1　溝　土坑　包含層ほか …… 108
第 69 図　9 区出土遺物　その 2　包含層 …… 109
第 70 図　9 区出土遺物　その 3　包含層 …… 110
第 71 図　12区出土遺物　その 1　溝　土坑 …… 112
第 72 図　12区出土遺物　その 2　溝　土坑 …… 114
第 73 図　12区出土遺物　その 3　溝　土坑ほか …… 115
第 74 図　12区出土遺物　その 4　包含層 …… 117
第 75 図　12区出土遺物　その 5　包含層　9・12区接合土器 …… 118
第 76 図　10区出土遺物　その 1　溝　土坑 …… 120
第 77 図　10区出土遺物　その 2　溝　土坑ほか …… 122
第 78 図　10区出土遺物　その 3　溝　その他ほか …… 124
第 79 図　10区出土遺物　その 4　土坑　包含層ほか …… 125
第 80 図　出土遺物　文字資料　その 1　6・1・10区 …… 139
第 81 図　出土遺物　文字資料　その 2　1・12・10区 …… 141
第 82 図　出土遺物　文字資料　その 3　1・10区 …… 144
第 83 図　出土遺物　石製品　その 1　石臼・石塔 …… 147
第 84 図　出土遺物　石製品　その 2　硯・砥石 …… 148
第 85 図　出土遺物　木製品　その 1　6・1・4・12・10区 …… 150
第 86 図　出土遺物　木製品　その 2　1・9・12・10区 …… 151
第 87 図　出土遺物　木製品　その 3　4・10区 …… 153
第 88 図　出土遺物　木製品　その 4　10区 …… 154
第 89 図　出土遺物　木製品　その 5　10・12区 …… 156
第 90 図　出土遺物　木製品　その 6　10・12区 …… 157
第 91 図　銭貨拓影図　その 1　6区 …… 160
第 92 図　銭貨拓影図　その 2　6・1区 …… 161
第 93 図　銭貨拓影図　その 3　1区 …… 162
第 94 図　銭貨拓影図　その 4　1区 …… 163
第 95 図　銭貨拓影図　その 5　1・3区 …… 164
第 96 図　銭貨拓影図　その 6　3・4区 …… 165

第 97 図　銭貨拓影図　その7　4・9区 …… 166
第 98 図　銭貨拓影図　その8　9区 …… 167
第 99 図　銭貨拓影図　その9　9・12・10・7・8区ほか …… 168
第100図　金属製品　その1　キセル …… 172
第101図　金属製品　その2 …… 173
第102図　原川遺跡変遷模式図（第1・2期）……179・180
第103図　原川遺跡変遷模式図（第3期）……181・182
第104図　戦国の原川とその周辺 …… 183
第105図　『東海道分間延絵図』の原川町 …… 186
第106図　原川遺跡出土カワラケ・内耳鍋編年図 …… 190
第107図　漆塗り構造の分類 …… 195
第108図　塗り構造（Ⅰ）（顕微鏡写真）……195
第109図　塗り構造（Ⅱ）（顕微鏡写真）……195
第110図　赤色系漆のX線分析結果（ベンガラ）…… 195
第111図　赤色系漆のX線分析結果（朱）…… 195
第112図　金蒔絵のX線分析結果（錫粉）…… 195
付図　中世後半・近世遺構全体図

挿表目次

第1表　出土土器一覧表……128～136
第2表　出土銭貨一覧表……169～170
第3表　原川町地籍図面積一覧表 …… 178
第4表　出土漆器資料観察表 …… 194
第5表　ろくろ挽き物の用材分類一覧表 …… 196

図版目次

図版 1　原川遺跡遠景（航空写真）

図版 2　1．6区1面全景　2．6区3面全景

図版 3　1．SH601・SH602　2．柱穴群

図版 4　1．SE601　2．6区柱穴（礎板）　3．6区柱穴　4．6区柱穴（栗石）
5．6区試掘坑　柱穴検出状況

図版 5　1．1区全景（航空写真）　2．SH106

図版 6　掘立柱建物跡群（SH103～SH106）

図版 7　1．SH101　2．1区天目茶碗（30）出土状況　3．SH106
4．1区柱穴検出状況

図版 8　1．SE101　2．SE102

図版 9　1．3区全景　2．SD303土層断面

図版10　1．SD303近景　2．SF301　3．3区埋甕

図版11　1．4区全景　2．SD401　3．SF404

図版12　1．SD406石塔出土状況　2．SD401遺物出土状況
3．SD401（皿1）出土状況

図版13　1．9区1面全景　2．9区2面全景

図版14　1．9区西側柱穴群　2．9区柱穴　3．9区柱穴　4．9区柱穴
5．9区柱穴

図版15　1．SH901　2．SE901全景　3．SE901掘り方

図版16　1．SD908・SD910・SX902（西から）　2．SX905・SD909（東から）
3．SX902　4．9区早桶出土状況

図版17　1．9区集石墓1　2．9区集石墓2・3・4　3．9区集石墓9・10・11

図版18　1．9区集石墓19　2．9区集石墓19　扇子出土状況　3．9区埋甕

図版19　1．SX902　2．SX902　3．SX902遺物出土状況

図版20　1．SX905遺物出土状況　2．SX905遺物出土状況　3．SX905遺物出土状況

図版21　1．12区全景　2．12区全景

図版22　1．SD1201・SD1202　2．12区遺物出土状況　3．12区遺物出土状況

図版23　1．SD1206・SD1207　2．SD1207遺物出土状況　3．SD1207遺物出土状況
4．SD1205鋤出土状況

図版24　1．SF1207　2．SF1207杭列　3．SF1207瓶子出土状況　4．SP12130

図版25　1．10C区全景　2．10B区全景（SX10B01ほか）

図版26　1．10B区柱穴・埋桶　2．10C区埋桶

図版27　1．SH10C01　2．10B区柱穴　3．10B区柱穴　4．10B区柱穴
5．10B区柱穴

図版28　1．SD10B05　2．SD10B05　3．SD10B03

図版29　1．SD10B08　2．SD10B10　3．SD10B10杭列

図版30　1．SF10B01　2．SF10B02　3．SF10C01

図版31　1．SF10B03　2．SF10B03遺物出土状況　3．SP10C01

図版32　1．SF10C09墨書土器出土状況　2．SF10C16　3．SF10C16
4．SF10C06糞笠出土状況

図版33　1．SX10B02　2．SX10B06　3．SX10B01杭列

図版34　1．SX10B01　2．SX10B01近景　3．SX10B04

図版35　遺物出土状況
1．SF10B02　2．SX10B02　3．SX10B02　4．SF10B02
5．SF10B01　6．SF10B01　7．SF10C09　8．SF10B01

図版36　遺物出土状況
1．SF10B09　2．SF10C09　3．SF10C09　4．SF10B02
5．SF10C09　6．SF10B01　7．SX10B01　8．SF10B01

図版37　1．14区水田　2．15区出土天目茶碗　3．14区水田
4．15区水田全景（東よりSX1501）

図版38　6区出土遺物　その1　SD601

図版39　6区出土遺物　その2　SD601

図版40　6区出土遺物　その3　SD601・SD602

図版41　6区出土遺物　その4　SD601・SD602

図版42　6区出土遺物　その5　SD602・SE601・SP621・SF607・SF610

図版43　6区出土遺物　その6　SD602・SF610・SF603・SP680・包含層

図版44　6区出土遺物　その7　SP608・包含層

図版45　6区出土遺物　その8　包含層

図版46　6区出土遺物　その9　青磁・白磁　SD601・SD602・包含層

図版47　1区出土遺物　その1　SE102・包含層

図版48　1区出土遺物　その2　包含層

図版49　1区出土遺物　その3　包含層

図版50　1区出土遺物　その4　包含層

図版51　1区出土遺物　その5　包含層
図版52　1区出土遺物　その6　包含層
図版53　1区出土遺物　その7　包含層
図版54　1区出土遺物　その8　包含層
図版55　1区出土遺物　その9　包含層
図版56　1区出土遺物　その10　包含層
図版57　1区出土遺物　その11　包含層
図版58　1区出土遺物　その12　包含層
図版59　1区出土遺物　その13　包含層
図版60　1区出土遺物　その14　包含層
図版61　1区出土遺物　その15　包含層
図版62　1区出土遺物　その16　包含層
図版63　1区出土遺物　その17　包含層
図版64　1区出土遺物　その18　包含層
図版65　1区出土遺物　その19　包含層
図版66　1区出土遺物　その20　中国製青磁・白磁（包含層）
図版67　1区出土遺物　その21　包含層（大皿片）
図版68　3区出土遺物　その1　SD303・その他
図版69　3区出土遺物　その2　包含層
図版70　3区出土遺物　その3　包含層
　　4区出土遺物　その1　SD401・SD405
図版71　4区出土遺物　その2　SD405・SF401・SF403・SF404
図版72　4区出土遺物　その3　土坑・包含層
図版73　4区出土遺物　その4　包含層
図版74　4区出土遺物　その5　包含層
図版75　4区出土遺物　その6　包含層
図版76　9区出土遺物　その1　土坑・その他
図版77　9区出土遺物　その2　包含層
図版78　9区出土遺物　その3　包含層
図版79　出土遺物　青磁・白磁（9・10・12区ほか）
図版80　12区出土遺物　その1　SD1206・SD1207
図版81　12区出土遺物　その2　土坑・その他
図版82　12区出土遺物　その3　SP12130・包含層

図版83　12区出土遺物　その4　包含層
10区出土遺物　その1　土坑・溝　土製品
図版84　10区出土遺物　その2　溝・土坑・その他
図版85　10区出土遺物　その3　溝・その他　土製品
図版86　10区出土遺物　その4　溝・土坑・その他
図版87　10区出土遺物　その5　1．SX10B01　2．SX10B01
図版88　1区出土遺物　通い徳利
図版89　文字資料　その1　木札・墨書土器ほか
図版90　文字資料　その2　墨書土器ほか
図版91　文字資料　その3　墨書土器ほか
図版92　文字資料　その4　墨書土器
石製品ほか
図版93　木製品　その1
図版94　木製品　その2
図版95　出土銭貨　その1　6・1区
図版96　出土銭貨　その2　6・1区（X線写真）
図版97　出土銭貨　その3　1区
図版98　出土銭貨　その4　1区（X線写真）
図版99　出土銭貨　その5　1・3区
図版100　出土銭貨　その6　1・3区（X線写真）
図版101　出土銭貨　その7　4・9区
図版102　出土銭貨　その8　4・9区（X線写真）
図版103　出土銭貨　その9　9・12・10・7・8区ほか
出土銭貨　その10　9・12・10・7・8区ほか（X線写真）
図版104　金属製品　その1　キセル
図版105　金属製品　その2

第1章　中・近世遺構・遺物の整理とその方法

第1節　本書の構成

『原川遺跡Ⅳ』は原川遺跡の中・近世（室町期以後、幕末まで）の遺構・遺物を対象としている。『原川遺跡Ⅰ』でも述べたように本遺跡が弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世のそれぞれに特色をもつ複合遺跡で、各時代毎に報告することにしたためである。なお『原川遺跡Ⅳ』は原川遺跡発掘調査報告書の最終巻にあたる。

1．遺構と近世原川町

近世原川町

原川遺跡の大部分は江戸時代には「原川町」と呼称され、東海道の宿場町袋井宿と掛川宿の間にあって、いわゆる間（あい）の宿と呼ばれる機能を有していた。

『掛川誌稿』（文化文政年間編）によれば[1]、

「原川町

川の名を町の名とす、此地袋井と掛川の間にありて、旅客のために酒肆茶店を設けて生業とする所なれば、國初前に早く町となりて、軒を並べしものと見へて、慶長九年検地帳にも、原川町六十四人の宅地及び田畑の歩数を載たり、又寛永十六年城主よりあたへし文書では原川宿とも書り、是後世に間の宿と呼ぶ所なればなり

行程　一里十九町

田　二十五石四斗一升三合

田畑固より多からず、皆町の宅地にあたえし所にして大池町廿九石五斗の類の如し

戸　四十六、内個戸一

口　百九十四　内男九十一　女百三」　（以下略）

とある。

なお、それ以前、史上有名な文録二年の太閤検地において、原川村の村高として十九石余の村高が記録されている。原川村の村高は、江戸時代を通じて二三石から二五石余を前後するなど、さして変化が認められない[2]。

「掛川誌稿」の記述

『掛川誌稿』に記述があるように、村高のほとんどが宅地にかけられた年貢高と推定され、慶長期以後、江戸時代の戸数も四十戸から五十戸前後とほぼ横ばい状況であったことが推定される。

ところで江戸時代に編まれた地方誌には掛川藩領とその周辺では、東海道の宿場町以外、城下町部分を除くと原川町と森町が「町」として呼称されており、これらは在郷町の範疇として考えることができる。

くしくも今回の発掘調査は、大部分こうした江戸時代の在郷町「原川」を対象としたものとなった。

しかしながら、先に掲げた『掛川誌稿』と『遠江國風土記伝』『東海道分間延絵図』など地誌類や道中記類以外、いわゆる地方文書がほとんど残存していないことにより、文献資料との比較によって原川町の様相を論ずることは、不可能といってよい状況であった。

第２節　報告書の記述

１．遺構の認識

検出された遺構は、一口に建物跡といっても、家屋の基礎部分が残されているのみであったが、掘立柱建物跡、石場立建物跡、小屋を含んでいる。また土坑については、芥溜と称すべき機能のものが多く認められ、遺構の性格も奈良・平安時代まで異なっていわゆる生活の臭いを感じさせ、そのままその性格まで推定できるものが認められる。この点、本研究所の遺構名称の範囲で「ＳＸ＝その他の遺構」と一率に律すべきではないと考え、集疃墓や埋甕、芥溜などの呼称を使用し、桶を埋置したものを埋桶とした。

遺構の標記

検出した遺構は当研究所の整理記号で『原川Ⅰ』に準じて標記した。各遺構の記号は下記の通りである。

ＳＨ　建物跡（小屋・石場立建物、掘立柱建物を含む）　ＳＰ　柱穴・小穴
ＳＤ　溝（旧河道を含む）　ＳＦ　土坑（芥溜を含む）　ＳＸ　その他
ＳＥ　井戸　ＳＫ　畦畔　ＳＡ　杭列

ほかに疃石墓、埋甕は墓として一括した。

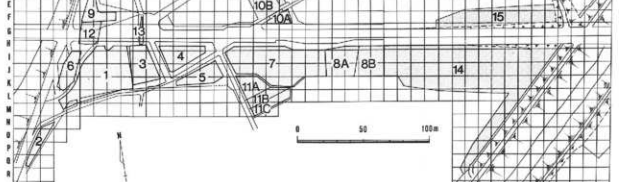
『原川Ⅳ』では原則として縮尺を遺構は1/60、遺物は1/3、1/2、1/1で表示し、例外は個別にその縮尺を表示した。

ところで各調査区の調査面が同じ１面と呼称していても、かならずしも同じ時期の面ではない。

遺構の検討方法

また、上層については明治以降のあいつぐ地業によって削平や盛り土を繰り返しているため、重機を入れ表土除去を実施した。結果としてある調査区では幕末の遺構から調査し、別の調査区では江戸前期から調査を実施するなどとなった。調査面についても集落が営まれる範囲において建替えやなんらかの地業がくりかえし行われ、攪乱をうけている。さらにいわゆる中間層と呼ぶべき厚い自然堆積層が存在せず、層位的にも時間的断絶が認められない。このことは、考古学のタイムスケールの中ではそれほど時間的経過をたどっていないこととともに、原川町が今日まで永続的に営まれたことによろう。

先に述べたように各遺構の検討を行い、さらに各調査面の年代を考えた。ところで１区については１面から３面として認識し発掘調査したが、２、３面についてはわずか数セン



第１図　原川遺跡調査区配置図

チの高低差であって、同一建物の柱穴が面を異にして検出されたり、同一時期の遺物が認められたことから、本来、同一面とすべきであったと解すべきであろう。また、6区北側で検出された溝状遺構は隣接した1区に続いていたと考えられるが、調査では確認されていないなど齟齬をきたしている。検出したレベルからすれば1区3面より下位に遺構面の存在した可能性が大きい。したがって、1区北側についてはさらに下位に6区より続く遺構の存在を認めざるをえないが、南側ではトレンチによって無遺物層が確認されており、どの範囲に文化層が存在したのかは判断できる材料はない。

また3区、4区、10区では土坑や塵溜、ピット、柱穴のように、当時の地表面より掘り下げられた遺構のみが残されていることもあって、同一調査面で異なる時期の遺構が検出させることはすでに指摘した通りである。

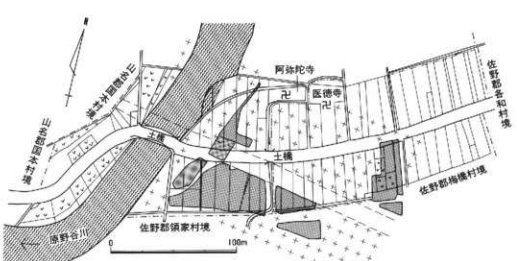
さらに14区、15区のように居住域ではなく、他村の水田域である場合も存在する。

遺物の出土の見なかった遺構については、包含層出土の遺物や同一面での遺構を検討し、室町後期以後と考えられるもののみ全体図に掲げた。

2．全体図の作成方法

中・近世の遺物は調査区の全体から検出されているが、遺構については『原川Ⅰ』基本層序にも述べた通り奈良・平安時代、また調査区により中・近世の遺構まで同一調査面で重複して検出されていることもある。このため遺構の整理は、まず区毎の遺構カードの作成を進める中で個々の遺構の検討、抽出、時期決定に努めた。特にピットについては、その中に含まれる遺物を下限として調査状況を参考にしながら各時期にあてた。無遺物の柱穴は、調査所見などから最も妥当な年代に含めたものもある。

このような個々の検討に基づいて別添付図の中・近世遺構全体図を作成した。この中で東側部分に当たる11区・7区・8区・14区・15区について弥生時代以後は中世初期までの遺構が中心で水田遺構以外、近世と限定できるものはなかったが、遺物は出土しているため、区域のみ図示した。



第2図　地籍図による幕末・明治期の原川町概念図

3．遺物の整理

遺物の整理方法

遺物については中・近世の遺構出土の遺物を中心に接合・復元に努め、実測図の完成したものから陶器・磁器・土器・銭貨・木製品・文字資料別にカードを作成して遺構毎に整理した。特にまとまりのある一括遺物や建物の時期を決める包含層について接合復元には手をかけ、また包含層についても特に注意すべき資料の図化に努めた。遺物写真は6×7版の中型カメラを使用して撮影した。さらに主要な遺構遺物は、遺構平面図版中にその出土地点、また断面図中に出土レベルを示すように努めた。

注

（1）『掛川誌稿』（名著出版刊本）1972
（2）小和田哲男「関ヶ原のあとさき」『掛川市史　中巻』1984

第２章　各区の遺構

第１節　６区の遺構

６区からは３面の遺構面が認められた。１面については、埋桶、ピット、土坑が検出された。試掘溝の上層部においては石場立建物の基礎が認められたが、検出面は１面より上位であり１面以後、小屋もしくは家屋が建てられていたことが想定される。あるいは、１面で検出された埋桶は底部を残すのみであって、後世、地業のため、上部を削平された可能性も否定できない。したがって、埋桶と石場立建物も時間的には同時存在であるかも知れない。

家屋の範囲

遺構や包含層から出土した陶磁器からすれば、１面の時期はほぼ18世紀中葉から幕末までであろう。

２面についてはＳＤ601、ＳＤ602を境として様相が異なる。北側では壺掘りした掘立柱建物の柱穴が約20ヶ所認められたが、建物の規模や方向を示すだけの判断材料は認められなかった。

この地域に家屋が想定される。しかしながらＳＤ601、ＳＤ602より以南では円形の土坑やピットが認められたのみで、１面で認められた埋桶と形状や規模も同じ様相を呈していた。出土遺物はきわめて少ない。

３面では調査区中央で掘立柱建物跡１棟が認められた。そのほか南側では円形土坑やピットが散在的に認められた。以上のように６区は、家屋が建てられた地域とそれ以外に大別される。

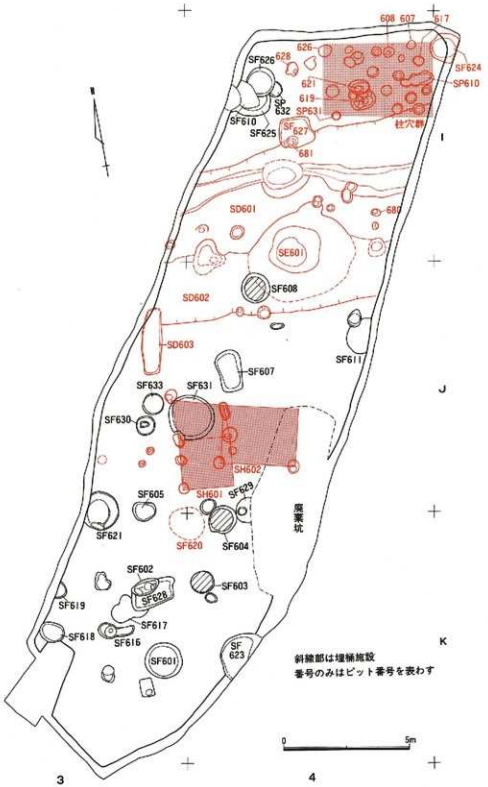
SH601

第３面からは、堀立柱礎石建物の壺掘りによる柱穴がＪ－４グリッドで検出された。しかしながら東側に幕末期の大きな攪乱が及んでおり、全体の規模は不明である。いずれにせよ南北に棟方向を向けた２棟の重複と考えられるが、１棟は玉石地業で、他の１棟は割栗地業である。前者のＳＨ601については、柱穴は直径0.6mの壺掘り穴に長径0.3m、短径0.22mの玉石を中心に据えており、他の柱穴より大きい。建物の東側が攪乱を受けているものの、中心の柱とすれば、後世の大黒柱にあたるものであろうか。柱穴の間隔は約1.8m前後である。建物の規模は現状では１間×２間であるが攪乱を受けた部分を考えると、もとは２間×２間以上と推定される。主軸方位はＮ－２°－Ｅである。柱穴の中に礎板が残存するものもある。時期については、２面からの検出であるので16世紀または17世紀と大きな時間幅でしかとらえられなかった。

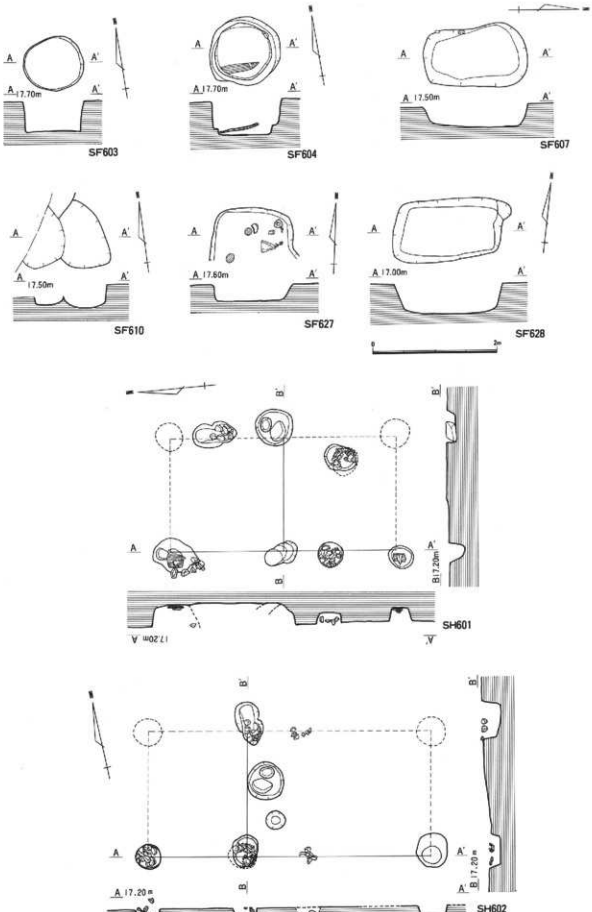
家屋の重複

SH602

柱穴のうち南北の柱穴には割栗が認められないが、調査時に作成された図面には「礫取りはずす」と注記があるので、この建物の柱穴は割栗地業が行われたと理解できる。柱穴は長径0.5m、短径0.3m前後でほぼ同じ大きさである。柱間は桁方向で1.5mと2.9mと間柱を持たないで２間取りし、部屋割りを大きくとっている。桁行4.6m、梁行1.9mで２間×１間の東西棟である。ＳＨ601とＳＨ602については主軸方位はＮ－15°－Ｗであり、大きくずれるため、建て直しと考えられるが、前後関係は不明である。



第3図　6区遺構全体図（1：150）



第4図　土坑・SH601・SH602　実測図

柱穴群

調査区の北東で柱穴群が認められたが、直径0.4m～0.3mを測る。柱穴の中には柱、礎石なども残存しているものもある。建物の規模、柱穴の対応関係は不明である。建物は何回かの重複があると推定される。建物の時期は、柱穴から出土した遺物から16世紀後半から17世紀初めと推定しておきたい。

埋桶SF603

1面では埋桶が多く認められた。そのうちSF603と呼称した埋桶はJ－3グリッドに位置し、直径0.98m、深さ0.46mを測る円形を呈する土坑で桶が埋設されていた。覆土から鮫肌釉の急須、燈明皿、蓋物の茶碗片が少量出土した。天保年間から幕末の遺構と考えられる。

埋　桶　**埋桶SF604**

K－4グリッドに位置する。直径1.13m、深さ0.57mを測る円形を呈するもので、桶を収めるために下部を段掘りしている。19世紀前半の染付磁器と明治13年発行の1銭銅貨とともに銅版プリントの染付磁器が出土しており、江戸後期から明治前半までの遺構と考えられるが、幕末から明治前半と考えておきたい。それにしても上部が開いていたので、長い期間の遺物が流入したと考えられる。

SF607

土　坑　J－4グリッドに位置する。長径1.69m、短径0.9m、深さ0.4mを測る楕円形を呈する土坑である。灰釉陶器、山茶碗片のほか江戸後期から幕末の陶磁器が出土している。

SF610

H－4グリッドに位置する。調査区の隅にあるため、全形は不明であるが、長径1.35mを測る土坑が重なっている。覆土からは灰釉陶器、カワラケほか、18世紀後半から幕末の仏餉器、擂鉢、茶碗片が出土している。

SF627

第2面I－4グリッドに位置し、SD601により切られていると考えたが、あるいは同時存在かも知れない。灰釉陶器片ほか17世紀前半からの陶磁器が少量出土しているが、新しい時期のものは江戸時代後期、幕末である。土坑と考えたが、SD601にともなうかもしれない。

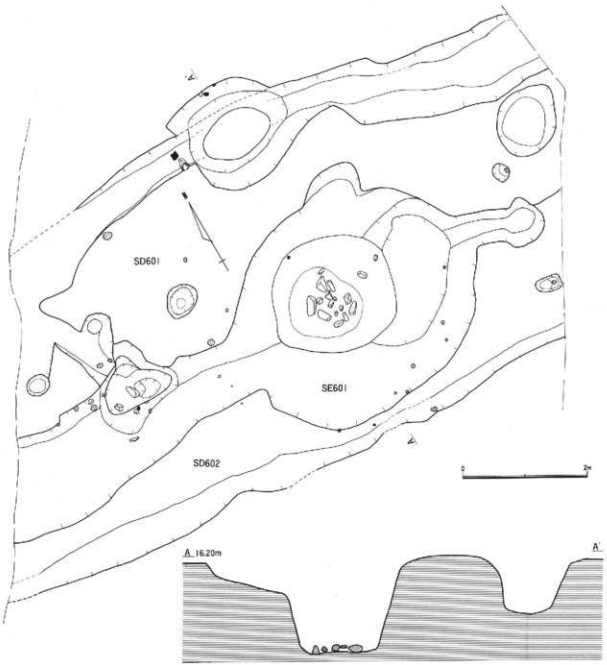
SF628

第3面K－3グリッドに位置する。長径1.63m、短径1.0m、深さ0.45mを測る長方形を呈する土坑である。土師器、須恵器にまじって江戸後期か幕末の擂鉢や甕の破片が少量出土している。

SD601・SD602

調査当初、1条の溝として発掘したが、調査途中より、底面と土層断面を検討した結果、2条の溝状遺構と判断できたので、SD601（古）、SD602（新）と呼称した。したがって
自然流路　遺物の取り上げ途中の混入や錯綜があると思われるが、大筋ではSD601を16世紀後半から16世紀末、SD602を16世紀末から17世紀後半までの時期と判断しておきたい。

なおI－4グリッドからは直径1.88m、深さ1.4mを測る掘り込みが認められ、底面に長径0.3m、短径0.1m大の礫が敷かれており、周囲には細い杭が巡らされていた。現地では井戸とも考えられ、SE601と呼称された。出土した遺物からは16世紀後半から17世紀前半で溝状遺構と同時期と考えられる。しかしながら溝状遺構とともに内耳鍋をはじめとし、



第5図　溝状遺構　SE601　実測図

廃棄された多くの陶磁器片が出土しており、いわば生活の過程で生じたゴミなどの廃棄物を溝の中に投げ捨てた状態であって、飲料水をこの場所より汲み上げるとは考えられない状況であった。井戸として機能した時期はごく短期間であったのかもしれないが、別の機能を考えたほうがよいのかもしれない。周辺に5cm大の杭を廻しており、あるいは上部に板材を敷きつめたかとも思われる。

6区の遺構をまとめるとつぎのようになろう。第1点として16世紀代から17世紀中頃まで溝状遺構の南北に掘立柱建物が建てられていた。しかしながら第1面、それ以後には石場立建物の存在が確認できたが、明確な年代観を示す材料はない。ただ第1面の年代観からすれば大つかみに18世紀後半から幕末、とそれ以後、といえよう。

第2点として1面から検出された埋桶は、民俗例からすれば厠あるいは寝尿溜であろう。

また2、3面で認められた円形土坑についても数少ない遺物から18世紀後半から幕末という時期を考えるものもある。おそらく大半が埋桶であったものと推定される。また長方形を呈する土坑は塵溜と推定される。

第2節　1区の遺構

地籍図と調査結果

1区第1面は南北方向の溝によって3ヶ所に区画されていた。明治前半代に作成された地引図（地籍図）よると、この区画はほぼ地引図（地籍図）に現れた屋敷の区画に対応する。この地境溝は幅0.7mを測り、中央部に約0.4mおきに直径3～5cm大の丸杭を打っていた。このことよりこの杭列は垣根の機能をもっていたと考えられるが、板垣や竹垣のように間隔を開けずに密集した塀の形態をとるものではない。むしろ地境に基づいて溝を布掘りし、一定の間隔をおいて杭を打ち、さらに控え柱や横木をわたしていたものと考えられる。おそらく一般的在り方からすれば、溝は別の土を入れ、垣根を固定するため裏込めとして叩きしめられ、さらに当時の地表面と同じ高さに整地されたと推定される。

埋桶2ヶ所

また中央部の屋敷跡で埋桶2ヶ所が検出された。外に設置された厠と推定される。ほかに不定形を呈する攪乱坑とされたものは幕末期までの陶磁器が含まれており、塵溜と考えられる。ただし長方形や正方形を呈する攪乱坑は土管や碍子が出土し、近・現代に属すると考えられる。なお石場立建物の礎石については、現地調査の段階で表土除去によって外したとのことである。また東側第3列の屋敷地では石場立建物跡もしくは掘立柱建物跡と推定される建物跡2ヶ所で確認された。

井　戸

第2面、第3面では掘立柱建物と井戸が検出された。しかしながら現地調査では同じ建物の柱穴も面を異にして検出されたりした。同時に同じ屋敷地割の中で建物が次々と立て直されているため、建物の存在した範囲は判明するものの、間取りや方位については不明な点が多い。したがって、以下の記述では柱間の取り方や柱穴の底面を検討し、あくまでも最小面積で建物の規模と方位が推定できるとして記述した。建物の時期については柱穴からの遺物がないことが多いので判断できないが、グリッドでの出土遺物の年代は16世紀から17世紀代を示している。

SH101

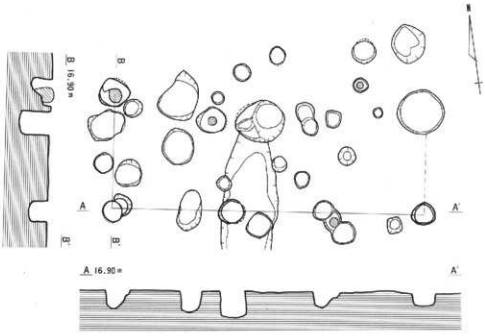
Ⅰ－7、K－7グリッドで検出された。主軸はN－2°－Eの方位で、方形の柱穴を壺掘りした建物で、現地調査の段階で後世の建物跡と考えられ、検出面での柱穴の輪郭が図化された。隅柱と間柱の一部が検出されていないが、東南に小部屋をもつ間取りであろう。柱穴には礎石が認められたという。石場立建物の場合も礎石の落着がよいようにに石を7分か6分埋めるというから、この遺構についても石場立建物跡と推定される。

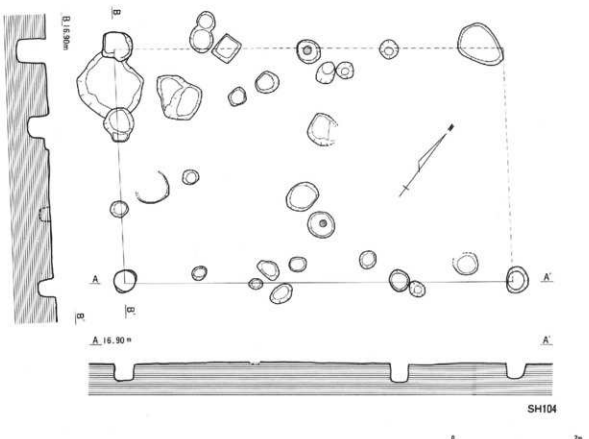
SH102

Ⅰ－7、J－7グリッドで検出された。方位はN－10°－Eを示す。東側は未調査区域のため建物の範囲は掌握されていない。2条の雨落ち溝か布掘りの溝と考えられる浅く細い溝と柱穴が認められた。この細い溝の範囲は小砂利または割栗石を敷いており、建物の土台の柱材を固めた地業と推定される。なお柱穴の範囲と溝の範囲が一致せず、この建物は明らかに建替えられた可能性が高い。その場合、掘立柱建物から石場立建物へ建替えられたものであろう。柱穴に伴う遺物が認められなかったので、建物の時期の認定は困難であるが、周辺から出土した遺物から18世紀代から19世紀代までぐらいと推定したい。

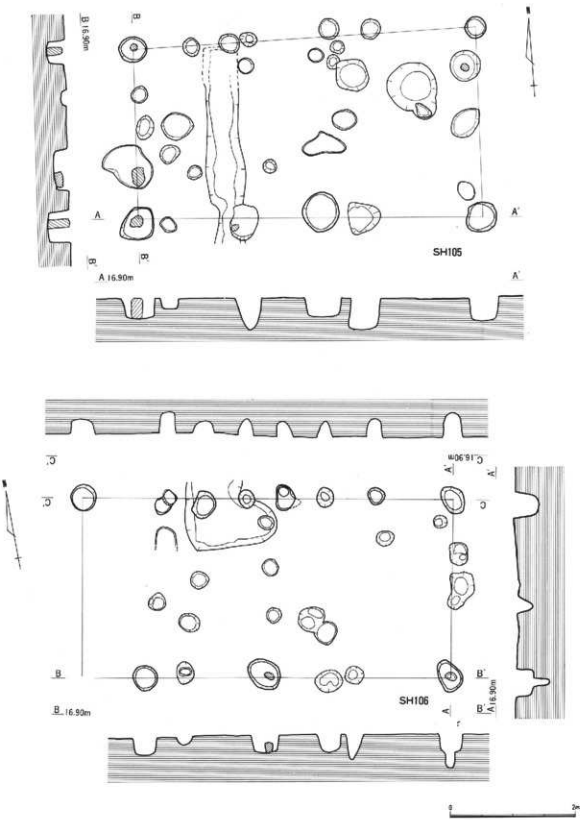
石場立建物

第6図　1区遺構全体図（1：200）





第7図　SH103・SH104　実測図



第8図　SH105・SH106　実測図

SH103

3面J－5グリッドを中心に掘立柱建物跡の柱穴が検出された。建替えのため組み合わせの検討が十分できないが、一定の屋敷地割の中で前身の建物を踏襲して次々と建てられている。

何回かの建て直しが考えられ、建物の規模など明瞭ではないが、ある時期の建物の推定範囲を示すと、東西5m、南北3m以上で主軸方位はN－10°－Eを示す。間取りについては最小規模で推定すれば3間×2間であろうか。

SH104

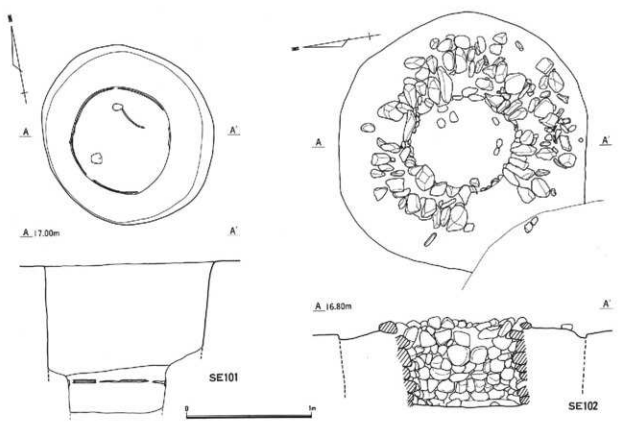
K－5グリッドを中心に柱穴が検出された。先の建物同様に一定の屋敷地割の中で前身の建物をほぼ踏襲して建替えられている。東側に石積みの井戸を持っていたと推定されるが、ある時期井戸も埋立てて、家屋を建替えたと推定される。中央部から東側にかけて大きな撹乱が及んでいるため、隅柱と間柱は確認できない部分があるが、ある時期の建物は最小規模で推定すると南北6.2m、東西3.8mとなり、4間×3間の間取りであろうか。N－35°－Eを示す。

SH105

K－5グリッドで検出された。柱穴の重複から前身の建物を次々と建て直したものと推定される。ある時期の建物は最小規模で推定すると南北6.5m、東西2.8mとなり、3間×2間の間取りであろうか。N－10°－Eを示す。

SH106

J－7、K－7グリッドから検出された。何回かの建て直しが考えられ、建物の規模など明瞭ではない。ある時期の建物の推定範囲を示したが、東西6m、南北2.85m以上で主



第9図　SE101・SE102　実測図

軸方位はN－15°－Eを示す。間取りについては最小規模で推定すれば4間×2間であろうか。

SE101

井　戸

I－7、K－7、J－8グリッドの境界で検出された。直径1.45～1.36m、深さ1.15m以上で円形を呈する。内部の水溜め部分には桶を埋めている。桶はたがと側板の一部がわずかに残っていた。井戸の内部の覆土を観察すると上部の堆積が同じ土なので一挙に埋められたと判断される。遺物は認められなかったが、2面よりの検出なので17世紀代であろうか。

SE102

I－5、K－5グリッドから検出された。井戸の掘り方は直径2.05～1.98mで井戸側は円礫を深さ0.7mほど円筒形に積み上げて作っている。井戸側の直径は0.85mを測る。底面より大窯I期の天目茶碗が出土しており、16世紀初頭～前半の遺構と判断される。

第3節　3区の遺構

3区は2面と3面に分けて調査された。なお1面については現地調査の段階で水田によって破壊されたと判断し、第1次調査面を2面、第2次調査面を3面と呼称し、さらに2面は中・近世面、3面はそれ以前と考えた。しかしながら、3面においても出土遺物を見るかぎり古墳時代、奈良平安時代の遺構とともに少ないながら江戸時代の遺構が検出されている。全体に3区は中、近世における遺構の密度は薄く、灌漑用水の一部と考えられる溝状遺構と屋敷地割と考えられる細い溝状遺構、さらに廃溜と考えられる土坑が認められ、発掘区の北端で六道銭の入った壺が認められた。おそらく屋敷地の範囲にありながらも家屋の建られる空間ではなかったものと推定されよう。

SD303

溝を埋める

調査区の北西H－8、I－8グリッドで検出された。覆土の堆積状態と平面形態さらに出土遺物を見るかぎり3回の作り替えが認められる。それぞれ古、中、新と記述する。古は幅0.8m、深さ0.27mを測り、もっとも下面で検出された。大窯I期を上限とし戦国時代後半期まで使用されたと推定される。この段階は煮沸容器の土鍋や漆器なども出土しており、厨房施設で廃棄されたものが捨てられているところから、家屋が近い位置にあったと推定される。中段階は古段階の終わりから17世紀の前半代と考えられる。幅1.5m、深さ0.2m以上と推定される。新段階には幅2.6m、深さ0.4mに改作されたと推定される。出土遺物を見ると18世紀の後半、末がもっとも新しい遺物であり、遺構の時期とは直接関連はしないであろう。なお覆土の最上層は一挙に埋められたものと推定される。

ほかにSD305がH－9、I－9グリッドで検出されたが、遺物も認められない。屋敷地割の溝と推定している。

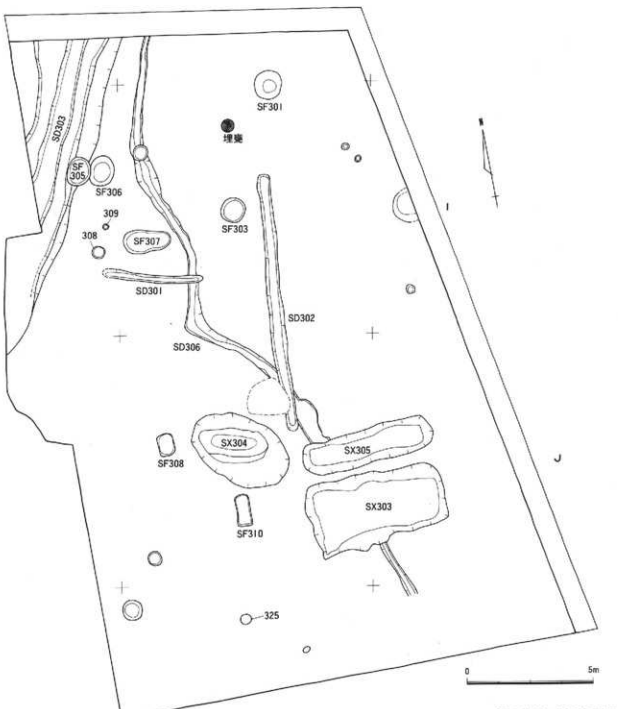
SF301

H－9、I－9グリッドの境界で検出された。円形を呈し直径1.2m前後、深さ0.53mを測る。18世紀中頃から後半と考えられる陶磁器片とともに銀冶滓が1点出土した。

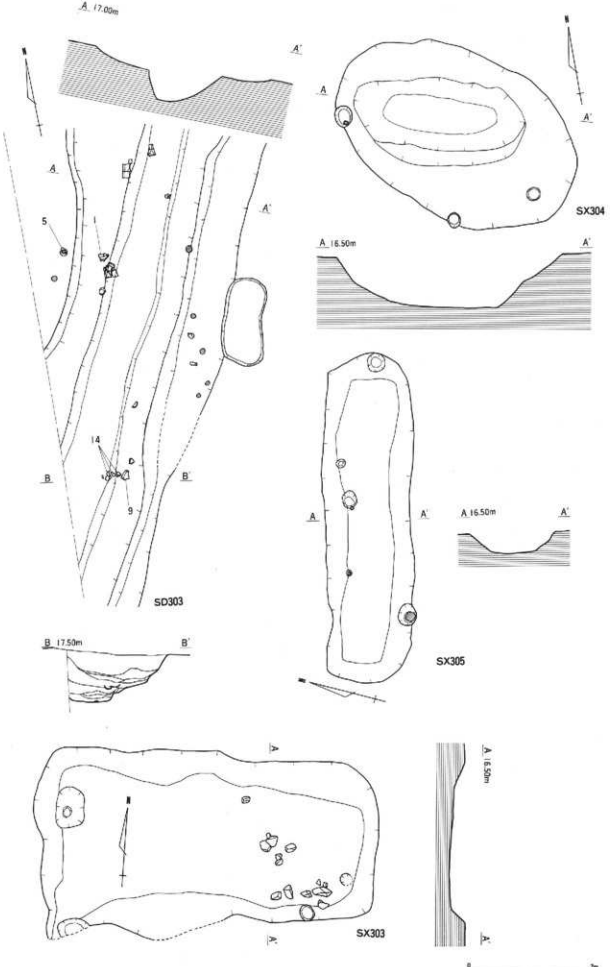
SF305・306についてはSD303を切っており、それより新しい遺構と考えられる。少量の陶磁器片が出土している。

SX303

J－9、J－10グリッドで検出された。東西5.38m、南北2.55m、深さ0.25mを測る。



第10図　3区遺構全体図（1：150）



第11図　溝状遺構　その他　実測図

多量の炭化物、植物遺体とともにカワラケがわずかに出土した。土坑の大きさからしても日常生活の中での廃棄物を投棄した塵溜という印象は少ない。 塵　溜

SX304

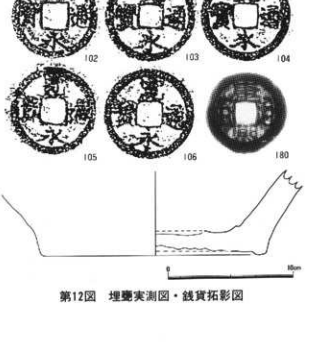
J－9グリッドで検出された。長径4.05m、短径2.6m、深さ0.7mを測る長楕円形を呈する土坑である。出土遺物をみると登窯1期の天目茶碗片や大窯期の擂鉢片があって、16世紀代から17世紀代前半の遺構と考えられる。覆土中位に植物遺体細片を多量に含む。覆土上層の状態からすればこの遺構は埋もどされたと判断される。

SX305

J－9、J－10グリッドで検出された。東西5.3m、南北1.35m、深さ0.3mを測り、長方形を呈する土坑である。擂鉢片とともに18世紀から19世紀代のカワラケが出土した。

埋甕

I－9グリッドで常滑焼と考えられる無釉焼締陶器壺（あるいは甕）が出土した。底径18cmを測るが、胴部以上が無くなっている。内底面に6枚（寛永通宝5枚、康熙通宝1枚）が出土していたがいわゆる六道銭であろう。隣接する1区・6区の調査区を含め埋葬施設と考えられる遺構は認められず、寺院や村落地の一角とはいえない。単独例ではあるが、屋敷墓を想定したい遺構である。なお、その多くは遺物が認められないため時期の判断はできない。3区では小ピットは南側で認められないが、古墳時代から平安時代までの居住域になっているため、それらに伴うピットの可能性が大きい。 六道銭の出土



第12図　埋甕実測図・銭貨拓影図

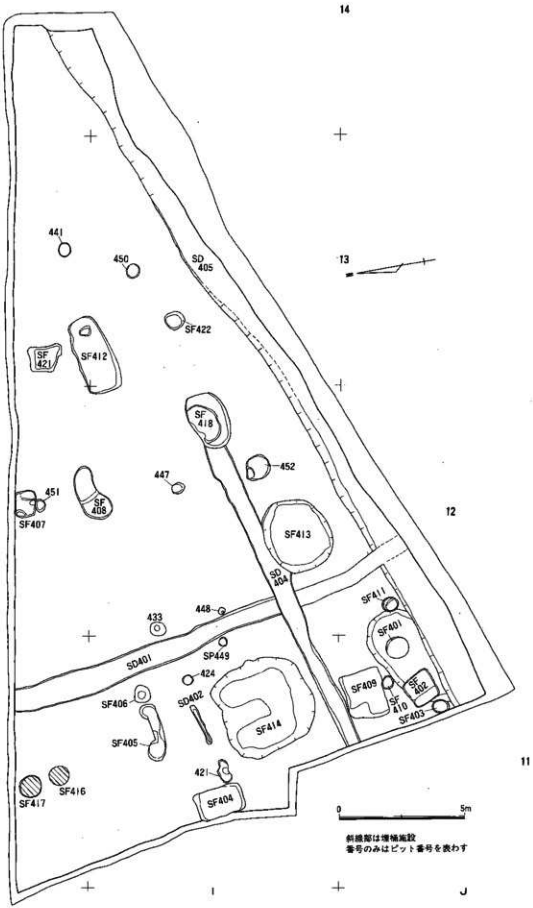
第4節　4区の遺構

中・近世の遺構は1・2面で検出された。調査区南側で検出されたSD405は地引図に描かれた灌漑用水と判断され、調査時まで存在した隣接する用水路の前身といえよう。また、埋桶が三ヶ所検出されたが、屋敷境の地境溝の内にあって、屋敷地内に設置された厠と判断される。そのほか不定形の土坑がみられるが、家屋の存在は少ない。4区は屋敷地割の中でも屋敷が建てられなかった空間といえよう。

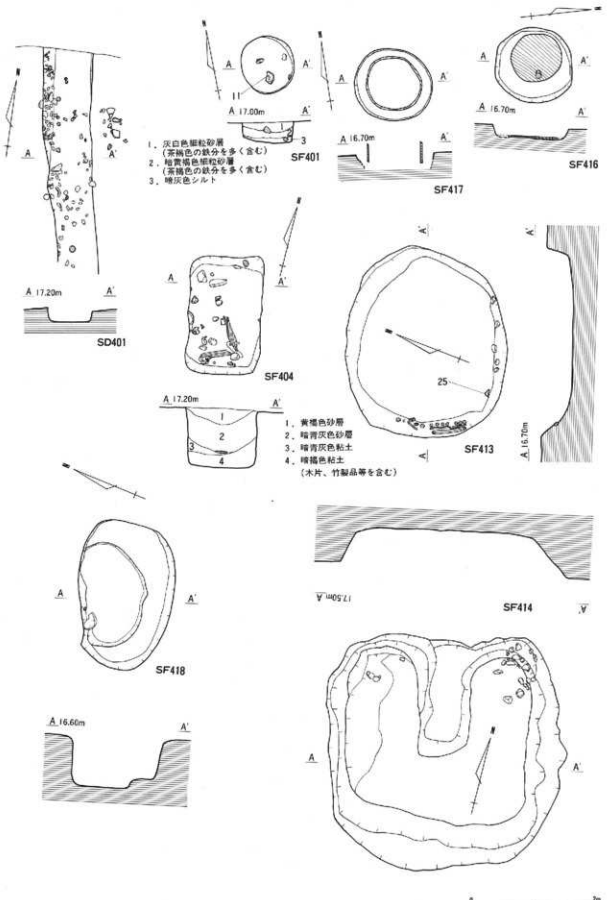
SD401

H－11～J－12グリッドにかけて南北方向に長く検出された。幅0.9～0.66m、深さ0.35mを測る。杭や礫が認められた。第1区同様屋敷の垣根と考えられる。18世紀中頃から19世紀前半の陶磁器片が出土した。 溝状遺構

なおSD405からは18世紀後半から幕末までの陶磁器が出土しており、少なくとも明治前半期には使用されていないと判断される。SD404は幅0.85m、深さ0.25mを測り、SF418によって切られている。出土遺物の年代に幅があって時期を決定できる資料は少ないが、



第13図　4区遺構全体図（1：150）



第14図　溝状遺構　土坑　実測図

18世紀後半までの時期と判断される。

SF401

J－11グリッドで検出された。直径0.85m、深さ0.3mを測る。18世紀後半の中型鉢が検出されている。

SF404

土　坑　I－11グリッドから検出された。南北で1.89m、東西で1.15mを測る長方形の土坑である。木片、礫が上層に出土した。出土した陶磁器片からみると18世紀後半から末の遺構と判断される。塵溜であろうか。

SF410

J－11グリッドで検出された。直径0.52mの桶を埋置してあった。長方形を呈するSF409と本来同一遺構であろうか。桃の実、かんざしが出土した。

SF413

I－12グリッドで検出された。長径3.0m、短径2.6m、深さ0.3mの楕円形を呈する土坑である。石や木片とともに18世紀末から19世紀前半代を下限とする陶磁器片が出土した。

SF414

I－11グリッドで検出された。幅3.8m、深さ0.7～0.6mでコの字形を呈する。底面に木葉、木枝、礫とともに18世紀中頃から後半の陶磁器片が出土した。この土坑は覆土中位層に粘土破砕ブロックが混入しており、埋め戻されたと判断された。

SF416

H－11グリッドから検出された。直径0.8mの円形の土坑に桶が埋置されていた。桶上部は消滅しており、底板のみが残存していた。

SF417

H－11グリッドから検出された。直径0.89mの円形の土坑に桶が埋置されていた。桶上部は消滅していたが、側板が0.3mの高さまで残っていた。SF416とともに時期の判断できる遺物はほとんど認められなかった。

SF418

I－11グリッドで検出された。長径2.3m、短径1.5mの楕円形を呈する土坑である。底面は二段となっており深さは0.7mと0.58mを測る。本来、重複した遺構であろう。出土した陶磁器は16世紀後半と18世紀後半の時期に位置づけられる。

出土遺物うち陶磁器は、16世紀代と18世紀中頃から幕末であるが後者が圧倒的に多い。

第5節　9区の遺構

1・2面に中・近世面が検出された。1面では集石が数ブロックのまとまりでほぼ全域から検出された。そのうち、わずかではあるが人骨が礫群出土として採集されており、明瞭な方形区画を呈するタイプもある。このタイプについては集石墓として判断した。しかしながら、列状の集石もあって単に集石としか呼称できないものもある。一方、列状の集石については家屋の地業と関連するものという見方もできようが、その集石中で廃棄物である陶磁器片や瓦片もあって、新しい傾向は認められるものの、その性格は不明とせざるをえない。

集石墓の広がり

なお、18世紀・19世紀代の陶磁器は9区では少なく、排水溝、調査区南西部分として採集されている。遺構としてはSE901以外、極めて少ない。集石面までの堀り下げ過程で出

番号のみは集石墓番号を表わす

第15図　9区遺構全体図（1：100）

土し、また第2面から検出された遺構のうち、土坑墓と考えられる遺構はわずかに一基のみであった。第2面検出のSP948の中に肉眼観察で火葬されていない人骨が入っており、納骨穴と考えられる。

このような関係を整理すると、第2面のピットや土坑のうちでも上面で検出された集石墓との関係を想定せざるをえない遺構もあるが、現地調査の段階では把握できなかった。なお、表土除去中、F－5グリッド付近で銭貨6枚とコマ、漆器椀の入った早桶が出土した。銭貨はいずれも寛永通宝で、うち1枚は四文銭である。また銭貨は火熱を受けているが、通常、早桶埋葬では被葬者は火葬されないといわれている。早く逝った男児に手むけのコマと椀を副葬したものと推定したい。さらにこの遺構は江戸中期ないし後期の屋敷地内に埋葬している。

早桶埋葬

なお、第1トレンチ（9区北端）で円礫石の井戸SE901が検出されている。9区は明治前期の地引図では屋敷地となっており、「東海道分間延絵図」にも家屋の並ぶ区域である。検出された面にはその頃の家屋とそれに関する遺構は極端に少なく、後世の攪乱がおよんでおり、表土除去によってすでに撤去されたものと判断された。

第2面では、ほぼ南北にはしる溝状遺構と小流路と推定される南北方向の溝や建物跡の柱穴が認められた。集石墓以前の村落の姿が想定される。

SH901

南北方向に走るSD905に平行するように第2面F－5グリッドを中心に柱穴群が検出された。数回の建物跡の重複と考えられ、建物跡の主軸方位はN－10°－Eである。

家　屋

柱穴には柱穴中に玉石を敷くタイプと割栗地業がみられ、前者はいわゆる鹿之子建の石場立建物の礎石と指定される。後者についても建替えの際、玉石をはずし取った可能性もある。ほかに単に柱穴を壺掘し、柱を設置した通常の掘立柱建物跡の柱穴がみられる。

なお、この建物跡について調査区の南西隅からの検出であって、建物跡の規模は不明であるが、検出した柱穴を考慮に入れて建物の推定をするならば4間×3間以上と考えられる。

時期については数少ない柱穴出土の陶磁器をみると、古瀬戸後期から大窯後期または17世紀前半の資料が多く、一部に18世紀後期と判断される遺構出土の土器が認められた。

また、上層に集石が確認されていることから、建物跡の中心時期を15世紀後半から17世紀前半と推定しておきたい。ほかに柱穴と推定されるピットが多く検出された。

すでに述べたように、その後調査区の一部が墓地に使用されたことや納骨穴が認められることから、検出されたピットのすべてを柱穴と考えることは出来ないであろう。なおF－7グリッド東隅SP914では、割栗の下に敷き玉石を設置しいわゆる鹿之子建の石場立建物跡の礎石が検出された。

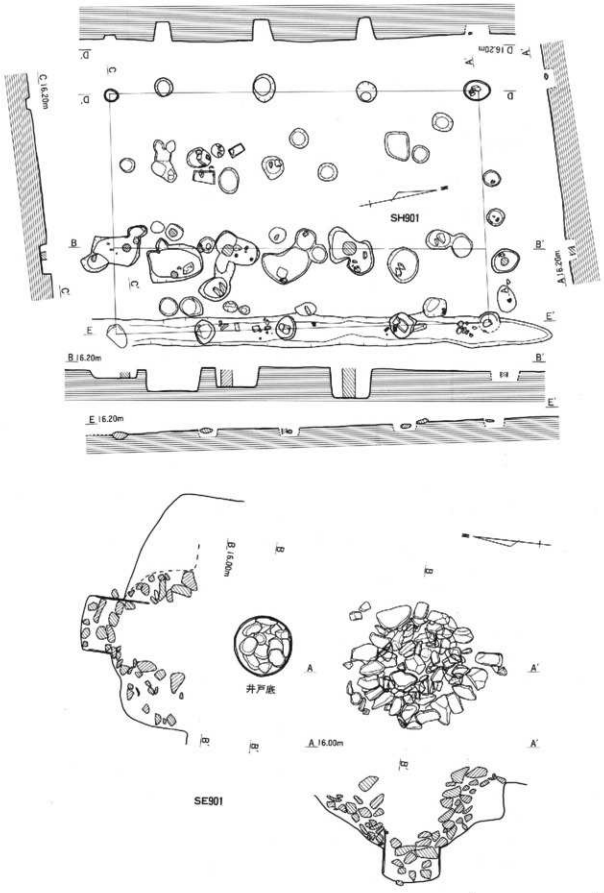
SE901

井戸の廃棄

第1トレンチ北側で検出された。井戸の堀り方は上面で2.9m、深さ1.8m、井戸側は直径1.2m～1.1m、水溜部の直径0.9mを測る石組円筒形（宇野隆夫分類[11]）の井戸である。水溜部は桶（もしくは曲物）を設置し、円礫を埋め込んでいる。覆土上部から、瓦類と幕末～明治初期の陶磁器が出土している。家屋を撤去した際、同時にこの井戸も廃棄されたものと推定される。

集石・集石墓

集石墓1はF－5グリッドから検出された。長径0.15～0.1m大の河原石を1辺0.75m×



第16図　SH901・SE901　実測図

0.60mの方形に敷いている。石塔などは認められなかった。

集石墓２～４

集石墓 集石墓２～４はＥ－５グリッドで検出された。集石墓２基は長径0.2～0.1m大の河原石を１辺0.96m×0.55mの長方形に敷きつめている。集石墓３・４については明瞭な区画が認められず、抜取りや２次移動が考えられるので、墓であるかは断定できなっかった。集石墓３付近から17世紀代の香炉（79）が出土している。

集石５～８

集石５～８についてはＥ－５グリッドから検出された。全体に抜取りや２次的移動で原形をとどめていないが、いずれも長径0.2～0.1mの河原石の集石が検出された。集石７については南西隅を欠くものの0.6mの方形を呈し、形状により集石墓と考えられる。周辺から土鍋片などが認められた。

集石９～11

集石９は0.75m×0.65mの範囲に直径0.2～0.1mの河原石の集石がＦ－６グリッドから検出された。集石10・11はＦ－６グリッドにおいて検出された。２ヶ所の集石と考えたが、あるいは1.4mの範囲で連続する遺構かも知れない。これら９～11の集石は、周辺に杭や瓦片が検出されたことにより時期的にも新しい。あるいは墓ではないかも知れない。

集石12～14

集石12～14はＦ－７グリッドで検出された。３ヶ所の集石と考えたが、１辺もしくは２辺が縁石として明瞭であるほか、平面形は不明瞭である。周辺からは土鍋片、17世紀の陶器片が出土している。

埋甕

埋甕 Ｆ－６、Ｅ－６グリッドの境界で検出された。胴部中位以上は消滅しているが、底部内面に木材が残っていた。底部21cm、推定最大径60cm前後の赤焼の常滑である。17世紀後半から18世紀代と考えられ、礫群周辺から出土したことから、甕棺とも推定されるが、レベルを想定すると胴部と口縁部は集石より上位であると判断されよう。したがって表土除去によって撤去された家屋と関係するものと考えられる。おそらく水甕ではないかと判断しておきたい。

SF901

土坑墓 Ｅ－５グリッドから検出された。ＳＤ910の覆土を切って掘りこまれていた。長さは0.57m×0.45mの隅丸長方形のプランを呈する。カワラケと照寧元宝が出土している。墓の可能性が大きい。

集石15～17

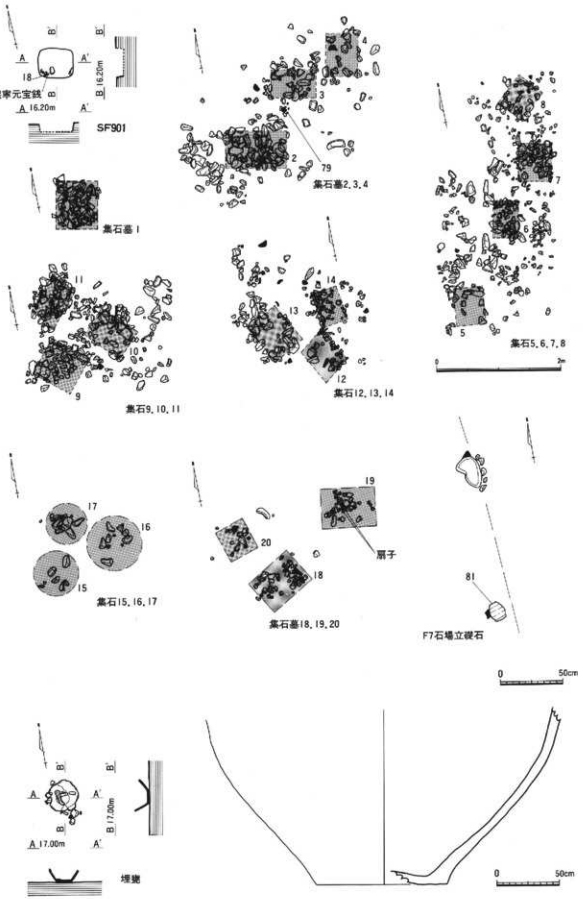
集石15～17はＦ－６グリッドから検出された。いずれも縁石は明確ではなく、プランが方形を呈するのか円形を呈するのかは判断できなかった。直径もしくは１辺が0.5m以下の小型の集石ではあるが、円礫を意識的に集めているので、集石墓の可能性は高い。

集石墓18～20

Ｆ－７グリッドから検出された。集石墓19からは扇子が礫群中より出土した。１辺0.7～0.6mを測り、本来、礫は抜取りや落下があってプランは定かではないが方形を呈していたと判断される。

礎石

Ｆ－７グリッドの礫群からやや東側の離れた位置から下部に５～４cm大の小礫を敷き詰

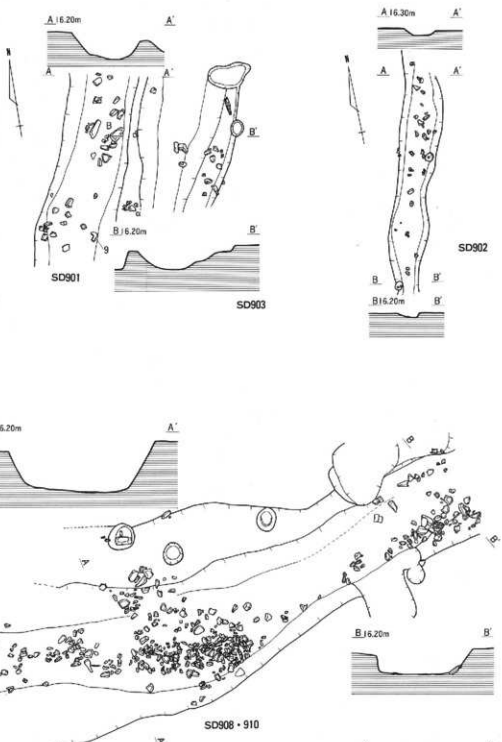


第17図　SF901　集石墓・集石・埋甕　実測図

石場立　め、直径25cm大の平坦な礫を設置した。いわゆる割栗地業の石場立礎石がみられた。なお、直径1.2m程のタタキ面が礎石より北西の位置に検出されており、建物跡の中心が本調査区の東隣りに想定される。なお、礎石の南側より9－81の短頸壺が検出された。

SD902

F－6グリッドから検出された。幅1.2m、深さ0.35mを測る。SD901、SD903とともに南北方向に走る。いずれも現地調査の段階ではSD904によって切られていると判断され



第18図　溝状遺構実測図

たが、出土遺物をみると同時期もしくはＳＤ904の方が古く、ＳＤ901～ＳＤ903はＳＤ904と本来同一遺構であるかも知れない。

SD903

Ｆ－７グリッドから検出された。幅1.6m、深さ0.25mを測る。ＳＤ901、ＳＤ902とともに古瀬戸後期から大窯期の陶磁器が出土していることから、いずれも16世紀後半までの遺構と考えられる。

SD908・SD910

Ｅ－５グリッドから検出された。ＳＤ908と重複し、東西方向に走る。ＳＤ908の古い流路である可能性が高い。ＳＤ908は幅2.3m、深さ0.8mを測り、大窯期の陶磁器が出土した。ＳＤ910では山茶碗片が出土しているが、その量は少ない。

SX901

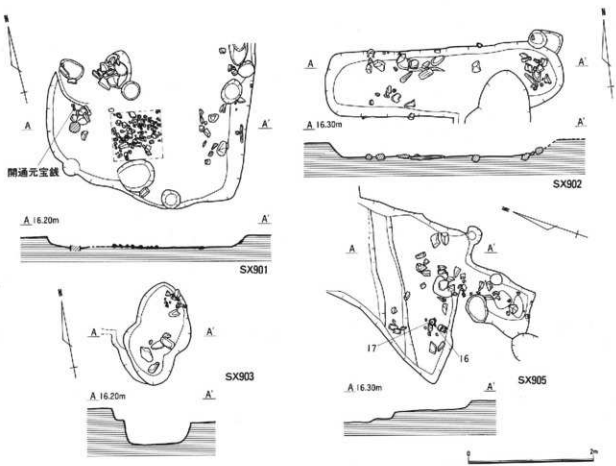
土坑墓

Ｆ－７グリッドから検出された。１辺3.25m前後（北辺未調査区）深さ0.2mを測る方形の土坑である。下部に0.8×0.6mの方形の集石をもっている。集石についてもプランから墓と考えられる。なお、開通元宝１枚が出土している。集石付近から大窯期後半の擂鉢片が出土しており、16世紀後半の遺構と判断される。本遺構の上部に１面で検出された集石墓18～20があって、本来、同一遺構である可能性が高い。

SX902

黄瀬戸皿の出土

Ｅ－５、Ｅ－６グリッドの境界から検出された。長さ3.8m、幅1.0m、深さ0.2mを測る溝状を呈した遺構である。古瀬戸後期と大窯後半（黄瀬戸皿）の陶器片が出土した。この



第19図　SX901・SX902・SX903・SX905　実測図

ほか杭、板材が底面より出土している。

SX903

ＳＸ９０２を切っており、長径1.6m、短径１m、深さ0.4mを測る楕円形を呈する遺構である。内耳鍋、羽釜、志野皿片が少量出土した。

SX905

Ｅ－５グリッドから検出された。ＳＤ909の南側にあり、大窯期、登窯初期の陶器片が出土している。ＳＤ909に併行し、あるいは幅0.4～0.3mの段を有するところから溝（小流路）への昇降段的役割をもつ遺構かもしれない。

第６節　12区の遺構

中・近世の遺構は１・２面で検出された。本調査区は９区の南隣りに位置し、当然ながら両区の間で出土遺物の接合関係をみた。出土した陶磁器の年代観や接合関係を考慮に入れると、一定の年代幅をもちながら９区２面と12区１面に同時存在の関係が成り立つと考えられる。なお、９区で指摘した早桶や集石墓は認められなかったが、火熱を受けていない人骨片がＦ－５グリッドで採集されている。おそらく、表土除去の際、江戸時代中・後期の遺構は撹乱層とともに撤去されたと推定される。

人骨の出土

なお、建物の存在を示す柱穴は、ＳＤ1203より東側で散在的な在り方をするが、ＳＤ1203以西では、錯綜した在り方をし、長期間の建替えが考えられる。また、礫や土器片を入れた廃棄穴と考えられる土坑もみられた。溝状遺構はほぼ南北に直走し、屋敷境も兼ねそなえていたと考えられる。

溝状遺構

２面では古瀬戸後期から大窯期のピット、土坑の溝状遺構が検出されたが、それより西側部分の精査は十分行われず、結果として溝状遺構ＳＤ1206・1207を中心とする範囲を調査したのみとなった。包含層遺物をみると15～16世紀の遺物が主体となっており、江戸時代主体の３・４区など原川遺跡の東側区域ときわだった違いをみせている。おそらく、室町時代後半から戦国時代前期の集落の中心が原野谷川東岸にあったことを物語っていると考えられる。

SD1203

調査区を南北方向に縦断するが、南端は調査区外に延びている。おそらく、９区ＳＤ905と同一遺構と考えられる。幅1.05～0.5m、深さ0.15mで、河原石が転落している箇所があるが、何らかの施設とは考えられない。出土遺物をみると、16世紀後半～末代と考えられる。なお、ＳＤ1201とその枝溝は、出土した陶磁器から16世紀後半～17世紀前半の遺構と考えられる。

SD1205

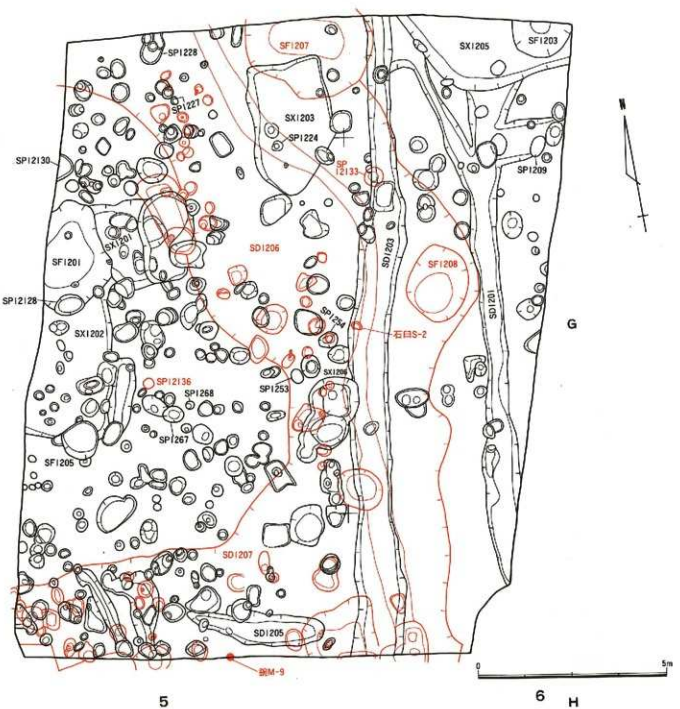
木製鋤の出土

Ｈ－５グリッドから検出された。長さ3.7m、最大幅0.85m、深さ0.15mを測る。木製小型鋤状工具が出土した。陶片、内耳鍋など細片が少量出土したのみで時期決定の要素に欠くが、17世紀代と考えられる。

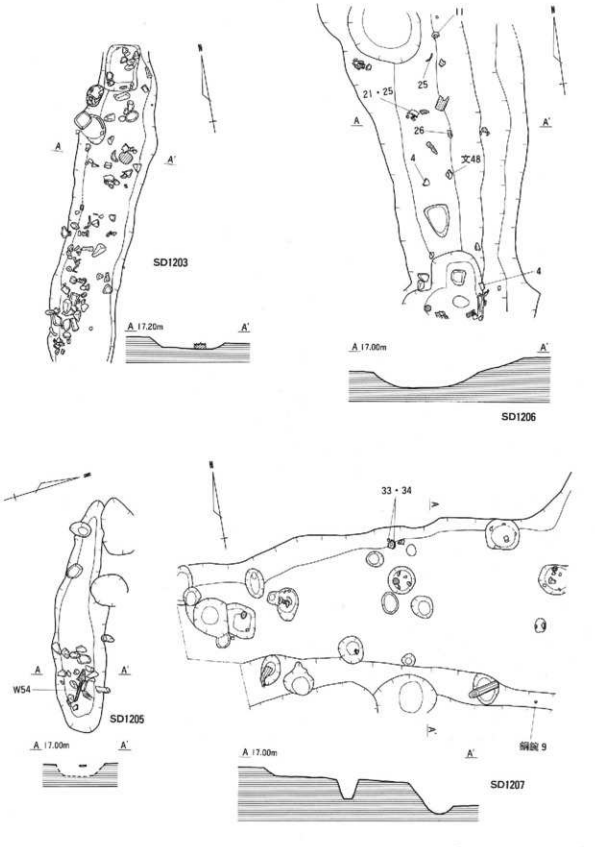
SD1206

調査区を南北方向に走り、上層には多くの河原石が投棄されており、炭化物が含まれている。おそらく、自然堆積で埋まったものではなく、上層については人為的に埋められ整地されたと判断される。幅６～４m、深さ0.4mを測る。１面で検出された柱穴、ピット、ＳＤ1203が切っている。古瀬戸後期から大窯期の陶器とともに漆器椀、石臼片が出土して

石臼



第20図　12区遺構全体図（1：100）



第21図　溝状遺構実測図

いた。

SD1207

調査区南側を東西に走り、両端は把握出来なかった。幅3.2m、深さ0.5mを測る。2～3㎝大の細礫が上層に堆積し南側に続いており、原野谷川の支流と考えられる。北岸より銅鏡が出土した。なお、SD1206との新旧関係は、出土した陶器片を考慮に入れると同時存在と考えられる。北岸で検出されたピットは1面からの掘削であると推定される。

SF1201

G－5グリッドから検出された。長径2.5m、深さ0.3mを測るが、西側は未調査区に入っているため全様は不明である。古瀬戸後期、大窯前期の陶器片が出土している。

SF1202

G－5グリッドから検出された。長径2.4m、短径1.45mを測る長楕円形を呈する。北側には0.2～0.1mの礫が底面に敷かれていた。時期の判断できる遺物は認められなかった。

SF1204

G－5グリッドで検出された。長径0.95m、短径0.65m、深さ0.35mを測る楕円形を呈する土坑である。杭が打たれており、覆土中位に礫が認められた。抜取りであった柱穴かも知れない。出土した陶片が細片かつ少量のため中世末期以降であることは認めざるをえないが、細かい時期は不明である。

SF1205

G－5グリッドから検出された。直径1m、深さ0.6mを測る円形を呈する。覆土中よりくの字口縁の内耳鍋片が出土した。

SF1206

G－5グリッドから検出された。長径1m、短径0.7m、深さ0.4mを測り、中央部に直径0.3mの柱が認められた。覆土から17世紀前半の内耳鍋が出土した。家屋の柱穴かあるいは原野谷川に架設された橋脚であろう。

SF1207

F－5グリッドから検出された。長径3.4m、短径2.4m、深さ1.3mを測り、西側に張り出しをもち不定形を呈する。なおSD1206と重複しており、SF1207が埋没した段階で、SD1206が新たに掘削されたと判断された。遺物は出土状況から上群と下群にわかれ、本来、SF1207に帰属する遺物は下群のグループであろう。しかしながら、SD1206が掘削された際、下位のSF1207が攪拌を受け、下位の古い遺物が上群に混入していた。

西側の張り出しには、8本の杭を打ちつけ横木丸太をわたしており土止めしているが、土層の堆積状態からすればSD1206に伴う遺構と判断してよいだろう。上位からの礫もSD1206に投棄されたと推定される。瓶子、天目茶碗、合子蓋、内耳鍋などが出土している。

古瀬戸の瓶子

SX1203

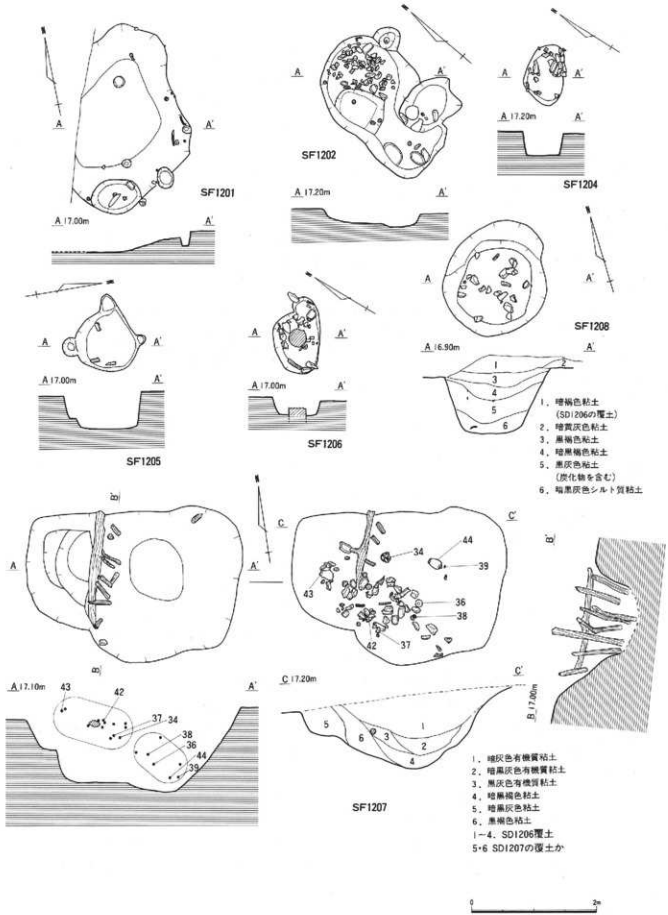
F－5グリッドから検出された。長さ3.6m、幅2.2m、深さ0.2～0.1mを測る不定形の土坑である。20～10㎝前後の礫を覆土に含んでいた。

杭が周辺や内部に打たれている。SP1224より自在鉤が出土した。出土した陶器片は15世紀後半～16世紀後半までの年代を示しているが、廃棄坑と考えられるので、16世紀後半の遺構と判断したい。

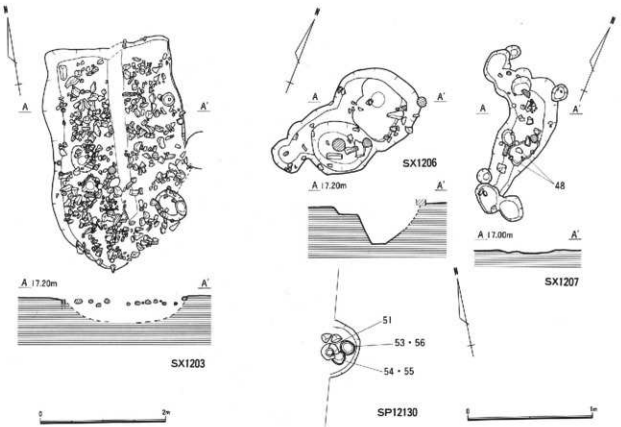
自在鉤の出土

SX1205

G－5グリッドから検出された。南側は橋脚もしくは掘立柱建物の柱穴によって破壊さ


SF1201
SF1202
SF1204
SF1205
SF1206
SF1208
SF1207
A 17.00m
A 17.20m
A 16.90m
B 17.00m
C 17.20m
1．暗褐色粘土
(SD1206の覆土)
2．暗黄灰色粘土
3．暗褐色粘土
4．暗黒褐色粘土
5．黒灰色粘土
(炭化物を含む)
6．暗黒灰色シルト質粘土
1．暗灰色有機質粘土
2．暗黒灰色有機質粘土
3．黒灰色有機質粘土
4．暗黒褐色粘土
5．暗黒灰色粘土
6．黒褐色粘土
1－4．SD1206覆土
5・6 SD1207の覆土か
0
2m

第22図　土坑実測図



第23図　SX1203・SX1206・SX1207・SP12130　実測図

れている。直径1.55m、深さ0.35mを測り、円形を呈する。中心部に柱穴の抜き取った痕とみられる小穴が認められた。大窯Ⅱ～Ⅲ期の陶片が出土した。

SX1207

H－5グリッドから検出された。溝状の遺構に4個程のピットが重複したと考えられる。長さ2m前後、幅0.8m、深さ0.03mの浅い遺構である。大窯期の擂鉢片や内耳鍋片が少量出土している。廃棄坑と推定される。

第7節　10区の遺構

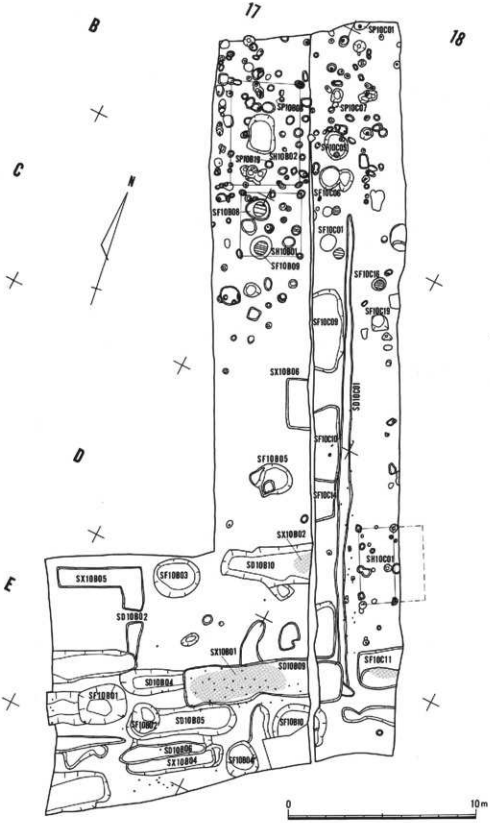
10区の調査は建物撤去の関係で、A・B（60年度）、C（61年度）の2回にわたって実施された。10A区については中・近世の遺構が認められず本冊の記述では割愛し、B・C区をあわせて10区として記述する。

10区については中・近世面は1面としてとらえた。2面には古墳時代の流路が検出されており、それ以降、鎌倉時代の土器が認められるのみで、16世紀まで足跡を知ることはできない区域である。

東海道に沿った調査区北側には長期にわたって家屋が建替えられたらしく、柱穴群が錯綜した在り方を示した。一方、明治前期の地引図にあったように、10区南側は水田畑地として利用されており、塵溜と考えられる土坑・集石が認められた。なおSD10C01は南北に延び屋敷境を兼ねた溝と考えられるが、その南東に1棟の建物跡が検出された。建替えのみられない（もしくは1回か）日常的な屋敷ではなく、納屋のような性格を推定したい。

納　屋　か

北側の家屋群は16世紀末～幕末の陶磁器が出土しており、長期間の間に次々と建替えう



第24図　10区遺構全体図（1：200）

れたものと考えられる。おそらく東海道に沿って北側に入口をもち、南側の家屋外に菜園等が作られていたと推定される。

SH10C01

D－19グリッドから検出された柱穴以外建物が未調査区に延びていた可能性が高い。なお柱間は1間を基本としているが、北側柱列が2.1m（1間3尺）と不規則で、2間×2間の掘立柱建物跡と推定される。家屋の重複する場所からはなれており、のちに水田・畑区域に利用されていることから納屋と推定しておきたい。時期は不明である。 家　屋

SH10B01

埋桶を中心として1間×1間の掘立柱建物跡が推定された。柱間は3～3.3mであるが、永年変化を受けたとはいえ柱は細く、小屋がけの建物を想定したい。なお、埋桶は廁の糞尿溜と推定しているので、それを覆する小屋（両者で厠）と考えておきたい。18世紀後葉から末と考えられる。 厠

SH10B02

B－17、B－18グリッドで検出された。東西4間、南北3間の範囲に掘立柱建物跡もしくは割菜を下部に敷いた穴が認められた。第26図では2つの想定案を掲げておいたが、東西6.5m、南北5.7mが推定最大規模である。時期は出土した陶器すら16世紀末～17世紀初頭以後、後半までである。推定範囲内には石場立建物の基礎と考えられる割菜地形の柱穴を認めること、さらに第1面からは幕末までの陶磁器片が出土していることから、10区北側では前時期からの屋敷地割をほぼ踏襲し、前身建物を拡大縮小しながら長期間住んでいたと考えられる。おそらく、家屋を営んだ時期の上限が16世紀末・17世紀初頭であろう。

SD10B05

E－18グリッドから検出された。長さ6m、幅1.5m、深さ0.45mを測るSD10B05の覆土の堆積状況をみると、2時期の遺構が重複しており、SX10B01の礫はSD10B05が埋まった段階において新たに掘削されたと考えられる。したがって本来、SD10B05は新旧2時期の遺構重複といえよう。出土陶磁器をみると新期は、18世紀末～19世紀代、古期は17世紀前半を中心とする時期であろう。隣接するSD10B09においても同様の遺物の在り方を示した。 溝状遺構

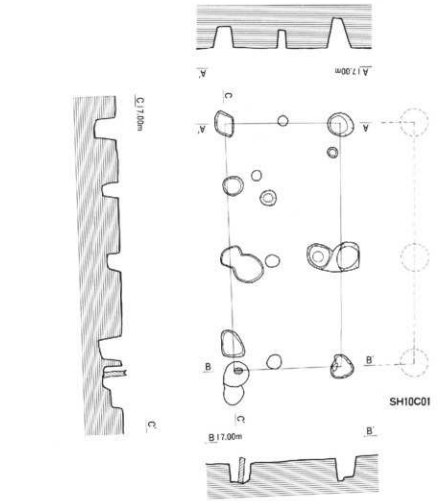
SD10B10

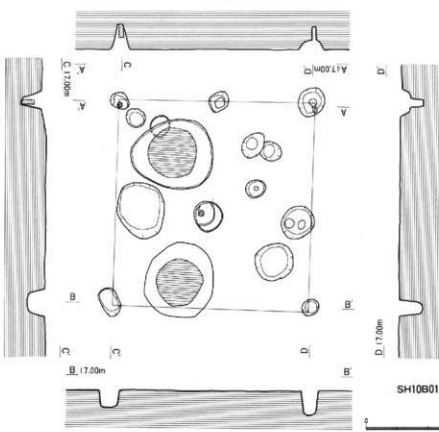
D－18、D－19グリッドの境界で検出された。東側は10区の調査において検出できなかった。残存長5m、深さ0.4mを測る。覆土上位から中位で0.2～0.1mの円礫が認められた箇所がある。北側に3本の細杭が打たれていた。17世紀前半から中頃の陶器片が中心であるが上部に軒丸瓦片なども認められるので、若干の混入遺物があると考えられる。

SD10C01

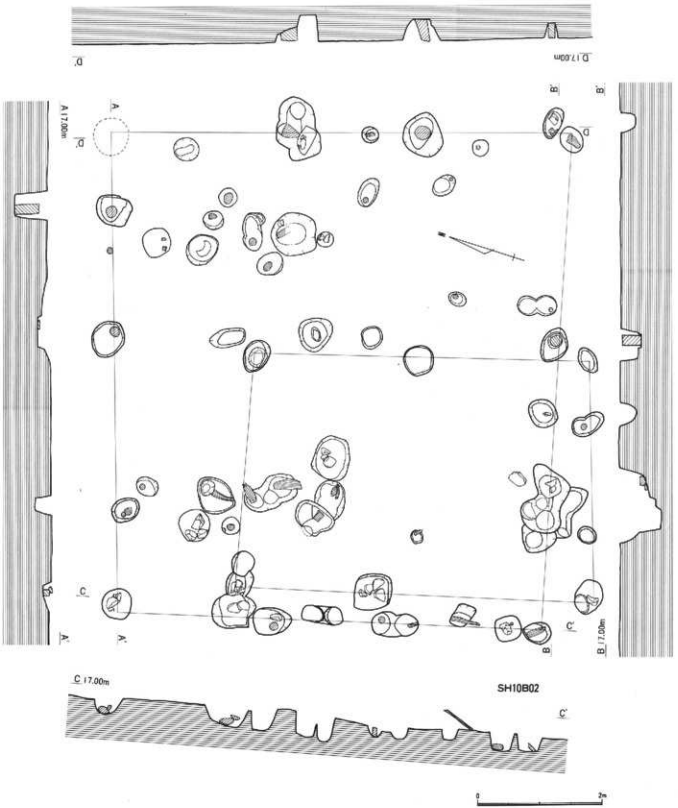
B－18グリッドからE－19グリッドまでほぼ南北方向に検出された。幅0.5～0.4m深さ0.1mを測る。18世紀後半から19世紀前半の陶器片が出土している。

そのほかSD10B01、SD10B04が幕末の陶磁器を、SD10B06、SD10B08が16世紀末～17世紀の陶器片が出土している。SD10B06は遺構の切り合関係では最も新しく、出土遺物と矛盾している。また、年代幅を持つ遺物が極めて少量で年代決定出来ない遺構はSD10B02、SD10B03、SD10B07である。おそらく遺物の年代観と異なったSD10B06や遺物によって年代決定出来なかった溝状遺構についても新旧関係によって18世紀中頃から幕末の年代をあててみたい。なお形状から溝状遺構としたが機能については不明であ





第25図　SH10C01・SH10B01　実測図



第26図　SH10B02実測図

る。

SF10B01

土　坑　E－18グリッドで検出された。長径2.5m、短径2.1m、深さ0.85mを測る。破損した陶磁器片や礫、漆椀が認められ、2次焼成を受けた遺物をみられることから、火事に伴う廃棄遺構の可能性が大きい。なお18世紀後半の陶磁器片が出土した。

SF10B02

E－18グリッドから検出された。直径1.5m、深さ0.45mのほぼ円形を呈する土坑である。漆椀・蓋・曲物の底・下駄等と共に18世紀後半の陶磁器が出土した。上部に炭化物層が覆っており、廃棄遺構と考えられる。

SF10B03

D－18、E－18グリッドの境界から検出された。長径2.4m、短径2.2m、深さ0.75mを測る。覆土中位から下位にかけて礫、木製蓋、板、杭とともに17世紀前半～後半の陶器片を含む。2次焼成を受けたものもあり、おそらく火事に伴っての廃棄遺構であろう。

SF10B04

E－18グリッドで検出された。直径1.9～1.8m、深さ0.4mを測る円形を呈する遺構である。覆土の堆積状況をみると古い時期の覆土を掘り返し新たにピットを掘削しており、2時期の遺構の重複と考えられる。出土した陶器片から古期を17世紀後半、新しい時期を18世紀後半と考えられる。塵溜と考えられる。

SF10B05

D－18グリッドから検出された。長径1.85m、短径1.65m、深さ0.2mの楕円形を呈する土坑である。形状から数度にわたって掘られたピットの重複と考えられる。出土した陶磁器から18世紀中頃から明治前半までの塵溜であろう。

SF10B08

C－17、C18グリッドの境界から検出された。長径0.65m、短径0.56m、深さ0.1mのほぼ円形の穴に桶底が検出された。17世紀後半～18世紀代の陶磁器細片が極少量出土した。厠と考えられる。

SF10B09

C－18グリッドから検出された。長径0.6m、短径0.55m、深さ0.1mを測る。桶底が検出された。出土遺物は認められないが、SF10B08とセットとなる厠と推定される。

SF10C01

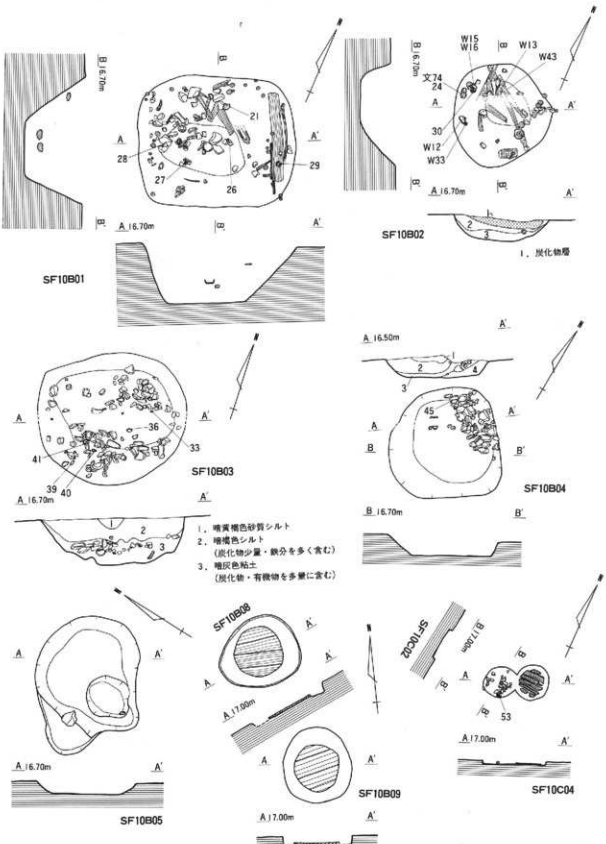
C－18グリッドから検出された。直径0.9m、深さ0.3mを測る円形の土坑で、破損した陶磁器片と多量の礫が埋まっていた。出土した陶磁器は17世紀代のものも混入しているが、18世紀末から19世紀初頭の遺物が認められる。その時期に何らかの理由によって礫を中心とした廃棄を目的とし掘削された遺構と考えられる。

SF10C02・SF10C04

B－18グリッドから検出された。直径0.5～0.4m、深さ0.1mの円形を呈する土坑である。SF10C04からは桶底が、SF10C02からは礫の集石が認められた。出土した陶磁器から幕末～明治前半期の肥料溜ないし厠と推定された。

SF10C09

C－18グリッドから検出された。長さ4.4m、幅1.4m、深さ南側0.5mと底面が段掘りした遺構である。ひ杓、下駄、漆椀とともに18世紀中頃から19世紀初頭の陶磁器が出土して


SF10B01
SF10B02
1．炭化物層
SF10B03
SF10B04
1．暗黄褐色砂質シルト
2．暗褐色シルト
（炭化物少量・鉄分を多く含む）
3．暗灰色粘土
（炭化物・有機物を多量に含む）
SF10B05
SF10B09
SF10C02
SF10C04

第27図　土坑実測図

いる。形状から肥料溜あるいは厠の可能性もある。

SF10C10・SF10C14

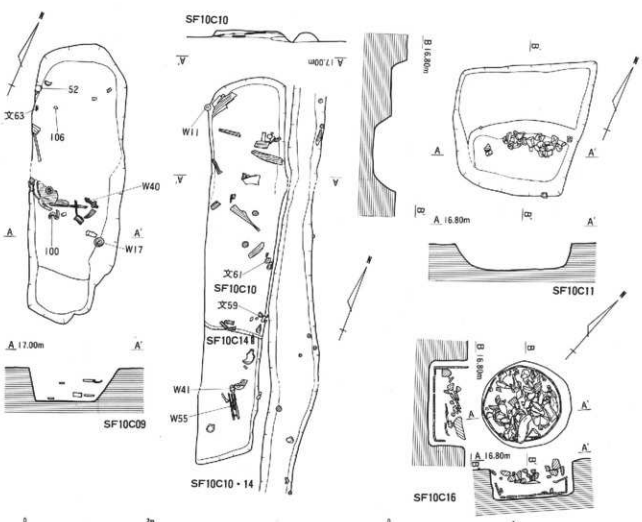
カセ車の出土　長さ6.25m、幅1.2m、深さ0.12mの溝状を呈する遺構である。SF10C14と重複しているが、本来同一遺構と考えられる。下駄、漆椀、カセ車の部材とともに墓末の陶磁器が出土している。底面を2段に掘削している。肥料溜あるいは厠の可能性も考えられる。

SF10C11

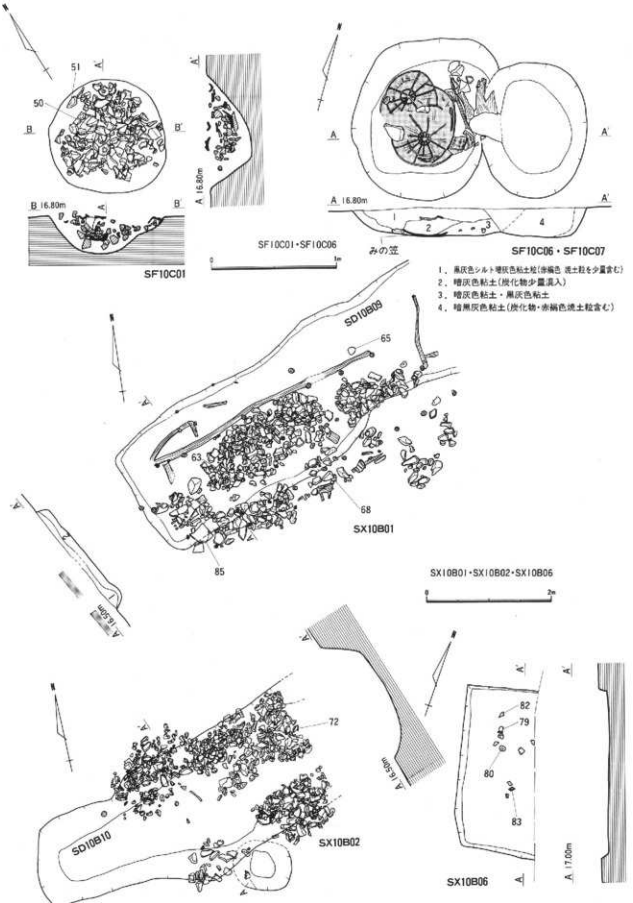
D−19、E−19グリッドの境界から検出された。長辺2.2m、短辺1.6m、深さ0.4m、0.2mと底面が2段に掘削されている。深いピットの底面からやや浮いたレベルに礫を並べている。18世紀末から19世紀前半の陶磁器が少量出土している。性格は不明であるが、礫群を並べ、底面に段を造っていることから、水溜とも考えられる。

SF10C06

B−18グリッドから検出された。直径1.25m、深さ0.2mの円形を呈する土坑で貨笠2枚が出土した。SF10C07によってきられている。出土した陶器片は17世紀代から18世紀前



第28図　土坑実測図



第29図　土坑・その他実測図

半までである。性格は不明である。

SF10C16

C－18グリッドから検出された。直径0.7m、深さ0.28mの掘り方に桶を埋置してあった。上部に礫が入っており埋められたものと考えられる。出土した陶器は17世紀中頃から後半が多く、一部18世紀代に及んでおり、18世紀前半の遺構と考えられる。飲料用の水溜とも考えられるが建物跡から離れており、厠とも考えられる。

SX10B01

性格不明の土坑

E－18、E－19グリッドから検出された。SD10B09の上位に横木をわたした杭列と集石が認められた。礫群は長さ5m、幅1mと長さ4.5m、幅0.7mの二列がみられ、下部のSD10B09の主軸とやや異なる。なお土層堆積状況からすればSD10B09が埋没した段階にSX10B01の杭列や集石は構築されていた。礫の間から19世紀前半の陶磁器が出土しており、下部のSD10B09との間に時期差が認められる。杭列と横木は礫に並行して設置されており、本来、集石を固定する役割と考えられ、暗渠もしくは明渠のような用・排水の施設とも考えられる。

SX10B02

D－18、D－19グリッドの境界から検出された。長さ3～2.8m、幅1mの範囲に集石が認められた。下層にはSD10B10が認められるが、埋没した段階で集石は構築されている。下部のSD10B10の主軸とはやや異なるが、杭列は本遺構とは関係しない。礫群の間から18世紀後半から19世紀前半の陶磁器片が出土している。下部に埋没した溝があり、その上部に集石を構築するなど先のSX10B01と類似した構造をもっている。暗渠か明渠とも考えられる。

焼土塊と塊形の鍛冶滓2点が認められた。周辺に野鍛冶の存在が推定されよう。

SX10B06

C－18、D－18グリッドの境界から検出された長さ2.65m、東側が欠けているが、幅1.1m、深さ0.1mを測る。19世紀から幕末の陶磁器片が出土した。

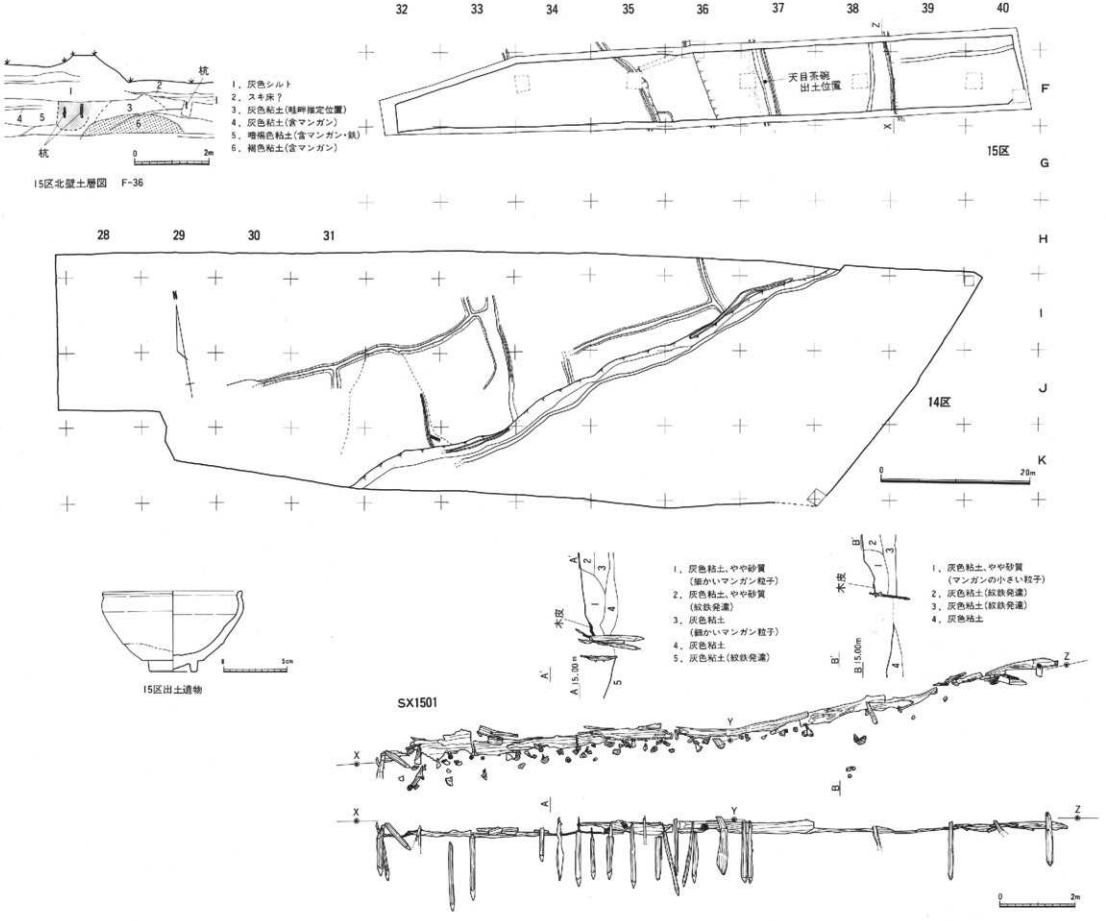
そのほか性格不明の遺構はSX10B07が17世紀初頭であるほか、18世紀末以降の遺構が多い。概して出土資料は極めて少なく、廃穴と考えられるが、明治期には確実に水田もしくは畑となっている区域であり、生ゴミの廃棄を処理する目的を考えることが妥当であろう。

第8節　14区・15区の水田

水田の調査

14・15区はすでに記述した1区から12区までの様相とはつぎの点で大きく異なる。第1は江戸時代の村域を異にする点である。14・15区は原川町の範囲外で、越前や太田と呼称された岡津村・梅橋村の飛地である。地形上自然堤防縁辺の後背湿地にあたり、調査前の地目は水田であった。本来河川の蛇行と流路の関係で、川域となったり、開発されたりして、飛地が多く錯綜した場所である。古い時期は三ッ池坪付近（調査区東側）は悪水の出る場所とされる。第2は、検出された遺構が水田である点にある。1区から12区は原川村とその周辺という集落であって、14・15区は耕地と著しい対照をみせている。しかし、後述するように水田の時期は江戸時代前期以降までであって、近世原川村の同じ時期に相当することからあながち無関係ではないだろう。

14区水田



第30図　14・15区遺構全体図　全体図ほか

14・15区の水田遺構の検出はマンガン斑のふくらみを畦畔の反映として調査した。この点についてはすでに加藤芳朗氏によって、土壌学的分析によって灌漑水（乾田）型水田と指摘を得た[2]。

マンガン斑のふくらみ

ところで、検出された14区水田は床土にあたる斑鉄の強い集積層が認められないことから疑似畦畔と考えられた。

その理由として鋤床層の直下における斑鉄集積層が盛り上がり、現行畦畔とこの盛り上がりが35cm程ずれて観察された。また旧マンガン斑層とそれに対になる旧斑鉄層はそれに伴って次第に消滅していく。この現象は現行水田の畦畔にも認められる。以上が観察されたことによっている。以下、上層水田の反映としての遺構の記録を述べることとする。

調査区の東側を逆川もしくは垂木川系の軟質砂礫（加藤芳朗氏による）の含まれる低湿性粘土が覆土となった後背湿地が形成されている。この部分には疑似畦畔は認められなかった。

調査区の中央部には幅2mの疑似（以下、疑似を略す）大畦畔がほぼ南北に走り、それより西側に3枚の区画が認められたが、うち1枚は北端部のみで規模は不明である。2の水田区画は東西9m、南北13mでややいびつの略長方形を呈する区画である。3の水田区画は東西8.5m、南北10.5mで大畦畔が南に屈曲しているため、南東ではややいびつである。もともと周辺の水田区画を『土地宝典』によって考えるならば[3]、流路や後背湿地に沿った形で水田区画が形成される場合と、条里型土地割によって形成される場合がある。調査対象となった14・15区は前者にあたる。そのためやや変形した区画となったと推定される。なお、検出面からは17世紀中頃から18世紀前半の陶器が出土し、下層からは17世紀初頭から前半の天目が出土しており、水田の時期は現行水田の区画よりも古く18世紀前半以降といえる。しかしながら、東側の後背湿地との時間差はにわかに判断できないが、土層堆積では後背湿地が埋積された後であって、低湿地粘土ゆえに畦畔がプリントされなかったと考えられる。

15区水田

15区疑似畦畔は南北方向に3列認められた。東西列をうかがい知ることはできなかったが、畦畔の間隔は13～16mを測る。中央畦畔では一部溝が走っているが、水田に伴う溝の反映であるかは判断できなかった。なお、14区同様、現行畦畔の方向とはずれており、検出面での土器は、17世紀代から18世紀前半が主である。したがって、18世紀前半から近代までの水田の反映とみることができよう。検出面では3ヶ所の段差がみられた。おそらく水田形成以前の地形の残存と考えられる。段差の付近では3条の杭列が認められた。つぎにもっともよく整備された杭列のSX1501について述べてみたい。

杭　列

SX1501

表土除去の段階で杭列SX1501が南北10mの長さで検出された。杭は割材（丸太杭の4分割程度）または枝を使っている。先端部は金属の刃物で大きく削り落として尖らせている。横面は平坦面を削り落とすものもみられる。杭の間隔は一定ではないが、0.2～0.05mでかなりアトランダムであるが、全体に密集して打たれている。杭の上部に直径5～20cmの丸太材を横木として使っており、そのすきまには土が埋められていた。杭列の東西では東側が低くなっており、後背湿地に入りかかった傾斜変換点である。土留の役割とともに耕地と低地との境界をもっていたと考えておきたい。

注

（1）宇野隆夫「井戸考」『史林第65巻5号』1982

（2）加藤芳朗「原川遺跡をめぐる地形・地質・土壌学的背景」『原川遺跡Ⅰ』1988
矢田勝「土壌の検討について」『低湿地遺跡の調査』1989
矢田は15区北壁の事例に基づき、マンガン斑の盛り上がりは、「堆積層位ではなく、土壌生成作用により分化した土壌層位である」と指摘した。また、水田の区画が近世以降からの連続性を保っているという指摘を行なっている。

（3）掛川市教育委員会提供のコピーによる。
なお本章の家屋遺構の理解については『図解家屋造作雛形』（7版）1956によるところが大きい。

第3章　出土遺物

中世後半から近世（室町時代から江戸時代）の出土遺物は、原川遺跡出土遺物中、過半数を占める。

本章では遺物の記述にあたって、材質の属性によって材質別分類をした。第1に陶磁器・中・近世土器（土鍋・カワラケ等）を一括して土器・土製品とし、瓦もあわせて記載した。第2に墨書・ヘラ書き等土器や木札・曲物等に文字や記号の記された遺物を文字資料とした。第3に硯・砥石・石臼・石塔など岩石に加工を加えた遺物を石製品とし、第4に漆椀・下駄・曲物など木・木皮などいわゆる草木類に加工を加えた遺物を木製品とした。第5に銅や鉄製品を金属製品として分類をした。なお、遺物番号は、遺構図・遺物実測図・遺物図版についても統一し、共通の番号を付した。

土器・土製品については、出土遺物の大半を占めるため、調査区別・遺構別に記述をした。そのほかの遺物は少数であるため一括し、さらに用途別に細分し記述した。

ところで、遺物は現地調査の段階で、精粗さまざまな取り上げを行っている。また、江戸後期・幕末・明治前期の廃棄坑・芥溜は攪乱として取り上げており、グリッドの記載さえないものが多い。そのため、調査日誌や遺物台帳を参考にしながら、遺物の出土箇所を復元したところもあるが、むろん復元できない例が多い。全体として現地調査の段階で近世遺物に対する認識が未熟であったため、層位の細部に対する認識、生活面に対する認定遺物が原位置か流入なのかの判断不完全なまま遺物採取を行い、失敗したといえよう。今後の教訓となろう。

第1節　土　　器

土器の分類

狭義、土器の内耳鍋やカワラケは産地比定が困難であるが、現状では大半が在地産であろうと認識している。そのうち陶磁器は、中世後半には大半が瀬戸・美濃産で、少数の地元志戸呂焼三ッ沢窯期・中国製磁器の製品が含まれる。

中世末・近世に入ると、陶磁器は瀬戸・美濃産と地元、初山焼・志戸呂焼・肥前製品など産地の判別できる資料が増加し、当該期の陶磁器の流通の在り方を示している。

土器の検討

なお、ここ20年間に考古学的方法を多用し、中世後半から近世陶磁器の研究が進展した。記述にあたっては、もっと研究の進行している瀬戸・美濃製品について、楢崎彰一氏らの『美濃の古陶』[1]以来、井上喜久男氏[2]・仲野泰裕氏[3]・藤沢良祐氏[4]・伊藤嘉章氏[5]らの器種細分・編年を参照し、すでに一般化している古瀬戸期・大窯期編年の考え方に従った。なお、常滑焼については赤羽一郎氏の分類・編年観に従い[6]、肥前製品については大橋康二氏の器種細分・編年観に従っている[7]。

また、地元初山焼・志戸呂焼については、足立の江戸遺跡研究会による『江戸の陶磁器』の編年観に基づき[8]、内耳鍋については、足立の分類・編年観に基づいた[9]。

本節の土器・土製品の記述は、先の各氏の論文や直接の御教示による点が多いことをあらかじめ述べておきたい。

1．6区出土土器

SD601

天目茶碗1は口縁部にわずかな屈曲部をもつ。高台脇はサビ釉化粧がけがみられる。胎

土に黒色粒子を含む。初山焼である。天目茶碗2は胴部中位にわずかな段をもち、口端部は直立気味に外反する。高台部は削り出し輪高台で頭幅につくっている。志戸呂焼神座窯・上志戸呂窯（新）の製品（足立編年第Ⅲb期）と考えられる。

丸碗3は胴部内面に圏線を巡らし鉄釉を高台脇までかける。高台部は削り出し輪高台で、内面の削り込みは浅い。

小皿4・6は稜皿とも呼称されるタイプで、腰部に稜がみられず、直線的に開く。高台は幅広い削り込み高台で、総釉がけで、目痕から輪トチとトチンで重ね焼きされたと推定される。瀬戸・美濃産である。小皿5は小皿4の同じタイプであるが、高台端部の釉を一部ぬぐっている。瀬戸・美濃産である。小皿7は鉄釉を下地とし、さらに灰釉を胴部中位までかけている。高台はやや幅広い削り込み高台で志戸呂焼第Ⅳ期の製品であろう。小皿8は偏平な器形で口端部が外反する。サビ釉化粧がけの上に灰釉をかける。高台は輪高台である。志戸呂焼第Ⅳ期の製品と判断される。小皿9も小皿8に同様のタイプであるが、サビ釉の化粧がけが認められない。菊花皿10は口縁部に花弁状切込みを入れ、縦方向の沈線を施す。高台内は露胎である。黄瀬戸タンバン打ちの良品である。丸皿11は内面に2条・3条の沈線を施し、見込みは凸状を呈し内兀高台内は露胎で輪高台であり、黄瀬戸タンバン打ちの良品である。小形壺12は化粧がけの上に鉄釉をかけ、底部は糸切り未調整で大海茶入茶入であろう。初山窯製品である。茶入13は内底面まで鉄釉がけであるが、外面は底部脇までで露胎となる。初山窯の肩衝茶入である。向付14は小破片ではあるが、片口をつくり出している。明るい鉄釉がけで志戸呂焼の良品である。特殊な器種ゆえ年代比定は困難であるが、釉調や作行から16世紀末から17世紀前半代と考えたい。

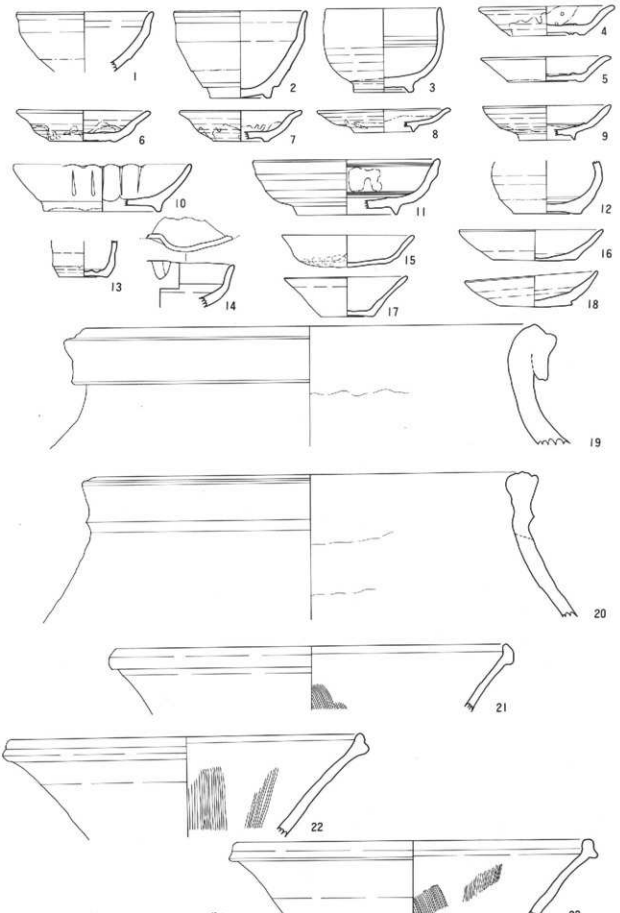
カワラケ皿15は底部型造りで体部を粘土紐輪積み成形と考えられる。体部外面はわずかに指頭圧痕が残るが内面は横ナデ調整で消す。カワラケ皿16は水挽き成形で色調は白味をおびる硬質の製品である。カワラケ小皿17は水挽き成形で赤味をおびた堅緻な焼き上がりとなっている。周辺では志戸呂窯や水ヶ谷窯で登窯内においてカワラケを生産しており、陶器窯製品と考えられる。カワラケ小皿18は水挽き成形で、底部が厚手につくられている。

甕19は幅広の口端部をもつ器形の、常滑製品である。甕20は折り返し口縁帯も偏平で頸部との境界が不明である。口縁部はいわゆるテリ（光沢）があり、先端の尖った工具でつついている。おそらく、使用の際か窯出しの際、重ね焼のヒッツキを除去したものと考えられる。

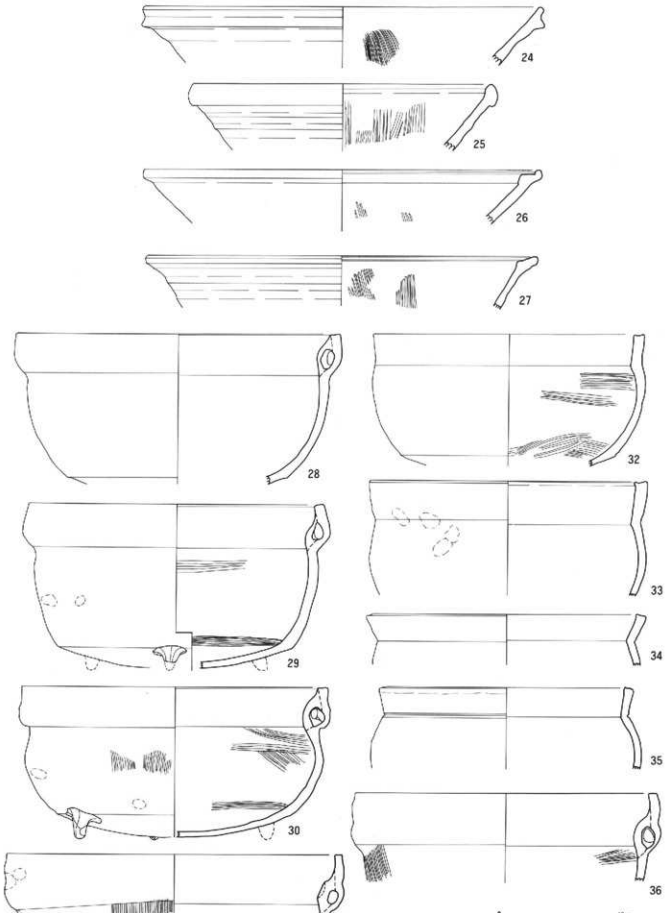
擂鉢21・25は幅狭く低い縁帯で、サビ釉をかける。瀬戸・美濃産である。擂鉢22は幅狭く低い縁帯を形成するが、垂れ下がった縁帯下部が外側に突出気味となっている。志戸呂焼第Ⅲa期か第Ⅲb期の製品に帰属させたい。擂鉢23・24は幅狭い縁帯で、垂下した部分は外側に開く。瀬戸・美濃産である。擂鉢26は内側に突帯を形成する志戸呂製品で第Ⅲa期に相当する。擂鉢27は志戸呂製品で第Ⅲb期に帰属する。

内耳鍋28～40は内湾型に分類されるタイプがほとんどを占める。口縁部が平坦となるものとわずかに下がり気味となるものがある。天目茶碗41はSD602とで接合できる破片であった。露胎部は化粧がけが認められない。志戸呂焼第Ⅲa期に帰属するであろう。現地調査の時点ではSD601・602の遺物は途中から遺構別採取を行っており、少なからず混乱が認明青磁められる。土層の検討結果は、SD601を（古）SD602を（新）としている。口縁部下位に回文の巡っている明代の青磁碗155が出土している。

SD602



第31図　6区出土遺物　その1　SD601



第32図　6区出土遺物　その2　SD601

天目茶碗43は瀬戸・美濃産で大窯Ⅲ期に帰属する。天目茶碗44は志戸呂焼で、サビ釉化粧がけは認められない。第Ⅲａ期に属する。天目茶碗45は志戸呂焼で第Ⅲｂ期あるいは第Ⅳ期と考えられる。丸碗46は腰部の張った形態で幅狭い削り出し高台をもつ。サビ釉化粧がけの製品で大窯期の古い段階と推定される。瀬戸・美濃産である。丸碗47は志戸呂焼の高い張り付け高台の製品で、南窯に類例がある。第Ⅳ期と考えられる。尾呂茶碗48は灰釉の上にワラ灰釉をかけたと考えられる。丸碗49は細い輪高台で腰の張った形態を呈し、光沢のある長石釉をかける。瀬戸・美濃産である。丸碗50は腰の張った形態で、淡緑色の灰釉をかけた瀬戸・美濃製品である。丸皿51・52は総釉がけで、削り込んだ高台をもつ。瀬戸・美濃産である。志野丸皿53・54・55は低い削り込み輪高台で54にはタンパン打ちがみられる。小皿56は高台部露胎の蛇の目凹形高台である。志戸呂焼である。浅鉢57は削り込み高台で、見込みと底部内面露胎である。志戸呂産で、第Ⅲａ期か第Ⅲｂ期と考えたい製品である。徳利58は削り出し高台で高台端部をぬぐっている灰釉製品である。瀬戸・美濃産である。志野向付59は蔦？を鉄絵で描いている。志野織部向付60は梅か桜を鉄釉で描く。いずれも良品である。香炉61は底部と胴部の境界を厚く面取りした形態で、鉄釉に灰釉を二重がけし、口端部の釉をぬぐっている。志戸呂製品で第Ⅳ期に属する。香炉62は削り出し輪高台で、志戸呂産である。第Ⅲ期の中に帰属させたい。63の丸碗は肥前陶器で梅花？と濃絵風の葉紋が描かれている。

蓋64は縁帯を重ねて下位に下垂させており、常滑産である。擂鉢65は志戸呂焼で第Ⅳ期に属する。17世紀前半から中頃とされるタイプであろう。

カワラケ小皿66・67は灰白色を呈する手捏成形のもので底部から指で押し、見込みが凸状をつくる。カワラケ小皿68は水挽き成形で口端部に芯押えの小突起がつく。内外面ともススが付着し燈明皿に使用されたと判断される。カワラケ小皿69は水挽き成形で、腰部が丸味をもつ。カワラケ小皿70・71・72はいずれも水挽き成形。硬質で陶器窯で焼成された製品と判断される。70・71はススが付着し燈明皿に使用されたと考えられる。内耳鍋73～75は内湾型で76のみが半球型を呈する。図示できなかった破片も内湾型が圧倒的に多い。

SE601

天目茶碗42・擂鉢79・小皿80が出土している。擂鉢79は口縁部の縁帯をわずかにつくり出すタイプである。いずれも瀬戸・美濃産である。

SF607

水指77は鉄釉上に灰釉を二重がけし、口端部の釉をぬぐっている。志戸呂焼の第Ⅳ期に帰属させたい水指である。このほか中皿78は18世紀代の肥前磁器であるが、本遺構出土陶磁器の下限を示す資料である。

水　指

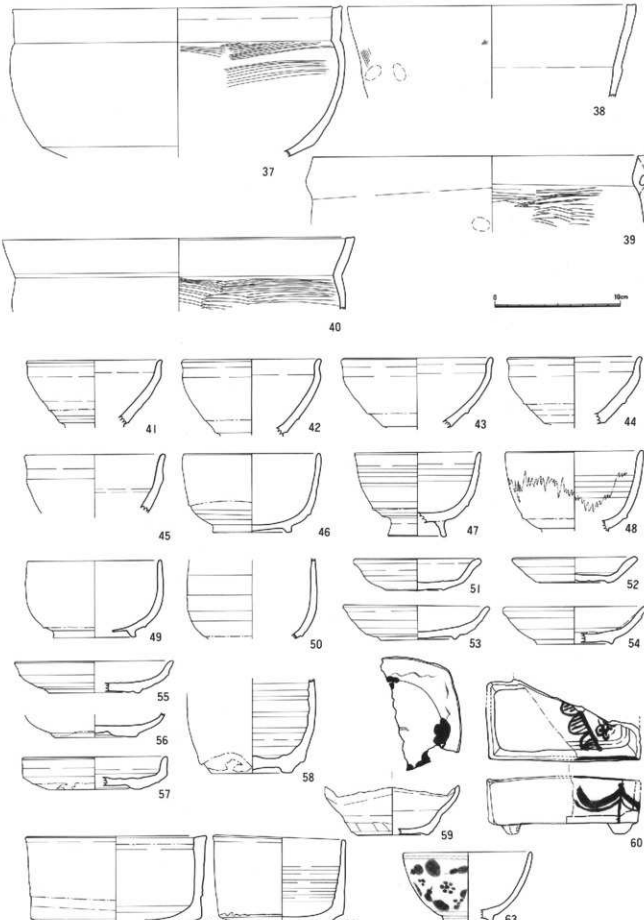
SF610

仏舗器81は明るい光沢のある灰釉がかけられている。瀬戸・美濃産である。御室茶碗82は球形を呈する形態で灰釉に呉須で紋様を描く。瀬戸・美濃産である。丸碗83は俗にクラワンカ手といわれるタイプで草花紋を描く。

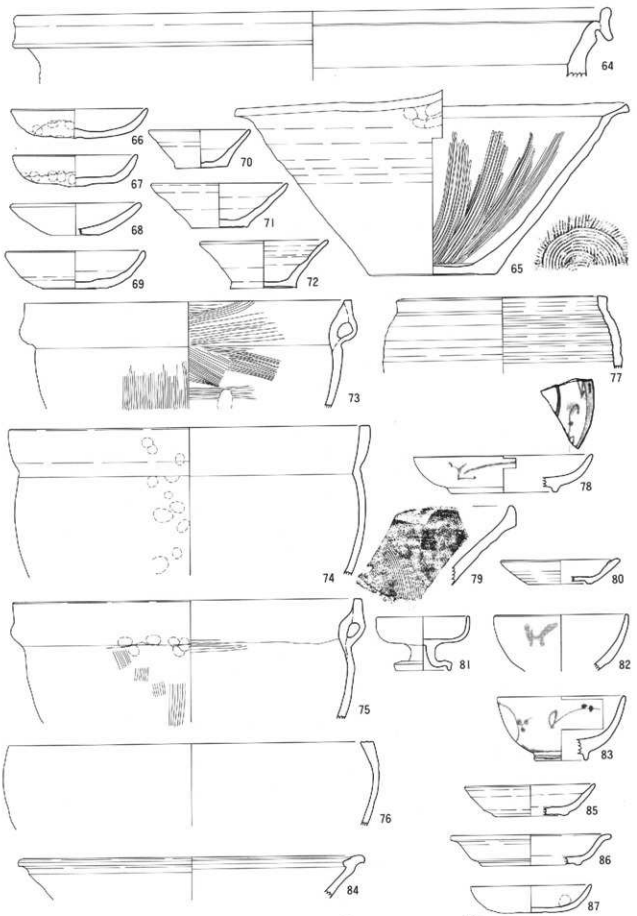
SF603

蓋付碗の蓋88は素書と呼ばれる線描き手法のタイプで肥前磁器である。蓋89は濃絵手法を用いたタイプで瀬戸・美濃産磁器である。燈明皿90は削り出しの低い輪高台をつけた天目茶碗台形を呈するタイプで、瀬戸・美濃産である。

SP621



第33図　6区出土遺物　その3　SD601・SD602



第34図　6区出土遺物　その4　SD602・SE601　土坑ほか

擂鉢84は口端部を内側に折り返すタイプで、内面に突帯をつくる。志戸呂焼で第Ⅲａ期に属する。ほかに志野丸皿86と手捏成形のカワラケ87が出土している。

SP680

カワラケ小皿85は水挽き成形で底部と体部の境界に段をもつ。

SP608

カワラケ皿114は手捏ねで底部端をおり曲げて体部とし成形している。

包含層遺物

天目茶碗91は２・３面から出土したもので、削り出し高台である。瀬戸・美濃産。丸碗92は輪高台に球形の体部をもつ。志戸呂焼で第Ⅳ期以降と考えられる。

志野鉄釉絵皿94は見込みに圏線や紋様をともない口縁部は外反しないタイプである。２面出土。茶入95は破損した後、ススが付着しており燈明皿に転用したものと考えられる。瀬戸・美濃産である。水注96は鉄釉がけの初山焼である。中世溝上と注記がある。小皿97は体部中位より直立する形態を呈し、削り出し高台である。志戸呂焼で第Ⅳ期の製品である。皿あるいは小鉢98は体部中位から直立し、口縁部を外側にひねり返している。高台部は削って平底としている。サビ釉がけで、志戸呂焼である。第Ⅴ期以降であるが、19世紀まで下らないと考えられる。99は小皿であるが、いわゆる手塩皿として使用されたと判断される。瀬戸・美濃製品である。97～99は第１面から出土した。緑釉皿100は古瀬戸後期に属する瀬戸・美濃製品で、第２面から出土した。小皿101は爪形を呈する輪高台の灰釉漬けがけの製品で、志戸呂焼である。時期は不明であるが少なくとも第Ⅵ期にはない。第２面出土。中皿102は交趾三彩写して銅緑釉がかけられた低火度焼成の製品である。江戸後期こうした写しは畿内などで流行するが、日常雑器というより鑑賞陶器として珍重されたと考えられる。源内焼（香川県）はこの種の色絵陶器では有名である。１面出土。

交趾三彩写し

小鉢103は見込みに大黒神の型押しのある鉄釉製品である。19世紀代の瀬戸・美濃産と考えられる。第１面出土。土瓶104は鉄釉に青釉を流しがけした製品で、瀬戸・美濃産である。１面を掘り込んだ攪乱（廃棄坑）から出土。瓶掛105も同じ廃棄坑からの出土である。蓋107は急須蓋である。志戸呂焼で同じ廃棄坑出土。

ほかに半胴甕109があるが、植木鉢に転用されている。瀬戸・美濃産織部手洗鉢116もある。土瓶蓋106は貼付紋に呉須をかけている。形態上、幕末より出現しているが、コバルトが使用されていることから明治以降と考えられる。１面出土の大皿108は見込みに灰釉をかけ、口縁部の釉をぬぐっている。張り付け高台である。匣鉢に入れず焼成されたものと考えられ、自然釉も一部にかかっている。１面出土。志戸呂焼第Ⅳ期の製品である。

植木鉢に転用

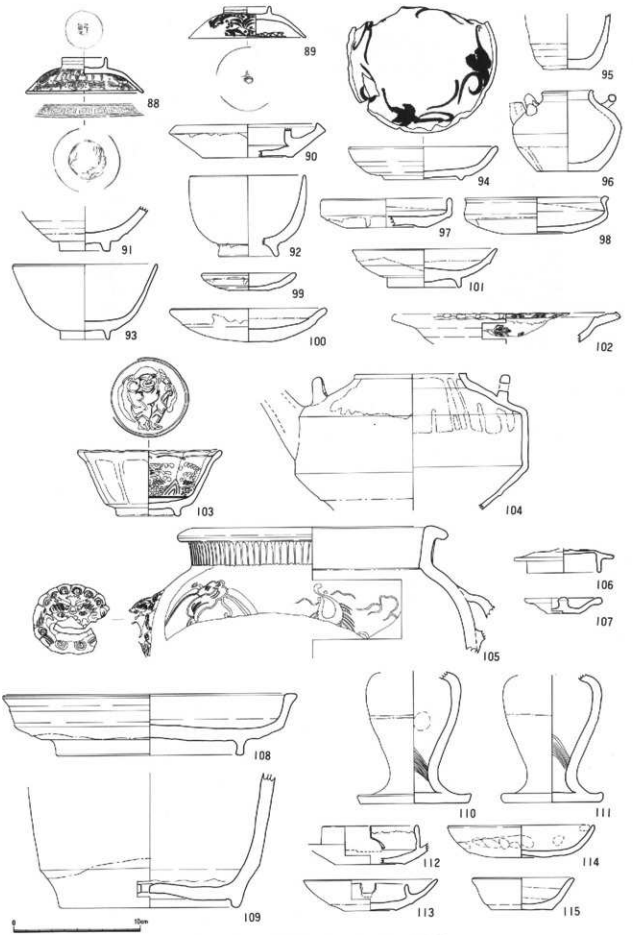
仏花瓶110・111は長石釉と鉄釉をかけた瀬戸・美濃製品である。燈明皿112は志戸呂焼第Ⅴ期の製品で、このタイプでは初現的形態である。燈明皿113は瀬戸・美濃製品である。

カワラケ小皿115は口縁部の一部にススが付着しており、燈明皿に使用されたと判断される。３面出土。

常滑甕117は表面に光沢があり、酸化鉄の化粧がけが認められる。２面出土。

擂鉢118・120は内面に段を有し、摺目は密である。118には「大」の押印が認められる。瀬戸・美濃産。１面を掘り込んだ廃棄坑から出土した。擂鉢121は縁帯を厚くし、摺目は非常に密である。備前擂鉢を写した形態である。擂鉢119は口縁端部をふくらませ、摺目は密である。いずれも瀬戸・美濃産である。

染付は国産と中国製品が出土した。国産は瀬戸・美濃と肥前の二大産地の製品がほとん



第35図　6区出土遺物　その5　土坑　包含層

第36図　6区出土遺物　その6　包含層

どであって、時期も幕末のものが多い。碗129・133・139・140・141はK－4グリッドの大形廃棄坑から出土した。湯飲み碗と考えられるタイプと蓋付碗（飯碗）がある。なお、1面への掘り下げ過程と考えられる1面攪乱と注記のある例は重箱蓋136、白磁皿143、紅皿148があるが、蓋は白粉入れかも知れない。白磁皿は明治以降の瀬戸製品であろう。同様に同じ攪乱と注記のある碗・皿類に122・125・127・128・130・134・142・144がある。144の中皿はガラス継ぎされている。調査日誌や前後の作業状況からすると、幕末から明治期の同じ廃棄坑から出土したと推定されるが、取り上げ位置の記録がないので、不明とせざるをえない。湯飲み碗や蓋付碗が多い点も日常雑器の廃棄であろう。

ガラス継ぎ

1面から出土した染付はコンニャク版を押した碗123や蓋付碗の蓋131・132・135や線描でセミを描く碗134、湯飲み碗138・139、肥前の紅皿147・148、タコ唐草の型造り紅皿149や瀬戸産の明治以降と考えられる色絵中皿146や明染付の小皿126・145や碗124がある。I－4グリッドでは肥前青磁の香炉150が出土している。

2・3面からは青磁・青白磁の中国製陶磁が出土した。合子蓋151は壺型合子で経塚から多く出土するタイプである。型押しで草花紋を描く優品である。静岡県下では壺型合子の出土例は少なく、集落の一部と考えられる原川遺跡での出土例は極めて珍しい。同安窯系小皿152・型押し蓮弁紋碗154・白磁碗156が2面からで本地域では灰釉陶器後半から山茶碗までに伴っているので古代末から中世前期と考えられる。

壺型合子

青磁の出土

明代と考えられる碗は157～159である。いずれも見込みに型押しの草花紋を押す。159の外面にはヘラで蓮弁を描く。碗153は外面に片切り彫りの蓮弁紋を描いている。

このほか2面下部では内湾型内耳鍋160が出土した。

2．1区出土土器

天目茶碗1は露胎部にサビ釉化粧がけが認められる。大窯Ⅱ期の瀬戸・美濃製品であろう。2は小型壺で全面にサビ釉で化粧がけされている。壺内部には細釘様の鉄製品が入っていた。お歯黒壺であろうか。瀬戸・美濃製品で大窯Ⅰ期かⅡ期と考えられる。1・2ともにSE102から出土した。端反皿3は3面ピットから出土したもので3面から検出された家屋の年代を知る手がかりとなる。付高台で見込みにかたばみ？の印花が押印されている。瀬戸市小金山窯の製品に類似する。

お歯黒壺

羽釜4は3面ピットから出土した。このタイプの羽釜は遠江地方ではほとんど使用されておらず、搬入品であろう。

つぎに家屋跡の検出されたグリッド出土の土器を述べてみたい。

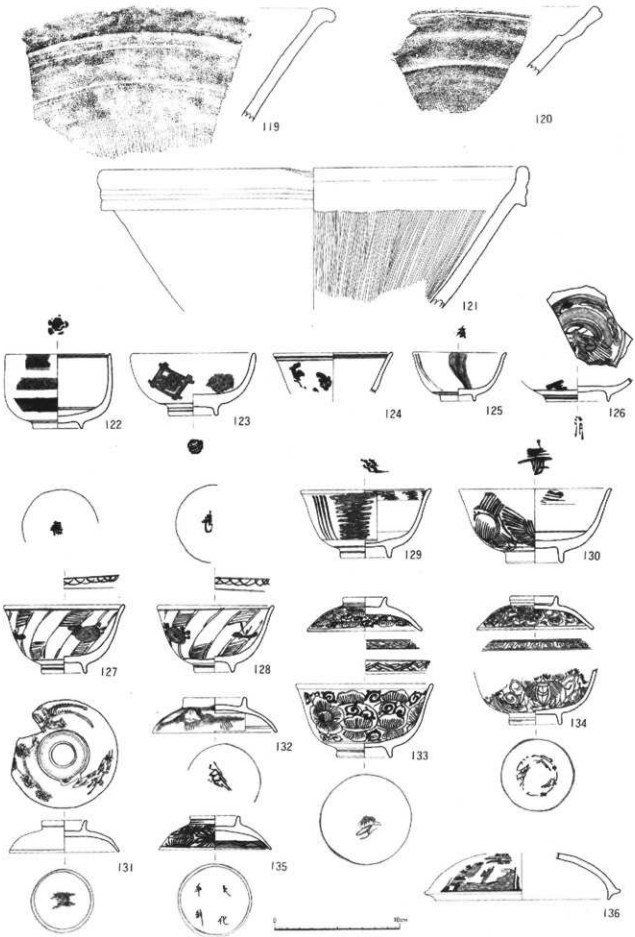
丸碗5は志戸呂焼で第Ⅴ期に属する。第1面出土で、第1面の家屋がこの時期から建てられていたと判断される。

端反皿6は総釉がけで見込み部は無紋である。大窯Ⅱ期であろう。

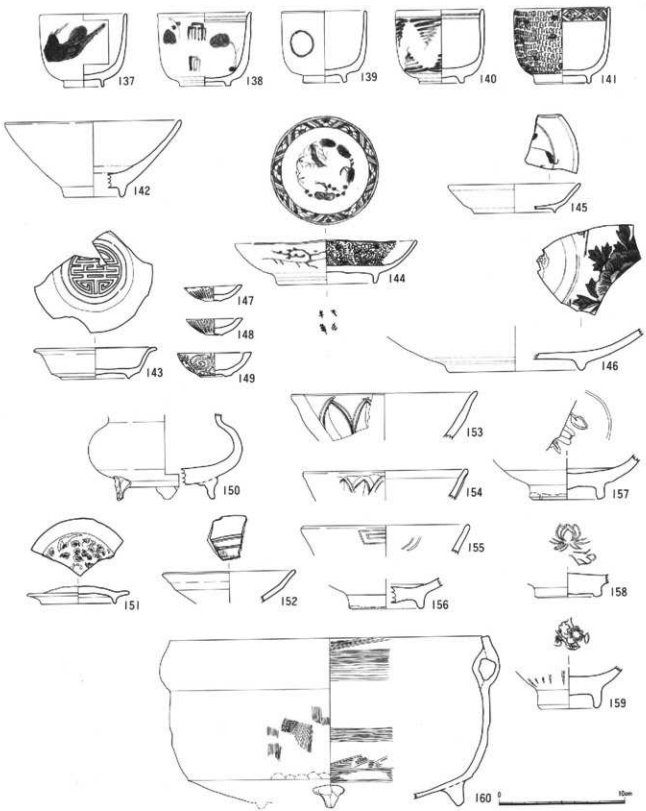
内耳皿7は初山焼で底面には化粧がけは認められない。折縁皿8は内兀で底面露胎である。大窯期後半であろう。端反皿9は見込み部無紋である。灰釉の上に白濁した灰釉がかかっている。瀬戸・美濃産。10・11の中皿は明るい黄瀬戸風の灰釉をかけ内面にソギを入れた菊花皿で、瀬戸・美濃産である。

12の小皿は口端部にサビ釉をぬり、見込みに灰釉をかける。類例はないが、胎土、色調から志戸呂焼の製品と判断される。2面出土。折縁皿13はわずかに口縁部に灰釉をかけ、見込み部に花紋の鉄絵を描く。長石釉をかけないタイプである。瀬戸・美濃産。

14のカワラケ小皿はK－5グリッドから出土した。15のカワラケ小皿は内面と口端部に



第37図　6区出土遺物　その7　包含層



第38図　6区出土遺物　その8　包含層ほか

ススが付着しており、燈明皿として使用されたと判断される。16・22のカワラケ皿は口径からすれば中皿と考えたい。16は見込み部に押圧具による同心円紋が残っている。硬質であり、こうした押圧具による同心円紋が残るタイプは美濃大窯製品にあるが、胎土や色調から本例はカワラケ皿である。焼成から地元の陶器窯で生産されたとも考えられる。

17の緑釉皿は鉄釉がけで瀬戸・美濃製品であろう。18の緑釉皿は灰釉がけで瀬戸・美濃製品である。いずれも古瀬戸後期。19の小皿は削り込み高台で灰釉をかける。志戸呂焼で第Ⅲb期に属する。3面出土。

水注20は厚手で、鉄釉と灰釉が二重がけされている。志戸呂焼と考えておきたい。21の片口鉢は削り出し高台で、口端部の釉をぬぐっている。志戸呂焼第Ⅳ期の製品である。

23の擂鉢は志戸呂焼で第Ⅳ期か第Ⅲb期に属する。

24の常滑甕は口縁部を折り曲げて幅広の縁帯とする。大窯期の瀬戸・美濃製品には伴出しないタイプでそれより古い製品であろう。胎土は暗灰色を呈する。

25・26はくの字型内耳鍋である。3面出土。

27・28の天目茶碗は削り出し高台の製品で柿釉がかけられている。27は瀬戸・美濃製品であるが、28は産地不明である。29の天目茶碗は大窯Ⅰ期ないし大窯Ⅱ期前半の瀬戸・美濃製品である。腰部にサビ釉による化粧がけがされている。30の天目茶碗は削り出し高台で、灰釉がけの製品の、良品である。志戸呂焼第Ⅳ期と考えたい。

31の丸碗は削り出し高台で明るい灰釉がかけられている。瀬戸・美濃製品である。

32の筒型碗は志戸呂焼第Ⅲb期の製品であろう。

33の丸碗は光沢のある長石釉に銅緑釉の流しがけを施す。瀬戸・美濃製品。34の御室碗は薄く断面角形の高台をつける。光沢のある薄緑色の釉をかける。瀬戸・美濃製品でⅠ－8グリッドで出土。

35の丸碗は光沢のある長石釉の上に銅緑釉のかけ流しが施されている。瀬戸・美濃産。

36・38の丸碗は削り出し高台をもち柿釉の上に絵筆で横方向に走らせ鉄釉をかける。瀬戸・美濃産であるが、おそらく中馬街道筋の製品ではないだろうか。

37の御室碗は灰釉の上に呉須を筆にふくませアクセントをつけている。御室碗としては新しいタイプであろう。瀬戸・美濃産でH－8グリッド出土。

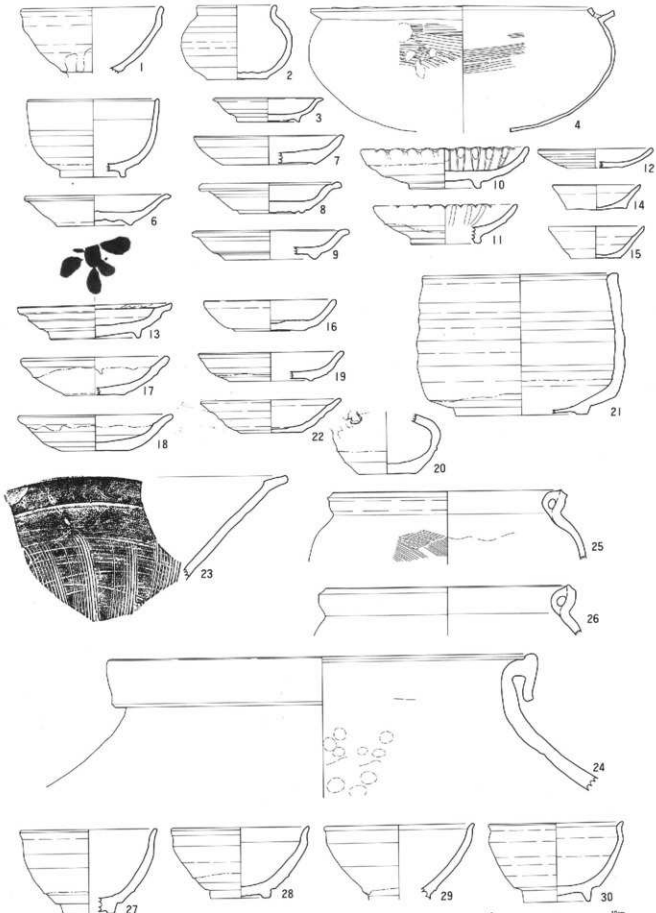
39の丸碗は薄手につくられ鉄釉上に灰釉を二重がけしている。おそらく薄くかけられ、釉切れも直線的であるところから筆を使って釉をぬったものと判断される。志戸呂焼第Ⅴ期と考えたい製品である。Ⅰ－7グリッド出土。

40の御室碗は灰釉の筆描でアクセントをつけている。高台上位まで釉がかかっている。Ⅰ－8グリッド出土。

42・43の丸碗は同じタイプで黒味の鉄釉をかけさらに灰釉を流しがけする。時期は第Ⅴ期か第Ⅵ期と考えられる志戸呂焼製品である。少なくとも第Ⅳ期ではみられない製品である。

44・45・46小形丸碗は志戸呂焼で第Ⅳ期以降と考えたい。少なくとも45・46の高高台の製品は、第Ⅳ期の内藤窯か南窯の製品であろう。いずれも2・3面出土である。

47・49の小皿は内兀皿で釉切れの段がわずかに残る。菊花の印花紋を押す。志戸呂焼第Ⅲa期か第Ⅲb期であろう。49は印花紋の上に鉄釉をぬっている。48の小皿は貼り付け高台で外面無釉である。内面は鉄釉に部分的に灰釉を二重がけする。見込みには大きな輪の中に梅花と思われる6輪の印花紋を押す。焼成・胎土は須恵器に類似する。産地・時期と



第39図　1区出土遺物　その1　SE102　包含層

もに不明である。古瀬戸期の製品であろうか。

小皿50は内面に鉄釉をかけた瀬戸・美濃産である。Ⅰ－8グリッドから出土した。

51の端反皿は総釉がけで、大窯Ⅱ期の製品と考えられる。

52・61・62・63・64・65の内兀皿は初山焼である。53は高台をもった縁釉皿である。灰釉のかかった瀬戸・美濃製品である。54の腰皿は削り出し輪高台で高台を除いて灰釉がけである。大窯Ⅱ期であろうか。

55・56は総釉がけの腰皿である。いずれも大窯Ⅱ期であろうか。56には灰釉もかかっている。57の腰皿は底部露胎である。見込み部も釉をぬぐい取っていると思われる。

58の小皿は削り込んで低い高台をつくっている。高台部脇から無釉である。瀬戸・美濃製品。59・60の折縁皿は灰釉がけで底部内外面とも無釉である。

66の小皿はサビ釉を内面にぬった製品で志戸呂焼であろう。第Ⅵ期に比定できる。焼成が甘い。口端部にススが付着し、燈明皿として使ったと考えられる。

67は志野丸皿で端反するタイプである。

小皿68・69は削り出し高台で灰釉をかけている。上志戸呂窯製品と判断され、第Ⅲａ期に属する。69はサビ釉による化粧がけが施されている。

70・71・72の小皿は細い輪高台を削り出している。志戸呂焼で第Ⅳ期に属する。3面出土。

小皿73は削り込み高台で大窯Ⅱ～Ⅲ期であろう。高台内は無釉である。75は削り込み高台で輪トチを使用して焼成した製品である。総釉がけでトチのあたる部分の釉をぬぐっている。大窯Ⅱ期に相当する製品であろうか。74は腰皿で高台内と高台部端はサビ釉化粧がけである。73～75は瀬戸・美濃製品である。

76の輪兀皿は灰釉をかけ見込みに菊花の印花を施す。高台は付け輪高台で、高台内を頭巾状に削り、無釉である。穴田2号窯床面下遺物[10]や大川東古窯跡群に類例がある[11]。

77の高台内は露胎で、見込みに菊花の印花を施した灰釉製品である。削り出し高台の形状は低く、高台端を面取りし角形としている。大窯Ⅴ期であろうか。

78・79・82・83・84・85・86は初山焼の削り込み高台の内兀皿で、78・79・85・86は見込み部の釉切れの段はほとんどないが82・84は低く残っている。78は2次焼成を受けている。初山焼の内兀皿としては前者が新しい傾向といえよう。

80・81のヒダ皿は初山焼である。81は見込み部の釉切れの段が明瞭で削り出し高台は幅が狭い。

87の菊花皿は口端部を花弁状につくり出し、外面をヘラによる沈線で表現している。釉は淡緑色を呈し、御深井釉に近い灰釉をかけている。胎土は青灰色を呈する。現状では瀬戸・美濃産としておきたい。

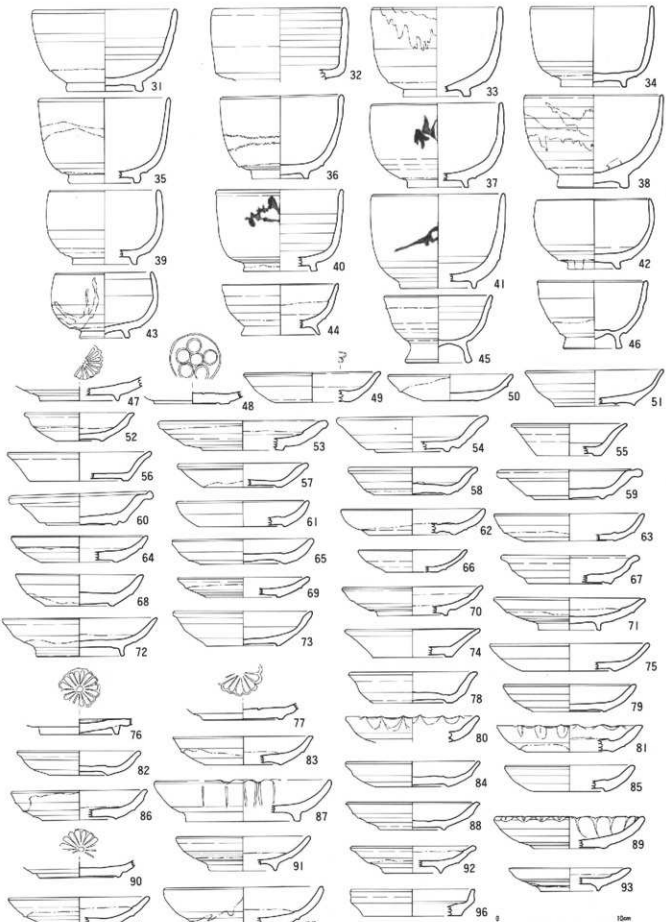
88・89・90はいずれも志野丸皿である。89は見込み部に鉄絵を描かないタイプである。

89はツギ皿で総釉がけの製品である。90は見込みに菊花の印花が施され、高台内露胎の製品である。いずれも高根沢古窯跡群に類品がある[12]。

91・92・93は志戸呂焼で第Ⅳ期の貼り付け輪高台の小皿である。灰釉を体部中位までかける。いずれもサビ釉（志戸呂焼では丹石と呼ぶ酸化鉄を塗る）で化粧がけされている。

94・95は鉄釉がけの小皿で、高台は削り出し輪高台で高台脇から内湾気味に続く形状を呈している。91～93の小皿と系譜が異なると考えられる。志戸呂焼第Ⅵ期。

96の小皿は体部中位に段をもち直立気味に口縁部につづく形態で類例を知らない。サビ



第40図　1区出土遺物　その2　包含層

釉化粧がけで平底である。燈明皿の一種であろう。胎土は初山焼に近似する。

97は大皿であろう。ワラ灰をかけ、見込み部に別の灰釉で絵か紋様を描いている。口端部は釉をぬぐっている。志戸呂焼で第Ⅳ期の良品であろう。98は鉄釉をかけている。いずれも貼り付け輪高台である。99の皿は3足で口端部を指頭で押圧し、輪花状につくっている。鉄釉の上に灰釉を二重がけしている。

100の鉢は削り出し高台で鉄釉に灰釉をかけている。97～100の製品は志戸呂焼第Ⅳ期と考えられる。

折縁皿101はサビ釉化粧がけの上に鉄釉をかけているが、その範囲は破片のため断定をさけたいが器体の半分のみと考えられる。輪高台で高台端のみ釉をぬぐっている。口端部にヘラでわずかな口を造っている。志戸呂焼第Ⅴ期か。102は瀬戸・美濃の鉄茶碗である。

103・104は唐津の折縁鉢で白粘土による象嵌が施されている。

105は瀬戸・美濃産の石皿のうち馬目皿と呼称されるタイプである。

106は見込みに灰釉を地として二階松の鉄釉の摺絵が描かれた瀬戸・美濃の製品である。

107・108・109・110の小形壺は糸切り未調整で、全面にサビ釉化粧がけされた製品である。107・109には内部に鉄分が付着しており、SE102の例と同様にお歯黒壺と考えたい。志戸呂焼で第Ⅲ期と考えたい形態であるが、108・110はサビ釉が底面までおよんでおらず、それより新しい時期に帰属させたい。

鉢111は体部上位にゆるやかな張りをもつ形態で、鉄釉の上に灰釉を二重がけした製品で、口端部の釉はぬぐっている。形態上、類例は認められなかったが、志戸呂焼第Ⅳ期と考えたい。

112の小鉢は削り込み高台で、全面サビ釉が化粧がけされている。志戸呂焼第Ⅲ期と考えたい。

片口113～117は円筒状の桶の一端をくり抜き、さらに注口部を貼りつけている。体部下部は露胎で113・114・116・117が鉄釉がけ、115が灰釉がけである。底部脇は面取りし、平底である。口端部の釉はぬぐっている。匣鉢のように重ね焼きされたと考えられる。志戸呂焼第Ⅳ期。なお116・117の片口は香炉の可能性もあるが、三足をもたないことから片口とした。

118は口端部の釉をぬぐっていないこと、端部をやや外反させていること、体部に3段の段を明瞭に造っていることから香炉とした。鉄釉がけで志戸呂焼第Ⅳ期か第Ⅴ期と考えたい。

119は輪高台をもつ香炉で、サビ釉化粧がけの上に鉄釉をかける。鉄釉は内面にまでおよんでいない。志戸呂焼第Ⅵ期であろう。

120は小形の香炉であろうか。瀬戸・美濃製品である。明るい光沢のある灰釉がかけられている。

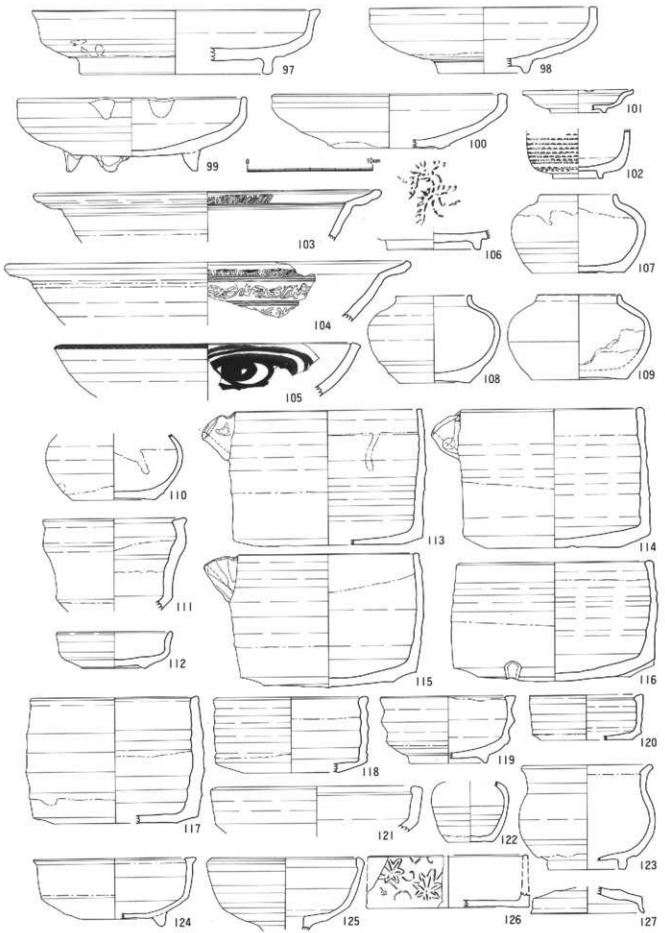
121は瓦器質で小形の手あぶりと考えられる。現状では遠江地方での瓦器質製品の発見例はきわめて少なく、他地域からの搬入品であろう。

122は柿釉をかけた志戸呂の茶入である。詳細な時期は不明であるが、第Ⅲ期としておきたい。

植木鉢へ転用

123の鉢は光沢のある鉄釉がかけられている。焼成後、底部に直径5㎜の穴があけられており、植木鉢に転用されたと考えられる。志戸呂焼第Ⅵ期の製品である。

124は三足の香炉である。灰釉がかけられており、志戸呂焼第Ⅳ期か第Ⅴ期の製品と考え



第41図　1区出土遺物　その3　包含層

られる。

漏　斗　125の漏斗は注口部分のみ露胎でそのほかサビ釉化粧がけである。特殊な製品であり、詳しい年代は不明であるが、志戸呂焼第Ⅵ期と考えておきたい。

126は瀬戸・美濃産で摺絵のビンダライである。

127は内面露胎で、表面にサビ釉の化粧がけが施されている。蓋であろうか。志戸呂焼であるが、特殊な製品であるので時期は不明である。１面出土であり、18世紀中頃以降（第Ⅵ期？）に属する製品であろうか。

128・129は徳利で鉄釉がけである。128は志戸呂焼第Ⅲａ期か第Ⅲｂ期と考えられる。129は削り出し高台で志戸呂焼第Ⅲａ期と考えられる。

130は短頸壺か一升徳利であろう。サビ釉化粧がけで、志戸呂焼第Ⅴ期以降と考えておきたい。

由右衛門徳利　131は志戸呂焼の由右衛門徳利である。由右衛門徳利は第Ⅳ期から第Ⅵ期まで長期間生産されており、器形の変化は口縁部に表れる。したがって、131の胴部破片のみでは年代の細分はできないが、下胴部が張って釉を下部まで掛けており、第Ⅳ期か第Ⅴ期と考えたい。１升徳利であろう。

132・133は瀬戸・美濃産の片口である。132はねり鉢かもしれない。

134の油指は瀬戸・美濃製品でサビ釉がけである。頸部をもつ油徳利であろう。

燈明皿135は志戸呂焼第Ⅳ期か第Ⅴ期に属すると考えられる。口は２ケ所である。燈明皿136は135に比べ小形で芯受けも低い。口は１ヶ所切っている。志戸呂焼第Ⅵ期。燈明皿137はサビ釉がけの瀬戸・美濃産で、芯受けも口端部より下位に巡る。燈明皿138・139は灰釉がけの瀬戸・美濃製品である。

140は三脚の割り高台で、楕円形または半月形の風門をあけている。円筒形を呈する冷炉と考えられる。白泥質ではあるが、むしろ白カワラケに類似する。

141は茶壺か水壺で折り返し口縁で光沢のある鉄釉が内外ともかけられている。志戸呂焼第Ⅲ期と考えたい。

しびん142は瀬戸・美濃製品で、把手部周辺に櫛描紋を描く。

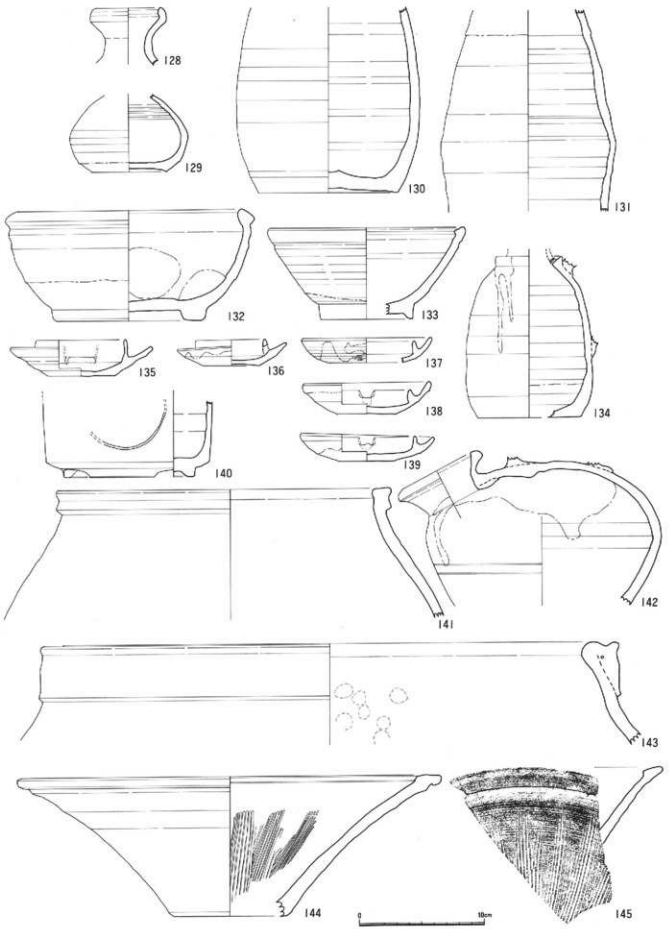
壺143は幅広く低い縁帯をもつ。常滑焼でサビ釉を化粧がけしている。

擂鉢144～151・153は、いずれも志戸呂焼である。144・150は第Ⅲａ期、145・146・151は第Ⅲｂ期か第Ⅳ期、147は第Ⅲａ期、148・153は三ツ沢窯製品で第Ⅰ期、149は第Ⅴ期であろう。

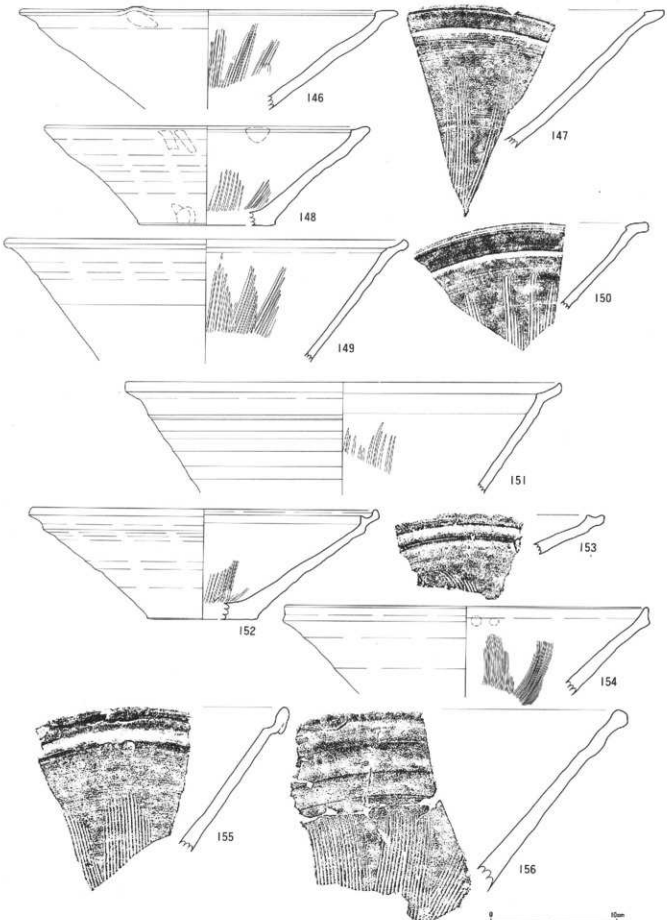
擂鉢152は内面に小突起がみられるタイプで端部は平坦に面取りしてナデている。瀬戸・美濃産で赤津Ｂ窯採集品に類例がある。擂鉢154は瀬戸・美濃産で大窯後半期であろう。

155は18世紀代の瀬戸・美濃製品で、口縁部を屈曲させている。156・157は19世紀代の瀬戸・美濃製品である。

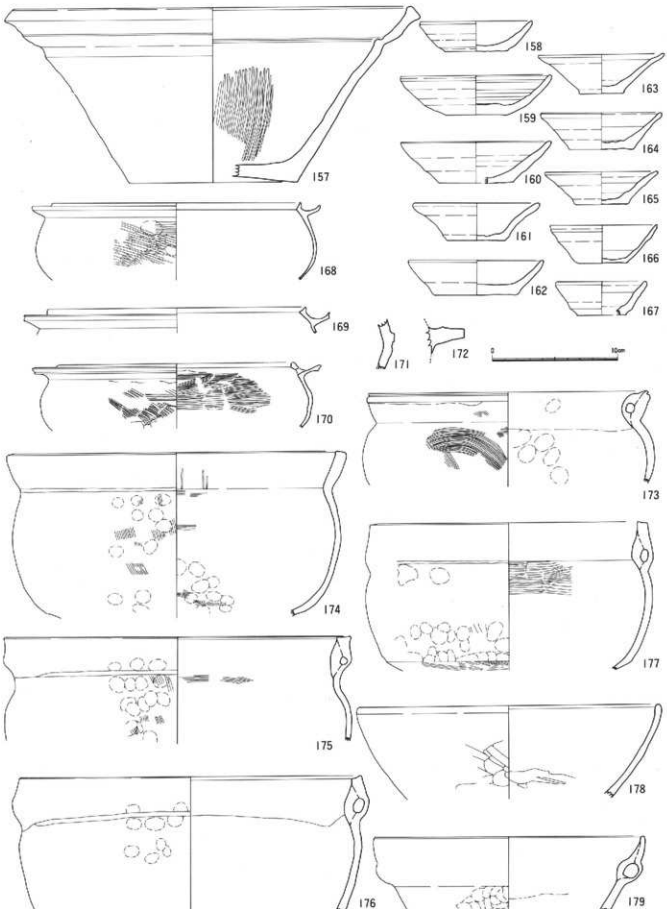
カワラケ小皿158は外面と口縁内面にススが付着しており、燈明皿として使用されたと判断される。159は同心円状の押圧痕が巡る。瀬戸・美濃製品ではいわゆる重圏紋皿とされるタイプである。硬質で陶器窯製品であって、胎土からすれば地元製品であろう。160・162・164についても硬質で陶器窯製品で地元産であろう。口縁部外面にわずかにススが付着している。161・163のカワラケ小皿は底径に比べ口径が大きく開くタイプである。ススが付着し、燈明皿として使用されたと判断される。163・166・167については焼成はややあまいが地元陶器窯製品かもしれない。



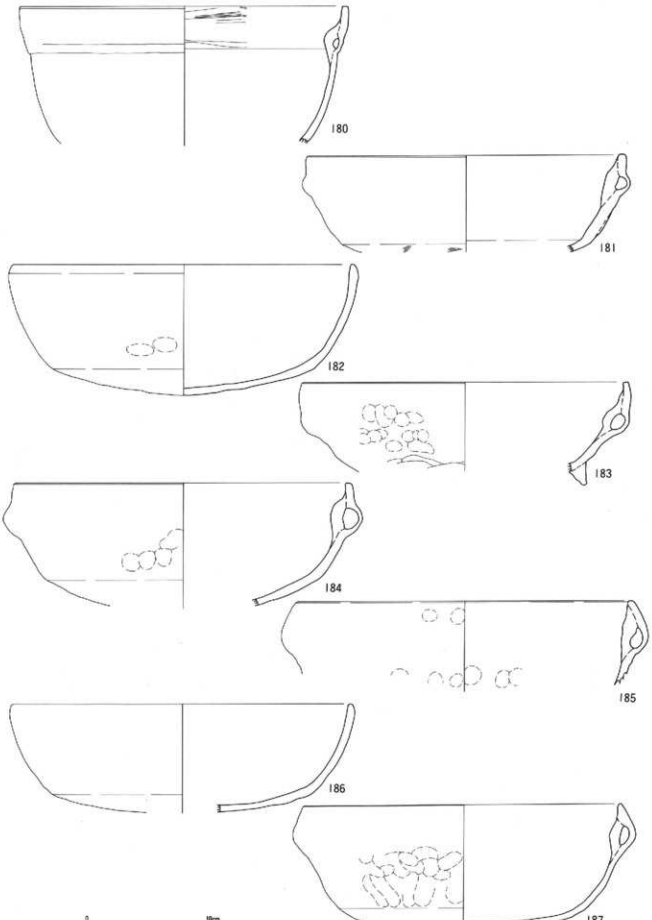
第42図　1区出土遺物　その4　包含層



第43図　1区出土遺物　その5　包含層



第44図　1区出土遺物　その6　包含層



第45図　1区出土遺物　その7　包含層

168～170の羽釜は薄手に造られており、形態上、搬入品と考えられる。

171・172は外側に耳が付き、鍔状尖帯の巡る茶釜形と耳を付けない煮沸土器である。遠江においてはその出土量は内耳鍋に比べ極めて少ない。

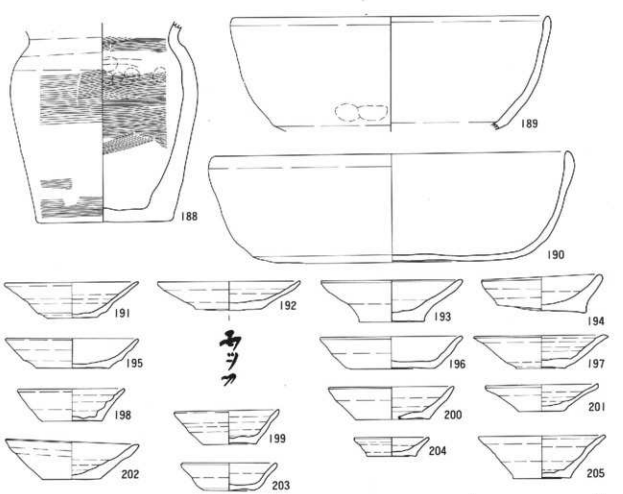
173～187・189・190は内耳鍋である。形態上、内耳鍋はくの字型・内湾型・半球型の三種類があるが、内湾型が多数を占める。181～187・189・190は胴上位の屈曲部も消失しており、17世紀代と判断される。

188の小形壺は赤味をおび、常滑焼と考えられる。内面に指頭圧痕と板によるカキナデが残っている。断面の幅が一定ではなく輪積成形であろう。

カワラケ小皿191・192・193・201・202・205は口径が大きく外面に開くタイプである。192は器高が低く底面にスノコ状の圧痕がつく。「ウツ」の墨書が認められる。多くは陶器窯製品であろう。195のカワラケはススが付着し、燈明皿として使用されたと判断される。胎土・焼成は白カワラケ質である。底部下位に鋭い横ナデによる屈曲をもつ。196・200のカワラケ小皿は直径がやや大きく、口径と底径の比は極端ではない。

194のカワラケ小皿は土師質で、底部が厚く造られている。底径も大きく、特徴的な器形を呈する。

198・199・203・204は直径10cm以下で、底径に比べ器高は高い。いずれも陶器窯製品で18世紀中頃以降と判断される。200のカワラケ小皿も焼成もあまく土師質ではあるが、陶器



第46図　1区出土遺物　その8　包含層

窯の物原などで採集される焼成不良品がこの程度の焼成であり、このタイプが市場に流れていても、不都合はない。

以上が家屋の検出された周辺で出土した土器である。

包含層出土

206の天目茶碗は腰部にサビ釉化粧がけが施される。丸碗207は腰部以下が露胎で、光沢のある灰釉が施釉され高台部の釉をぬぐっている。208・209の御室茶碗は207に比べ高台がやや低く造られている。高台脇まで施釉されている。209は呉須による絵付が不明瞭となっており、新しい様相を呈している。

210の尾呂茶碗は、高台内を頭巾に削り出し、口縁部に白濁したうのふ釉がかけられている。211の丸碗は黄味をおびた灰釉がかけられている。

212は掛け分け茶碗である。213は灰釉丸碗で腰部の張った形態を呈する。

抹茶茶碗

214の大ぶりの茶碗は、外面に1ヶ所凹みを入れており、抹茶茶碗と考えられる。志戸呂焼第V期以降と考えたい。215はサビ釉をかけた小ぶりの丸碗で志戸呂焼第VI期と考えられる。

216・217・221の丸碗は口縁部内外面とも灰釉を漬けがけし、中位以下は露胎である。志戸呂焼第IV期か第V期前半の製品であろう。器高が低くやや特殊な器形を呈する。218の丸碗は腰部のやや張った形態で低い輪高台がつく。鉄釉がけである。志戸呂焼第IV期か第V期の製品であろう。219の丸碗は灰釉がけで、サビ釉化粧がけが施される。志戸呂焼第IV期と考えたい。

220・222・224の小形丸碗は削り出し輪高台の瀬戸・美濃製品である。18世紀末から19世紀以降に盛行する器形である。223の小形丸碗はサビ釉化粧がけに体部外面と内面上位に鉄釉がかけられている。産地は瀬戸・美濃と考えられるが、地元産の可能性もある。

225の丸碗は高台高の高い器形で、志戸呂焼第IV期の製品である。

226は鎧茶碗である。瀬戸・美濃産。

227は初山焼の内冗皿である。

228・230は志野丸皿で鉄絵の描かれないタイプである。229は志野丸皿で鉄絵が描かれている。見込みに二重の圏線を描き、体部内面に草花紋を描く。231は志野総釉がけで高台端部の釉をぬぐう。見込みに菊花の印花を施す。

232は明るく光沢のある灰釉をかけた菊花皿で、内面に丸彫りを入れさらに口端部をヘラで花弁状の切り込みを入れている。高台内は露胎である。瀬戸・美濃製品。

233はサビ釉がけの小皿で口端部にススが付着している。燈明皿であろうが、芯押えが1ヶ所付くタイプであろうか。志戸呂焼第IV期以降（あるいは第VI期）にみられるタイプと判断したい。

234は光沢のある灰釉のかけられた中皿で、見込みに灰釉による梅花紋？摺絵が施される。付け高台で高台内は露胎である。瀬戸・美濃製品。

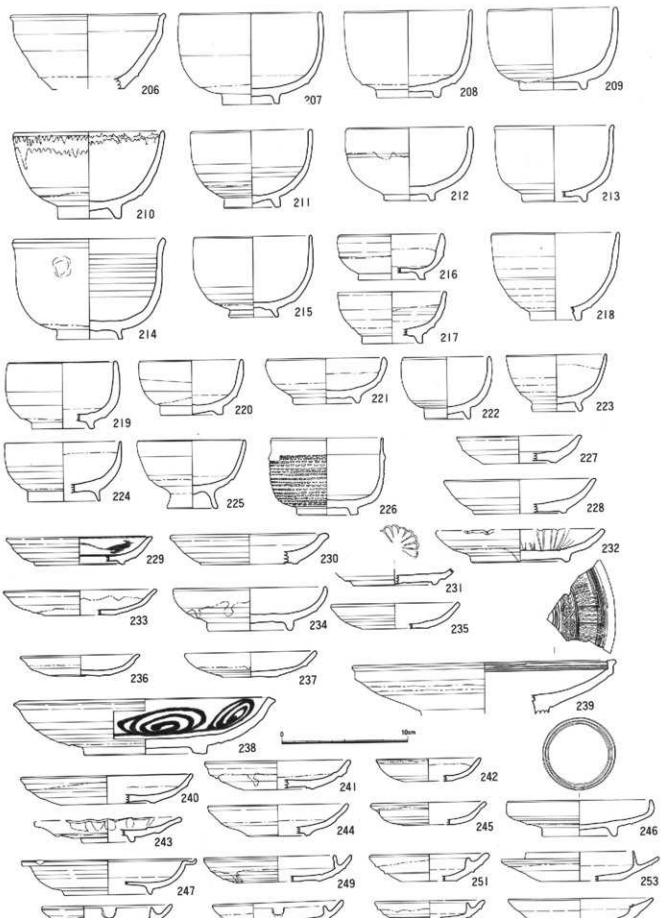
235は志野総釉がけの小皿で、体部にはカンナ削りが施される。手塩皿であろう。236・237は形態上、235の小皿に近似するが、灰釉がけで体部から底部は露胎である。油皿であろう。瀬戸・美濃産。

馬目皿

238は江戸後期に盛んに量産された馬目皿である。

239は唐津皿で白粘土の象嵌が施される。体部外面下半は鉄釉がけである。

240・241・244は削り込み高台の志戸呂焼鉄釉皿で、志戸呂焼第IV期に属する。242・245の小皿はサビ釉がけである。242は底部脇を削っているが、245は削りはみられない。志戸



第47図　1区出土遺物　その9　包含層

呂焼第Ⅳ期以降である。

243のヒダ皿は張り付け輪高台で、灰釉がけの製品である。志戸呂焼第Ⅳ期か第Ⅴ期であろう。

246の皿は体部に屈曲部をもち直立して口縁につづく形態で、輪高台である。鉄釉をかけ見込み部は露胎で同心円紋が巡る。志戸呂焼第Ⅳ期の製品である。

247の折縁皿は削り出し輪高台で鉄釉と灰釉の二重がけが施される。志戸呂焼第Ⅵ期か第Ⅴ期の製品であろう。

248～252は瀬戸・美濃産の燈明皿である。248・250・251・252は灰釉がけで249はサビ釉がけである。

253・254は志戸呂焼の燈明皿である。いずれもサビ釉がけである。253は第Ⅵ期、254は第Ⅴ期以降の製品である。

255～257は瀬戸・美濃産の片口鉢である。255は重ね焼されたと考えられるヒッツキが胴部下半にある。灰釉か銅緑釉の筆先による紋様が施される。256・257は灰釉がけである。257は高台部以下が露胎である。258は小形の片口で、削り出し高台である。あざやかな緑色の灰釉が施されている。

漏　斗　259は志戸呂焼の漏斗である。サビ釉がけである。1面よりの出土や焼成からすれば第Ⅵ期と推定される。

260は瀬戸・美濃産のひょうそくである。底部内面は露胎である。

261の鉢はサビ釉化粧がけの上に胴部外面上位に灰釉をかけ、内面は鉄釉？がけであろうか。口端部は釉をぬぐっている。志戸呂焼第Ⅳ期か第Ⅴ期の製品であろう。

262は瀬戸・美濃産の香炉である。灰釉がけで底部は削り出し高台である。

263は志戸呂焼の香炉である。体部中位から外側に大きく開く形態で、張り付け輪高台である。灰釉がけで内面は露胎である。志戸呂焼第Ⅳ期か第Ⅴ期と考えたい。264は灰釉がけで、三足が付く。志戸呂焼第Ⅲ期か第Ⅳ期であろう。265・266・267・269・271は志戸呂焼の香炉で、265・267・269・271は第Ⅵ期、266は第Ⅴ期の製品である。

268は三足の付く香炉で、志戸呂焼第Ⅲ期か第Ⅳ期であろう。270の鉢は鉄釉総釉がけで、一部に灰釉がかかったと推定されるが、2次焼成を受け判断できない。瀬戸・美濃産であろう。

272は小形香炉で、御深井釉に赤絵の上絵付がされる。瀬戸・美濃産とも考えられるが、京焼周辺の可能性もある。

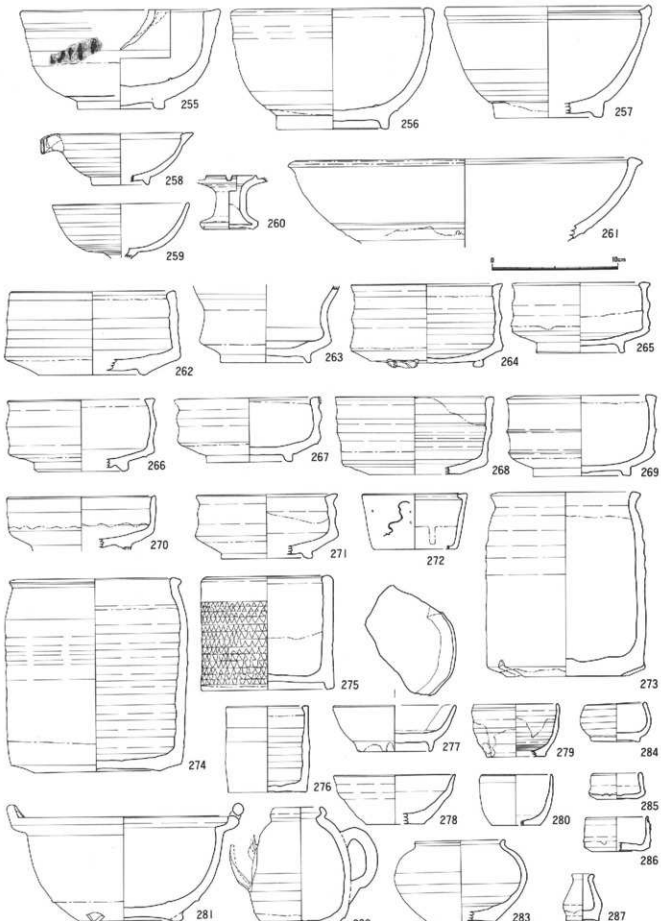
273・274の水指はサビ釉がけで、底部は平底に造る。底部の脇はカンナ削りで切り落としている。また、273は底部に丸彫りによる5ヶ所の凹みをつけている。志戸呂焼で第Ⅳ期と推定される。274には凹みは認められない。匣鉢のように重ね焼きされたと判断される。

275の鉢は体部に連続三角印刻紋を施し、口縁部に銅緑釉をかける。形態から火入れと考えられる。瀬戸・美濃産であろう。

虎斑釉　276は円筒形を呈し、外面にサビ釉をかけ、さらにインチンがけか指先で白粘土をつける虎斑釉技法を施している。志戸呂焼第Ⅵ期の火入れであろうか。277は輪高台で光沢のある灰釉がかけられている。口縁部が五角形ないし六角形を呈することから向付と考えられる。瀬戸・美濃産。

278は平底でサビ釉が総がけされている。チョクであろうか。

279・280は平底の底部を除いてサビ釉がかけてある。279には見込みに同心円紋が施され



第48図　1区出土遺物　その10　包含層

る。志戸呂焼で第Ⅳ期以降であろう。

281の鍋は鉄釉がけの瀬戸・美濃製品である。

282は削り出し高台の油指である。瀬戸・美濃産。

小形壺283はサビ釉がけで、底部は糸切り未調整である。内面に鉄分が付着しており、お歯黒壺に使用されたと考えられる。瀬戸・美濃産であろうか。

284は糸切り未調整のチョクで、胎土・焼成は備前焼や丹波焼に類似する。

285・286は瀬戸・美濃産の餌チョクである。285の底部には2次穿孔がみられ、何かに転用されたと考えられる。

287は灰釉のかかったミニチュアである。瀬戸・美濃産であろう。

288は四耳壺の胴部であろう。胴部に圏線を巡らし、灰釉をハケ塗する。古瀬戸であり、13世紀か14世紀代にさかのぼる。J－6グリッドの攪乱部から出土した。

急須

急須289は鮫肌釉がかかり、信楽（高原）焼であろうか。

290は土瓶の蓋と考えられる。サビ釉がけで志戸呂焼と考えられる。幕末から明治前期に志戸呂では土瓶・急須を生産しており、290についてもこの時期の可能性が大きい。291・292は内キ土瓶の蓋である。293・294は山蓋土瓶の蓋である。いずれも瀬戸・美濃産である。

295・296は瀬戸・美濃産の手あぶりである。

297は虎斑釉のかけられた志戸呂焼徳利と推定される器種である。徳利とすれば5合入である。志戸呂焼第Ⅵ期であろう。

298は常滑の火鉢か水甕であろう。299は瓦質で火消し壺であろう。

300の壺は鉄釉がけで、内面にも釉がけがみられる。初山焼であろう。

301～320・322はサビ釉がけの擂鉢である。そのうち301・303・313・314が志戸呂焼である。301・303・313が第Ⅴ期、314が第Ⅳ期後半と考えられる。319の擂鉢は長石粒を含み、赤味をおびた肌色で志戸呂や瀬戸・美濃以外の製品であろう。口縁部も丸くおさめ異なっている。

それ以外の302・304～312・315～318・320・322は瀬戸・美濃製品である。18世紀から19世紀と判断される。この時期、擂鉢は瀬戸・美濃製品が圧倒的多数を占める。

321・323は土鍋であるが、321は茶釜形を呈する外耳型土鍋である。323はくの字型内耳鍋である。

カワラケの分類

324～336はいずれも水挽き成形のカワラケである。口径10cm以下で小皿に入る。なかでも器高や口径によって、さらに形態によってつぎのように細分できる。

1　口径が8cm以上で、器高が2cm以上を測る。（324・329・330・331・334）

2　口径が8cm以下で器高にはバラつきがある。おおむね2cm前後である。

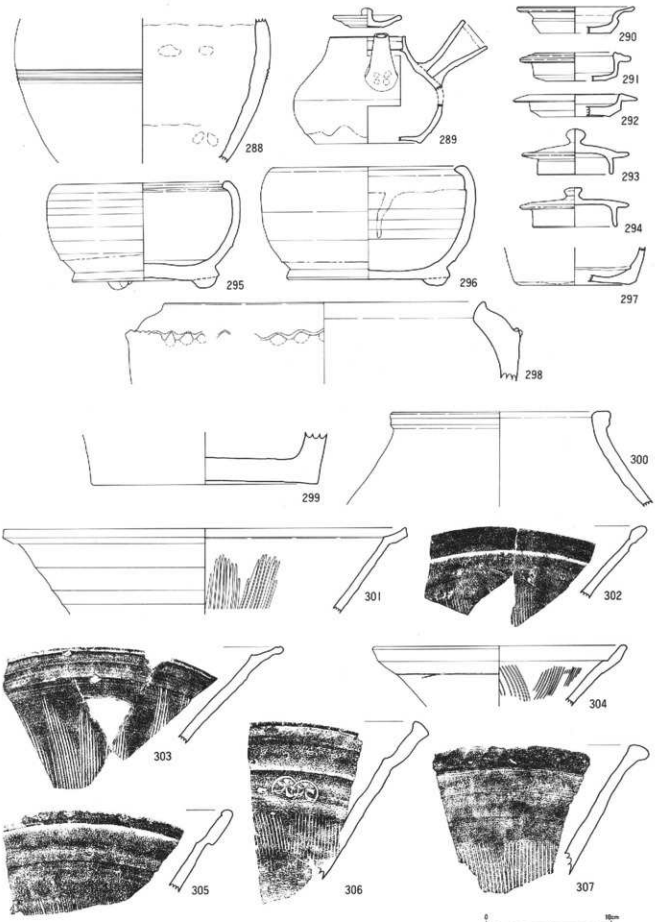
（327・328・332・333・335・336）

3　体部から口縁部に丸味をもってつづくタイプ（326）

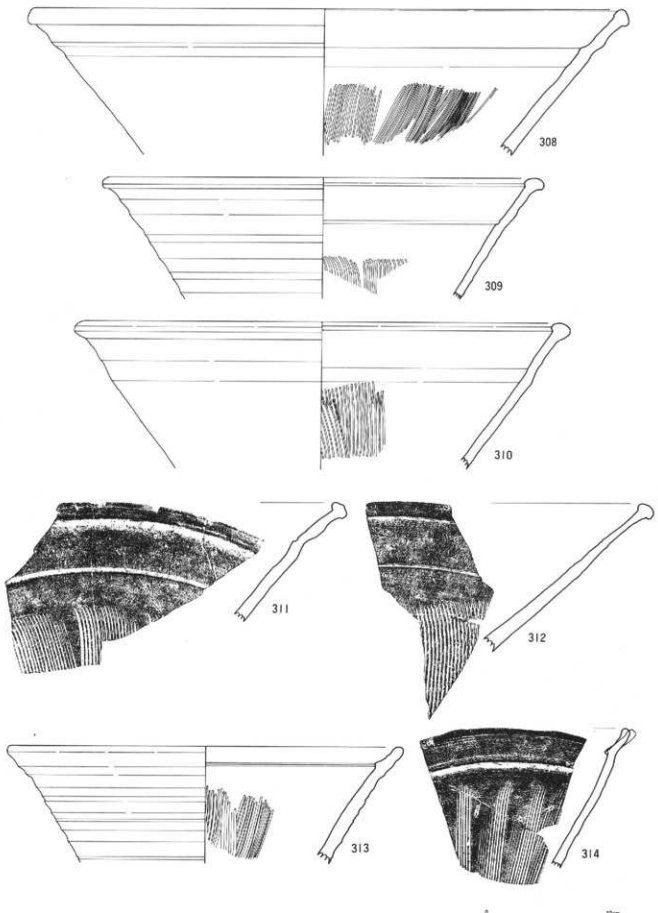
325はゆがんでおり分類出来ないが、1に入れておく。うち硬質で陶器窯で生産されたと推定される品は、カワラケ324・326・330・333・334・335であろう。

337は灰釉の上に鉄釉による擂絵を描く。内面はよごれておらず、汁次として使用されたと判断される。

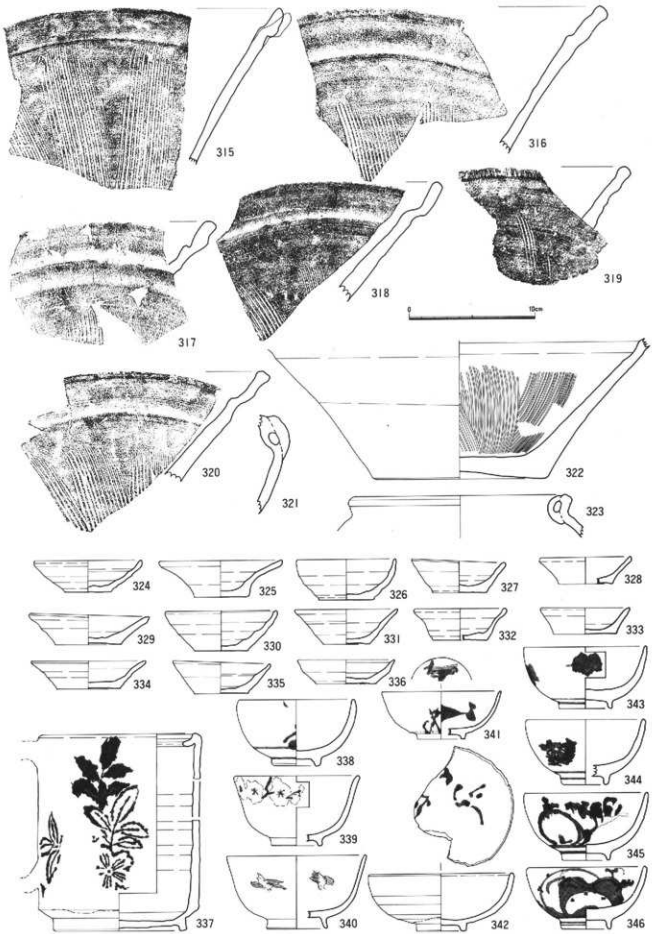
338・345・347は瀬戸・美濃産の陶器茶碗である。342は見込みに呉須と鉄絵で草花紋を描く。339は白桜の土絵付を施す。瀬戸・美濃産と判断される。341は灰釉上に鉄絵で山水紋を描く。



第49図　1区出土遺物　その11　包含層



第50図　1区出土遺物　その12　包含層



第51図　1区出土遺物　その13　包含層

コンニャク版　343・344はコンニャク版で桐紋を描く肥前産の碗で、コンニャク版手としては古い。

346・348・349は波佐見地方などで盛んに生産されるタイプの碗である。340は内外面に浜千鳥を紋様とする。いずれも肥前磁器である。

350・351は青磁染付蓋付碗で、コンニャク版が認められる。360は青磁染付碗で、ガラス継ぎされている。口端部には酸化鉄でいわゆる口サビが施されている。

352～357は広東碗タイプの磁器碗である。357は瀬戸・美濃の陶胎磁器であるが、それを除くといずれも肥前磁器である。353は古いタイプであろう。

358・359の丸碗は肥前磁器である。358は丸紋と口縁内側に回紋を描く。359は二重網手紋を描く。

361～383までは蓋付碗の蓋である。器高が高く、天井部から口縁部に直線的につづくタイプと天井部下位にわずかな丸味をつくり、肩の張ったタイプがある。おそらく広東碗タイプの蓋と端反碗タイプの蓋であろう。濃絵技法が多く383の素描技法のものは少ない。361・362・364～367・370・372・373・375～380・382・383が肥前磁器で、363・368・369・371・381が瀬戸・美濃産であろう。374は産地は不明で白磁が緑味を帯びる。なお同じ蕙東紋の構図であっても375は産地の違いか釉調は異なり、描写法も異なっている。

384～387は端反碗である。384・386・387は瀬戸・美濃産で385は肥前産であろう。387は丸窓紋で、高台畳付を平坦に造り、高台内とともに露胎である。小ぶりであることから煎茶碗であろうか。

388～396までは筒茶碗である。388は陶胎で、灰釉と呉須と鉄釉で帯紋を描く。呉須の部分は摺絵であろうか。見込み部は印版であろう。瀬戸・美濃産。392・393・396も瀬戸・美濃産と判断される。389～391、394・395は肥前磁器である。389・390・394は見込みにコンニャク版が認められる。

397～405の碗は腰部が張って高台部が細く径の小さいタイプで、湯飲み碗と考えられるタイプである。

397・398・404の碗は肥前磁器と考えられる。399～403、405は瀬戸・美濃産と考えられる。このタイプは瀬戸・美濃産が優位である。

406～409は丸碗タイプであるが、口径が小さいことから湯飲み碗と考えたい。406・407・409は肥前、408は瀬戸・美濃産と考えたい。

410・411は白磁碗である。410は瀬戸・美濃産、411は肥前磁器と判断したい。

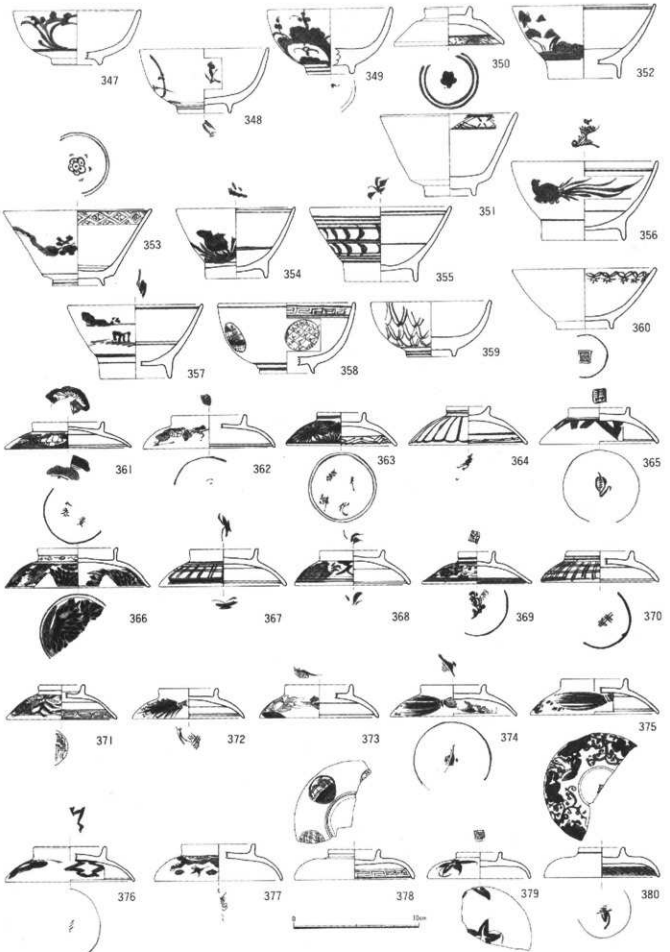
412～423は口径が小さく器高の高い器形で湯飲み碗と考えられる。416・417・423が肥前磁器、414・415・418～422は瀬戸・美濃産と判断したい。415は鮮明なコバルトを使ったと思われる絵付が認められ、明治前期と考えられる。それ以後は幕末から明治初年代であろう。

424～436はチョク・煎茶碗と考えた。424・425・431が肥前磁器である。424は窯ノ辻窯製品に類例がある。17世紀前半から中頃の肥前磁器は原川遺跡の中では少ない。431はコンニャク版で紋様を施した製品であろう。425は瑠璃釉がかけられている。

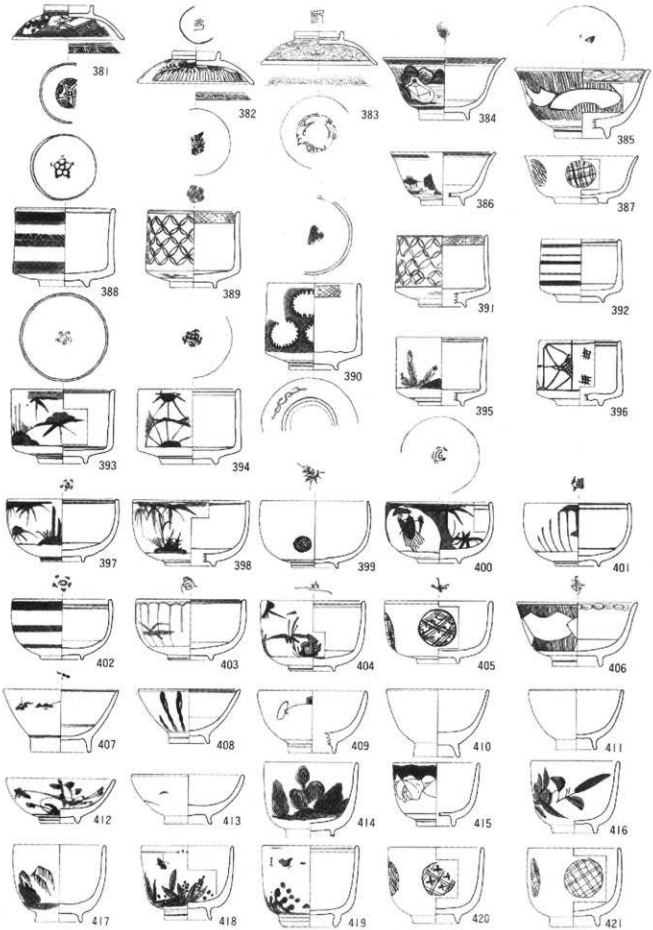
432～434は瀬戸・美濃産の白磁である。ソバチョク型と坏型の器形を呈する。427・429は陶胎である。426～429は瀬戸・美濃産のチョクであろう。

435・436は明治前期の煎茶碗であろう。430は明治中期か摺絵が見込みにみられるチョクである。

437～440・444は見込みコンニャク版の施された中皿である。439・440・444は見込み部



第52図　1区出土遺物　その14　包含層



第53図　1区出土遺物　その15　包含層

を蛇の目状に釉を剝いでいる。443は蛇の目釉ハギのタイプで広瀬向窯に類例がみられる。

449の中皿は花鳥紋が描かれ、蛇の目凹形高台である。446・447は小皿である。肥前産であろうか。441は陶胎の小皿で長石釉の上に呉須絵を描く。見込みには五弁花を手描きしており、瀬戸・美濃産の肥前写しであろう。442は鉄絵小皿である。445・448・450は瀬戸・美濃産の磁器である。445・450は破片を含め量的にも多く5枚以上の組皿と考えられる。450は上絵付されている。いずれも明治以降の瀬戸・美濃産である。

碗・皿以外では次の陶磁器類が出土している。

451は小鉢であるが、コバルト釉と鉄釉で紋様を描く。Ⅲ層上とされるところからⅢ層上面が明治以降といえよう。

452は肥前の瑠璃釉小瓶で鬢付油などを入れたと思われる。 瑠璃釉小瓶

453～456は肥前磁器の大皿である。453の大皿はガラス継ぎされている。453と454は型造りであろうか。457は鉢としたが、香炉または段重の可能性もある。肥前磁器であろうか。

458・459は肥前青磁の香炉である。いずれも蛇の目凹形底である。458には底面にサビ釉をぬっている。

460は鉄絵による摺絵ピンダライである。

461はつまみ部の欠損痕があり、合子蓋であろう。肥前磁器と判断される。

462は肥前の紅皿である。463～467は瀬戸・美濃産の角形型抜皿で、464は浮彫りのいちょうの葉をぬり残し背面を呉須でぬり紋様としている。464・467は麒麟を浮彫りしており、465は口サビをぬっている。

466は菊花を紋様としている。464～467までは白磁製品である。安政3（1856）年から慶応4（1868）年まで北海道およびクナシリ・エトロフ島の警備のため造営された仙台藩白老陣屋からこの種の型抜皿が出土している[13]。 型抜皿

次に、出土面不明や遺物取上げ台帳から出土面を確定した遺物を述べたい。

468は古瀬戸の前期水注である。13世紀前半代と考えられる。胴部に突帯を巡らし、ヘラで刻目を入れている。

469の丸碗は鉄釉の上に灰釉流しがけを施す。高台は削り出し高台でサビ釉で化粧がけを施している。

470は志戸呂焼の丸碗で、灰釉漬けがけである。第Ⅳ期であろう。

471は尾呂茶碗である。口縁部のみ灰釉を二重がけした製品である。1面出土。

472は志戸呂焼の小形碗で第Ⅳ期であろう。

473・477は志野丸皿である。474は初山焼内兀皿である。3面と1面から出土した。

476は大窯期の折縁皿である。480は折縁皿で見込みに鉄釉を描く。483は端反皿である。瀬戸・美濃製品かもしれない。

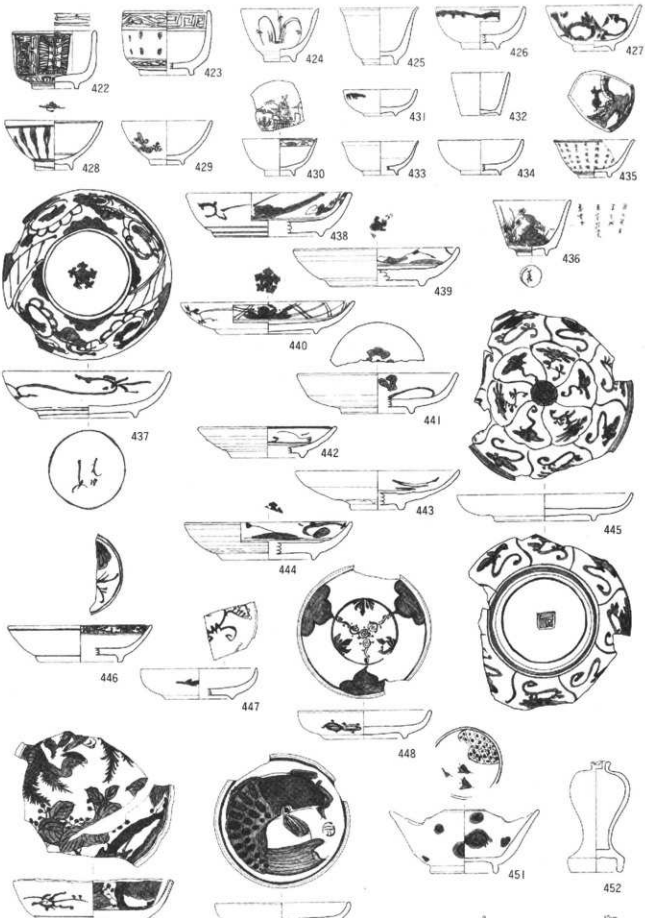
475・478・479は志戸呂焼の小皿である。いずれも第Ⅳ期である。1面出土の479を除いて2面から出土した。

481・482は肥前の蛇の目凹形高台の中皿である。481には口サビを施している。

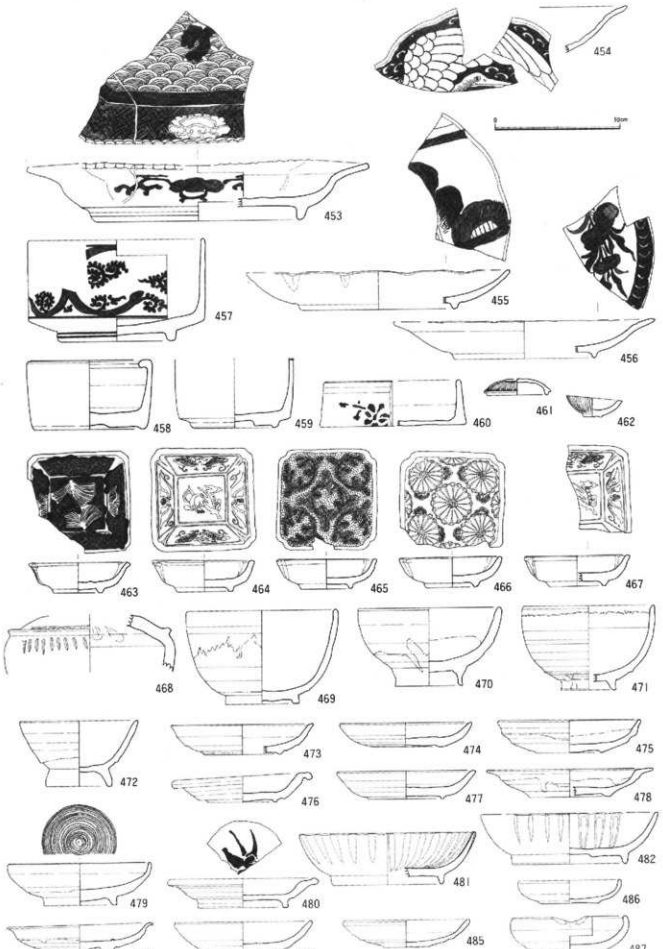
485の小皿は胎土に暗青灰色にわずかに朱色をおびる部分がある。志戸呂焼第Ⅵ期の製品にこの種の器形のものがあり、その可能性も否定できない。光沢のある灰釉のかかった小皿である。

486の小皿は平底で糸切り痕が残る。志戸呂焼であるが、時期は明確ではない。

487は志野の片口である。削り込み高台で総釉がけであるが、高台とその周辺のみ釉をぬ



第54図　1区出土遺物　その16　包含層



第55図　1区出土遺物　その17　包含層

ぐっている。

488・489は志戸呂焼の香炉で、488は破片であるので明確ではないが三足の付くタイプであろうか。489は志戸呂焼第Ⅳ期か第Ⅴ期に属する。灰釉がけで下半分にサビ釉を化粧がけしている。

490は鉄釉がけの蓋であるが、どの器種に伴うか不明である。志戸呂焼第Ⅵ期であろう。

491は灰釉のかかった瀬戸・美濃の燈明皿である。492はチョクであろうか。志戸呂焼であるが時期は不明である。

493は折縁の豆皿である。志戸呂焼であるが時期は不明である。494は志戸呂焼の燈明皿である。第Ⅴ期か第Ⅵ期であろう。

495は笠原鉢である。灰釉の上にサビ絵を描く。

496・497は瀬戸・美濃産の片口であろう。498は瀬戸・美濃産のやや大振りの土瓶である。このタイプは19世紀から幕末までであろうか。

499は半胴甕である。瀬戸市小佐衛門窯出土品に類例がある[14]。

信　楽　500は信楽の土瓶で、縦方向の櫛描紋の上にイッチン技法で灰釉をかけている。

501・502は志戸呂焼の仏飯器でこのタイプは新兵衛窯で焼成されており、第Ⅵ期に属する。

503は常滑甕である。鍔状の口縁帯を水平に外面へ出しており、近世常滑甕の編年では19世紀前半と推定されているタイプであろう。水甕か糞尿溜であろう[15]。なお同じタイプが天保7（1836）年に亡くなった掛川市龍華院住職長全の甕棺に使用されていた。

504～507は志戸呂焼擂鉢である。504・505が第Ⅴ期、506・507は第Ⅳ期であろう。

508は瀬戸・美濃産の備前写しの擂鉢で、幕末から明治以降であろう。

509～511は手捏ねカワラケ小皿で、内面にハケ目調整の残るタイプと型造りと考えられるタイプがある。509を除いてススが付着している。いずれも3面出土である。

512～518はロクロ水挽き成形のカワラケ小皿である。

口径8cm以上、器高2.5cm以上のタイプは、516～518で、いずれも2面出土である。口縁8cm以下で、器高は2.9cmと高いタイプは513・515である。口径7.1cmで器高が2cmと小振りのタイプは512である。ススが付着し、燈明皿として使用されたと考えられる。514は硬質で陶器窯で造られたカワラケ小皿であろう。

519・520は肥前の広東タイプの碗である。521・522は瀬戸・美濃産で、幕末から明治前半期であろう。523は瀬戸・美濃産の湯飲み碗である。

524・525は筒茶碗であるが、524は瀬戸・美濃産で、身込みは手描きで花弁を描く。525は肥前磁器であろう。

526のチョクは外側をコンニャク版で花弁様の紋様を施す。コンニャク版手法では古い器形を呈する。

527～529は瀬戸・美濃産の碗蓋であるが、529は明治以降であろう。530は瀬戸・美濃産の鉄絵の描かれた土瓶蓋である。531は段重の蓋であろうか。

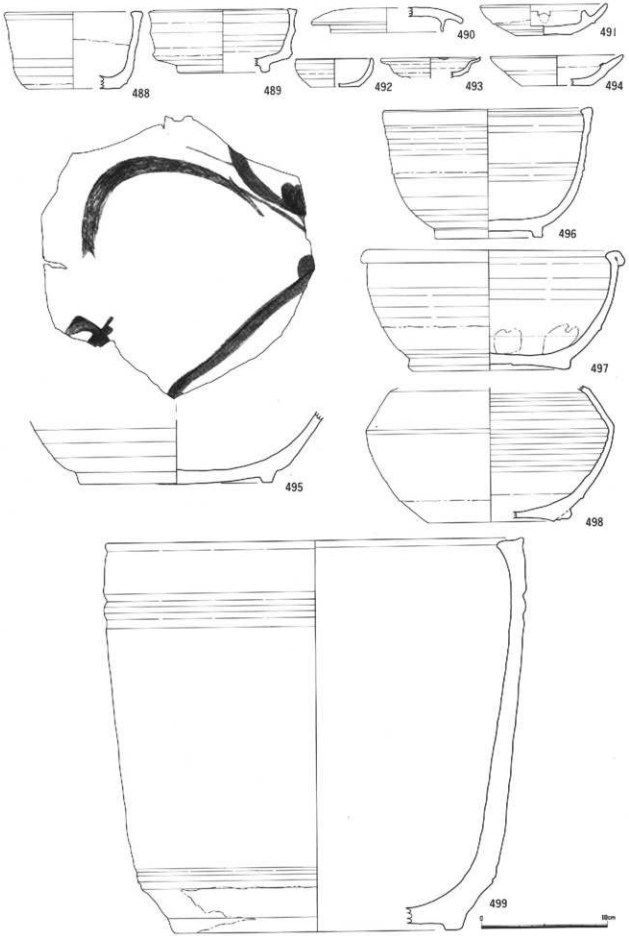
532・533は呉須と鉄絵を描く瀬戸・美濃産の小皿である。19世紀中頃に盛行する。

534は肥前青磁でヘラ先で富士山と松原を陰刻する。「成化年制」銘がある。

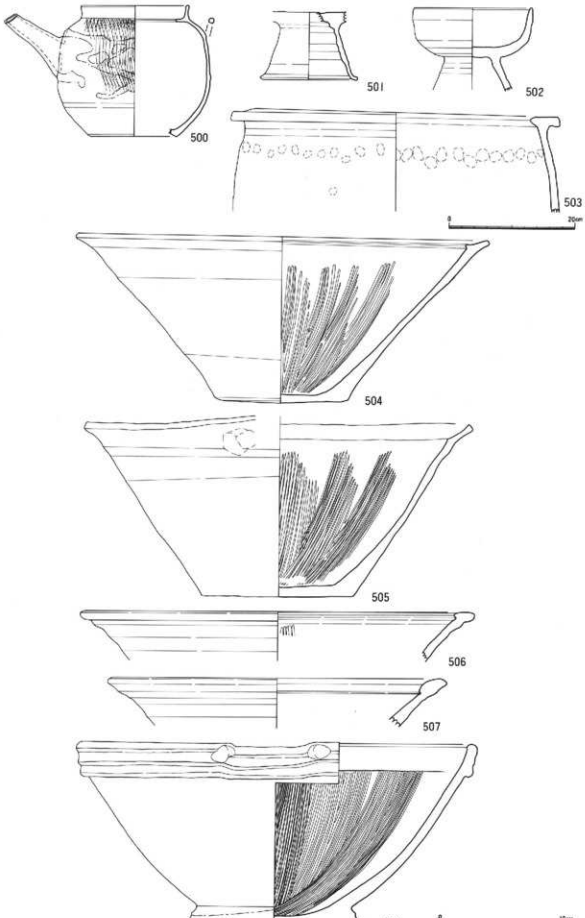
535は蛇の目凹形底の小皿で肥前産であろうか。536は瀬戸・美濃産の型押皿である。

537は白磁碗である。11世紀後半から12世紀前半であろう。

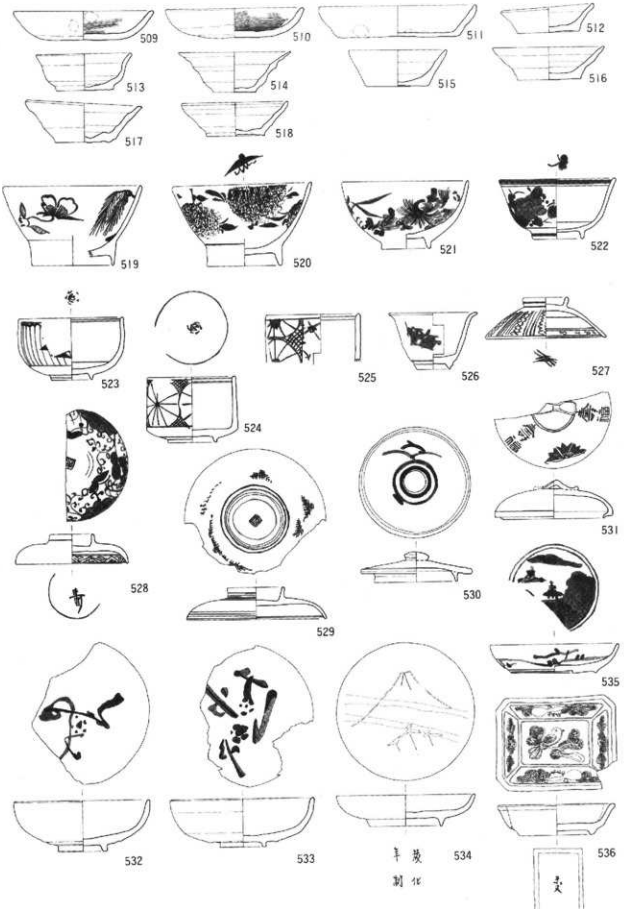
青　磁　538～543は青磁である。538は高台内を蛇の目状に釉をぬぐっている。539は陵皿であろ



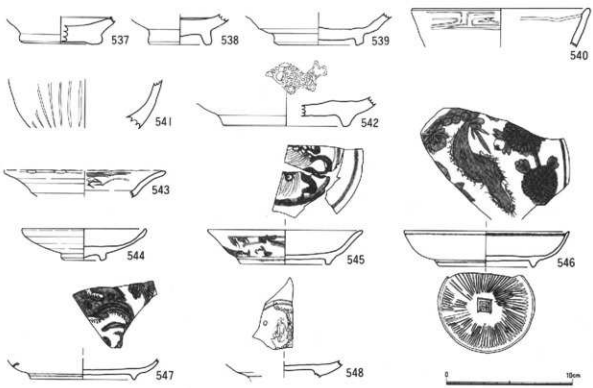
第56図　1区出土遺物　その18　包含層



第57図　1区出土遺物　その19　包含層



第58図　1区出土遺物　その20　包含層



第59図　1区出土遺物　その21　包含層

う。見込みの中央は釉をぬぐっている。540が雷紋帯碗、541が剣先蓮弁紋碗である。542は

青磁大皿　元様式の大皿で、型押陽刻の魚紋が見込みにつけられている。543は陵花皿である。538を除いて2・3面から出土した。これら青磁は本来15世紀から16世紀の国産陶器に伴うものが多いが、大皿については1区からは当該期の国産陶器は数少なく、伝世資料の可能性も否定できない。

白　磁　544は白濁した釉をかけた白磁皿である。国内では類例の少ないタイプであり年代観は定まっていないが、14世紀後半から15世紀前半と考えたい。

545は玉取り獅子紋皿である。546・547の皿は同じ図柄である。菊花と霊芝を線描きしてぬりつぶし濃絵風に描いている。高台内は放射状に細かく削っている。2枚以上の組皿と

青花皿　考えられる。548は学士を見込みに描く小皿である。玉取り獅子紋皿は永禄12（1569）年落城の掛川市殿の谷城跡においても出土している[16]。人物紋皿はそれ以後に盛行する型式である。546のタイプの皿は大阪城跡の調査で第Ⅲ層面（家康入城頃）とされるもので[17]、ピッテレウ号一括遺物以前であろう[18]。

通い徳利

1区K－7グリッドを中心に通称貧乏徳利が出土した。K－7グリッドは屋敷地裏側にあたるが、幕末荘屋を勤めた石川団兵衛宅かその隣家金田屋に関連するものと考えられる

徳利と屋号　が、各店の徳利が認められることから、後者の廃棄遺物の可能性が高い。しかしながら明治後期以後、金田屋が営業していたかは判断できない。

これらの通い徳利は多治見市高田神社境内古窯においても灰釉のかかった高田徳利とともに生産されているところから[19]、江戸後期から幕末の美濃高田徳利の系譜をひくもので、やはり美濃方面で生産されたと考えられている。なお遠江では細江町瀬戸窯で生産されている。年代的には明治後期から大正期とされているが、その裏づけは明確ではない。屋号の明確な例を図版88に示しておく。

1　名栗　吉本　□□
2　酒屋　㊙　□□
3　原川　〒　□ぎや　巳　百九号
4　原川　〒　すぎや　巳　四百三十五
5　石川屋　二百六十三
6　安口屋　百六十八番
7　原川　三十口
8　鳴屋

ほかに平喜の屋号の書かれた徳利がある。

すでに指摘されていることであるが、通い徳利には所在地、屋号、番号を窯場に注文して書かせることが一般的であった。

原川町の商業

明治30年発行の『駿遠豆鑑』によれば2の㊙は酒類醸造業曾賀村榮田謙作の屋号であろう。3・4のすぎやとは原川において太物・唐物・小間物・酒類・質屋営業・製茶商を営んだ杉屋と考えられる。5の石川屋とは原川において呉服・唐物・絹布機業の石川屋（石川団兵衛）であろう。1の吉本とは聞き取りによれば東海道に沿って小売一般を営業していた店であった。

かって、この通い徳利に書かれた番号については、時代の新しいものに電話番号があるとされたことがあったが、3・4の例のように同じ店と考えられる同じ屋号であっても番号が異なる例がある。あるいは徳利に番号がつけられ、通い帳の処理に利するように使われていたとも考えられるが、当該期の酒屋や旅館、料理屋の通い帳の分析まで研究が進んでいないので、結論は差しひかえておきたい。徳利に書かれた所在地をみると、同じ原川町内が4例を占め、明治期同じ曾賀村になる沢田の酒醸造業者の徳利がある[20]。同心橋の対岸である名栗も含めると、ほとんどが小さな流通圏の中にあったことが知られる。

また、6の徳利は5合徳利で鶴首の頸部で鉄釉をかけ、胴部は灰釉がけで内面はサビ釉がけである。形態上は7とともに幕末期と考えられる。1・3・4は明治30年の『駿遠豆鑑』に対応することから明治以降と考えられる。長石釉に鉄釉で屋号を書いている。5の徳利については石川屋が明治30年の『駿遠豆鑑』以降では呉服・唐物・絹布機業の営業にたずさわっており、それ以前の徳利と考えられる。また石川屋は休所を営んだとされており、酒屋など製造業種や小売業者ばかりでなく、旅館、料理屋等の接客業種にもこの徳利が使われていると理解されよう。

3．3区出土土器

SD303

天目茶碗1は削り出し輪高台で、高台内までサビ釉化粧がけされている。大窯Ⅰ期と考えられる。

小皿2は糸切り未調整で、内面と口縁外面に鉄釉がけをし、さらに口端部の釉をぬぐい取っている。

内丸皿3は初山窯製品である。

小皿4は削り込み高台で口縁部内外面に鉄釉をかける。志戸呂焼第Ⅳ期。小皿5は内面にススが付着し、燈明皿として使用されたと判断される。志戸呂焼第Ⅳ期か第Ⅴ期。出土状態から遺構外出土と考えられ、遺構の存続年代とは直接関係しないと判断される。小皿6は体部から口縁に直立してつづくタイプで、高台部は削り出している。

小形壺7はサビ釉がけで内面が露胎である。内面には黒色の付着物が認められる。志戸呂焼第Ⅲ期か第Ⅳ期であろう。

9～12が土師質の煮沸具で、9・10は内湾形内耳鍋、11が茶釜型、12が羽釜である。

13～16がＳＤ３０３から出土したカワラケ皿である。ススが付着し、燈明皿として使用されたと判断される。13は底径が大きく、糸切り痕の単位も大きい。ロクロの大きさに関連するものであろう。14は硬質である。13・14は口径が11cm以上であり、中皿の規格と考えてよいかもしれない。カワラケ全資料中、極めて少ない。

SD306

8は内耳鍋である。

SX303

ＳＸ３０３出土のカワラケ17はススの付着も認められず、燈明皿以外の用途を考えてよいだろう。

SX302

丸碗18は口径の大きく腰部の張った形態で、鉄釉の上に白粘土をかけた虎斑釉がけの志戸呂焼第Ⅵ期であろう。中皿20は瀬戸・美濃産の陶胎皿である。

SX304

天目茶碗19は瀬戸・美濃産で登窯期の古い段階であろう。

SX305

擂鉢23は志戸呂焼で2次焼成を受けている。狭くなった縁帯で口端部を内側におり曲げている。第Ⅲ期であろう。カワラケ小皿21が伴っている。ススが付着しており、燈明皿であろう。

包含層出土遺物（２面以下３面以上）

22は手捏ねカワラケである。幅１cmのハケ目が施されているが、木口でカキ取って器壁を均一にしたと考えられる。ススが付着しており、燈明皿であろう。

小皿24・25は瀬戸・美濃産で削り出し高台である。24は鉄釉がけである。25は端反皿で総釉がけである。大窯Ⅰ期であろう。

26の鉢は灰釉の上に鉄絵を描くタイプでいわゆる笠原鉢であろう。

27は鉄絵皿で、口端部の釉をぬぐっている。産地は不明である。28は端反皿で削り出し高台をもつ。瀬戸・美濃産であろう。

29の小皿は削り込み高台で灰釉をかける。志戸呂焼第Ⅳ期であろう。

30の蓋は糸切り痕の上に偏平なつまみをつけ、外面にサビ釉をかける。内面は露胎である。志戸呂焼第Ⅵ期であろう。

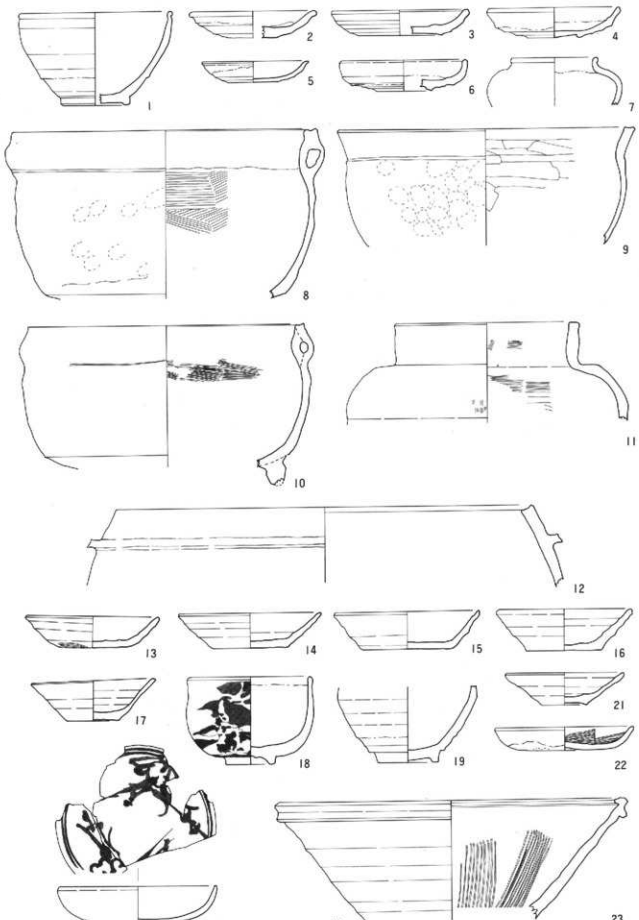
31の鉢は象嵌の唐津鉢である。32は内耳鍋であるが、口縁部の粘土をわずかに折り返している。以上が２面・３面から出土した。

包含層（２面まで）

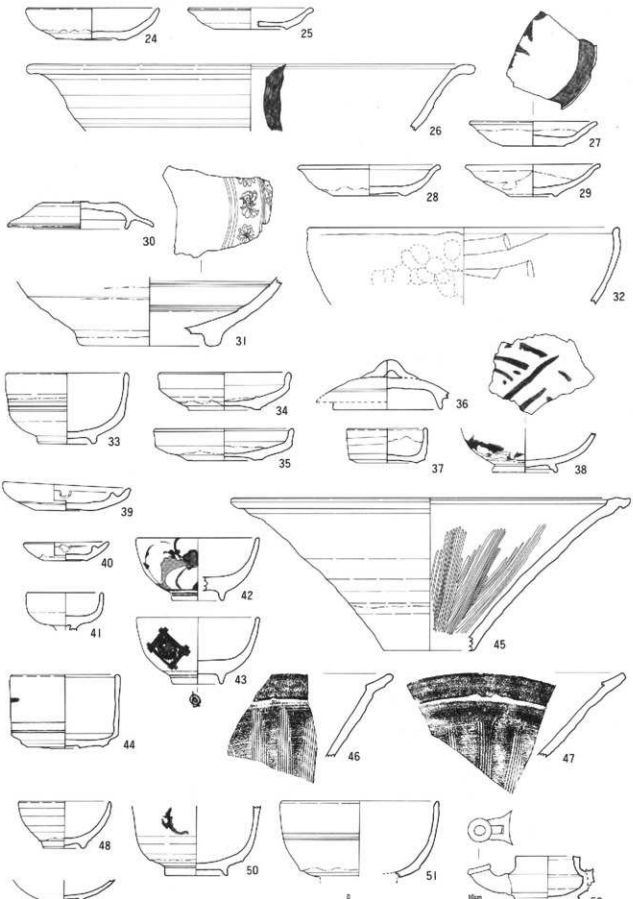
33は瀬戸・美濃産の掛け分け茶碗である。34・35の小皿は削り出し高台で体部上位から口縁部にかけて直立するタイプである。志戸呂焼第Ⅲｂ期か第Ⅳ期であろう。鉄釉に灰釉を二重がけしている。

36の蓋は耳状のつまみを貼りつけ、天井部下位に圏線を巡らす。志戸呂焼第Ⅴ期と考えたい。

37は瀬戸・美濃産の餌チョクである。灰釉をかけ、底部を削り込んでいる。



第60図　3区出土遺物　その1　溝　包含層ほか



第61図　3区出土遺物　その2　包含層

38の碗は外面をサビ釉の化粧がけし、鉄釉に灰釉を虎斑釉技法でかける。内面は灰を全面にかけたのち、一部の灰釉を棒状具で直線状にかき取っている。志戸呂焼第VI期であろう。

39・40は瀬戸・美濃産の灰釉がけの燈明皿である。40は口径6.9cmで小さく類例は少ない。

41は長石釉をかけた瀬戸・美濃産の仏餉器である。

42・43は肥前の丸碗で、43は井ゲタの中に菊花のコンニャク版を施している。44は蛇の目凹底の香炉で瀬戸・美濃産と考えられる。

45～47の擂鉢は志戸呂焼である。45が第Ⅲa期、46が第Ⅴ期、47が第Ⅳ期であろう。

48は瀬戸・美濃産の碗であるが、口径が7.2cm前後と推定されることからグイ飲みと考えられる。

49は京焼およびその周辺の煎茶碗と考えられる。

京焼写し

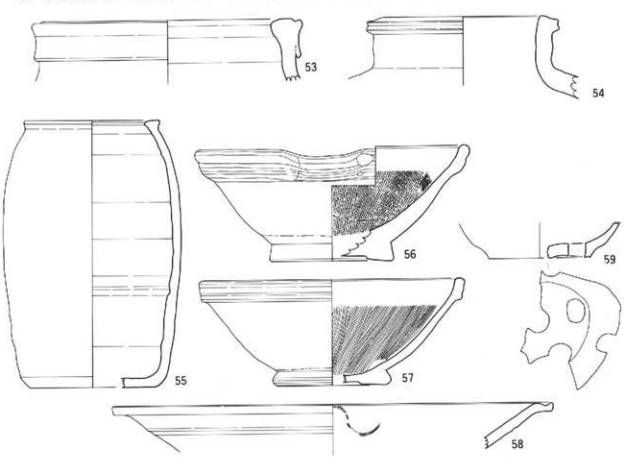
50・51は瀬戸・美濃産の碗であろう。50は御室茶碗で、18世紀中頃から後半であろう。51は丸碗であるが体部中位に圏線を巡らす。

52は瀬戸・美濃産で筒状の注口をもち、反対側に把手がつく。俗にひょうそくと呼ばれる手燭である。

53・54はサビ釉をかけた常滑産の壺・甕である。53の縁帯は偏平で下へ垂下している。54は頸部を持ち、口縁部をやや厚く造っている。

55はサビ釉をかけた志戸呂焼第VI期の壺である[21]。

56・57は備前写しの擂鉢である。いずれも高台部をもち、肥厚した縁帯部をもつ。光沢



第62図　3区出土遺物　その3　包含層

のある鉄釉がけである。56は志戸呂焼の可能性もあるが断定できない。57は瀬戸・美濃産
黄瀬戸鉢 である。58は黄瀬戸の鉢である。内面に櫛描波状紋を描く。

59は土師質の皿状を呈する有孔土器で、七輪の部分かも知れないが、ススは付着していない。類例をまちたい。

以上が2面までの出土土器である。

4．4区出土土器

SD401

小皿1は総釉がけで高台端部のみ釉をぬぐっている。1は見込みに呉須の摺絵による梅とうぐいすが描かれている。

SD405

掛け分け碗2、陶胎筒茶碗6、蓋付碗の身17、広東碗8、擂鉢10が瀬戸・美濃産の陶磁器である。蓋4は肥前磁器であろう。ほかに志戸呂焼の中皿9が出土しているが、肥前や瀬戸・美濃製品と異なり志戸呂焼第Ⅳ期の製品であり、他の陶磁器より古く混入であろう。瀬戸・美濃産の摺絵皿5が出土した。見込みに梅花紋が描かれている。

SF401

鉢11は口縁部を輪花状に5ヶ所を押さえている。刷毛技法の総釉がけで高台端部のみ釉をぬぐっている。瀬戸・美濃産であろう。

SF404

壺14は常滑産の短頸壺で、類例や時期は不明である。伴出した遺物は18世紀後半から末である。ススけており、炭壺であろうか。

SF413

12は小皿で外面のみサビ釉がけである。糸切り未調整でやや上底気味である。志戸呂焼第Ⅴ期以降であろう。煎茶碗13は志戸呂焼で体部に指頭でへこみをつけている。鉄釉の上
虎斑釉技法 に灰釉を虎斑釉技法で施している。志戸呂焼第Ⅵ期であろう。森山焼にこの器形と釉がけ技法は受け継がれている。

鉢15は灰釉がけで瀬戸・美濃産の片口であろう。高台内に「や七」の墨書が書かれているが、この片口の持ち主であろうか。鉢16・19は瀬戸・美濃産のねり鉢で16は内面に灰釉流しを施している。19は外面に銅緑釉をかけている。擂鉢20は瀬戸・美濃産である。

碗18・23は広東碗タイプで、瀬戸・美濃産であろう。筒茶碗17は肥前磁器で見込み部にコンニャク版が施されたタイプであろう。21・22は蓋付碗の蓋でいずれも瀬戸・美濃産である。

美春手皿 24の大皿は粗製のコンニャク版のある美春手皿である。ガラス継ぎが認められるが、稚拙である。銘款は「大明成化年製」の2行6字銘である。窯ノ辻窯に類品がある[22]。

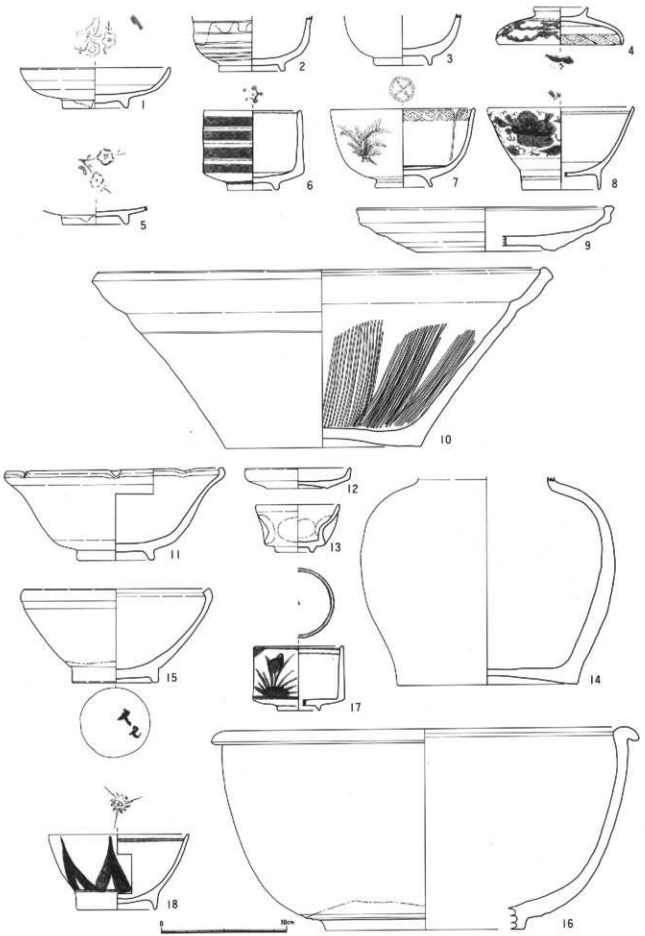
ほかにススの付着したカワラケ小皿25と志戸呂焼第Ⅳ期の皿26が出土している。

出土した陶磁器は24・26の皿や筒茶碗17を除くと19世紀第2四半期にほぼ収まる。遺物廃棄をこの頃と考え、それ以前の遺物を破片も小さいことから混入と考えたい。

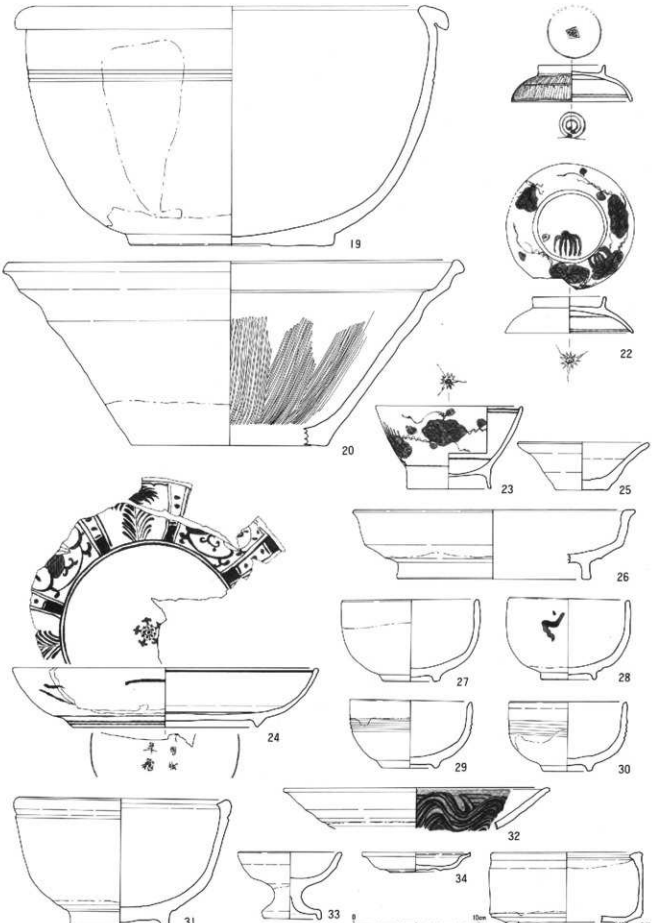
SF414

ＳＦ414東側でまとまって出土した。掛け分け碗27・29・30、御室碗28が出土した。

片口31、瀬戸・美濃産のハケ目皿32、仏餉器33、志戸呂焼折縁皿34、瀬戸・美濃産三足香炉35・擂鉢36が出土している。若干の古い遺物が認められるものの18世紀後半から末の一括廃棄と考えられる。



第63図　4区出土遺物　その1　溝　土坑



第64図　4区出土遺物　その2　土坑

SF415

湯飲み碗37が出土した。瀬戸・美濃産である。幕末から明治初年頃であろう。

SF418

擂鉢38は胴部上位までカンナ削り調整を施す。志戸呂焼第Ⅳ期の製品であるが、古い様相をもっている。

SF420

39は明るい灰釉のかかった筒茶碗で志戸呂焼第Ⅳ期であろう。内面が露胎であるので、用途として香炉もしくは火入れを考慮すべきであろう。 **香炉か火入れ**

SF423

中皿40は輪花皿で、見込みにコンニャク散が施されている。肥前磁器である。

包含層

41の掛け分け碗、42の鎧碗、43の小形碗（チョクか）は瀬戸・美濃産で、2・3面までの遺物である。

44は煎茶碗であろう。下地に柿釉をかけ、さらに灰釉をかけている。その上をクギ彫りで垣根と秋草・木をカキ落しして紋様とする。信楽焼であろう。

45は煎茶碗であるが「相馬陶徳」の二行四字書きの銘款がある。内面に白釉にコバルト釉の流しがけがあるが、明治以降であるが県内での相馬焼の出土例としては初出であろう。 **相馬焼の煎茶碗**

46は初山焼の内凡皿である。47は削り込み高台で、蓋受けをもつ器形である。初山焼ではあるが類例は知られていない。

48は鉢形の向付で志戸呂焼であろう。志戸呂焼では第Ⅲ期か第Ⅳ期と考えたい。

49は志野の呉須絵小皿である。50は志野鉄絵皿である。

51の小皿は折縁で口端部を内側に折り曲げ注ぎ口を造っている。瀬戸・美濃産であろうか。

52・53も折縁皿であるが、53はサビ釉に灰釉を二重がけする。52は鉄釉がけである。志戸呂焼の第Ⅴ期か第Ⅵ期の製品であろう。

54は柿釉がけの小皿である。瀬戸・美濃産である。手塩皿として使用されたのであろう。

55は瀬戸・美濃産の小香炉であろう。内面に炭化物が付着している。

56は志戸呂焼の香炉であるが、脚は付かないタイプであろう。灰釉がけで口端部の釉をぬぐっている。志戸呂焼第Ⅳ期と考えたい。

57～61は燈明皿である。57・61がサビ釉がけの志戸呂焼で、58～60が灰釉がけの瀬戸・美濃産である。

62・63は仏鉢器であるが、62が灰釉がけの瀬戸・美濃製品、63は志戸呂焼で新兵衛窯で同じタイプが生産されている。志戸呂焼第Ⅳ期。

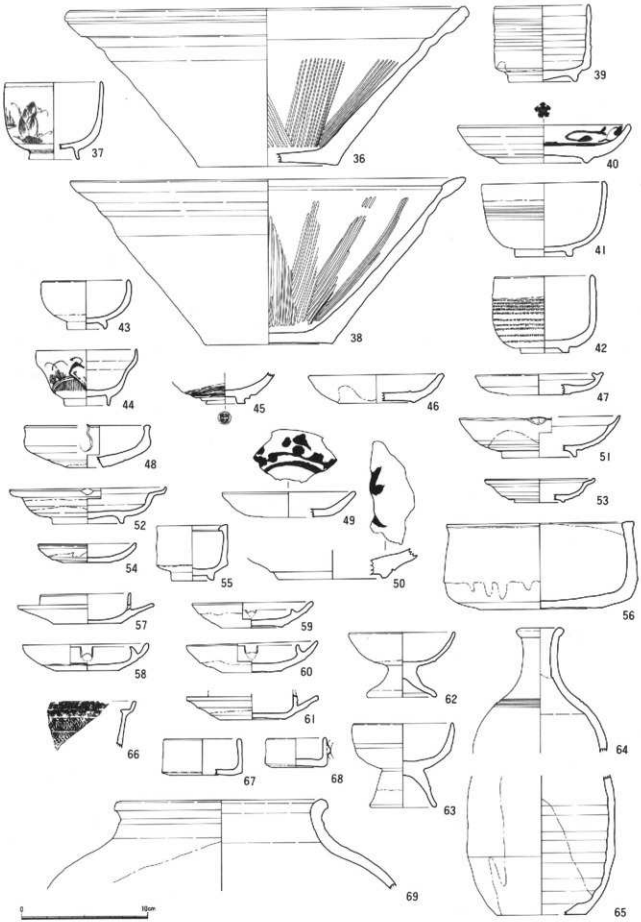
64の徳利は鉄釉にわら灰釉をかけ流ししている。瀬戸・美濃製品である。徳利の出土例は原川遺跡ではあまり多くない。65の徳利はサビ釉がけの徳利で瀬戸・美濃産である。64・65は大きさからすれば3合から5合徳利であろう。 **徳利は少ない**

66は急須であるが、産地は不明である。あるいは常滑であろうか。

67・68は瀬戸・美濃産の餌チョクである。

69は灰釉がけの志戸呂焼壺である。耳の付かないタイプで、第Ⅲ期もしくは第Ⅳ期と考えたい。

70の水壺は灰釉上に銅緑釉とワラ灰釉のかけ流しを施している。73の土瓶掛は銅緑釉を



第65図　4区出土遺物　その3　土坑　包含層

かけ、脚部にうずまき紋を陰刻する。脚内面に「正り□□□」を墨書で書いている。瀬戸・美濃産。

71の擂鉢は志戸呂焼第Ⅳ期の製品である。サビ釉の発色や焼成は良くない。72は瀬戸・美濃産の火鉢（手あぶり）である。

74～76のカワラケ小皿は口径8㎝、器高2.2㎝である。このタイプは一部志戸呂焼第Ⅵ期の陶器窯・水ヶ谷窯で生産されており、18世紀中頃以降が考えられる。注記をみると調査中排水溝として利用したＳＤ405からの出土と推定される。

77～79の丸碗は肥前磁器である。80・81・83は広東碗タイプの碗であるが、80が肥前磁器、81・83が瀬戸・美濃産であろう。82は瀬戸・美濃産の丸碗である。注記からすればＳＤ405からの出土と考えられる。

84～88は筒茶碗である。84・86が見込みにコンニャク版を施している。85は青磁染付である。88は見込み部の花紋は筆の運びからすれば手描きではないかと観察される。いずれも肥前磁器であろう。

87は見込み部の花紋は手描きであろう。瀬戸・美濃産である。いずれも筒茶碗は2面までの包含層出土で調査区南側からの出土である。

89～94は湯飲み碗タイプである。肥前磁器の90を除いてそれ以外瀬戸・美濃産である。

90・91・93・94が2面までの調査区南側からの出土である。89は調査区東端第3面出土である。

95・96が端反タイプの碗である。95が肥前、96が瀬戸・美濃産である。

97は陶胎の小振り碗で、茶碗というよりグイ飲み・チョクの用途をもったものと判断される。瀬戸・美濃産である。

98～102は蓋付碗の蓋である。98は天井部内面にコンニャク版による花紋の施された青磁染付である。98・99が肥前、100～102は瀬戸・美濃磁器である。

小皿103は口端部をヒダ状に追り、酸化鉄をぬった口紅技法が認められる。肥前磁器であろう。

104～106は見込みにコンニャク版を施すタイプの皿である。104・105が調査区南半分、106が調査区東端3面で出土した。107はＪ－９グリッドで出土した。摺絵技法が認められる瀬戸・美濃産の磁器である。明治中期以降である。この時期の皿・碗は遺構内ではほとんど認められなかった。包含層遺物としても少ない。

108は青磁染付の水滴である。17世紀末から18世紀前半であろう。調査区東端で出土した。

109は内面が露胎で円筒形を呈する。肥前産の火入れであろう。南半部で出土した。

110は肥前産の神酒徳利である。111は青磁染付の大鉢である。いずれも南半部出土である。４区では調査区南半部に18世紀後半から19世紀中頃までの陶磁器がややまとまって出土した。

墨　書

神酒徳利

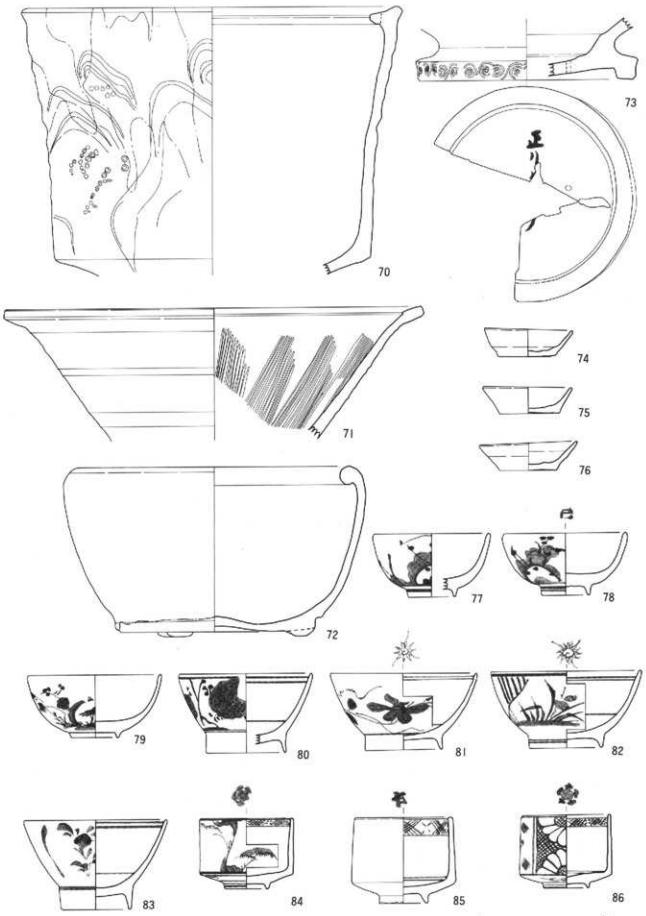
５．９区出土土器

SD901

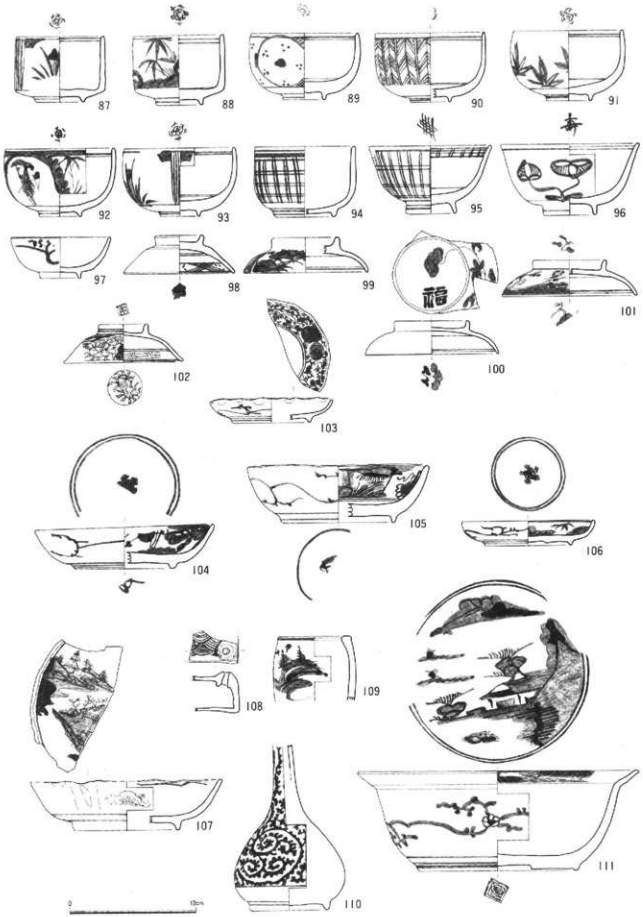
青磁碗９は高台内露胎で見込み部に型押しの草花紋が施されている。ややくすんだ青色のかけられた青磁である。15世紀代と判断される。ほかに古瀬戸後期から大窯期の擂鉢が出土している。

SD903

おろし皿１は古瀬戸後期に属する。溝状遺構の上部から出土した。ほかに15世紀代の常



第66図　4区出土遺物　その4　包含層



第67図　4区出土遺物　その5　包含層

滑窯が出土した。

SD904

2は幅広の縁帯をもち下部に垂れ下がっている。一般に15世紀代とされる常滑窯である。

SD907

鉄釉皿3は瀬戸・美濃産の鉄釉皿である。端反皿4は灰釉がけである。いずれも大窯Ⅱ期に比定される瀬戸・美濃産である。

SD908

天目茶碗5は赤味をおびた肌色の胎土で、細かな白色粒子を含む粗い土である。釉調もあまり良いとはいえない。瀬戸焼の可能性もあるが尾林焼に類似した製品である。常滑壺6は玉縁口縁で小形壺である。15世紀後半から16世紀前半と考えてよいだろう。煮沸具では、くの字型内耳鍋7が出土した。背磁碗8は型押し蓮弁紋を体部に施す。13世紀代と考えられ、遺構の年代とは直接関連しないであろう。

このほか10・11のカワラケ皿が出土しているが、口径・器高・焼成がきわめて類似し、出土状態からもほぼ同一時期と考えられる。

ＳＤ908は16世紀後半までの陶器が主体である。

SD909

折縁皿12は口端部を外より凹ませ注口を造っている。瀬戸・美濃産で18世紀前半から中頃に比定できる。

SF901

18は手捏成形のカワラケ小皿で、内面を木口で調整する。宋銭が出土しており、出土したＳＦ901は土壙墓と考えられる。

柱穴群・ピット

初山焼の内反皿19はＳＰ918から出土した。このピットは墓坑の一部の可能性が高い。カワラケ小皿20はＳＰ957から出土した。建物跡の柱穴と判断される。常滑甕21、壺22も建物跡の構成する柱穴出土の可能性が高い。

SX903

カワラケ小皿15は口縁部にススが付着しており、燈明皿として使用されたと判断される。

SX905

天目茶碗13・14が出土した。13は志戸呂焼の第Ⅳ期（あるいは第Ⅲｂ期の新しい段階か）14は瀬戸・美濃産で登窯期の古い段階であろう。カワラケ小皿16・17が伴っている。

集石墓およびその周辺

集石および集石面掘り下げ一括と注記された一群である。おそらく集石墓に伴うと考えられる。

水滴23は注記より東側集石を掘り下げた際出土したと考えられる。志戸呂焼第Ⅲａ期と判断される。

25～28は天目茶碗であるが、26の産地不明（瀬戸・美濃か）の天目を除いて志戸呂焼である。28は第Ⅲｂ期でそのほかは第Ⅲａ期であろう。

24の碗はＩ面と注記があり、礫群には直接関連しないと考えられる。灰釉の上に呉須と鉄絵で紋様が描かれている。19世紀前半代であろう。瀬戸・美濃産。

29の丸碗も調査区東側から出土した。瀬戸・美濃産であるが、集石墓との関係は明らかではない。17世紀中頃から後半と考えられる。

30～39は小皿である。いずれも集石および集石面の掘り下げと注記されており、その多くは集石墓の時期として判断される。30は見込みに釉留めの段をもつ。輪状に釉をぬぐっているが、本来は内兀皿で釉が残ったのであろう。31は三ッ沢窯で生産された縁釉皿である。32は上志戸呂窯で生産された灰釉の小皿で第Ⅲa期である。33・34は初山窯製品と判断される。鉄釉の内兀皿タイプであるが、33には釉留めの段はみられない。いずれも削り込み高台である。

35は瀬戸・美濃の稜皿である。大窯期後半であろう。36・38の小皿は見込みに菊花の印花が施されている。大窯Ⅱ期の瀬戸・美濃製品であろう。37は総釉がけの端反皿である。

39は志戸呂焼第Ⅳ期の小皿で釉留めの段を残す。高台は輪高台である。

スズメ型の水滴

40はスズメ型の水滴である。全体に灰釉をかけ羽の部分に鉄釉をかけている。特殊な製品であるので明確な年代観は不明であるが、志戸呂焼第Ⅲ期の製品であろう。消費地の出土例では初山窯製品に類例があり、本例も16世紀後半から17世紀前後の製品と考えてよいだろう。

瓶41は体部外側にロクロ水挽き痕を残す。志戸呂焼第Ⅲ期であろう。徳利であろう。

集石墓周辺から出土した陶器は15世紀末から16世紀前半にはじまり16世紀後半から末が多い。下限は17世紀前半であるが、量的には少ない。

42～60は染付磁器類である。42・44・48は肥前磁器である。それ以外は瀬戸・美濃産である。42は二重網手紋、44は矢羽紋、48は花紋とポピュラーな製品である。

45・46は湯飲み碗タイプ、43・47は丸底タイプであるが、いずれも19世紀中頃を前後する時期であろう。51・52の赤絵碗は明治前半まで下るであろう。

ガラス継ぎ

49・50は蓋付碗の蓋でいずれも瀬戸・美濃産と判断される。53～55の中皿は肥前製品である。56の小皿は蛇の目に釉をぬぐい、さらに赤絵で釉のぬぐった部分を縁取りし、呉須で埋めている。特殊な製品であろう。57は向付の鉢でガラス継ぎされている。58・59は神酒徳利であろう。60は染付の徳利で原川遺跡ではきわめて少ない。いずれも肥前磁器である。

同安窯青磁

61は同安窯系小皿である。1面中の遺物であるが混入と考えられる。

62は瓦質の火消し壺であろう。63は土師質羽釜である。64は17世紀の内耳鍋であろう。

65は大形の土師質の鍋である。原川遺跡ではこのほか類例は認められない。66は外耳の浅い土鍋でいわゆるホウロクに入るであろう。集石墓周辺であるので、16世紀代から17世紀前半と考えられる。

67・68は志野鉄絵皿である。集石墓面掘り下げ過程で出土した。67は瑞浪市向窯古窯跡群に類例がある。69は明染付である。見込みに玉取り獅子紋を描く。

皿71～73・76はいずれも瀬戸・美濃産である。76は黄瀬戸で織部釉を掛け流ししている。

73は志野丸皿でそれ以外は大窯Ⅰ～Ⅲ期の小皿であろう。74・75の小皿は瀬戸・美濃産で、74が灰釉製品、75が鉄釉製品である。いずれも1面までの掘り下げ中に出土した。

77は集石墓面で出土した。志戸呂焼第Ⅳ期製品の片口鉢である。

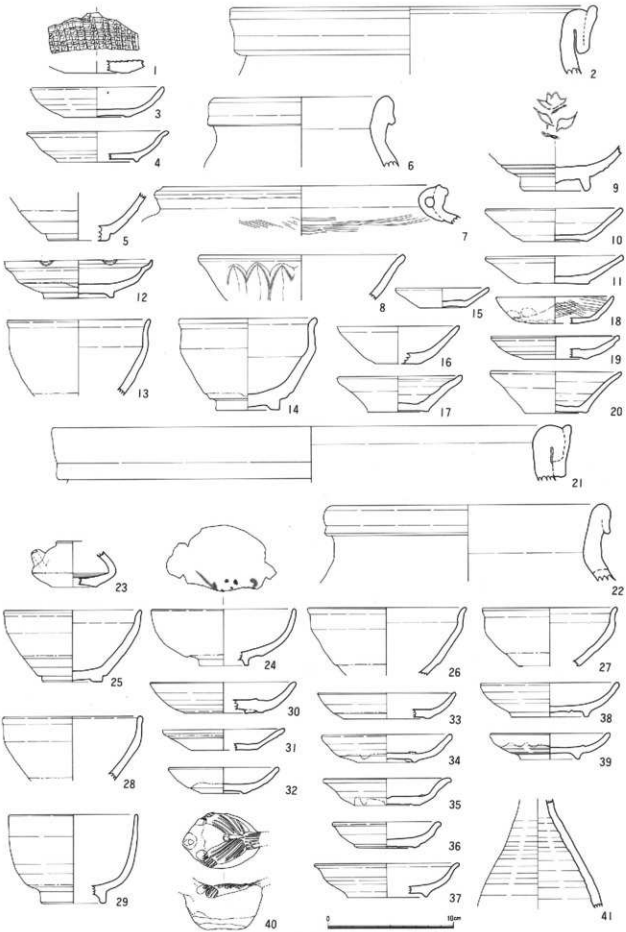
78は灰釉がけの壺の落し蓋である。瀬戸・美濃産で19世紀代である。

79は志戸呂焼第Ⅴ期の鉄釉がけ香炉である。

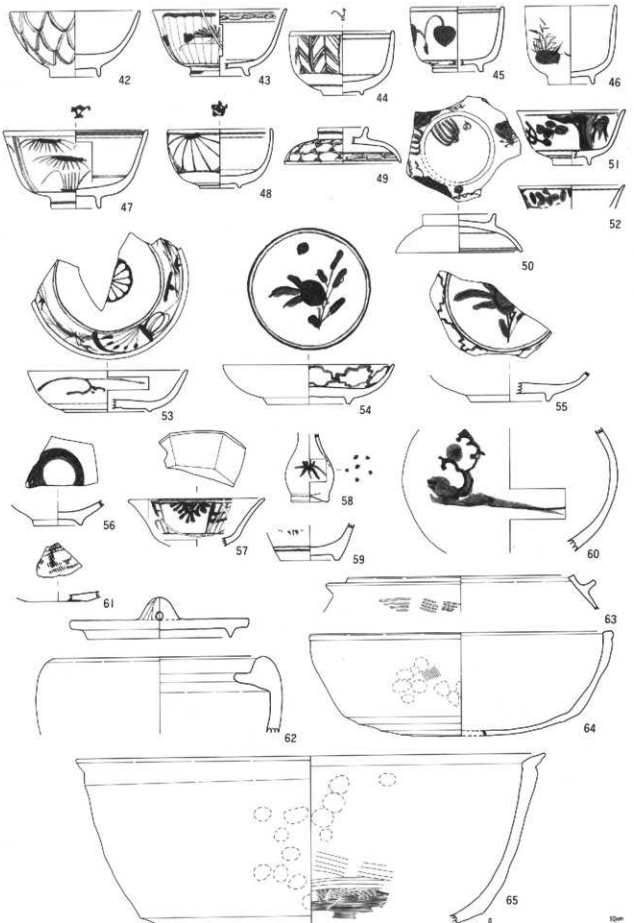
80は九州産の徳利である。高台・高台内を除いて内面まで釉がけされている。

81の短頸壺は耳は付いていない。志戸呂焼第Ⅴ期の製品と判断したい。

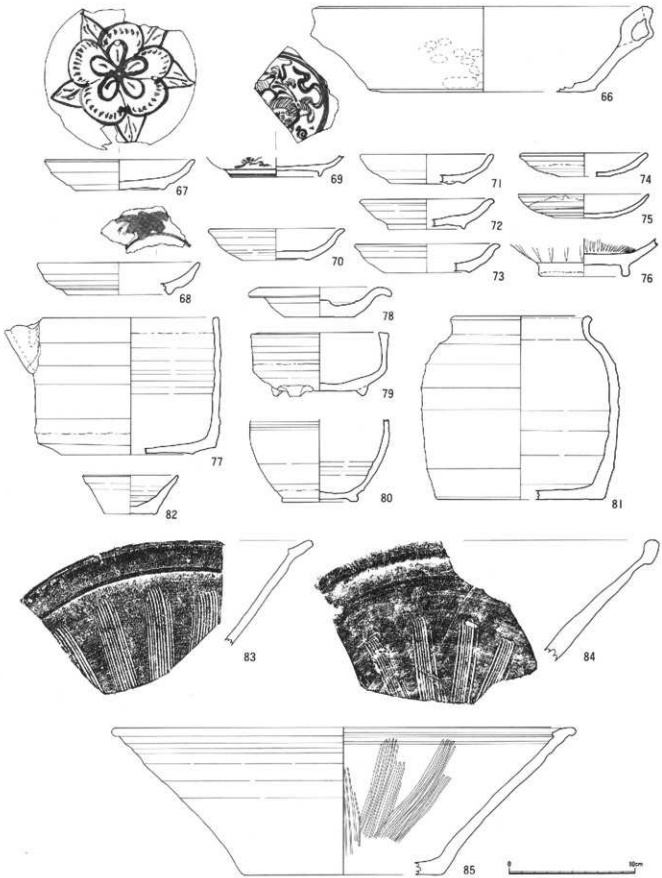
82はススが付着し、燈明皿に使用されたと判断される。



第68図　9区出土遺物　その1　溝　土坑　包含層ほか



第69図　9区出土遺物　その2　包含層



第70図　9区出土遺物　その3　包含層

83～85は志戸呂焼擂鉢である。いずれも第Ⅳ期の製品であるが、84のように口端部の縁帯を造るタイプは小数であり、ほとんどが83・85のタイプである。

9区から出土した陶磁器は、集石墓面を中心に大きく時期が変わる。

出土した陶磁器を中心にみると、9区の遺構はおおよそ次のような変遷をたどったと思われる。

溝や掘立柱建物跡は15世紀中頃から形成され16世紀後半から17世紀前半に集石墓群が形成される。その後、おそらく改葬や墓地が使われなくなり（寺院の移転であろうか）、その後18世紀前半から中頃に家屋が建てられたのであろう。

6．12区出土土器

SD1203

小皿1は高台部は欠損しているが端反皿と考えられる。体部下半は無釉である。瀬戸・美濃産で、登窯期の古い段階と考えたい。

SD1206

天目茶碗2は柿釉がけで体部下半にサビ釉化粧がけされている。大窯Ⅰ期であろう。

3は瀬戸・美濃産の瓶子で、内面にロクロによる横ナデ調整を施す。古瀬戸後期であろう。5は緑釉皿で、古瀬戸後期か大窯Ⅰ期である。4は常滑小形壺である。

6～20はカワラケ皿である。6・7が手捏成形で、いずれもススが付着しており燈明皿として使用されたと考えられる。

8～20はロクロ水挽き成形のカワラケであるが、8・9・12を除いてススが付着しており、燈明皿に使用されたと考えられる。焼成については、先の8・9・12を除いて硬質で陶器窯製品ではないかと推定される。15・17・19の底面に糸切り痕の上にスノコ状圧痕が残っている。口径をみると10.8～11.8cmの製品が多く、器形上類似しており、時期差はあまり認められないと判断される。

21はサビ釉化粧がけの壺で、胴部上位に細かいカンナ削りを施している。口縁部はやや肥厚させている。

22・23は幅広の縁帯をもつ常滑甕で15世紀代と判断される。24は玉縁口縁の常滑壺である。自然釉によって光沢のある製品である。

25は志戸呂焼第Ⅰ期の擂鉢である。摺目の先端は跳ね上げていない。見込み部の摺目は交差させている。

26は内耳鍋であるが、内耳部分は小さく三角形に突出させている。

27・28は常滑産の鉢である。端部を上面に面取りしている。

29は青磁碗で片切り彫りの剣先蓮弁と花紋が描かれている。 **青磁碗**

SD1207

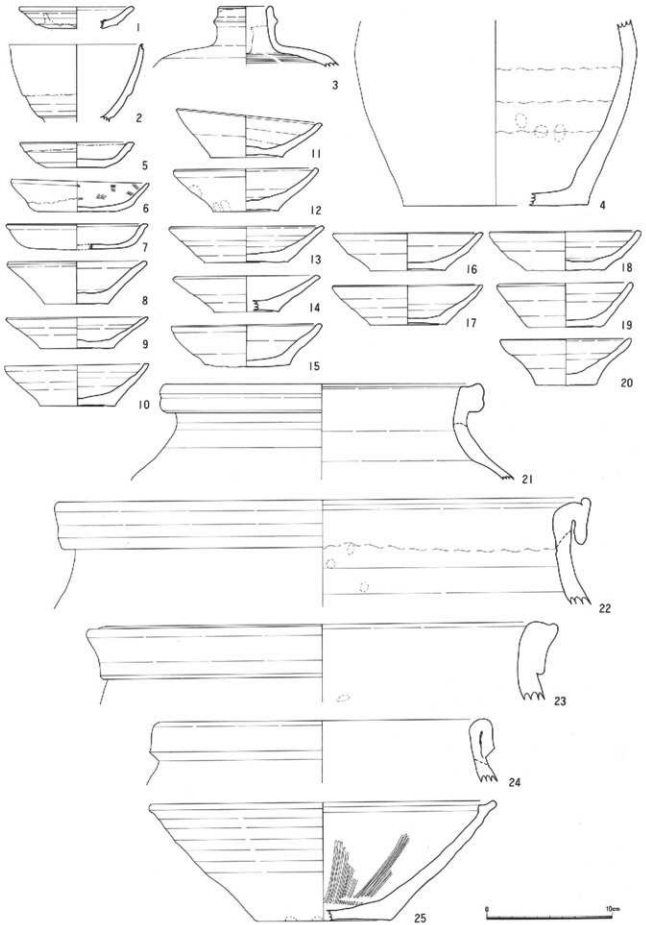
31は内湾形の内耳鍋で、口縁部はあまり広がらず、器高も高い。

32～34はカワラケ皿である。33にはススが付着しており、燈明皿として使用されたと考えられる。32には底部にスノコ状圧痕が付く。33は手捏成形で他はロクロ水挽き成形である。

SF1204

志野丸皿40が出土している。鉄絵は認められず削り出し輪高台である。大窯Ⅳ期から初期の連房式窯の時期まで生産されるタイプであろう。

SF1207



第71図　12区出土遺物　その1　溝　土坑

35は瀬戸・美濃産の緑釉皿である。

36の天目茶碗は口縁部下位に屈曲部は認められず、古瀬戸後期の形態を留めている。高台は削り出し高台である。瀬戸・美濃産であろう。

30は折縁の鉢で鉄釉の上に灰釉がかかっている。胎土は37の碗に近い。

37の碗は大橋康二氏によって肥後小代焼であると指摘を受けた。

38は瀬戸・美濃産の天目台である。

39は壺形合子の蓋で、灰釉がかけてある。志戸呂焼第Ⅰ期の製品である。

42・43は甕・壺類である。42は幅広の縁帯をもつ常滑甕である。43は三ッ沢窯の製品と考えられる壺である。

44は古瀬戸後期に併行する瓶子で、胴部に圏線が3ヶ所巡る。胎土は鉄分の多い土で志戸呂三ッ沢窯の製品の可能性もある。 古瀬戸瓶子

45は常滑の鉢である。端部は斜めに面取りしている。

46はくの字型内耳鍋である。端部にはわずかに浅い凹みをつけている。内耳はやや小さく付けられている。器形はややしもぶくれで、胴部下位に最大径をもつ。口縁部は胴部に比較して低い形態を呈する。

SF1208

ロクロ水挽き成形のカワラケ41が出土した。ススが付着しており燈明皿に使われたと考えられる。SD1206の溝状遺構より古いか同時存在の可能性が考えられる。SD1206は時間幅があり、SF1208は岸面に近い位置に掘削されていることから、新しい時期に伴う解釈が成り立つのであろうか。

SX1202

ロクロ水挽き成形のカワラケ小皿50が出土した。

SX1203

幅広で広い縁帯をもつ甕47が出土している。

SX1207

擂鉢48は幅の狭い縁帯をもち口端部に平坦面を造る。大窯Ⅲ期であろう。ほかに内耳鍋片が出土している。

SF12130

51・53～56の5枚のカワラケは一括出土した。ほぼ完形でススも付着していないことから、さらに柱穴からの出土であることから地鎮祭祀用に埋置されたと考えられる。51のカワラケは口径12.7cm、器高4cmと大振りである。

SP12136

縁釉中皿57は底面が広くハサミ皿に類似した形態を呈する。古瀬戸後期ないし大窯Ⅰ期に属する。

SP12133

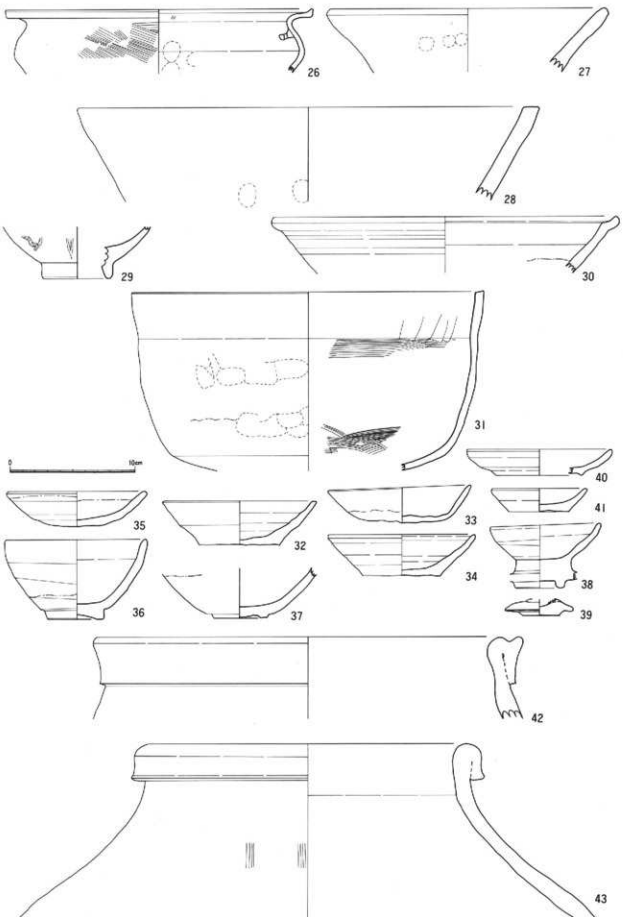
58は見込みに菊花紋をもつ小皿である。端反皿か丸皿と考えられる。瀬戸・美濃産で、大窯Ⅰ期かⅡ期であろう。

SP1254

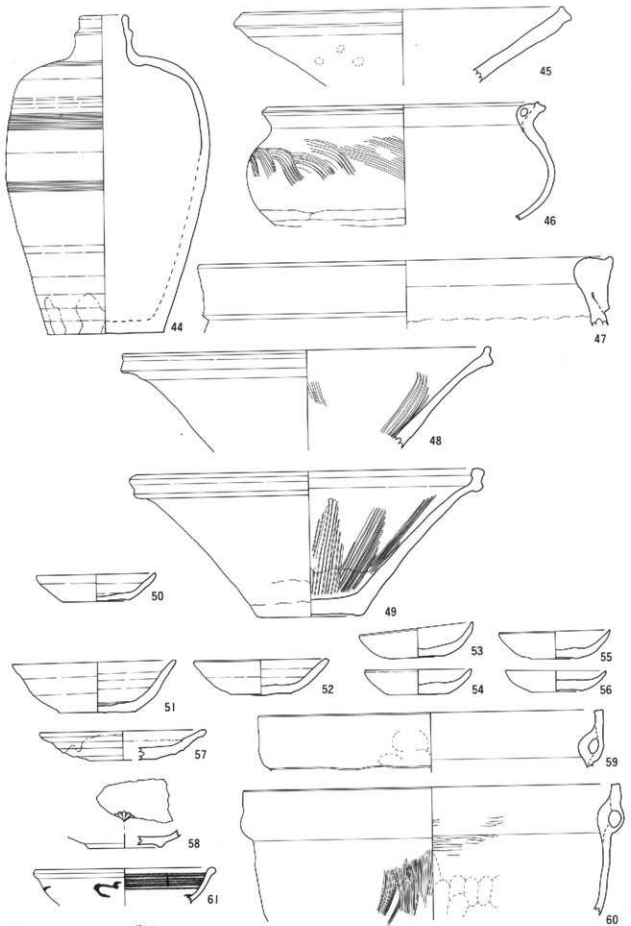
内湾型内耳鍋59である。

SP1227

内湾型内耳鍋60であるが、SP1228の破片と接合関係が認められた。



第72図　12区出土遺物　その2　溝　土坑



第73図　12区出土遺物　その3　溝　土坑ほか

SP1209

小鉢61が出土した。コバルト釉を使っているところから明治以降と考えられる。

包含層（1面）

天目茶碗62は高台脇が露胎で、初期登窯期の製品であろう。63の天目茶碗はややくすんだ肌色の胎土で、高台は削り出し高台である。17世紀前半肥前陶磁器である。原川遺跡を含め県内出土の大目茶碗では肥前産の天目はきわめて少ない。

64～73は小皿である。64は古瀬戸後期から大窯Ⅰ期の縁釉皿である。ハサミ皿に類似した形態を呈する。65は端反皿の形態であるが、体部内面上位に櫛描紋を描く。青磁稜花皿を写した紋様であろう。

66・67は初山窯の小皿である。66は見込み部に釉留めの段があるが、釉はぬぐっていない。67の内面は見込み部まで釉がけである。

68は端反皿であるが、高台部は削り込み高台である。底面内面はサビ釉化粧がけである。

69は稜皿である。いずれも大窯Ⅱ・Ⅲ期かと考えられる。

70・71・73は志野丸皿である。いずれも鉄絵を施されないタイプである。71は削り込み高台、ほかは削り出し輪高台である。72は灰釉がけの端反皿である。65～73はⅠ面出土。

74は無釉陶器でロクロ水挽き成形である。カワラケ皿に類似するが器高が高く坏と考えている。胎土からすれば地元産の可能性が高い。

75は小鉢であろう。胎土からすれば地元志戸呂焼であると考えられる。光沢のある灰釉がけで志戸呂製品では未見であり、編年的位置は断定をさけたい。

76はサビ釉がけでチョクであろう。志戸呂焼第Ⅵ期と判断したい。

77～83・90は常滑焼の甕である。1面および2面から出土しているが、形態的な変化は認められない。

77・78は口縁部内側に段をもつタイプである。焼成は赤味をおびる。粘土も精製され細かい。79～83・90は、幅広で低い縁帯をもつ。前者に比べ粗い土で硬質に焼締っている。

明染付　皿84は高台内に二重圏線中に「寅口年口」（宣徳年製）の銘款が記されている。明染付である。1面出土。

85・86はサビ釉がけの鉢である。85は志戸呂焼第Ⅳ期と判断したい製品である。86は第Ⅲ期であろう。

87・88は常滑の鉢である。いずれも2面出土である。

89は大窯後半の擂鉢である。1面出土。

91は志戸呂焼の水甕である。SD906からも同一破片が出土し接合できた。きわめて粗い土で、鉄釉がけで三足をもつと考えられる。志戸呂焼第Ⅳ期から第Ⅴ期と判断したい製品である。

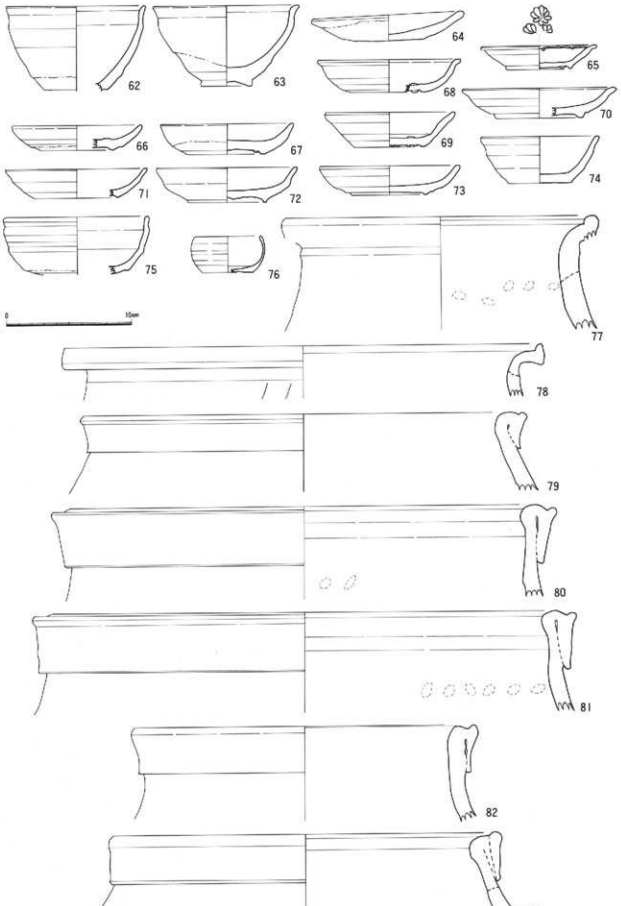
92は瓦質土釜の把手である。型押しの亀甲紋が施されている。遠江では類例は知られていない。搬入品であろう。1面出土。

93は内湾型土鍋である。94・95は常滑の鉢である。94はSD903に同一破片があり接合できた。

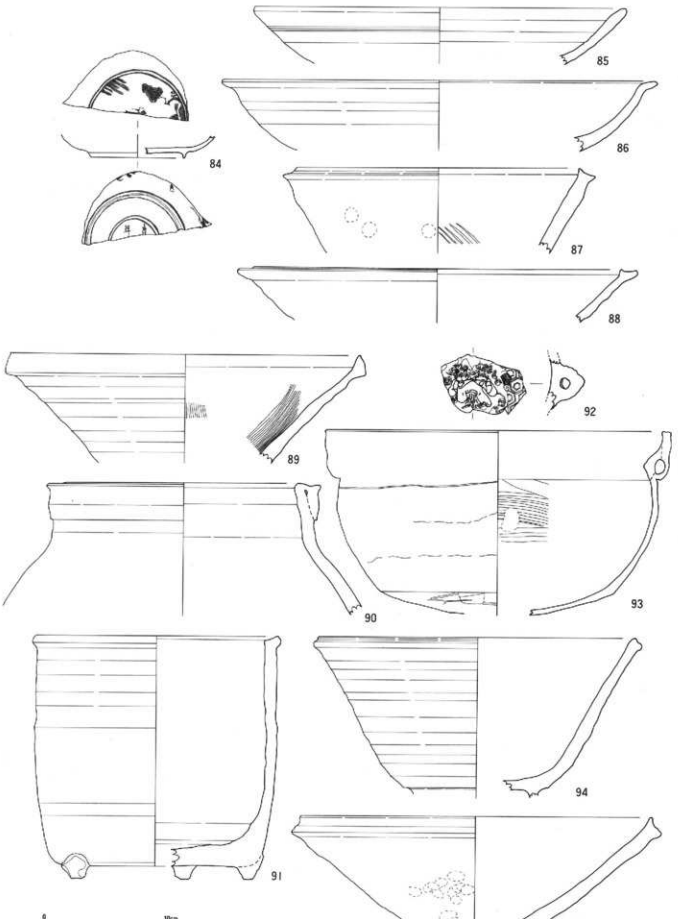
7．10区出土土器

SD10CO1

カワラケ小皿1は口端部にススが付着しており、燈明皿として使用されたと考えられる。口径が小さく、それにくらべ器高が高いタイプである。



第74図　12区出土遺物　その4　包含層



第75図　12区出土遺物　その5　包含層　9・12区接合土器

SD10B05

丸碗2は高台内から高台脇までサビ釉化粧がけを施す。高台は端部を面取りした輪高台である。志戸呂焼第Ⅲ期から第Ⅳ期の製品と考えたい。菊花皿3は口端を花弁状に切込みを入れ、外面にはヘラ先で縦位に沈線を入れている。長石釉をかけている。大窯Ⅳ期から初期連房窯の製品と考えられる。擂鉢4～6は志戸呂焼第Ⅳ期から第Ⅴ期の製品であろう。

カワラケ皿7・9は口端部から体部にかけてススが付着しており、燈明皿に使用されたと考えられる。

小皿8は底部から体部中位までカンナ削りを施している。志戸呂焼第Ⅳ期から第Ⅴ期の製品と判断される。

内耳鍋10は器高が低く、いわゆるホウロクであろうか。内耳部分の接合に際し外側に体部を押圧し取り付けている。形態から17世紀代と考えられる。

ＳＤ10Ｂ05出土陶器は、近接する礫群と出土していることから、16世紀末から17世紀前半代の遺物も認められる。しかしながら18世紀代、19世紀代の遺物も認められることから、時期の異なる遺構の重複と考えられる。

SD10B10

12は口端部に花弁状に切込みを入れ、内面は丸彫されたタイプで、志野釉を総がけしている。大窯Ⅳ期。

13の折縁皿は口縁部内面上位にかけ、見込みに鉄絵を描く。15は志戸呂焼第Ⅳ期の擂鉢である。

14はロクロ水挽き成形のカワラケ小皿である。ススが付着している。

16・17は上層のＳＸ10Ｂ02に伴う瓦である。ＳＤ10Ｂ10の覆土上層にも一部認められたが、本来分離すべきであろう。16の軒丸瓦は桔梗紋の浮彫りで2次焼成を受けている。17の軒平瓦の紋様は唐草紋である。

軒丸瓦

SF10B01

丸碗19は御室茶碗タイプで、腰部は丸くなり、呉須によって描かれた山水もあまり明瞭ではない。

20・21は掛け分け茶碗である。23はせんじ型の左右掛け分け碗である。22は鉄釉がけの丸碗である。小形化し半球形を呈している。

25の中皿は見込みにコンニャク版を施し、体部内面は濃絵手法を施している。

26の小形壺はサビ釉がけであるが、あまり発色していない。頸部が短く、糸切り未調整である。内面には淡墨色内容不明の付着物がある。2次焼成を受けた痕があり、火事等による廃棄かとも考えられる。

27は瀬戸・美濃産の仏餉器である。

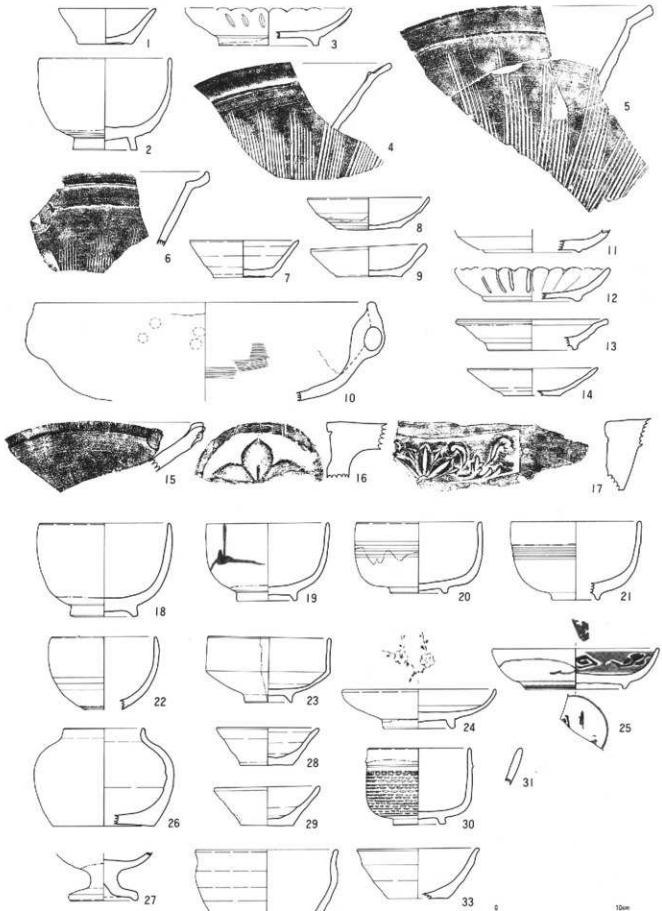
ＳＦ10Ｂ01では口径が狭く器高が高いタイプのカワラケ小皿を伴っている。28はススが付着しており燈明皿として使用されたと判断される。

SF10B02

24は灰釉がけで見込み部に梅枝の摺絵が描かれている。高台のみ露胎で、高台内も釉がけされている。ほかに鎧茶碗30が出土している。

SF10B03

31は天目茶碗か丸碗か小片のため明確ではない。天目茶碗とすれば古い形態を留めており、混入の可能性が高い。



第76図　10区出土遺物　その1　溝　土坑

32は志戸呂焼の天目茶碗で第Ⅳ期と考えられる。灰釉がけである。

33～35はサビ釉化粧がけの製品で、形態からチョクと考えられる。33は内外面にススが付着し、燈明皿に転用されたと考えられる。胎土から志戸呂焼であろうと考えられる。

36の小皿は志戸呂焼第Ⅳ期の製品で削り出し輪高台である。

37は鉄釉絵皿である。見込み部の鉄絵には圏線は認められない。

38は志戸呂焼の水注である。このタイプは志戸呂焼第Ⅲ期に盛行するが、ＳＦ10Ｂ03では第Ⅳ期の製品を伴っている。したがって伝世品の可能性もある。このタイプの水注の下限については類例を待って検討したい。39の徳利は志戸呂焼第Ⅲ期か第Ⅳ期に属する。

40～43はカワラケ皿である。40が手捏成形、それ以外がロクロ水挽き成形である。43はススが口端部に付着しており、燈明皿に使用されたと判断される。

SF10B04

44はせんじ型の左右掛け分け碗である。45は桶形の水壺もしくは壺である。タガを模した粘土帯が２条巡っている。灰釉がけである。志戸呂焼第Ⅲ期としておく。

46・47はカワラケ小皿である。燈明皿以外の用途に使用されたと考えられる。

SF10B05

48の蓋はひも結びの把手をつける。鉄釉を天井部と把手にかけ、灰釉をかけ流ししている。瀬戸・美濃産。

SF10C01

宝永の噴火と丸碗

丸碗18は志戸呂焼第Ⅳ期と考えられる。このタイプの丸碗は宝永４（1707）年に富士山の噴火によって埋没したとされる御殿場市大塚平遺跡においても出土している。このタイプの年代観を示すことができよう[23]。また、10Ｂ区南側一括にも同一破片があり接合できた。

49の香炉は平底で三足がつくかもしれない。灰釉がけで、志戸呂焼第Ⅳ期から第Ⅴ期であろう。50は瀬戸・美濃産で三足がつく。51は輪高台で、志戸呂焼第Ⅴ期か第Ⅵ期であろう。

SF10C09

52は瀬戸・美濃産の油徳利である。内外面とも柿釉がけである。

SF10C02

53はロクロ水挽き成形のカワラケ小皿である。

SF10C10

54はロクロ水挽き成形のカワラケ小皿である。53のカワラケとともに幕末の陶磁器が伴出している遺構からの出土である。

SF10C16

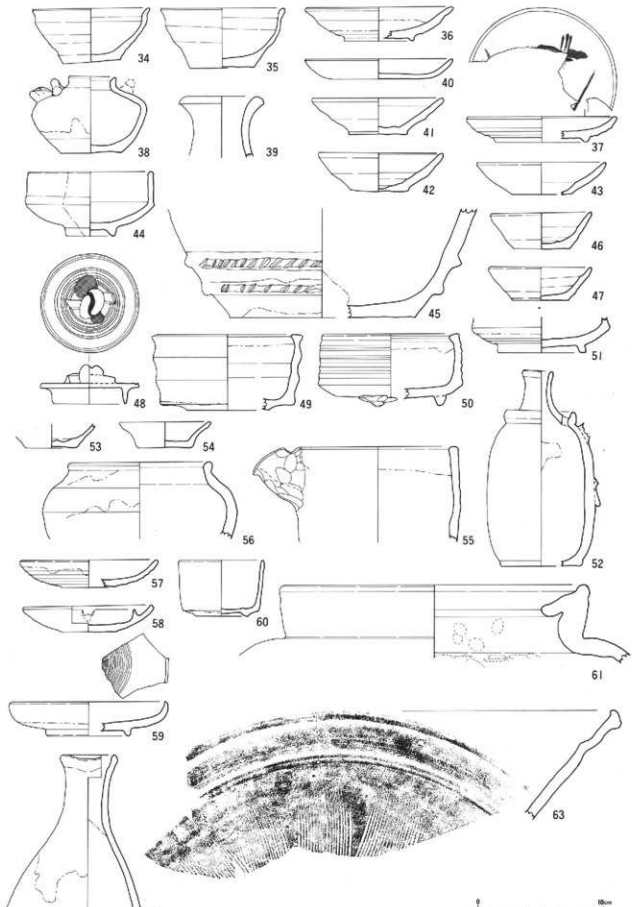
55は志戸呂焼第Ⅳ期の片口である。56は赤味をおびた胎土で鉄釉を二重がけしている。九州産であろう。17世紀後半代の鉢か小形壺であろう。

SX10B01（礫群）

57・58は瀬戸・美濃産の燈明皿にあたる。57は油皿と考えられる。59は見込み部に糸目を施す志戸呂焼第Ⅳ期の皿である。ＳＤ10Ｂ09と重複しており、混入品であろう。

60は鉄釉に灰釉を薄くぬった製品で、低い削り出し輪高台が造られている。志戸呂焼第Ⅳ期。

61は常滑壺である。内側に鍔状の張り出しをもつ口縁である。



第77図　10区出土遺物　その2　溝　土坑ほか

62は片口を造り出した徳利でおそらく5合入であろう。灰釉の上に飴釉を流しがけしている。志戸呂焼第VI期。

63は瀬戸・美濃産の擂鉢である。19世紀前半であろう。

64は焼塩壺である。原川遺跡では1例のみである。この形態は時期的にも古く、本来SD10B09に伴う遺物が攪乱によって礫群に入ったと推定したい。

65は青磁染付の蓋付碗の蓋である。天井部内側にコンニャク版が施される。 **青磁染付**

染付では蓋付碗の蓋66、湯飲み碗67、筒茶碗68が出土した。いずれも瀬戸・美濃産と考えられる。水指74は虎斑釉技法の志戸呂焼第VI期の製品である。

その他いぶし瓦質の軒瓦69・85が出土した。

SX10B01は出土した陶磁器より19世紀中頃と考えられる。

SX10B02（礫群杭列）

天目茶碗70は灰釉がけで志戸呂焼第IV期の製品である。おそらく志戸呂焼では灰釉がけの天目茶碗としては古いタイプであろう。

71・72・77は鉄釉もしくはサビ釉上に灰釉をかけ、口端部の釉をぬぐった中皿である。志戸呂焼第IV期の製品である。71は灰釉を紋様のように部分的にかけている。71のみ口端部の釉はぬぐっていない。

73は道もしくは壁でサビ釉化粧がけである。口縁部は鍔状に大きく外反する。従来みられないタイプで類例を待ちたい。

75は志戸呂焼第IV期の擂鉢である。注口部の造り出しは小さい。

76の折縁皿は口縁部内側のみ灰釉をかけ、見込み部に鉄絵を描く。

78は削り出し高台で灰釉がけの小鉢である。瀬戸・美濃産であろう。93の擂鉢は瀬戸・美濃産であろうと考えている。

SX10B02はSD10B10と重複しているため17世紀中頃から後半の陶器が多い。杭列や礫群からは18世紀後半から19世紀前半の陶磁器が出土している。おそらく、SX10B02と同様の性格であろう。それにしても礫群とともに破損した陶磁器や瓦を投棄するなど廃棄坑の代りにも利用している。礫群についても原野谷川からの川原石を利用するならば、こうした生活遺物は混入しないであろう。おそらく、身近にあった礫（石垣など）が地震や火事等何等かの天災によって壊れ、生活遺物とともに埋め込み暗渠のかわりにしたのであろうか。

SX10B06

瀬戸・美濃産のねり鉢79・信楽の土瓶の蓋80・柿釉がけの銅チョク81・肥前磁器の小皿 **信楽の土瓶**
82・湯飲み碗83・蓋付碗の蓋84が出土した。82の小皿は口縁部を花弁状に造り、さらに口端部に酸化鉄の口サビを施している良品である。

ピット・柱穴群

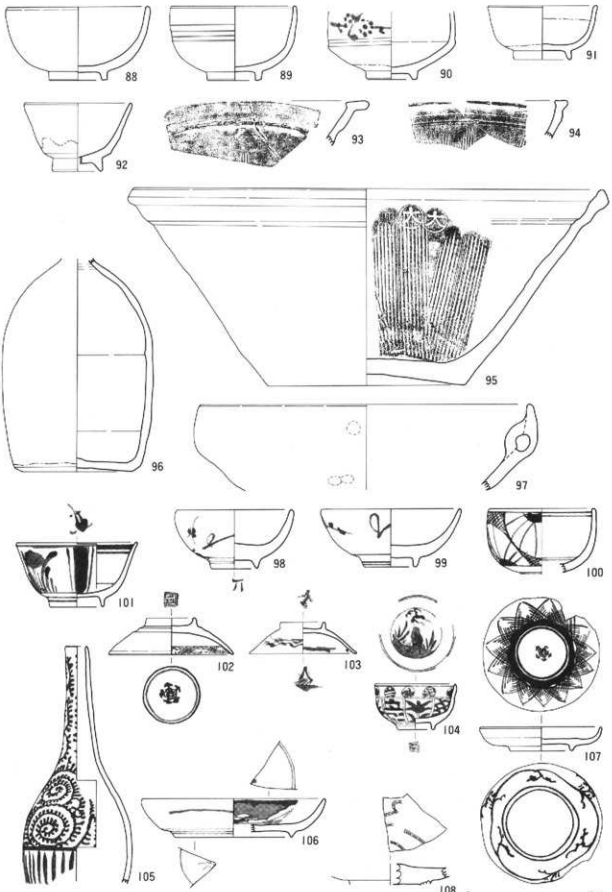
SP10C07からは志野丸皿11が出土した。SP10B25からは志戸呂焼第IIIa期の擂鉢86が出土した。

SP10C01からは燈明皿に使用されたカワラケ小皿87が出土した。SP10B19からは平安末から鎌倉前期の青磁碗片108が出土した。これらの陶磁器によって10区で検出された建物跡はすでに16世紀後半から末に存在したと判断されよう。

包含層

刷目丸碗88・掛け分け碗89・摺絵せんじ碗90・煎茶碗と考えられる鉄釉小形碗91・92が

第78図　10区出土遺物　その3　溝　その他ほか



第79図　10区出土遺物　その4　土坑　包含層ほか

出土している。88～90は瀬戸・美濃製品で、91・92はいずれも志戸呂焼であるが、91は志戸呂焼第Ⅳ期、92が第Ⅴ期であろう。

94の擂鉢は推定される口径も小さく口端部を平坦につくる形態で、志戸呂焼擂鉢ではみられない。普遍的な擂鉢ではなく特殊な用途で造られた製品であろう。95は瀬戸・美濃産の擂鉢で「大」の刻印が打たれている。

96は徳利で5合もしくは3合入であろう。灰釉を虎斑釉がけしている。志戸呂焼第Ⅵ期。

97は半球型を呈する内耳鍋で、器高も低くホウロクとしての用途も考えられる。17世紀代である。

染付ではつぎの碗・皿類が1面から出土した。98～100は肥前磁器である。101は瀬戸・美濃産である。102は青磁染付蓋付碗の蓋である。103は蓋付碗の蓋で瀬戸・美濃産である。104はチョクか小鉢であろう。瀬戸・美濃産と考えられる良品である。

105は肥前磁器の神酒徳利である。106・107の皿は肥前磁器で、いずれも18世紀代の製品である。

このほか、土製品では各調査区から土製人形、陶製の人形および玩具が出土している(24)。

注

(1) 楢崎彰一『美濃の古陶』1976
楢崎彰一「総括」『尾呂』1990
(2) 井上喜久男「美濃窯の研究（一）」『東洋陶磁　15・16』
(3) 仲野泰裕「浅間山の大噴火（天明三年）に伴う泥流層下の瀬戸美濃陶器」『愛知県陶磁資料館研究紀要5』1986
仲野泰裕「江戸時代の瀬戸美濃窯における錆釉製品について」『愛知県陶磁資料館研究紀要7』1988
(4) 藤沢良祐「本業焼の研究（1）～（3）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ～Ⅷ』1987～1989
藤沢良祐「瀬戸大窯発掘報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』1986
(5) 伊藤嘉章「瀬戸・美濃における大窯製産」『岐阜市歴史博物館研究紀要第2号』1988
ほかに住田誠行「近世美濃窯の変遷Ⅰ」『美濃の古陶　No.3』1989
(6) 赤羽一郎『常滑』1983
赤羽一郎『常滑焼』1984
(7) 大橋康二他『有田町史　古窯編』1988
大橋康二『肥前陶磁』1989
大橋康二『西有田の古窯』1988
(8) 足立順司「静岡県下の施釉陶器」『江戸の陶磁器』1990
(9) 足立順司「内耳鍋の研究」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅱ』1987
(10) (4) に同じ
(11) 田口昭二他『大川東窯第3群緊急調査発掘報告書』1979
住田誠行「瑞浪の古窯」『瑞浪陶磁資料館研究紀要　第1号』1979
(12) (5) に同じ。
(13) 白老町教育委員会『白老仙台藩陣屋敷跡Ⅰ～Ⅲ』1982～1984
(14) (4) に同じ。
(15) 海野栄久『龍華院、春光院関係住僧墓の発掘調査報告書』1984
(16) 松本一男『掛川市殿谷城址他遺跡』1985
(17) 大阪市文化財協会『大阪城跡　Ⅲ』1988
(18) C. L. van der Pijl Ketel editor Overall co-ordinator: J. B. Kist 'WITTE LEEUW' 1982
(19) 関口広次「美濃高田徳利の生産と消費に関する覚書」『考古学研究　25－4』1979

(20)『駿遠豆鑑』1897

(21) (15) に同じ。

このタイプの壺はサビ釉がけのタイプで、北察跡においても多く認められるタイプである。消費地では火葬骨壺に使用された例があり、近隣の春光院近世墓、上石野1号墓などに認められる。とくに春光院では龍華院侍僧韶賢（1848年卒）、韶全（1857年卒）、権大僧都を贈られた春光院住僧宝洞（1811年卒）の骨壺に使用されており、暦年代の1点が判明する。いずれも蓋付きであり、韶賢の骨壺には上石野1号墓出土の第7図5の摘み付きの蓋が伴っている。原川遺跡の出土遺物では3区出土30の蓋に同じタイプがある。

また上石野1号墓第7図4の壺は宝洞の骨壺と同じタイプで、春光院近世墓の所見に基づけばこの壺については口縁部の形態、蓋に時期差が認められるようである。

吉岡伸夫『上石野I号墓』1988

(22) (7) に同じ。

(23)『御殿場市史　別巻I』1982

(24) 土製人形は、1区男性人物、七福神の恵比寿、碁盤、大黒、3区では寿老人？、4区では猿（上絵付）、魚を盛る皿、チョク、10区からは魚が出土した。1区からは灰釉をかけた陶製の鳥（笛か）、採集資料には婦人、ガマ、人形がある。

製作は形づくり成形と手捏成形があるが、前者が多い。玩具と考えておきたい。

第1表　出土土器一覧表(1)

挿図No.	器　種	遺構・グリッド	産　地
6区			
001	天目	SD601	初山
002	天目	SD601	志戸呂
003	丸皿	SD601	志戸呂
004	小皿	SD601	瀬戸・美濃
005	小皿	SD601	瀬戸・美濃
006	小皿	SD601	瀬戸・美濃
007	小皿	SD601	志戸呂
008	小皿	SD601	志戸呂
009	小皿	SD601	志戸呂
010	中皿	SD601	瀬戸・美濃
011	中皿	SD601	瀬戸・美濃
012	小形壺	SD601	初山
013	糸入	SD601	初山
014	向付	SD601	志戸呂
015	カワラケ	SD601	／
016	カワラケ	SD601	／
017	カワラケ	SD601	／
018	カワラケ	SD601	／
019	壺	SD601	常滑
020	壺	SD601	常滑
021	擂鉢	SD601	瀬戸・美濃
022	擂鉢	SD601	志戸呂
023	擂鉢	SD601	瀬戸・美濃
024	擂鉢	SD601	瀬戸・美濃
025	擂鉢	SD601	瀬戸・美濃
026	擂鉢	SD601	志戸呂
027	擂鉢	SD601	志戸呂
028	土鍋	SD601	／
029	土鍋	SD601	／
030	土鍋	SD601	／
031	土鍋	SD601	／
032	土鍋	SD601	／
033	土鍋	SD601	／
034	土鍋	SD601	／
035	土鍋	SD601	／
036	土鍋	SD601	／
037	土鍋	SD601	／
038	土鍋	SD601	／
039	土鍋	SD601	／
040	土鍋	SD601	／
041	天目	SD601・SD602東	志戸呂
042	天目	SE601・SD602	瀬戸・美濃
043	天目	SD602東	瀬戸・美濃
044	天目	SD602東	志戸呂
045	天目	SD602	志戸呂
046	丸碗	SD602西	瀬戸・美濃
047	丸碗	SD602西	志戸呂
048	丸碗	SD602西	瀬戸・美濃
049	丸碗	SD602西	瀬戸・美濃
050	丸碗	SD602東	瀬戸・美濃
051	小皿	SD602西	瀬戸・美濃
052	小皿	SD602中央	瀬戸・美濃
053	小皿	SD602東	瀬戸・美濃
054	小皿	SD602中央	瀬戸・美濃
055	小皿	SD602東	瀬戸・美濃
056	小皿	SD602	志戸呂
057	浅鉢	SD602東	志戸呂
058	徳利	SD602	瀬戸・美濃
059	向付	SD602	瀬戸・美濃
060	向付	SD602東	瀬戸・美濃
061	香炉	SD602東	志戸呂
062	香炉	SD602	志戸呂
063	丸碗	SD602西	肥前
064	壺	SD602	常滑
065	擂鉢	SD602	志戸呂
066	カワラケ	SD602東	／
067	カワラケ	SD602東	／

挿図No.	器　種	遺構・グリッド	産　地
068	カワラケ	SD602中央	／
069	カワラケ	SD602東	／
070	カワラケ	SD602中央	／
071	カワラケ	SD602中央	／
072	カワラケ	SD602西	／
073	土鍋	SD602東	／
074	土鍋	SD602東	／
075	土鍋	SD602東	／
076	土鍋	SD602中央	／
077	水指	SF607	志戸呂
078	中皿	SF607	肥前
079	摺鉢	SE601	瀬戸・美濃
080	小皿	SE601・SD602	瀬戸・美濃
081	仏飯器	SF610	瀬戸・美濃
082	丸碗	SF610	瀬戸・美濃
083	丸碗	SF610	肥前
084	擂鉢	SP621	志戸呂
085	カワラケ	SP680	／
086	小皿	SP621	瀬戸・美濃
087	カワラケ	SP621	／
088	蓋付碗の蓋	SF603	肥前
089	蓋付碗の蓋	SF603	瀬戸・美濃
090	燈明皿	SF603	瀬戸・美濃
091	天目	②～③	瀬戸・美濃
092	丸碗	I 4	志戸呂
093	丸碗	①～②	瀬戸・美濃
094	小皿	②	瀬戸・美濃
095	茶入	①撹乱	瀬戸・美濃
096	水注	②	初山
097	小皿	①精査	志戸呂
098	皿か小鉢	①精査	志戸呂
099	小皿	①精査	瀬戸・美濃
100	小皿	②	瀬戸・美濃
101	小皿	②	志戸呂
102	中皿	①撹乱	交趾三彩写し
103	小鉢	①精査	瀬戸・美濃
104	土瓶	①撹乱	瀬戸・美濃
105	瓶掛	①撹乱	瀬戸・美濃
106	土瓶蓋	①精査	信楽
107	急須蓋	①撹乱	志戸呂
108	大皿	①精査	志戸呂
109	半胴壺	①精査・撹乱	瀬戸・美濃
110	仏花瓶	①精査	瀬戸・美濃
111	仏花瓶	①精査	瀬戸・美濃
112	燈明皿	東側排水溝	志戸呂
113	燈明皿	①精査	瀬戸・美濃
114	カワラケ	SP608	／
115	カワラケ	③	／
116	入鉢	①撹乱・精査	瀬戸・美濃
117	壺	②	常滑
118	擂鉢	①撹乱	瀬戸・美濃
119	擂鉢	①精査	瀬戸・美濃
120	擂鉢	①撹乱	瀬戸・美濃
121	擂鉢	①精査	瀬戸・美濃
122	丸碗	①撹乱	瀬戸・美濃
123	丸碗	①精査	肥前
124	碗	①精査	明
125	丸碗	①撹乱	瀬戸・美濃
126	小皿	①撹乱	明
127	蓋付碗	①撹乱	肥前
128	蓋付碗	①撹乱	肥前
129	蓋付碗	①撹乱	瀬戸・美濃
130	蓋付碗	①撹乱	肥前
131	蓋付碗の蓋	①精査	肥前
132	蓋付碗の蓋	①撹乱	肥前
133上	蓋付碗の蓋	①撹乱	瀬戸・美濃
133下	蓋付碗	①撹乱	瀬戸・美濃
134上	蓋付碗の蓋	①精査	瀬戸・美濃

出土土器一覧表(2)

挿図No.	器種	遺構・グリッド	産地
134下	蓋付鍋	①精査	瀬戸・美濃
135	蓋付鍋の蓋	①撹乱	瀬戸・美濃
136	重箱の蓋	①撹乱	瀬戸・美濃
137	丸鍋	①撹乱	瀬戸・美濃
138	丸鍋	①精査	肥前か
139	丸鍋	①精査	瀬戸・美濃
140	丸鍋	①撹乱	不明
141	丸鍋	①撹乱	瀬戸・美濃
142	鍋	①撹乱	不明
143	小皿	①撹乱	瀬戸・美濃
144	中皿	①撹乱	瀬戸・美濃
145	小皿	①精査	明
146	中皿	①撹乱	瀬戸・美濃
147	紅皿	①精査	肥前
148	紅皿	①撹乱	肥前
149	紅皿	①精査	瀬戸・美濃か
150	香炉	I 4包含層	肥前
151	合子蓋	I 4②～③	明
152	小皿	K3②	宋
153	鍋	I 4②～③	宋から元
154	鍋	②	宋から元
155	鍋	S D601	明
156	鍋	②	宋
157	鍋	②	明
158	鍋	②～③	明
159	鍋	②	明
160	土鍋	②	／
I区			
001	犬日	S E102	瀬戸・美濃
002	小形壺	S E102	瀬戸・美濃
003	小皿	③ピット	瀬戸・美濃
004	羽釜	③ピット	／
005	丸碗	J 5①	志戸呂
006	小皿	K5Ⅲ層	瀬戸・美濃
007	小皿	J 5②	初山
008	小皿	J 5	瀬戸・美濃
009	小皿	J 5②	瀬戸・美濃
010	中皿	J 5②	瀬戸・美濃
011	中皿	J 5②	瀬戸・美濃
012	小皿	J 5②	志戸呂
013	小皿	J 5	瀬戸・美濃
014	カワラケ	K5Ⅲ層①	／
015	カワラケ	J 5	／
016	カワラケ	J 5	／
017	小皿	J 7③	瀬戸・美濃
018	小皿	J 7②	瀬戸・美濃
019	小皿	J 7②	志戸呂
020	水注	K7②	志戸呂
021	片口	J 7②	志戸呂
022	カワラケ	J 7西	／
023	擂鉢	K7②	志戸呂
024	甕	J 7③中央北西部	常滑
025	土鍋	J 7③	／
026	十鍋	K7③北側	／
027	天目	I 7③	瀬戸・美濃
028	天目	I 8②排水溝	不明
029	天目	I 7①	瀬戸・美濃
030	天目	M4	志戸呂
031	丸碗	J 6③東側	瀬戸・美濃
032	鍋	J 5②	志戸呂
033	丸碗	J 6③	瀬戸・美濃
034	丸碗	I 8②	瀬戸・美濃
035	丸碗	H8③	瀬戸・美濃
036	丸碗	I 6②	瀬戸・美濃
037	丸碗	H8③	瀬戸・美濃
038	丸碗	L5②撹乱	瀬戸・美濃
039	丸碗	I 7③	志戸呂
040	丸碗	I 8③	瀬戸・美濃

挿図No.	器種	遺構・グリッド	産地
041	丸碗	I 8③	不明
042	丸碗	M4②	志戸呂
043	丸碗	I 8②	志戸呂
044	小形丸碗	L5②	志戸呂
045	小形丸碗	M4②	志戸呂
046	小形丸碗	J 6・J 7③	志戸呂
047	小皿	H8③	志戸呂
048	小皿	I 5③	瀬戸・美濃か
049	小皿	I 7③	志戸呂
050	小皿	I 8③	瀬戸・美濃
051	小皿	H8③	瀬戸・美濃
052	小皿	I 7③	初山
053	小皿	K6③	瀬戸・美濃
054	小皿	I 7③	瀬戸・美濃
055	小皿	I 7③	瀬戸・美濃
056	小皿	I 7③	瀬戸・美濃
057	小皿	I 7③	瀬戸・美濃
058	小皿	J 6③	瀬戸・美濃
059	小皿	I 6③	瀬戸・美濃
060	小皿	J 6③	瀬戸・美濃
061	小皿	K6③	初山
062	小皿	I 8③	初山
063	小皿	I 8③	初山
064	小皿	L4③	初山
065	小皿	I 6	初山
066	小皿	L4③	志戸呂
067	小皿	I 6①	瀬戸・美濃
068	小皿	I 5排水溝	志戸呂
069	小皿	I 6①	志戸呂
070	小皿	I 7③	志戸呂
071	小皿	H8③	志戸呂
072	小皿	J 6③	志戸呂
073	小皿	I 7③	瀬戸・美濃
074	小皿	I 8②	瀬戸・美濃
075	小皿	I 7②	瀬戸・美濃
076	小皿	L5②	瀬戸・美濃
077	小皿	L5②	瀬戸・美濃
078	小皿	I 6①	初山
079	小皿	J 6③	初山
080	小皿	I 6②	初山
081	中皿	I 6②	初山
082	小皿	I 7③	初山
083	小皿	I 7②	初山
084	小皿	I 7②	初山
085	小皿	L5②	初山
086	小皿	I 7②	初山
087	中皿	I 7②	瀬戸・美濃
088	小皿	I 8②	瀬戸・美濃
089	小皿	M4②	瀬戸・美濃
090	小皿	L5②	瀬戸・美濃
091	小皿	L4②	志戸呂
092	小皿	I 6②	志戸呂
093	小皿	②	志戸呂
094	小皿	I 5③	志戸呂
095	小皿	I 7②	志戸呂
096	小皿	H7①	初山か
097	大皿	L4②	志戸呂か
098	中皿	L6②	志戸呂
099	大皿	K6①	志戸呂
100	鉢	I 5②	志戸呂
101	小皿	L7①	志戸呂
102	丸碗	L2②	瀬戸・美濃
103	鉢	K6②	唐津
104	鉢	H8①	唐津
105	大皿	L6③	瀬戸・美濃
106	小皿	L5②	瀬戸・美濃
107	小形壺	J 7③	志戸呂
108	小形壺	水路③	志戸呂

出土土器一覧表(3)

挿図№	器　種	遺構・グリッド	産　地
106	小形壺	I 6②	志戸呂
110	小形壺	J 6試掘	志戸呂
111	鉢	H7①	志戸呂
112	小鉢	I 5①	志戸呂
113	片口	L 5②	志戸呂
114	片口	L 5②	志戸呂
115	片口	M4②	志戸呂
116	片口	L 5	志戸呂
117	片口	I 6③	志戸呂
118	香炉	L 4②	志戸呂
119	香炉	L 6②	志戸呂
120	香炉	L 5②	瀬戸・美濃
121	手あぶり	L 6②	不明
122	茶入	I 7②	志戸呂
123	鉢	M4②	志戸呂
124	香炉	H8③	志戸呂
125	羅斗	L 6②	志戸呂
126	ピンダライ	L 6②	瀬戸・美濃
127	蓋	L 7①	志戸呂
128	徳利	I 8③	志戸呂
129	徳利	L 5②	志戸呂
130	短頸壺か徳利	J 7③櫛乱	志戸呂
131	徳利	L 4②	志戸呂
132	片口かねり鉢	L 5②	瀬戸・美濃
133	片口	L 6③	瀬戸・美濃
134	油揚	J 9②	瀬戸・美濃
135	燈明皿	J 6③	志戸呂
136	燈明皿	I 8③	志戸呂
137	燈明皿	I 7③	瀬戸・美濃
138	燈明皿	L 5②	瀬戸・美濃
139	燈明皿	L 5	瀬戸・美濃
140	冷炉	M3②	／
141	茶壺か水壺	H8③	志戸呂
142	しびん	K7②	瀬戸・美濃
143	蓋	K6②	常滑
144	擂鉢	J 8②	志戸呂
145	擂鉢	L 5③	志戸呂
146	擂鉢	南側部分	志戸呂
147	擂鉢	I 7③	志戸呂
148	擂鉢	I 8③	志戸呂
149	擂鉢	I 7③	志戸呂
150	擂鉢	I 6①	志戸呂
151	擂鉢	L 6②	志戸呂
152	擂鉢	I 7③	瀬戸・美濃
153	擂鉢	I 7③	志戸呂
154	擂鉢	I 7②	瀬戸・美濃
155	擂鉢	L 5②	瀬戸・美濃
156	擂鉢	J 7③	瀬戸・美濃
157	擂鉢	L 5②	瀬戸・美濃
158	カワラケ	I 8③	／
159	カワラケ	H8③	／
160	カワラケ	東西トレンチ③	／
161	カワラケ	I 6③	／
162	カワラケ	I 8③	／
163	カワラケ	H8③	／
164	カワラケ	H8③	／
165	カワラケ	I 6③	／
166	カワラケ	I 5③	／
167	カワラケ	I 6③	／
168	羽釜	I 7③	／
169	羽釜	I 7①	／
170	羽釜	I 7①	／
171	羽釜	I 8③	／
172	羽釜	I 6①	／
173	土鍋	I 7③	／
174	土鍋	I 7③	／
175	土鍋	I 7③	／
176	土鍋	I 7③	／

挿図№	器　種	遺構・グリッド	産　地
177	土鍋	I 7③	／
178	土鍋	M・L②	／
179	土鍋	M4②	／
180	土鍋	L 5②	／
181	土鍋	L 4②	／
182	土鍋	M4①	／
183	土鍋	不明	／
184	土鍋	I 7②	／
185	土鍋	M4②	／
186	土鍋	M4②	／
187	土鍋	不明	／
188	小形壺	I 6	常滑
189	土鍋	I 7②	／
190	土鍋	不明	／
191	カワラケ	L～M②	／
192	カワラケ	L 5②	／
193	カワラケ	K6Ⅲ層	／
194	カワラケ	L 5②	／
195	カワラケ	J 8Ⅲ層	／
196	カワラケ	K6Ⅲ層	／
197	カワラケ	H8②	／
198	カワラケ	L 6②	／
199	カワラケ	L 5②	／
200	カワラケ	L 5②	／
201	カワラケ	L 4②攪乱	／
202	カワラケ	L 5②	／
203	カワラケ	L 4②	／
204	カワラケ	K6②	／
205	カワラケ	L 5②	／
206	天目	J 6①	瀬戸・美濃
207	丸碗	L 6①	瀬戸・美濃
208	丸碗	L 5①	瀬戸・美濃
209	丸碗	L 4①	瀬戸・美濃
210	丸碗	I 5①	瀬戸・美濃
211	丸碗	K5①	瀬戸・美濃
212	丸碗	L 5①	瀬戸・美濃
213	丸碗	L 4①	瀬戸・美濃
214	碗	L 4①	志戸呂
215	丸碗	L 4①	志戸呂
216	丸碗	K4①	志戸呂
217	丸碗	L 5①	志戸呂
218	丸碗	J 7①攪乱	志戸呂
219	丸碗	L 5①攪乱	志戸呂
220	小形丸碗	L 5①	瀬戸・美濃
221	丸碗	L 5①	志戸呂
222	小形丸碗	L 4①	瀬戸・美濃
223	小形丸碗	L 4①	瀬戸・美濃か
224	小形丸碗	L 4①	瀬戸・美濃
225	丸碗	L 5①	志戸呂
226	丸碗	西側部分③	瀬戸・美濃
227	小皿	K5①溝側	初山
228	中皿	I 5①	瀬戸・美濃
229	小皿	L 6①	瀬戸・美濃
230	小皿	I 5①	瀬戸・美濃
231	中皿	I 5①	瀬戸・美濃
232	中皿	L 5①攪乱	瀬戸・美濃
233	小皿	K6①	志戸呂
234	中皿	L 5①	瀬戸・美濃
235	小皿	L 3①	瀬戸・美濃
236	小皿	H6①	瀬戸・美濃
237	小皿	M4①	瀬戸・美濃
238	大皿	I 7①	瀬戸・美濃
239	大皿	J 6①攪乱	唐津
240	中皿	M4①	志戸呂
241	小皿	①西側	志戸呂
242	小皿	L 4①	志戸呂
243	小皿	J 6①	志戸呂
244	小皿	L 5①攪乱	志戸呂

出土土器一覧表(4)

挿図No.	器種	遺構・グリッド	産地
245	小皿	I 5①	志戸呂
246	小皿	J 6①	志戸呂
247	中皿	K5①	志戸呂
248	燈明皿	L 6①	瀬戸・美濃
249	燈明皿	J 5①	瀬戸・美濃
250	燈明皿	L 6①	瀬戸・美濃
251	燈明皿	I 7①	瀬戸・美濃
252	燈明皿	①西側部分	瀬戸・美濃
253	燈明皿	J 6①	志戸呂
254	燈明皿	I 5①	志戸呂
255	片口	L 5①	瀬戸・美濃
256	片口	J 6①	瀬戸・美濃
257	片口	L 5①	瀬戸・美濃
258	片口	I 6①	志戸呂
259	鉢斗	L 5①	志戸呂
260	ひょうそく	I 7①	瀬戸・美濃
261	鉢	I 6①	志戸呂
262	香炉	L 4①	瀬戸・美濃
263	香炉	L 5①攪乱	志戸呂
264	香炉	不明	志戸呂
265	香炉	J 6①	志戸呂
266	香炉	L 4①	志戸呂
267	香炉	I 5①	志戸呂
268	香炉	L 5①	志戸呂
269	香炉	L 4①	志戸呂
270	鉢	L 4①	瀬戸・美濃
271	香炉	K5①	志戸呂
272	香炉	I 5①	瀬戸・美濃か京焼
273	水指	I 7①	志戸呂
274	水指	L 5①南西部	志戸呂
275	火入れ	①東側部分	瀬戸・美濃
276	火入れ	I 6①	志戸呂
277	向付	L 4①	瀬戸・美濃
278	チョク	I 6①	志戸呂
279	チョク	J 5①	志戸呂
280	チョク	K5①	志戸呂
281	鍋	L 4①	瀬戸・美濃
282	袖揺	J 7①	幾戸・美濃
283	小形壺	L 6①	瀬戸・美濃
284	チョク	K6①	肥前か丹波
285	餌チョク	①西側部分	瀬戸・美濃
286	餌チョク	①西側排水溝	瀬戸・美濃
287	ミニチュア	中央部II層上	瀬戸・美濃
288	四耳壺	J 6攪乱	瀬戸・美濃
289	急須	L 7	信楽か
290	土瓶蓋	L 7①	志戸呂
291	土瓶蓋	J 5①	瀬戸・美濃
292	土瓶蓋	K6①	瀬戸・美濃
293	土瓶蓋	K6①	瀬戸・美濃
294	土瓶蓋	J 7①	瀬戸・美濃
295	手あぶり	K5①	瀬戸・美濃
296	手あぶり	I 7②	瀬戸・美濃
297	徳利	J 6①	志戸呂
298	火鉢か水壺	I 6①	常滑
299	火消し壺	J 6①	／
300	壺	I 5①	初山
301	擂鉢	M4①	志戸呂
302	擂鉢	L 5①	瀬戸・美濃
303	擂鉢	J 7①	志戸呂
304	擂鉢	K7③	瀬戸・美濃
305	擂鉢	K6②	瀬戸・美濃
306	擂鉢	J 7①	瀬戸・美濃
307	擂鉢	K6①	瀬戸・美濃
308	擂鉢	I 7①	瀬戸・美濃
309	擂鉢	J 6③	瀬戸・美濃
310	擂鉢	L 7 II 層	瀬戸・美濃
311	擂鉢	①西側部分	瀬戸・美濃
312	擂鉢	K7① III 層	瀬戸・美濃

挿図No.	器種	遺構・グリッド	産地
313	擂鉢	L 5①	志戸呂
314	擂鉢	L 6①	志戸呂
315	擂鉢	L 6①	瀬戸・美濃
316	擂鉢	L 6②	瀬戸・美濃
317	擂鉢	I 7①	瀬戸・美濃
318	擂鉢	L 4①	瀬戸・美濃
319	擂鉢	I 6	不明
320	擂鉢	L 5①	瀬戸・美濃
321	土鍋	J 6①	／
322	擂鉢	J 6	瀬戸・美濃
323	土鍋	H6①	／
324	カワラケ	I 5①	／
325	カワラケ	①三角中央部	／
326	カワラケ	L 5①	／
327	カワラケ	L 5①	／
328	カワラケ	J 7	／
329	カワラケ	L 6①	／
330	カワラケ	L 5①	／
331	カワラケ	K6①	／
332	カワラケ	K6①	／
333	カワラケ	L 5①	／
334	カワラケ	L 5①	／
335	カワラケ	J 6①	／
336	カワラケ	L 5①	／
337	汁次	J 5①	瀬戸・美濃
338	丸碗	L 6①	瀬戸・美濃
339	丸碗	L 6①	瀬戸・美濃
340	丸碗	L 6①	肥前
341	丸碗	I 8①	瀬戸・美濃
342	丸碗	I 5①	瀬戸・美濃
343	丸碗	H7①	肥前
344	丸碗	①東側	肥前
345	丸碗	J 7①	瀬戸・美濃
346	丸碗	J 7②	肥前
347	丸碗	L 5①	瀬戸・美濃
348	丸碗	J 6①	肥前
349	丸碗	K7③	肥前
350	蓋付碗の蓋	L 5①	肥前
351	蓋付碗	L 4①～②	肥前
352	蓋付碗	K7①	肥前
353	蓋付碗	M3①	肥前
354	蓋付碗	J 6①	肥前
355	蓋付碗	H6①	肥前
356	蓋付碗	L 4①	肥前
357	蓋付碗	L 6①	瀬戸・美濃
358	丸碗	M4①	肥前
359	丸碗	L 5①	肥前
360	碗	①西側排水溝	肥前
361	蓋付碗の蓋	K4	肥前
362	蓋付碗の蓋	J 5①	肥前
363	蓋付碗の蓋	M4①攪乱	瀬戸・美濃
364	蓋付碗の蓋	J 6①	肥前
365	蓋付碗の蓋	I 7①	肥前
366	蓋付碗の蓋	L 5①	肥前
367	蓋付碗の蓋	J 5①	肥前
368	蓋付碗の蓋	L 7 II 層	瀬戸・美濃
369	蓋付碗の蓋	I 5①	瀬戸・美濃
370	蓋付碗の蓋	L 6①	肥前
371	蓋付碗の蓋	H6①	瀬戸・美濃
372	蓋付碗の蓋	①西側部分	肥前
373	蓋付碗の蓋	①西側部分	肥前
374	蓋付碗の蓋	K6①	不明
375	蓋付碗の蓋	①南側部分	肥前
376	蓋付碗の蓋	K6②	肥前
377	蓋付碗の蓋	L 6②	肥前
378	蓋付碗の蓋	L 4①	肥前
379	蓋付碗の蓋	L 7 II 層	肥前
380	蓋付碗の蓋	J 6②	肥前

出土土器一覧表(5)

挿図No.	器　種	遺構・グリッド	産　地
381	蓋付鉢の蓋	I 7①	瀬戸・美濃
382	蓋付鉢の蓋	L 7①	肥前
383	蓋付鉢の蓋	I 5①	肥前
384	鉢	①内側部分	瀬戸・美濃
385	鉢	L 7 II 層	肥前
386	鉢	J 7①	瀬戸・美濃
387	鉢	①東側	瀬戸・美濃
388	筒	K 5② 攪乱	瀬戸・美濃
389	筒	①西側部分	肥前
390	筒	L 6③	肥前
391	筒	K 7①	肥前
392	筒	I 7①	瀬戸・美濃
393	筒	L 5②	瀬戸・美濃
394	筒	L 4②	肥前
395	筒	L 4②	肥前
396	筒	L 6③	瀬戸・美濃
397	丸碗	L 5①	肥前
398	丸碗	M 4①	肥前
399	丸碗	①東側	瀬戸・美濃
400	丸碗	H 8②	瀬戸・美濃
401	丸碗	K 6①	瀬戸・美濃
402	丸碗	H 8③	瀬戸・美濃
403	丸碗	J 6①	瀬戸・美濃
404	丸碗	J 5①	肥前
405	丸碗	L 6①	瀬戸・美濃
406	丸碗	L 6①	肥前
407	丸碗	L 5③	肥前
408	丸碗	K 6①	瀬戸・美濃
409	丸碗	L 5③	肥前
410	丸碗	L 6③	瀬戸・美濃
411	丸碗	L 6③	肥前
412	丸碗	K 7②	瀬戸・美濃
413	丸碗	I 8③	肥前
414	丸碗	I 7①	瀬戸・美濃
415	丸碗	①南側部分	瀬戸・美濃
416	丸碗	L 6①	肥前
417	丸碗	K 7①	肥前
418	丸碗	H 8②	瀬戸・美濃
419	丸碗	K 6①	瀬戸・美濃
420	丸碗	L 6①	瀬戸・美濃
421	丸碗	L 6①	瀬戸・美濃
422	丸碗	M 4① 攪乱	瀬戸・美濃
423	丸碗	H 6①	肥前
424	煎茶碗	L 4②	肥前
425	煎茶碗	M 4① 攪乱	肥前
426	チョク	I 6①	瀬戸・美濃
427	チョク	I 5①	瀬戸・美濃
428	チョク	J 6①	瀬戸・美濃
429	チョク	L 5①	瀬戸・美濃
430	チョク	K 6①	瀬戸・美濃
431	煎茶碗	L 4① 攪乱	肥前
432	ぐい飲み	L 6①	瀬戸・美濃
433	ぐい飲み	L 7②	瀬戸・美濃
434	ぐい飲み	L 4②	瀬戸・美濃
435	煎茶碗	L 4①	瀬戸・美濃
436	煎茶碗	M 4① 攪乱	瀬戸・美濃か
437	中皿	J 7①	肥前
438	中皿	L 5①	肥前
439	中皿	L 5②	肥前
440	中皿	①西側部分	肥前
441	小皿	L 6①	瀬戸・美濃
442	小皿	H 6①	瀬戸・美濃
443	中皿	I 8①	肥前
444	中皿	H 6①	肥前
445	中皿	M 4① 攪乱	瀬戸・美濃
446	小皿	不明	肥前
447	小皿	L 5② 攪乱	肥前
448	小皿	M 4① 攪乱	瀬戸・美濃

挿図No.	器　種	遺構・グリッド	産　地
449	中皿	L 6①	肥前
450	小皿	M 4① 攪乱	瀬戸・美濃
451	小鉢	①中央部	瀬戸・美濃
452	小瓶	J～K 8③	肥前
453	大皿	K 7 攪乱	肥前
454	大皿	L 6①	肥前
455	大皿	L 6③	肥前
456	大皿	L 6③	肥前
457	鉢	②西側部分	肥前か
458	香炉	I 6②	肥前
459	香炉	M 3②	肥前
460	ビンダライ	J 6①	不明
461	合子蓋	I 7①	肥前
462	紅皿	L 6①	肥前
463	小皿	L 6①	瀬戸・美濃
464	小皿	L 6①	瀬戸・美濃
465	小皿	L 6①	瀬戸・美濃
466	小皿	L 6①	瀬戸・美濃
467	小皿	L 6③	瀬戸・美濃
468	水注	H 7 排水溝	瀬戸・美濃
469	丸碗	L 5	瀬戸・美濃
470	丸碗	L 5	志戸呂
471	丸碗	北側排水溝①	瀬戸・美濃
472	小形碗	L 4	志戸呂
473	小皿	I 7①	瀬戸・美濃
474	小皿	I 5	初山
475	小皿	L 5②	志戸呂
476	小皿	K 7	瀬戸・美濃
477	小皿	I 8③	瀬戸・美濃
478	小皿	L 5②	志戸呂
479	小皿	K 5①	志戸呂
480	小皿	I 6③	瀬戸・美濃
481	中皿	L 4	肥前
482	中皿	J 6③	肥前
483	小皿	K 7	瀬戸・美濃か
484	小皿	L 5②	瀬戸・美濃
485	小皿	西側①	志戸呂か
486	小皿	I 5	志戸呂
487	片口	不明	瀬戸・美濃
488	香炉	L 4	志戸呂
489	香炉	②	志戸呂
490	蓋	L 4	志戸呂
491	燈明皿	L 4	瀬戸・美濃
492	チョク	I 5	志戸呂
493	豆皿	②	志戸呂
494	燈明皿	L 5②	志戸呂
495	笠原鉢	表土	瀬戸・美濃
496	片口	L 6①	瀬戸・美濃
497	片口	シD 5	瀬戸・美濃
498	土瓶	西側部分	瀬戸・美濃
499	半岡壺	L 5	瀬戸・美濃
500	土瓶	I 5②	信楽
501	仏餉器	③	志戸呂
502	仏餉器	L 5	志戸呂
503	壺	L 4 攪乱	常滑
504	擂鉢	シC 3	志戸呂
505	擂鉢	J 6①	志戸呂
506	擂鉢	シB 7	志戸呂
507	擂鉢	I 7①	志戸呂
508	擂鉢	M 4 攪乱	瀬戸・美濃
509	カワラケ	I 7①	／
510	カワラケ	J 8③	／
511	カワラケ	I 7③	／
512	カワラケ	J 7①	／
513	カワラケ	I 5②	／
514	カワラケ	J 7①	／
515	カワラケ	L 5②	／
516	カワラケ	I 6②	／

出土土器一覧表(6)

挿図No.	器　種	遺構・グリッド	産　地
517	カワラケ	J 6②	／
518	カワラケ	J 5②	／
519	蓋付碗	南側排水溝	肥前
520	蓋付碗	南側排水溝	肥前
521	丸碗	東側部分	瀬戸・美濃
522	碗	L 4	瀬戸・美濃
523	丸碗	I 6	瀬戸・美濃
524	筒	L 6	瀬戸・美濃
525	筒	J 5	肥前
526	チョク	中央部北側	肥前
527	蓋付碗の蓋	攪乱部	瀬戸・美濃
528	蓋付碗の蓋	J 7中央北西部	瀬戸・美濃
529	蓋付碗の蓋	東側排水溝	瀬戸・美濃
530	土瓶蓋	J 7	瀬戸・美濃
531	段皿の蓋	東側部分	瀬戸・美濃
532	小皿	K5	瀬戸・美濃
533	小皿	L5	瀬戸・美濃
534	小皿	M4	肥前
535	小皿	I 7	肥前
536	小皿	L 4	瀬戸・美濃
537	碗	I 7②	朱
538	碗	J 6攪乱	宋から元
539	皿	H8③	明
540	碗	J 5②	明
541	碗	I 7③	明
542	大皿	J 6③	元
543	中皿	J 6③	明
544	小皿	J 6③	元から明初
545	中皿	I 6③	明
546	中皿	I 7③	明
547	中皿	J 7①	明
548	小皿	H6①	明
3 区			
001	天目	S D303	瀬戸・美濃
002	小皿	S D303	瀬戸・美濃
003	小皿	S D303	初山
004	小皿	S D303	志戸呂
005	小皿	S D303	志戸呂
006	小皿	S D303	志戸呂
007	小形壺	S D303	志戸呂
008	土鍋	S D303	／
009	土鍋	S D303	／
010	土鍋	S D303	／
011	土鍋	S D303	／
012	羽釜	S D303	／
013	カワラケ	S D303	／
014	カワラケ	S D303	／
015	カワラケ	S D303	／
016	カワラケ	S D303	／
017	カワラケ	S X303	／
018	丸碗	S X302	志戸呂
019	天目	S X304	瀬戸・美濃
020	中皿	S X302	瀬戸・美濃
021	カワラケ	S X305	／
022	カワラケ	②～③	／
023	擂鉢	S X305	志戸呂
024	小皿	H9c③まで	瀬戸・美濃
025	小皿	I 9d③まで	瀬戸・美濃
026	鉢	J 9c③まで、	瀬戸・美濃
027	中皿	I 9a③まで	不明
028	小皿	I 9a②	瀬戸・美濃
029	小皿	J 9a③まで	志戸呂
030	蓋	I 9③	志戸呂
031	鉢	I 9c d③まで	唐津
032	土鍋	I 9c d③まで	／
033	碗	I 11②まで	瀬戸・美濃
034	小皿	②大溝内	志戸呂
035	小皿	②大溝内	志戸呂

挿図No.	器　種	遺構・グリッド	産　地
036	蓋	I 11②まで	志戸呂
037	銅チョク	I 11②まで	瀬戸・美濃
038	碗	I 11②まで	志戸呂
039	燈明皿	I 11②まで	瀬戸・美濃
040	燈明皿	I 11②まで	瀬戸・美濃
041	仏鉢器	I 11②まで	瀬戸・美濃
042	丸碗	I 11②まで	肥前
043	丸碗	I 11②まで	肥前
044	香炉	I 11②まで	瀬戸・美濃
045	擂鉢	②大溝内	志戸呂
046	擂鉢	J 10②まで	志戸呂
047	擂鉢	J 9①	志戸呂
048	グイ飲み	J 9①	瀬戸・美濃
049	煎茶碗	②まで	京焼か
050	丸碗	撹土中	瀬戸・美濃
051	丸碗	北トレンチ	瀬戸・美濃
052	ひょうそく	排水溝②	瀬戸・美濃
053	壺・甕	I 9b②まで	常滑
054	壺・甕	J 9②まで	常滑
055	壺	J 8表土	志戸呂
056	擂鉢	I 8表土排水溝	志戸呂か
057	擂鉢	K9②まで	瀬戸・美濃
058	鉢	I 11	瀬戸・美濃
059	有孔土器	排水溝	不明
4 区			
001	小皿	S D401	瀬戸・美濃
002	丸碗	S D405	瀬戸・美濃
003	丸碗	S D405	瀬戸・美濃
004	蓋付碗の蓋	S D405	肥前
005	小皿	S D405	瀬戸・美濃
006	碗	S D405	瀬戸・美濃
007	蓋付碗	S D405	瀬戸・美濃
008	蓋付碗	S D405	瀬戸・美濃
009	中皿	S D405	志戸呂
010	擂鉢	S D405	瀬戸・美濃
011	鉢	S F401	瀬戸・美濃
012	小皿	S F413	志戸呂
013	碗	S F413	志戸呂
014	短頸壺	S F404	常滑
015	片口	S F413	瀬戸・美濃
016	ねり鉢	S F413	瀬戸・美濃
017	筒	S F413	肥前
018	蓋付碗	S F413	瀬戸・美濃
019	ねり鉢	S F413	瀬戸・美濃
020	擂鉢	S F413	瀬戸・美濃
021	蓋付碗の蓋	S F413	瀬戸・美濃
022	蓋付碗の蓋	S F413	瀬戸・美濃
023	蓋付碗	S F413	瀬戸・美濃
024	大皿	S F413	肥前
025	カワラケ	S F413	／
026	皿	S F413	志戸呂
027	丸碗	S F414-e	瀬戸・美濃
028	丸碗	S F414-e	瀬戸・美濃
029	丸碗	S F414 e	瀬戸・美濃
030	丸碗	S F414-e	瀬戸・美濃
031	片口	S F414	瀬戸・美濃
032	大皿	S F414-e	瀬戸・美濃
033	仏鉢器	S F414 e	瀬戸・美濃
034	小皿	S F414-e	志戸呂
035	香炉	S F414	瀬戸・美濃
036	擂鉢	S F414-e	瀬戸・美濃
037	丸碗	S F415	瀬戸・美濃
038	擂鉢	S F418	志戸呂
039	筒	S F420-c	志戸呂
040	中皿	S F423	肥前
041	丸碗	②南半	瀬戸・美濃
042	丸碗	③	瀬戸・美濃
043	小形碗	②～③南側排水溝	瀬戸・美濃

出土土器一覧表(7)

掲図No.	器種	遺構・グリッド	産地
044	碗	J 9②～③南半	信楽
045	丸碗	③まで	相馬
046	小皿	②南半	初山
047	小皿	②～③南半	初山
048	向付	②南半	志戸呂
049	小皿	②南半	瀬戸・美濃
050	中皿	②まで	瀬戸・美濃
051	小皿	②南半	瀬戸・美濃
052	中皿	南側排水溝東より	志戸呂
053	小皿	②～③南半	志戸呂
054	小皿	①上	瀬戸・美濃
055	香炉	J 12②～③南半	瀬戸・美濃
056	香炉	南側排水溝東より	志戸呂
057	燈明皿	南側排水溝東より	志戸呂
058	燈明皿	①北半	瀬戸・美濃
059	燈明皿	②南半	瀬戸・美濃
060	燈明皿	②北半	瀬戸・美濃
061	燈明皿	①北半	志戸呂
062	仏飯器	②南半	瀬戸・美濃
063	仏飯器	北側中央トレンチ①	志戸呂
064	徳利	南側排水溝	瀬戸・美濃
065	徳利	②	瀬戸・美濃
066	急須	②北半	常滑か
067	鉢チョク	J 11②～③南半	瀬戸・美濃
068	鉢チョク	②	瀬戸・美濃
069	壺	②南半	志戸呂
070	甕	②南半	瀬戸・美濃
071	擂鉢	西側排水溝	志戸呂
072	火鉢(手あぶり)	③まで	瀬戸・美濃
073	土瓶掛	②南半	瀬戸・美濃
074	カワラケ	②南側排水溝	／
075	カワラケ	②南側排水溝	／
076	カワラケ	②南側排水溝	／
077	丸碗	②南半	肥前
078	丸碗	②南半	肥前
079	丸碗	②南半	肥前
080	蓋付碗	北側中央トレンチ①	肥前
081	蓋付碗	②南半	瀬戸・美濃
082	丸碗	②～③南半	瀬戸・美濃
083	蓋付碗	③	瀬戸・美濃
084	筒	②南半	肥前
085	筒	②南半	肥前
086	筒	②南半	肥前
087	筒	②南半	瀬戸・美濃
088	筒	②南半	肥前
089	丸碗	③東端	瀬戸・美濃
090	丸碗	②南半	肥前
091	丸碗	②南半	瀬戸・美濃
092	丸碗	③	瀬戸・美濃
093	丸碗	②南半	瀬戸・美濃
094	丸碗	②南半	瀬戸・美濃
095	碗	北側中央トレンチ①	肥前
096	碗	③東端	瀬戸・美濃
097	丸碗	①南側	瀬戸・美濃
098	蓋付碗の蓋	①南側	肥前
099	蓋付碗の蓋	②北半	肥前
100	蓋付碗の蓋	②南半	瀬戸・美濃
101	蓋付碗の蓋	②南半	瀬戸・美濃
102	蓋付碗の蓋	③まで	瀬戸・美濃
103	小皿	③東端	肥前
104	中皿	②南半	肥前
105	中皿	②南半	肥前
106	小皿	③東端	肥前
107	中皿	J 9②～③	瀬戸・美濃
108	水滴	③東端	肥前
109	火入れ	②南半	肥前
110	神酒徳利	②南半	肥前
111	大鉢	②南半	肥前

掲図No.	器種	遺構・グリッド	産地
9区			
001	おろし皿	S D 903	瀬戸・美濃
002	甕	S D 904②	常滑
003	小皿	S D 907	瀬戸・美濃
004	小皿	S D 907	瀬戸・美濃
005	天目	S D 908	尾林か
006	小形壺	S D 908	常滑
007	土鍋	S D 908	／
008	碗	S D 908	宋
009	碗	S D 901	明
010	カワラケ	S D 908	／
011	カワラケ	S D 908	／
012	小皿	S D 909	瀬戸・美濃
013	天目	S X 905	志戸呂
014	天目	S X 905	瀬戸・美濃
015	カワラケ	S X 903	／
016	カワラケ	S X 905	／
017	カワラケ	S X 905	／
018	カワラケ	S F 901	／
019	小皿	S P 915	初山
020	カワラケ	S P 957	／
021	壺	ピット6	常滑
022	壺	ピット5	常滑
023	水滴	東側一段下げ	志戸呂
024	丸碗	①	瀬戸・美濃
025	天目	①東側集石	志戸呂
026	天目	①	不明
027	天目	東側一段下げ	志戸呂
028	天目	①東側一段下げ	志戸呂
029	丸碗	①東側	瀬戸・美濃
030	小皿	西側際部中	瀬戸・美濃
031	小皿	①南側	志戸呂
032	小皿	①東側集石	志戸呂
033	小皿	東側一段下げ	初山
034	小皿	東側一段下げ	初山
035	小皿	①東側一段下げ	瀬戸・美濃
036	小皿	東側一段下げ	瀬戸・美濃
037	小皿	①西側	瀬戸・美濃
038	小皿	東側一段下げ	瀬戸・美濃
039	小皿	東側一段下げ	志戸呂
040	水滴(スズメ)	東側一段下げ	志戸呂
041	徳利	①	志戸呂
042	丸碗	①	肥前
043	丸碗	①まで	瀬戸・美濃
044	丸碗	①	肥前
045	丸碗	①まで	瀬戸・美濃
046	丸碗	①	瀬戸・美濃
047	丸碗	①まで	瀬戸・美濃
048	丸碗	①	肥前
049	蓋付碗の蓋	①まで	瀬戸・美濃
050	蓋付碗の蓋	①まで	瀬戸・美濃
051	碗	①	瀬戸・美濃
052	碗	①まで	瀬戸・美濃
053	中皿	①西側	肥前
054	中皿	第一トレンチ北側	肥前
055	中皿	①	肥前
056	小皿	①南側集石部	肥前
057	向付の鉢	①	肥前
058	神酒徳利	①	肥前
059	神酒徳利	①	肥前
060	徳利	第一トレンチ北側	肥前
061	小皿	①まで	岡安窯系
062上	火消し壺の蓋	①	／
062下	火消し壺	第一トレンチ北側	／
063	羽釜	①	／
064	土鍋	①	／
065	土鍋	①まで	／
066	土鍋	①	／

出土土器一覧表(8)

挿図№	器　種	遺構・グリッド	産　地
067	小皿	東側一段下げ	瀬戸・美濃
068	小皿	東側一段下げ	瀬戸・美濃
069	小皿	東側一段下げ	明
070	小皿	①	瀬戸・美濃
071	小皿	②	瀬戸・美濃
072	小皿	S D908	瀬戸・美濃
073	小皿	東側部分排水溝	瀬戸・美濃
074	小皿	①まで	瀬戸・美濃
075	小皿	第一トレンチ北側	瀬戸・美濃
076	小皿	①まで	瀬戸・美濃
077	片口	①	志戸呂
078	壺の蓋し蓋	①	瀬戸・美濃
079	香炉	①	志戸呂
080	擂り	①まで	九州
081	短頸壺	①東側部分	志戸呂
082	カワラケ	第一トレンチ北側	／
083	擂鉢	①西側	志戸呂
084	擂鉢	①	志戸呂
085	擂鉢	①内側	志戸呂
12区			
001	小皿	S D1203	瀬戸・美濃
002	天目	S D1206	瀬戸・美濃
003	瓶子	S D1206	瀬戸・美濃
004	小形壺	S D1206	常滑
005	小皿	S D1206	瀬戸・美濃
006	カワラケ	S D1206	／
007	カワラケ	S D1206	／
008	カワラケ	S D1206	／
009	カワラケ	S D1206	／
010	カワラケ	S D1206	／
011	カワラケ	S D1206	／
012	カワラケ	S D1206	／
013	カワラケ	S D1206	／
014	カワラケ	S D1206	／
015	カワラケ	S D1206	／
016	カワラケ	S D1206	／
017	カワラケ	S D1206	／
018	カワラケ	S D1206	／
019	カワラケ	S D1206	／
020	カワラケ	S D1206	／
021	壺	S D1206	志戸呂
022	甕	S D1206	常滑
023	甕	S D1206	常滑
024	壺	S D1206	常滑
025	擂鉢	S D1206	志戸呂
026	羽釜	S D1206	／
027	鉢	S D1206	常滑
028	鉢	S D1206	常滑
029	碗	S D1206	明
030	鉢	S F1207	志戸呂
031	土鍋	S D1207	／
032	カワラケ	S D1207	／
033	カワラケ	S D1207	／
034	カワラケ	S D1207	／
035	小皿	S F1207	瀬戸・美濃
036	天目	S F1207	瀬戸・美濃
037	碗	S F1207	肥後小代
038	火入れ	S F1207	瀬戸・美濃
039	合子蓋	S F1207	志戸呂
040	小皿	S F1204	瀬戸・美濃
041	カワラケ	S F1208	／
042	壺	S F1207	常滑
043	壺	S F1207	志戸呂三ツ沢
044	瓶子	S F1207	志戸呂か
045	鉢	S F1207	常滑
046	土鍋	S F1207	／
047	壺	S X1203	常滑
048	擂鉢	S X1207	瀬戸・美濃

挿図№	器　種	遺構・グリッド	産　地
049	擂鉢	S P1253	不明
050	カワラケ	S X1202	／
051	カワラケ	S P12130	／
052	カワラケ	S P1267	／
053	カワラケ	S P12130	／
054	カワラケ	S P12130	／
055	カワラケ	S P12130	／
056	カワラケ	S P12130	／
057	中皿	S P12136	瀬戸・美濃
058	小皿	S P12133	瀬戸・美濃
059	土鍋	S P1254	／
060	土鍋	S P1227・S P1228	／
061	小鉢	S P1209	瀬戸・美濃
062	天目	①	瀬戸・美濃
063	大日	①	肥前
064	小皿	①	瀬戸・美濃
065	小皿	①	瀬戸・美濃
066	小皿	①	初山
067	小皿	東壁①	初山
068	小皿	①	瀬戸・美濃
069	小皿	①	瀬戸・美濃
070	小皿	①	瀬戸・美濃
071	小皿	①	瀬戸・美濃
072	小皿	①	瀬戸・美濃
073	小皿	①	瀬戸・美濃
074	坏	①	志戸呂か
075	小鉢	①	志戸呂
076	チョク	①	志戸呂
077	甕	①	常滑
078	甕	①	常滑
079	甕	②	常滑
080	甕	①	常滑
081	壺	②	常滑
082	甕	②	常滑
083	甕	②	常滑
084	皿	①	明
085	鉢	①	志戸呂
086	鉢	①	志戸呂
087	鉢	②	常滑
088	鉢	②	常滑
089	擂鉢	①	瀬戸・美濃
090	甕	①南側排水溝	常滑
091	水壺	①南側排水溝・S D906	志戸呂
092	土釜の把手	①	／
093	土鍋	①	／
094	鉢	①南西中央部・S D903	常滑
095	鉢	①	常滑
10区			
001	カワラケ	S D10C01	／
002	丸碗	S D10B05	志戸呂
003	中皿	S D10B05	瀬戸・美濃
004	擂鉢	S D10B05	志戸呂
005	擂鉢	S D10B05	志戸呂
006	擂鉢	S D10B05	志戸呂
007	カワラケ	S D10B05	／
008	小皿	S D10B05	志戸呂
009	カワラケ	S D10B05	／
010	土鍋	S D10B05	／
011	小皿	S P10C07	瀬戸・美濃
012	小皿	S D10B10	瀬戸・美濃
013	中皿	S D10B10	瀬戸・美濃
014	カワラケ	S D10B10	／
015	擂鉢	S D10B10	志戸呂
016	軒丸瓦	S D10B10	／
017	軒平瓦	S D10B10	／
018	丸碗	S F10C01	志戸呂
019	丸碗	S F10B01	瀬戸・美濃
020	丸碗	S F10B01	瀬戸・美濃

出土土器一覧表(9)

挿図No.	器種	遺構・グリッド	産地
021	丸碗	SF10B01	瀬戸・美濃
022	丸碗	SF10B01	瀬戸・美濃
023	丸碗	SF10B01	瀬戸・美濃
024	小皿	SF10B02	瀬戸・美濃
025	中皿	SF10B01	肥前
026	小形壺	SF10B01	志戸呂
027	仏餉器	SF10B01	瀬戸・美濃
028	カワラケ	SF10B01	／
029	カワラケ	SF10B01	／
030	丸碗	SF10B02	瀬戸・美濃
031	天目か丸碗	SF10B03	不明
032	天目	SF10B03	志戸呂
033	チョク	SF10B03	志戸呂
034	チョク	SF10B03	志戸呂
035	チョク	SF10B03	志戸呂
036	小皿	SF10B03	志戸呂
037	小皿	SF10B03	瀬戸・美濃
038	水注	SF10B03	志戸呂
039	擂利	SF10B03	志戸呂
040	カワラケ	SF10B03	／
041	カワラケ	SF10B03	／
042	カワラケ	SF10B03	／
043	カワラケ	SF10B03	／
044	碗	SF10B04	瀬戸・美濃
045	桃形の水滴か壺	SF10B04	志戸呂
046	カワラケ	SF10B04	／
047	カワラケ	SF10B04	／
048	土瓶の蓋	SF10B05	瀬戸・美濃
049	香炉	SF10C01	志戸呂
050	香炉	SF10C01	瀬戸・美濃
051	香炉	SF10C01	志戸呂
052	油徳利	SF10C09	瀬戸・美濃
053	カワラケ	SF10C02	／
054	カワラケ	SF10C10	／
055	片口	SF10C16	志戸呂
056	鉢か小形壺	SF10C16	九州
057	油皿	SX10B01	瀬戸・美濃
058	燈明皿	SX10B01	瀬戸・美濃
059	小皿	SX10B01	志戸呂
060	チョク	SX10B01	志戸呂
061	壺	SX10B01	常滑
062	徳利	SX10B01	志戸呂
063	擂鉢	SX10B01	瀬戸・美濃
064	焙烙壺	SX10B01	不明
065	蓋付碗の蓋	SX10B01	肥前
066	蓋付碗の蓋	SD10B01	瀬戸・美濃
067	丸碗	SX10B01	瀬戸・美濃
068	筒	SX10B01	瀬戸・美濃
069	軒瓦	SX10B01	／
070	天目	SX10B02	志戸呂
071	中皿	SX10B02	志戸呂
072	中皿	SX10B02	志戸呂
073	壺か甕	SX10B02	志戸呂
074	水指	SX10B01	志戸呂
075	擂鉢	SX10B02	志戸呂
076	中皿	SX10B02	瀬戸・美濃
077	中皿	SX10B02	志戸呂
078	小鉢	SX10B03	瀬戸・美濃
079	ねり鉢	SX10B06	瀬戸・美濃
080	土瓶蓋	SX10B06	信楽
081	銅チョク	SX10B06	瀬戸・美濃
082	小皿	SX10B06	肥前
083	丸碗	SX10B06	瀬戸・美濃
084	蓋付碗の蓋	SX10B06	瀬戸・美濃
085	軒丸	SX10B01	／
086	擂鉢	SP10B25	志戸呂
087	カワラケ	SP10C01	／
088	丸碗	表土から①	瀬戸・美濃
089	丸碗	表土から①	瀬戸・美濃
090	碗	表土から①	瀬戸・美濃
091	小形碗	表土から①	志戸呂
092	小形碗	①南側	志戸呂
093	擂鉢	SX10B02	瀬戸・美濃
094	擂鉢	①まで	志戸呂
095	擂鉢	①	瀬戸・美濃
096	徳利	表土から①	志戸呂
097	土鍋	①	／
098	丸碗	表土から①	肥前
099	碗	表土から①	肥前
100	丸碗	SF10C09	肥前
101	碗	SF10C11	瀬戸・美濃
102	蓋付碗の蓋	①	肥前
103	蓋付碗の蓋	表土から①	瀬戸・美濃
104	チョクか小鉢	表土から①	瀬戸・美濃
105	神酒徳利	表土から①	肥前
106	中皿	SF10C09	肥前
107	小皿	表土から①	肥前
108	碗	SP10B19	宋

第2節　文字資料

1．木札・曲物

1は直径12.2cmを測る曲物の底で桜皮で1ヶ所とじている。墨書の位置は上蓋部か底面であろう。SF10B02から出土した。18世紀後半の陶磁器が出土した。廃棄遺物と考えられる。

納　豆

納豆

常國寺

木札2はSF10C09から出土した。長さ15cm、幅3.8cm、厚さ4㎜の木札である。18世紀中頃から19世紀初頭の陶磁器とともに出土した。下駄や漆器椀など生活遺物とともに廃棄されたと考えられる。

水油三口詰

×鳥水油三口詰

×鳥は商標であろう。水油は頭髪用の椿油や燈火用菜種油の事である。三口を単位として詰めたということで、付札であろう。

3は10区1面から出土した。長さ13.1cm、幅4.7cm、厚さ3.5㎜を測る。下端は欠損している。

新川聿

新は新であろうか。屋号か品物名の書かれた付札であろう。聿は漢数字の五を符号としたものであろう。新川とすれば越中の新川木綿であろうか。

2．墨書土器

墨書土器4はSD601から出土した。伴出した陶器やカワラケ小皿の形態から16世紀代と判断される。底面に墨書が書かれている。下半は消えている。人名の略か頭文字であろうか。

源

墨書土器5はSD602から出土した。小型で器高の低いタイプである。仮名のくずし字と考えられるが、判読不能である。墨書は底部に書かれている。16世紀代であろう。

□

墨書土器6は6区出土である。墨書は底面に書かれている。細片で判読できない。墨書土器14・15は漢数字の一を底部に書いている。14は1区K－7グリッド第3面ピットから出土した。時期については15が17世紀～18世紀前半と考えられる。19についても一である可能性が大きい。

墨書土器16・17・22は漢数字の二が底部に書かれている。いずれも1区から出土した。17については16世紀代から17世紀前半と考えられる。

墨書土器20は底面に墨書が書かれている。

□□（衛カ）

人名の略記であろう。上の判読不能部分の部首は儿（あにのあし）を構成する文字であろうか。1区出土。

21の墨書土器は1区I－6グリッド第3面から出土した。判読不能であるが、墨書は底面に書かれている。

□

墨書土器23は1区J－7グリッドで体部下半に書かれている。判読不能であるが仮名の

ケの可能性もある。

□

墨書土器24は1区H－8グリッドから出土した。人名であろうか。墨書は底面に書かれている。

いヨ

墨書土器25は1区I－7グリッドから出土した。墨書は底面に書かれている。

□三□（不カ）□

墨書土器26は1区J－6グリッドから出土した。墨書は底面に書かれている。判読不能である。一字書きであろうか。

□

墨書土器27は1区I－7グリッド2面から出土した。カワラケ皿は18世紀後半以降のタイプである。墨書は底面に書かれている。あるいは記号かと考えられるが判読不能である。

□

墨書土器28は体部下半に書かれている。カワラケを倒位にして書いている。1区I－6グリッドから出土した。2行書きと思われるが破片のため字数も不明である。

定□

新□　　（倒位）

墨書土器29は1区L－6グリッドから出土した。体部上位に倒位に書かれている。名栗は北原川の地名である。

名くり

墨書土器30は1区K－7グリッドから出土した。カワラケの特徴は18世紀後半以降のタイプである。体部に書かれている。判読不能である。

□

墨書土器31は1区I－7グリッドから出土した。体部に2行書き、倒位で書かれている。カワラケ小皿の特徴は17世紀後半から18世紀前半である。

下のおば

領家おば

墨書土器32は1区M－4グリッドから出土した。墨書は底面に書かれている。人名の略記であろうか。カワラケ小皿は17世紀から18世紀前半と考えられる。

小兄久

墨書土器33は1区J－7グリッドから出土した。墨書は体部に横位で書かれている。欠字が多く意味不明である。

□のセ□（ビカ）

墨書土器34は1区出土であるほか、出土位置不明である。体部に倒位で書かれている。欠字が多いが2行書きで1部は人名であろう。

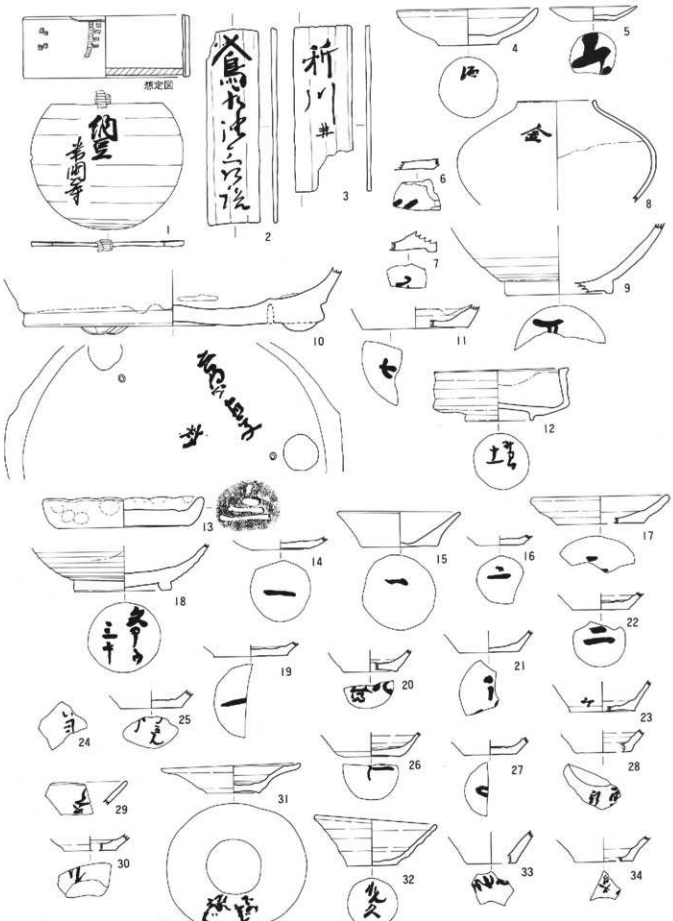
又左

□

墨書土器35は1区I－7グリッド2面から出土した。墨書は底面に書かれている。

永□（名カ）

墨書土器36は1区I－7グリッド2面から出土した。カワラケ小皿は17世紀から18世紀前半代であろう。墨書はなんらかの記号であろうか。



第80図　出土遺物　文字資料　その1　6・1・10区

△

墨書土器37は１区Ｈ－８グリッドから出土した。墨痕のみで判読不能である。

□

墨書土器40は３区Ｊ－９グリッドから出土した。墨書は底面に書かれている。カワラケ小皿は18世紀後半以降であろう。

□□□□

墨書土器45は12区第２面から出土した。カワラケ皿は16世紀後半代から17世紀前半と考えられる。墨書は底面に書かれている。萼は異体字であろう。

妙萼

墨書土器47は９区試掘坑から出土した。カワラケ小皿は17世紀から18世紀前半と考えられる。墨書は底面に書かれている。

一

墨書土器46はＳＤ1206から出土した。カワラケ小皿は16世紀前半から後半代である。墨書は底面に書かれている。欠けているので文意不明であるが人名であろうか。

□秀

墨書土器48はＳＤ1206から出土した。カワラケ小皿は15世紀末から16世紀前半であろう。墨書は底面に書かれている。人名であろう。

通春

墨書土器49は12区第２面から出土した。カワラケ小皿は16世紀代であろう。人名であろうと考えられるが、欠字のため文意不明である。

源□

墨書土器50はＳＤ1206から出土した。墨書は底面に書かれている。欠字のため文意不明である。

□供

墨書土器51は12区１面から出土した。墨書は底面に書かれている。欠字のため文意不明である。

一□

墨書土器52は12区第１トレンチから出土した。底面に書かれている。破片のため判読不能である。

□

墨書土器58はＳＦ10Ｂ03から出土した。手捏成形のカワラケ皿である。ＳＦ10Ｂ03は17世紀代の遺構と考えられるが、カワラケ皿はそれより古く混入であろうか。墨書は底面に書かれている。記号であろう。

○

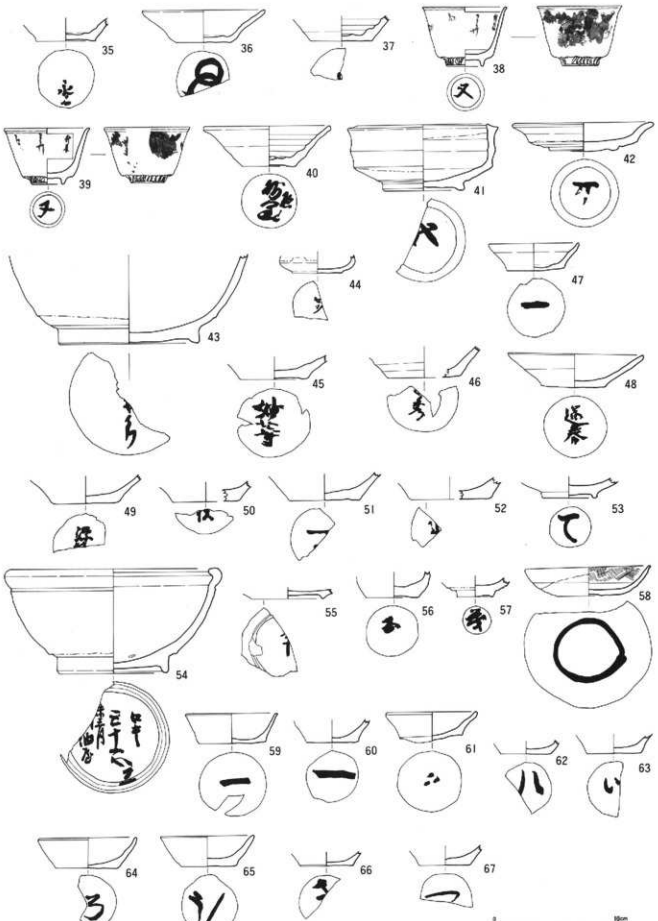
墨書土器59はＳＦ10Ｃ10から出土した。カワラケ小皿は18世紀代以降であろう。墨書は底面に書かれている。

一

墨書土器60はＳＦ10Ｃ09から出土した。カワラケは18世紀から19世紀以降であろう。墨書は底面に書かれている。

一

墨書土器61はＳＦ10Ｃ10から出土した。カワラケ小皿は18世紀から幕末と考えられる。



第81図　出土遺物　文字資料　その2　1・12・10区

墨書は底面に書かれている。記号であろう。

∴

墨書土器62は10区１面から出土した。墨書は底面に書かれている。

八

墨書土器63はＳＦ10Ｃ09から出土した。18世紀後半から19世紀初頭の陶磁器に伴っている。墨書は底面に書かれている。

い

墨書土器64・65は10区１面から出土した。カワラケ小皿は18世紀後半以降であろう。墨書は底部に書かれている。

墨書土器64

ろ

墨書土器65

シ

墨書土器66・73はＳＸ10Ｂ06から出土した。カワラケ小皿は18世紀後半以降であろう。いずれも破片のため文意・字数は不明である。なお73は裏表に墨書が書かれている。

墨書土器66

□（さカ）

墨書土器73

□

□

墨書土器67はＳＸ10Ｂ01から出土した。カワラケ小皿は18世紀後半以降であろう。墨書は底面に書かれている。破片のための文字・字数ともに不明である。

□（つカ）

墨書土器72はＳＤ10Ｂ05から出土した。カワラケは18世紀以降であろう。伴出した陶磁器は２時期であるが、後者の18世紀から19世紀代と可能性が強い。墨書は底面に書かれているが、破片のため判読不能である。１区出土。

□

墨書土器74はＳＦ10Ｂ02から出土した。墨書は薄く口径の小さいカワラケ小皿の底面に書かれている。破片のため判読不能である。伴出した陶磁器は18世紀後半である。

□

墨書土器68・69・70・71は10区１面から出土した。いずれも墨書は底面に書かれている。カワラケ小皿は18世紀後半以降であろう。71は記号であろう。あるいは合点であろうか。

墨書土器68

□

墨書土器69

亥

墨書土器70

大

墨書土器71

O

３．墨書陶磁器

墨書陶器７は小型の片口の底面に書かれているが、破片で判読不能である。１区出土。

□

８は幕末から明治期の土瓶の釉薬上に白玉粉（ガラス継ぎの原材料）と考えられる材質で書いている。１区出土。

白玉粉で書く

金

墨書陶器９は瀬戸・美濃産の片口鉢の高台内に書かれている。判読不能で、字数も明らかではない。記号であろうか。１区出土。

□

墨書陶器10は、瀬戸・美濃産の火鉢の底面に書かれている。火鉢の購入価格であろう。火鉢は幕末と考えられる。６区出土。

二百四拾二文

□

墨書陶器11は徳利底部に書かれている。破片のため字数不明。さらに文意も不明である。１区出土。

□七

墨書陶器12は香炉高台内に書かれている。香炉は志戸呂焼第Ⅵ期の製品である。１区出土。

みアツ

十一

墨書陶器18は瀬戸・美濃産の片口の高台内に書かれている。片口は18世紀後半であろう。１区出土。

文アウ

三十

38・39は墨書磁器の煎茶碗の高台内に書かれている。同じ文字で所有者の略称であろう。明治前期と考えられる。１区出土。

又

墨書陶器41は香炉の高台内に書かれている。字数・文意不明。

□

墨書陶器42は瀬戸・美濃産の折縁皿の高台内に書かれている。記号であろうか。大窯後期の製品である。９区出土。

兀

墨書陶器43は瀬戸・美濃産の片口の高台内に書かれている。18世紀後半から19世紀前半の製品であろう。

□ヤイ□（クか）

墨書陶器44は茶入と考えられる底面に書かれている。製品は志戸呂焼であるが時期は判断できない。人名であろう。９区出土。

セツ

墨書陶器53は瀬戸・美濃産で京焼風の小形丸碗？の高台内に書かれている。18世紀代であろう。ＳＦ10Ｂ01出土。

て

墨書陶器54は瀬戸・美濃産の片口の高台に書かれている。製品は19世紀前半であろう。

4行書きされている。購入月と持ち主原川油屋を書いたと考えられる。ＳＸ10Ｂ01出土。

口キ

油　屋　三十六三

□末三月

□川油屋

墨書陶器55は瀬戸・美濃産で灰釉のかかった削り込み高台の製品の高台内に書かれている。小破片のため時期は判断できないが18世紀代であろうか。破片のため字数・文意ともに不明である。ＳＦ10Ｂ05出土。

□

墨書陶器56は瀬戸・美濃産で飴釉のかかった器種不明の製品の底面に書かれている。ＳＦ10Ｂ01出土。

□（五カ）

墨書陶器57は瀬戸・美濃製品で、長石釉のかかった小形碗であろう。墨書は削り出し高台の内面に書かれている。人名の略であろうか。10区出土。

茂

4．ヘラ書き

手捏成形の瓦質皿13の見込みに書かれている。１区出土。

三

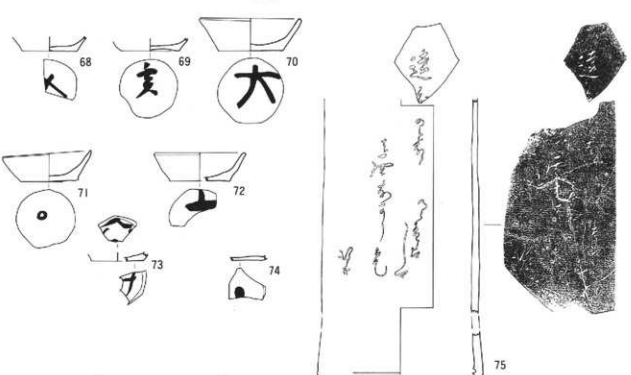
和歌のヘラ書き　75は円筒形を呈し、内面に多量のススが付着しており冷炉と考えたい。体部に和歌と歌人の名が書かれている。産地は不明であるが、志戸呂焼の可能性もある。

遠□□のとほく□水之音に

して

□者雲なかりけり

行□



第82図　出土遺物　文字資料　その３　１・10区

文字資料は書かれた材質によって木札・曲物の木製品、カワラケなど狭義土器と陶磁器に大別した。これら材質の違いを考慮に入れながら墨書の内容を検討してみたい。

曲物に書かれた墨書の「納豆」とは遠江地方では浜納豆や大福寺納豆に代表される塩納豆のことと思われる。この種の納豆は、古くはもっぱら寺院で製造されたといわれ、曲物に入れられた。「常國寺」とは製造場所の寺院であろう。

油屋は三浦家

木札2について述べてみたい。出土した10区は明治以後、東海道をはさんだ三浦家の所有であった。この三浦家（初代は元禄期に死亡）は代々藤兵衛を称する家で、油屋を営んでいた。文政12（1829）年には持高146石余の掛川藩御用達であった。原川では「1に団兵衛、2に藤兵衛」といわれる在豪商人であり、『東海道人物誌』（享和3年刊）に「古銭石品　桃亭　三千丸」の号で三浦藤十郎が記されている(1)。おそらく藤を通字としており、同家の人物と推定される。文政期の藤兵衛も俳号武陵の号を持っており、「水草にしら根はる夜か啼くタニシ」の句を句集『花のさち』の中に残す文人でもあった(2)。「油屋」と書かれた墨書陶器54とともに油の営業に関する付札が出土したことにより、すでに10区の屋敷地が、遅くとも19世紀初頭から前半には三浦家の抱地となっていたことが判明しよう。

三浦藤兵衛

一方カワラケ皿に書かれた墨書は1字書き漢数字もあって文意不明の例が多い。しかしながら、名前の頭文字、略称、近親関係を示す例がある。

1．人名

源（墨書土器4）・いヨ（墨書土器24）・下のおば　領家おば（墨書土器31）・小兄久（墨書土器32）・又左（墨書土器34）・妙尊（墨書土器45）・口秀（墨書土器46）・通春（墨書土器48）

2．漢数字

一（墨書土器14・15・47・59・60・19？）・二（墨書土器16・17・22）・八（墨書土器62）

3．漢字一字書き

亥（墨書土器69）・大（墨書土器70）

4．地名・所在地

名くり（墨書土器29）

墨書土器33についても「口のセ口（ど）」と読むことができるならば、この範疇であろう。「せど」とは家の裏という方言でもあるからである。これら地名は墨書土器31のように、遠州地方では縁戚関係にある場合、地名はその地にある親戚の呼称を示すことが多く、この場合も名栗の親戚という意味を持つかもしれない。

5．記号・符号

△（墨書土器36）・○（墨書土器58・71）・　∴（墨書土器61）

6．かな一字書き

い（墨書土器63）・ろ（墨書土器64）・シ（墨書土器65）

カワラケ皿は、口径・器高によって大皿・中皿・小皿とに分類できる。しかしながら、これらの規格は儀式用に使用されたと考えられ、原川遺跡では小皿が圧倒的に多い。

また墨書の書かれたカワラケは燈明皿への使用例はほとんど認められなかった。またカワラケ皿は9区の土坑墓で認められたように墓への副葬品、供養品などもある。

しかしながら、1区で認められたように東海道に沿った家屋の周辺に多く出土した。こうしたカワラケは燈明皿を除いて長期に使用される例は少なく、使用後、あまり時を置か

ず廃棄されることが多いためと考えられる。

おそらく門口の盛塩や屋敷神のお供えにも使用されたのであろう。墨書分類で漢数字と分類したタイプ、記号、符号としたタイプなど門口の場所や屋敷神を祭る場所を表したものと推定したい。

他方、一般的には盆供養にこれらカワラケ皿は使用される。

墨書分類に人名としたものは、その感が強い。おそらく縁戚関係者でなければ使用しないであろう。「下のおば領家おば」や人名の略称や頭文字はなんらかの身近な存在を想定させるものと考え、類例を持ちたい。また墨書土器45は女性の戒名であろう。

墨書陶磁器

所有者の略称と考えられる例がある。

金（墨書陶器８）・□七（墨書陶器11）・又（墨書磁器38・39）・セツ（墨書陶器44）・茂（墨書陶器57）

墨書陶器54は店で使用されるためか購入月と店の名が書かれている。

墨書陶器10のように購入価格が書かれた例もある。通常、購入月日・持主を記入する場合、収納箱に記す場合が多いが、この火鉢のように大形製品の場合、本例のように直接書いたものであろう。

さて、難物の墨書例がある。仮名，カタカナ，数字の組合せで墨書陶器12、墨書陶器18、墨書陶器54の例である。しかしながら墨書陶器54のように持主の略ではない。墨書陶器12の香炉は神仏器ばかりではなく、煙管盆の火入れに転用してもよさそうである。このように考えれば、片口など商家では店での常用品ともいえる。おそらくハレの席で使う漆器や陶磁器の組物は箱に記されることが多く、器物に直接墨書はしないのであろうと考えられる。したがって、器物を裸で使用するための覚えであろう。

したがって大工が使う番付に類似した使い方を想定したい。かなとカタカナさらに数字の組合わせによって収納場所の棚何段目を表わすという意味ではないだろうか。

第3節　石　製　品

1．石臼

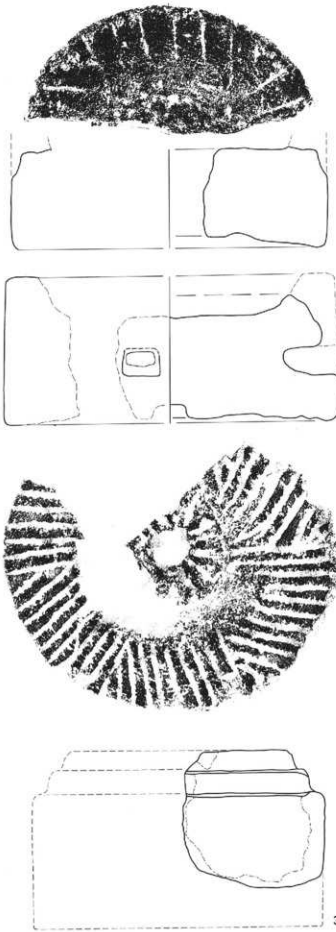
原川遺跡からは４点の石臼が出土した。うち１点は１区採集、他の１点は12区ＳＤ1206出土で伴出した陶器片から戦国時代後期に属すると判断された。それ以外の２点については出土地点が不明確であって時期の判断は困難である。

いずれも破片であって、割れ口が直線的であることから廃棄にともなって意図的に割られた可能性が高い。石臼１は下臼で荒棒孔より外側の破片であろう。推定できる直径は22～23cm、高さ７～８cmの小形の製品で、大きさや目からすれば粉挽き臼と考えられる。溝は浅く、６分画（６分割画き）である。肉眼観察では火崩岩と推定される。１区採集。石臼２は上臼で全体の半分ほどが残っていた。ＳＤ1206出土。芯棒受けと供給口、挽き手穴も残っている。溝は明瞭で８分画と考えられ、三輪茂雄氏の分類では切線主溝型である[3]。直径26.7cm、高さ12cmと推定され、粉挽き臼であろう。採集品にも同じタイプが１点ある。肉眼観察では安山岩と推定される。

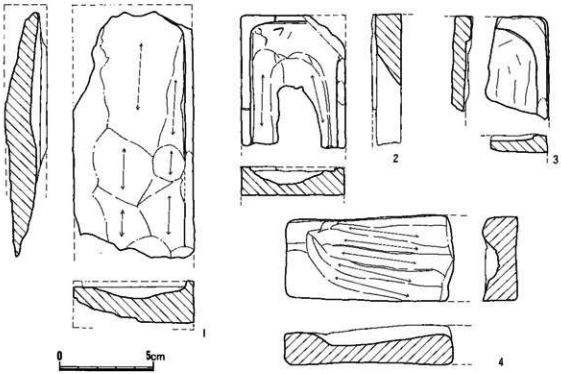
2．宝篋院塔

戦国期の墓塔

ＳＤ406から出土した。砂岩で塔身に接する部分は２段の造り出しになっている。格狭間は認められない。これらの特徴から戦国時代と考えられる。なおこの時期中遠地域では墓



第83図　出土遺物　石製品　その1　石臼・石塔



第84図　出土遺物　石製品　その2　硯・砥石

や供養塔としては一石五輪塔が多く、宝篋院塔は例が少ない。この点からすれば村落内でも有力者の墓石として立てられていた可能性は大きく、原川遺跡周辺の地侍クラスの墓石と考えたい。溝に廃棄されていたことから中世末から近世に無縁となった墓を改葬することなく、廃棄したものと推定される。

3．硯

いずれも長方硯の破片である。大きさからすれば中型と小型品であろう。破損部分を砥面として使用しており、墨汁をためる機能が終った後も砥石として転用され、その後廃棄されたと考えられる。いずれも粘板岩製である。硯1は1区1面L－4グリッドから出土しているため江戸後期か幕末と考えたい。硯2は4区排水溝から出土したもので、江戸時代と考えられるが、細かい年代は不明である。硯3はSD10B05から出土したものであるが、遺構が重複しているため江戸時代の硯としか判断できない。

砥石に転用

4．砥石

4の砥石は3区J－9グリッドから出土した。時期は不明である。砥面からすれば農具や刃物に使われたものではなく、別の研磨に使用されたと考えられる。

第4節　木　製　品

木製品は大別して漆器、刳り物の容器類や下駄が多く、そのほか柄杓、自在鉤、カセ車、何等かの部材と考えられる用途不明品などが出土しているが数少ない。容器のうち、漆器資料については製作技法についての別掲の北野論文にゆずるとして、本節では、これら木製品を概観し、その出土状況から年代を考えることを主旨としたい。

1．容器類

1の椀は内外面赤漆塗りである。高台は細く腰部が張って面取りしている。4区南半部出土。

2の椀は高台が低く赤漆を塗っている。体部に窠輪に唐花？の紋様を入れる。1区J－7グリッドから出土した。

3は細く低い高台を持つ。内外面とも赤漆塗りである。4区第2面までの掘り下げ過程で出土した。

4の椀は内面黒漆塗り、外面赤漆塗りである。SF413出土で、伴出した陶磁器から19世紀前半から幕末と考えられる。

5の椀は内面赤漆塗り、外面黒漆塗りである。高台は低く細い。4区南半部出土である。なお底面に赤漆で○の記号を描く。

6の椀は内外面とも黒漆塗りである。高台部は低く細い。4区南半部出土である。

7の椀は内外面とも黒漆塗りで底面に赤漆で三の漢数字を入れる。腰部が張った形態を呈する。9区1面出土。

8の椀は汁椀形式で口径が小さく、器高は高い。体部上位に尖線が巡る。内外面とも黒漆塗りである。9区1面出土。

9の椀は外面黒漆、内面赤漆塗りである。体部二方に二重輪で橘紋様を描く。SD1206出土で16世紀代であろう。

10の椀は高高台で黒漆地に赤漆で水辺紋様を描く。高台内は#の記号（倉の屋号か）を記している。12区1面出土。

11の椀は外面黒漆、内面赤漆塗りである。体部三方に太輪で赤漆で抱きオモダカ紋様を描いている。高台内に「角右二門」（角右衛門か）と赤漆で描いている。10区1面出土。

12の椀は外面黒漆、内面赤漆塗りである。高台脇は腰を持つ形態である。高台内に赤漆でへと記号（屋号か）が記されている。SF10B02出土。

13の椀は外面黒漆、内面赤漆塗りで腰部は丸みを持つ。高台は輪高台である。15・16は内外面とも赤漆塗りである。SF10B02出土で、伴出した陶磁器から18世紀後半と考えられる。

14の椀は内外面とも赤漆塗りである。高台内を厚く木取りし、さらに低い高台を削り出している。SF10B01出土で、伴出した陶磁器から18世紀代と考えられる。

17の椀は外面黒漆、内面赤漆塗りである。体部に太輪で抱きオモダカ紋様を描く周辺には梅花紋を巡らしている。紋様は金粉で描かれたと思われ、蒔絵技法で仕上げられている。SF10C09出土で18世紀中頃から19世紀初頭の陶磁器が伴出している。紋様は11の椀と同じ意匠である。この抱きオモダカ紋は三浦家の家紋であると指摘を受けた[4]。

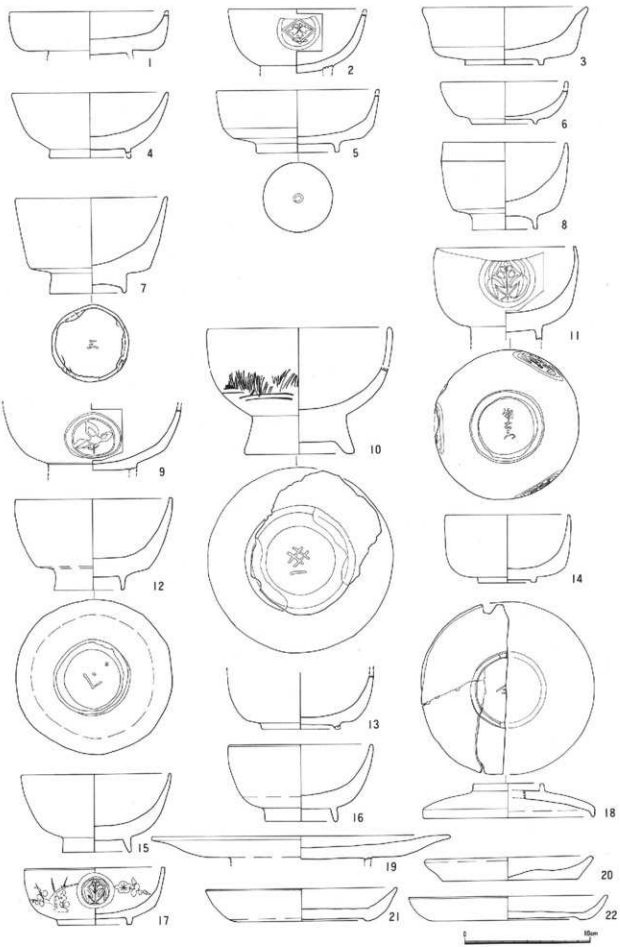
18の蓋は内外面ともに黒漆を塗っている。天井部内面に赤漆で𠆢（仝か）の記号（屋号か）を描いている。この屋号は石川屋と同じである[5]。4区出土。

19の皿は体部内側面は黒漆、高台内は赤漆を塗っている。体部には赤漆で線描による紋様が描かれた形跡が残っている。

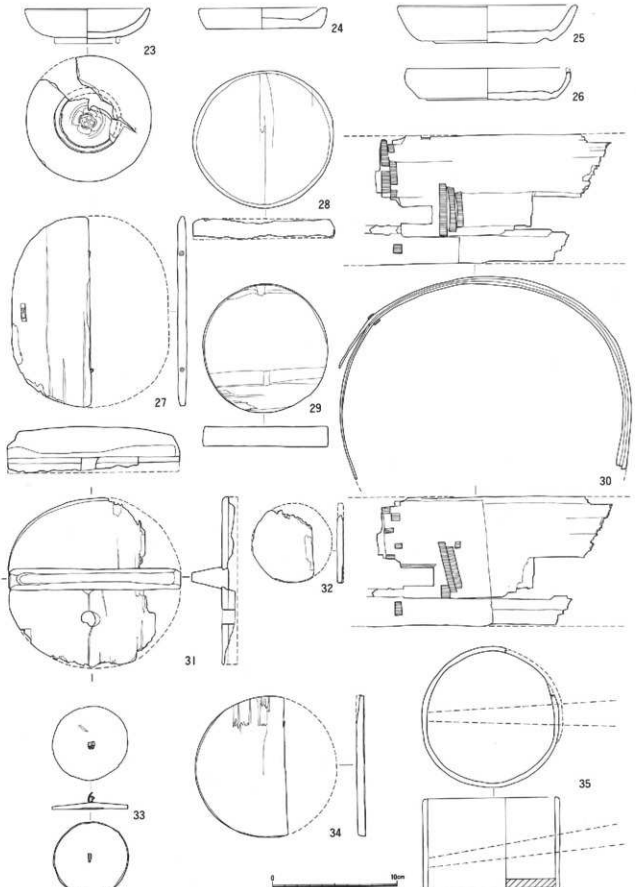
20の皿は朝り物で、4区SP426から出土した。伴出した土器、陶磁器は認められず時期不明である。

21の皿は口径15.25㎝を測り、中皿の範疇であろう。体部内面のみ黒漆塗りで、底部、体部外面ともに赤漆塗りである。高台は削り込んで碁笥底としている。10区表土から1面の掘り下げ過程で出土したことから江戸後期から幕末と推定されよう。

22の皿は中皿で、漆塗りの部所、形態は21の皿と同じタイプである。SF10B02から出土し、18世紀後半の陶磁器が伴出している。



第85図　出土遺物　木製品　その1　6・1・4・12・10区



第86図　出土遺物　木製品　その2　1・9・12・10区

23の椀は黒漆塗りで、高台内に赤漆で大輪と窠輪を巡らし、菱紋を描く。1区1面出土。

24は刳り物の小皿で、底部を厚く造っている。SE102出土で16世紀初頭から前半の天目茶碗が伴出している。

25は刳り物の小皿で、底部の脇に削りをいれ体部と底部の境界としている。SF10C11から出土した。幕末と考えられる。

26は25と同様に体部と底部の境界に一条の境界をいれ、底部との境界としている。SX10B05から出土した。幕末と考えられる。

漆器、刳り物について、伴出した遺物から年代の判明する資料は少なかった。

その中で12区1面から出土した10の高高台椀は型式的にみて古いタイプである。12区1面では17世紀までの陶器が多く、18世紀以降の遺物はきわめて少ない。したがって17世紀代の椀と考えたい。

またそれ以外の漆器椀では、内外面とも黒漆塗りのタイプ（椀6・8）、さらに内外面とも黒漆塗りで記号を持つタイプ（椀7・18）、内外面ともに赤漆塗りのタイプ（椀3・14・15・16）、紋様あるいは家紋を持つタイプ（椀2・9・10・11・17）がある。なお4区南半部では、18世紀中頃以降の陶磁器が多く出土しており、椀についてもその年代と考えている。

家紋

おそらく、漆器の中で紋様入りの上手品と日常雑器の違いをも追跡しなければならないが、10区でみられたように、廃棄土坑に別の廃棄品とも区別なく出土したことから、何等かの火事、地震等の地災によって一括廃棄されたことが想定されることにより、今回、考古学側でのアプローチはこの点を明確にできなかった。

しかしながら遺構出土で年代の把握された椀、皿をみると、18世紀中頃以降の遺物が多い。これらのことから18世紀中頃以降、形態的には丸椀タイプ、腰部の張ったタイプがあるが、その違いも、年代的差異とは直接結び付かないと判断されよう。

また家紋と推定される紋様も同じ10区で認められたことにより、廃棄した三浦家という共通性（家紋）を指摘できよう。

一方、皿では25の小皿が16世紀初頭から前半と考えられ、21の皿が江戸後期から幕末と考えられた。ところがその間を埋める資料は明確ではなかった。今後の課題となろう。

2．下駄

下駄

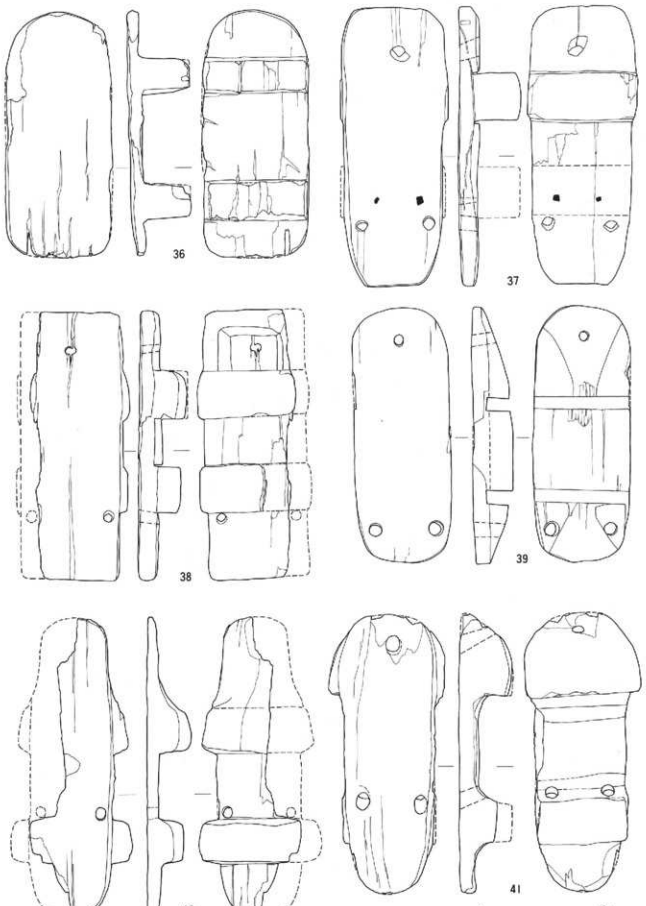
39の差歯下駄を除くといずれも連歯下駄である[6]。平面型では長方形を呈するタイプ（下駄38）と隅丸長方形を呈するタイプ（下駄36・37・40・42・43）に分類できる。

下駄41は前歯が幅広で、わずかに切れ上がっている。

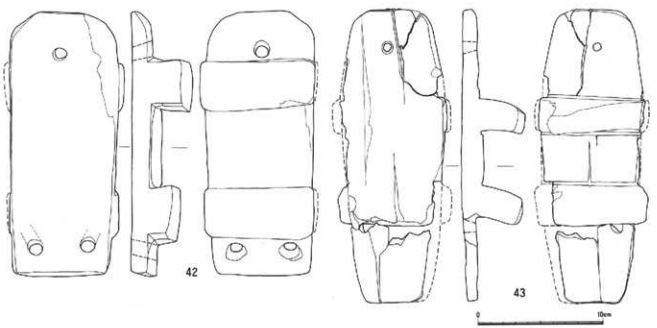
差歯下駄39は平面隅丸長方形で、側面が台形を呈する。

さて、下駄の年代観であるが、下駄36はSF424から出土で、この遺構から17世紀代の擂鉢片1点が出土した。下駄37・38は4区2面からの出土で遺構に伴う例ではなく年代は不明瞭であるが、この4区では18世紀中頃以降の製品が多い。あまり積極的な年代比定とはいえないが、一応18世紀中頃以降と判断しておきたい。

つぎに10区出土の下駄であるが、廃棄土坑からの出土が多く年代決定には安定した資料である。下駄40はSF10C09出土で、18世紀中頃から19世紀初頭の陶磁器が出土している。下駄41は19世紀中頃の陶磁器片を伴ったSF10C14から出土した。下駄42はSF10C05からの出土で、伴出した陶磁器の下限から明治前半と考えられる。下駄43はSF10B02からの出土で18世紀後半の陶磁器が出土している。こうしてみると、10区出土の下駄の年代は



第87図　出土遺物　木製品　その3　4・10区



第88図　出土遺物　木製品　その4　10区

江戸後期から明治前期に位置づけできよう。

3．庖厨具・工具その他

27は曲物の底と考えられる。木針と桜皮でとめている。ＳＤ1206から出土した。15世紀末から16世紀後半の陶器が伴出した。

28・29は曲物の底と考えられる。30は曲物の側板である。桜皮で綴じている。28は９区、29は10区、30は１区よりそれぞれ出土した。

鉄鍋の蓋

31は鉄鍋の蓋であろう。上部に一ヶ所穿孔がある。把手は別木をホゾ孔を長軸方向につくりはめている。長期間使用されたらしく表面に黒光りがしている。ＳＦ10Ｂ03から出土した。17世紀代の陶器が伴出している。

32は用途不明の円板で底板であろう。大きさからすると柄杓であろう。ＳＦ10Ｃ09から出土した。

33は蓋であるが、摘みとして桜皮を結んで使っている。ＳＦ10Ｂ02から出土したことから18世紀後半と考えられる。

34は用途不明の円板で、底板であろう。ＳＦ10Ｃ09から出土し、18世紀中頃から19世紀初頭と考えられる。

35は柄杓であろう。曲物で柄の差し込み部分が残っている。１区Ｊ－７グリッドから出土した。

柄杓44は10区１面から出土した。曲物を桜皮でとめ、さらに柄と身の部分は木釘で打ってとめている。

45は柄杓の身であろう。ＳＦ10Ｃ09から出土したもので18世紀中頃から19世紀初頭の陶磁器が伴出している。

柄杓46はＳＸ10Ｂ01から出土した。曲物を桜皮でとめている。19世紀前半の陶磁器が伴出している。

櫛

櫛47は赤漆地に黒漆で松紋を描く。ＳＦ303から出土した。伴出した資料が少なく、時期は不明瞭である。

48の椀は黒漆地で、蒔絵手法で紋様を施している。18世紀後半の陶磁器に伴ってSF10B02から出土した。

49は半月形を呈し、厚さ2cmで木釘どめの穴が穿たれている。樽底と推定される。SP12128から出土した。

しゃもじ

しゃもじ50は、柄の側面部分を面取りし、匙の部分を削り込んで、へこませている。SF10C05から出土した。出土した陶器から18世紀中頃であろうと考えられる。

51は樽底もしくは桶底と推定される。SF10C15から出土した。

52は自在鉤であろう。SP1224から出土した。出土した陶磁器からすれば17世紀代であろう。

墨壺

53は墨壺と考えられる。4区南半部で出土した。黒漆塗りであろう。

54は一木造りの鋤と考えられる。肉眼観察では、カシ材と考えられる。鉄の鋤先を装着するタイプであり、用途については、農具か土普請かの判断はできなかった。廃棄の際、鋤先ははずしたものと推定される。12区1面から出土した。

カセ車

55はカセ車の部材である。正徳2（1712）年序のある『和漢三才図絵』には近年、カセができ紡糸が能率的になった旨が記されている(7)。このカセ車はSF10C14から出土したことにより、幕末に考えたい。

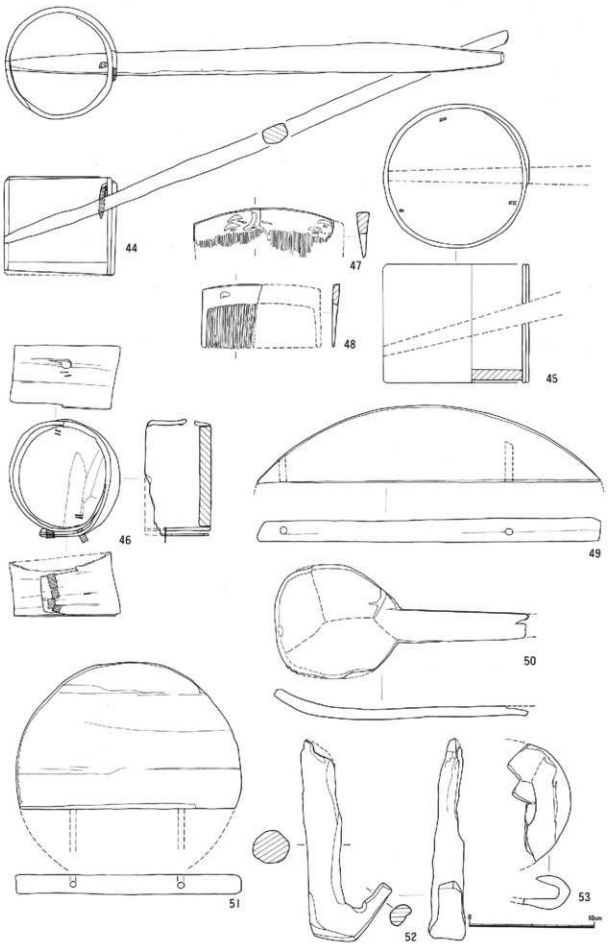
56は何等かの部材であるが、用途不明である。SP12128から出土した。穴を3ヶ所穿けている。57は差し込み部がある。中央に大きく刳り穴が穿けられている。厚さ3cmを測る。出土した調査区は不明である。

58は付札であろう。上部に切込みが2ヶ所ある。14区から出土したもので、江戸時代の遺物とすれば、水田からの出土と考えられる。

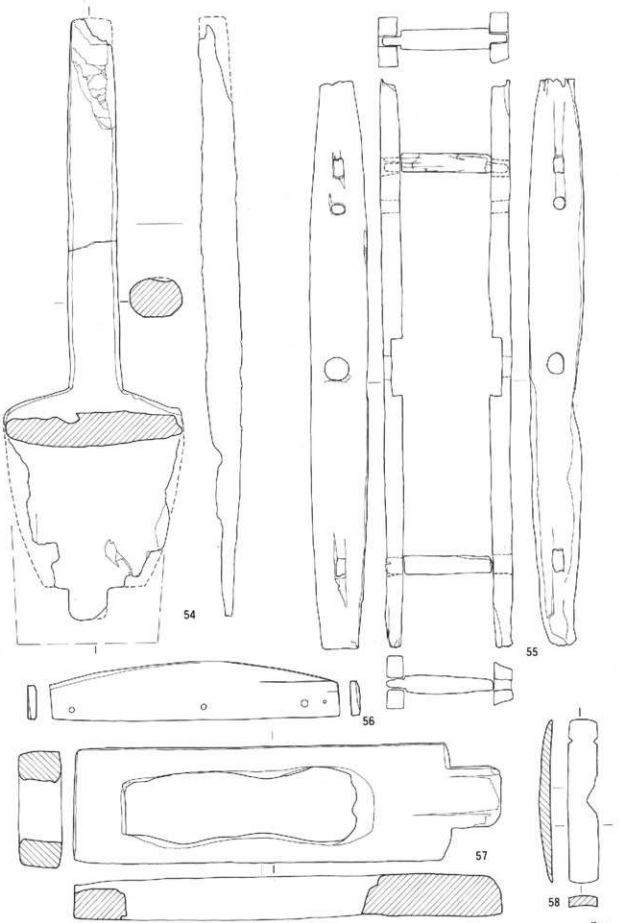
注

（1）「東海道人物誌」（1803刊）『近世人名集成　第2巻』1976
（2）窪野桂「近世学芸の展開」『袋井市史』1983
（3）三輪茂雄『臼』1978
（4）三浦藤兵衛の子孫にあたる、本研究所三浦孝一参与の御教示による。
（5）『駿遠豆鑑』1897
（6）古泉弘『江戸を掘る』1983
　　古泉弘『江戸の考古学』1987
（7）『和漢三才図絵』（1712刊）『東洋文庫』活字本による。

木札・墨書の釈読については、大隅信好氏や本研究所、橋本敬之氏の御教示によるところが大きい。



第89図　出土遺物　木製品　その5　10・12区



第90図　出土遺物　木製品　その6　10・12区

第5節　金属製品

1．銭貨

銭貨は我が国では乾元大宝発行以降、しばらく公鋳銭の発行が停止し、寛永通宝まで中国を中心とした渡来銭が流通していた。しかしながら、明代宣徳通宝以降、明王朝ではしばらく貨幣の発行が停止し、さらに勘合貿易においても貨幣の渡来が政策的に制限された。

渡来銭　一方、日本においては、商業活動が一層活発となって、供給とは反対に銭貨の需要が大いに増加した。そのため中国本土や日本を含む中国銭流通圏での私鋳銭が流通するようになった。

16世紀中ごろから明から新しい冶金法や灰吹法が伝わって金、銀鉱の精錬が容易となった。また、南蛮貿易での銀の需要や大規模な軍事行動に不可欠な金、銀の需要は増大した。このため金、銀鉱山の開発と増産の最盛期をむかえ、いわゆる「ゴールドラッシュ」の様相を呈したのである。従来、砂金を中心として自然貨幣としての役割を担っていたが、戦国時代には本格的にイゴットとして使われ、やがて甲州金を経て、天正大判の鋳造をむかえる。一方、市中では渡来銭や私鋳銭が貨幣として幅をきかせていたのである。

江戸幕府による「慶長の弊制」を制し、金貨、銀貨、銅銭の交換率が決定した。その中で、銅銭の中心に永楽通宝を置き、永楽銭1に対し、鐚銭4のレートを定めている。

貨幣の鋳造　ところで寛永13（1636）年に幕府は、寛永通宝を発行するが、それが全国的に出回るのは、17世紀後半のことで、それまで渡来銭やそれを模した私鋳銭と寛永通宝が流通している。寛永通宝以外の銭貨の流通を禁止したのは寛文10（1670）年6月のことであった。以上が出土した銭貨を分析するにあたっての前提である[1]。

原川遺跡出土の銭貨は中世の渡来銭と近世公鋳銭、近代銭に大別される。その多くは出土状況から六道銭や遺失物と考えられる。

鐚銭　銭貨は江戸後期以降、古銭図録の刊行と分類学が進んでおり、すでに昭和初期には分類の根本は決定された観があった。しかしながら、公鋳銭と広義、鐚銭との区別は、書体を中心とするものできわめて困難であり[2]、安定した見解には至っていないと思われる。

ところでこうした分類学以外に、函館市志海苔館付近出土銭貨報告の中で、金属同位元素の分析がなされた。この分析では出土銭は鉛や亜鉛の含有量に大きな違いがみられ、公鋳銭と私鋳銭の判別材料の可能性を指摘した[3]。

今回、原川遺跡出土銭貨については山梨文化財研究所にお願いし、X線写真を撮影していただいた。このX線写真では定量的な分析は望むべくもないが、銅と鉛、亜鉛やその他不純物の含有量によって、かなり鋳上がりに違いをみせている。

本節では旧来の分類学の上に立って、鋳上りの良好なグループと鋳上りの悪いグループ、2次焼成を受けた銭貨とし、あわせて出土状況についても述べてみたい。

なお銭貨の数量、スケール、出土状況については別表に譲りたい。

6区出土銭貨のうち、1の元祐通宝は彫りが浅く不鮮明であり、鋳写と考えられる。また鋳上りに細かなムラが認められ、鉛や亜鉛が多いと考えられる。6・7・8の渡来銭も鉛、亜鉛が多いと判断される。10の輪がゆがんでおり、字体も崩れている。直径もやや小さく、薄肉である。鋳写と考えられる。しかしながら成分は均一であって、X線の抜けは良好である。寛永通宝は書体の変化や製造方法の違いによって区別されてきた。21・22は新寛永とされるタイプである。新寛永についても元禄8（1695）年萩原重秀の建議によっ

て黒褐色、薄手で銅混入率の低い新寛永が鋳造された。また一時、正徳、享保の改鋳において良銭に覆することがあったが、改鋳を重ねるごとにしだいに品位・銅混合率の低下をよぶ。

23は真鍮四文銭である。21・22は23に比べ、銅の含有率は高く、X線の抜けもよい。22は「文」銭である。それに比べ19・20の新寛永は真鍮質に近く、新寛永としても後半期に属するであろう(4)。

24は直径も小さく穿径が大きい。無文銭であり、鐚銭と考えられる。26の大観通宝は書体の崩れもあり、輪も小さい。40・41は直径も縮小し、鋳写と考えられる。32も書体が崩れ、径もいく分小さい。鋳写と考えられる。

16・17は4個付着していたが、2枚は変形し銭名不明である。

25・26・27はSH104付近の柱穴から出土した。27は良質で新寛永である。35は新寛永であるが下に3枚が錆着している。45の永楽通宝は草書体の元祐通宝と錆着していた。43・44・45はX線の抜けも悪く銅の混合率が低いと考えられ、また45の方郭は明瞭であるが、穿は円くなっている。鋳上りが悪く私鋳銭であろう。49・50については鋳上りは良くない。61A・61Bは錆着して出土した。61A・68は直径も小さく、21㎜と22㎜である。76の嘉祐通宝は直径も小さく書体も不鮮明で、鋳上りが悪い。私鋳銭と考えられる。79・80についても鋳上りが悪く私鋳の可能性もある。3区ではSX304の覆土から渡来銭100A・100B・101と新寛永1枚計4枚が出土した。また3区埋甕からは清王朝・康熙通宝を含み、古寛永からなる6枚の銭貨（102～106を図示）が出土したいわゆる六道銭であろう。ゆがみや火熱を受けたものも3区では多い。

4区では埋桶SF417から115の新寛永が出土している。119は背文銭である。

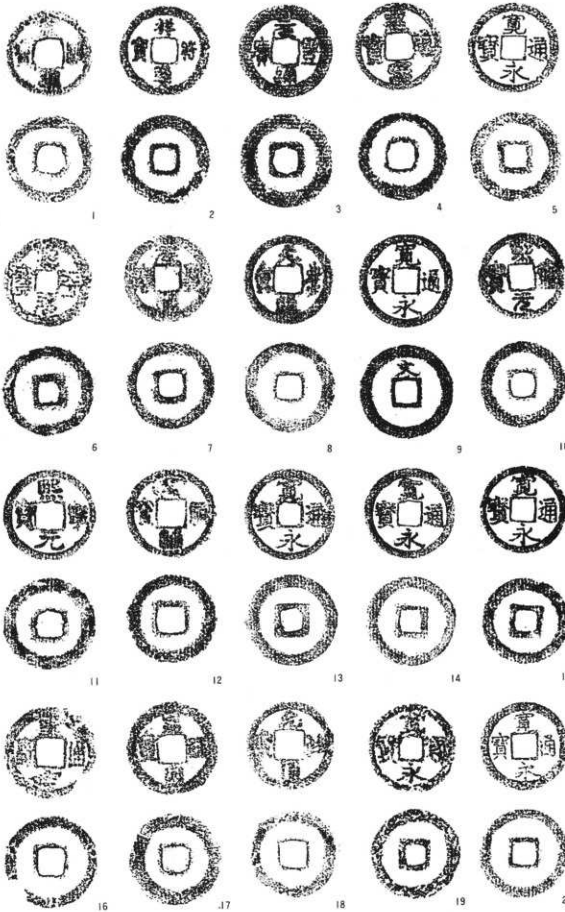
9区のSF901からは熙寧元宝125が1枚出土しているが、書体も不鮮明で鋳上りは悪い。私鋳銭と考えられる。SX901からは開通元宝126が1枚出土した。書体、鋳上りともに良好である。129～138までは集石墓および集石をはずしたあとの掘下げ作業中に検出された銭貨で、集石墓に伴うと考えられる。いずれも書体が不鮮明で、鋳上りが悪く私鋳銭とも考えられる。146～150は表土除去中、発見された早桶に副葬された銭貨で文久永宝1枚が組合さっている。9区では1面精査中における銭貨の出土が多く、集石墓などの六道銭の可能性が大きい。

159・164については鋳写銭であろう。また165の永楽通宝についてはムラがあって鋳上りが悪く、私鋳銭と考えられる。

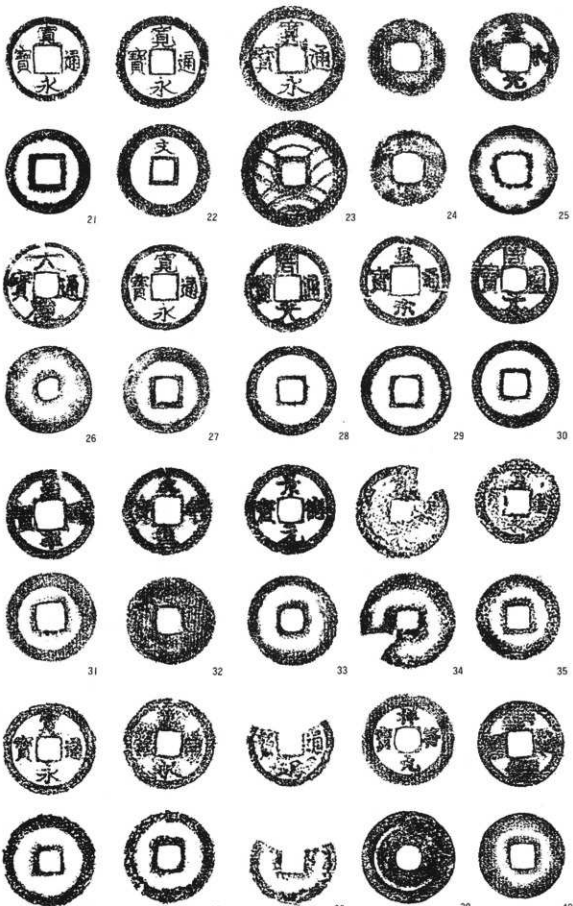
以上、原川遺跡出土の銭貨を述べた。多くは遺失物といって良い。なおサンプリングエラーがあって確認出来ない部分が多いが、3区・9区や1区出土の一部の銭貨については、六道銭と考えられる。なお寛永通宝については、四文銭を除いても銭径にバラつきが多い。同じ新寛永についても同様であった。

注

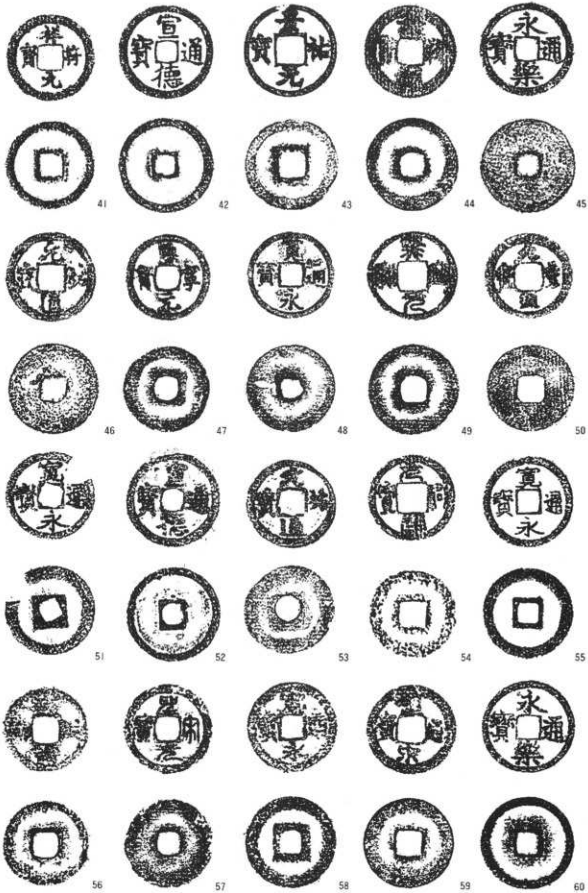
（1）小葉田淳『日本貨幣流通史』1930
（2）増尾富房『本邦鐚銭図譜』1982
（3）市立函館博物館『函館志海苔古銭』1973
（4）平尾聚泉編『昭和銭譜』1932（1986再版）



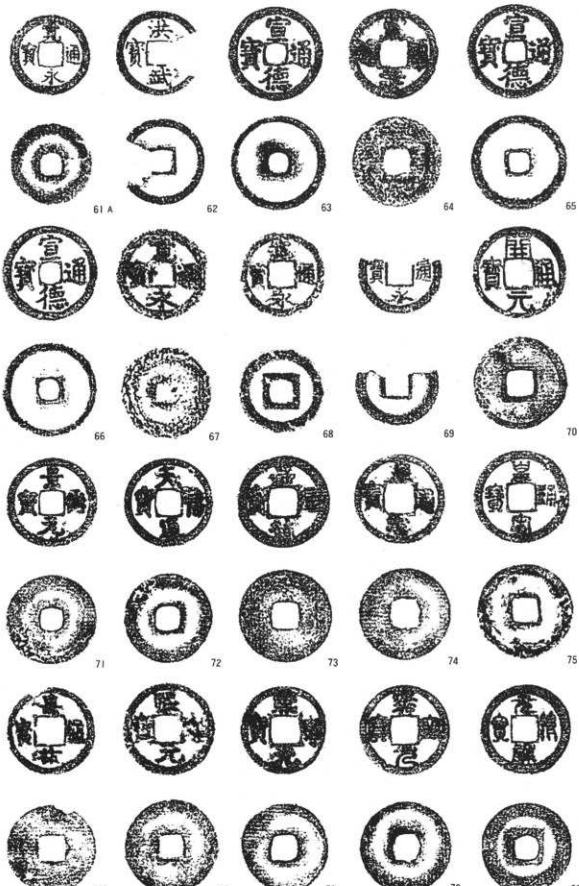
第91図　銭貨拓影図　その1　6区



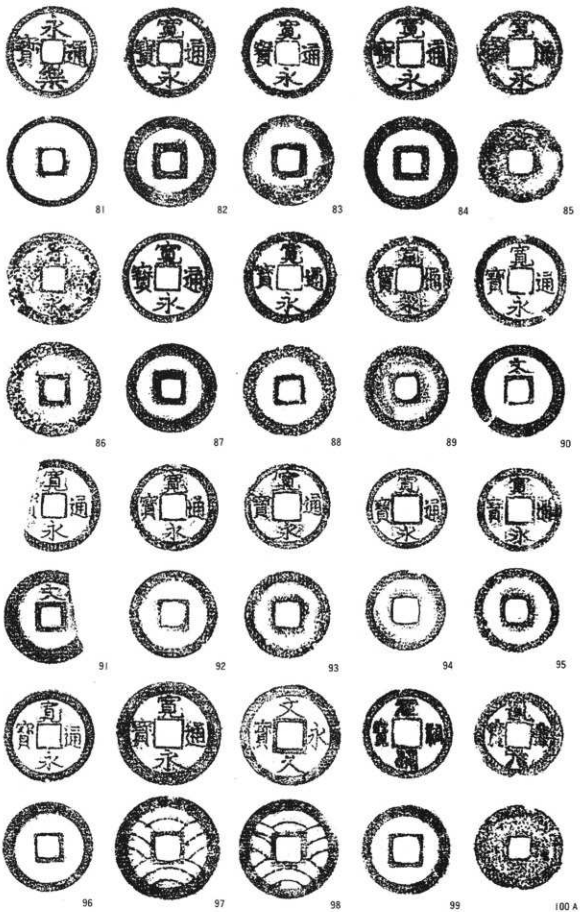
第92図　銭貨拓影図　その2　6・1区



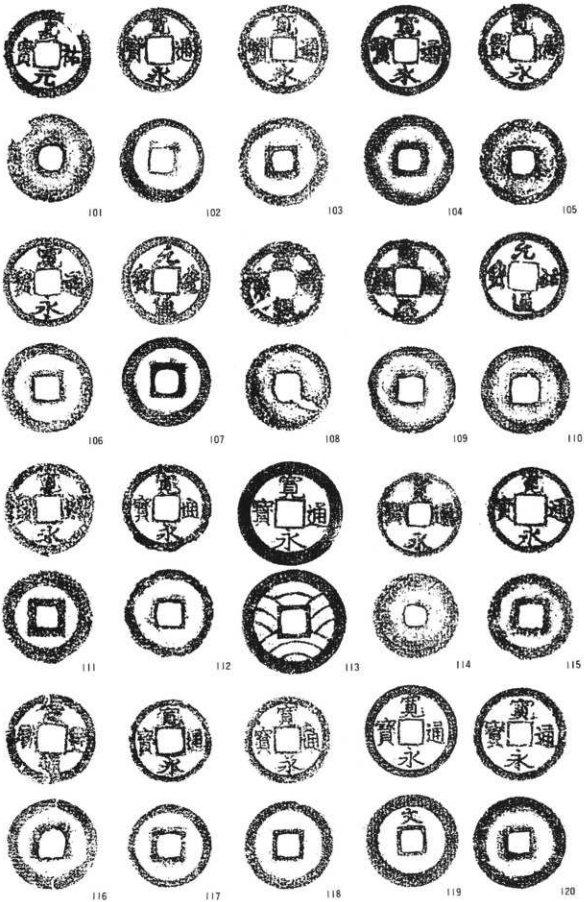
第93図　銭貨拓影図　その3　1区



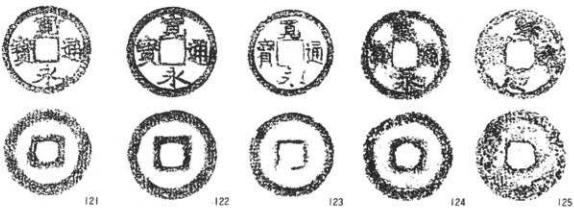
第94図　銭貨拓影図　その4　1区

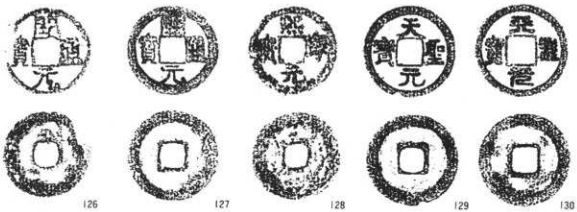


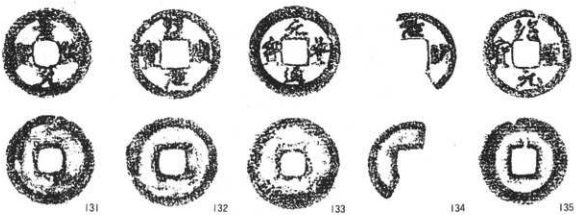
第95図　銭貨拓影図　その5　1・3区

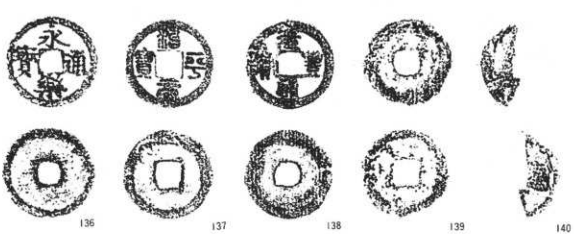


第96図　銭貨拓影図　その6　3・4区

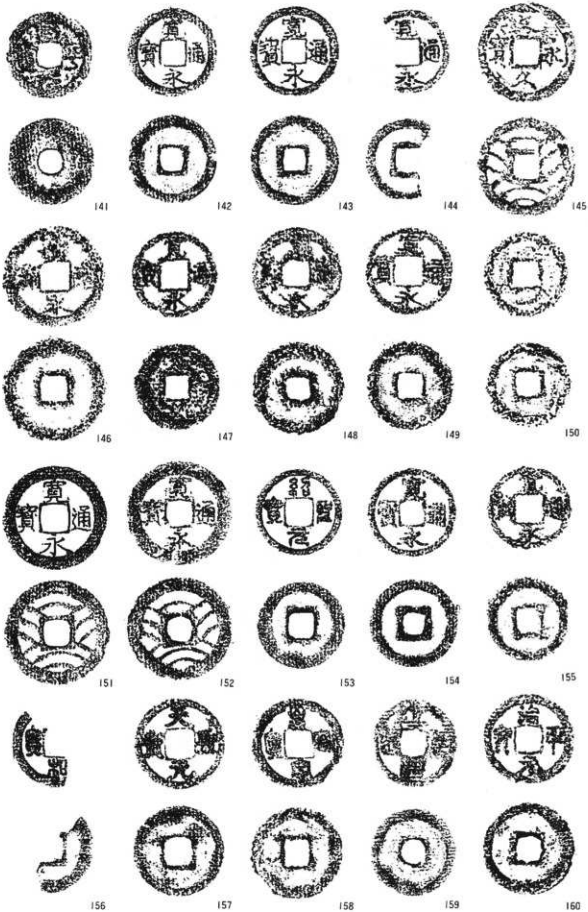




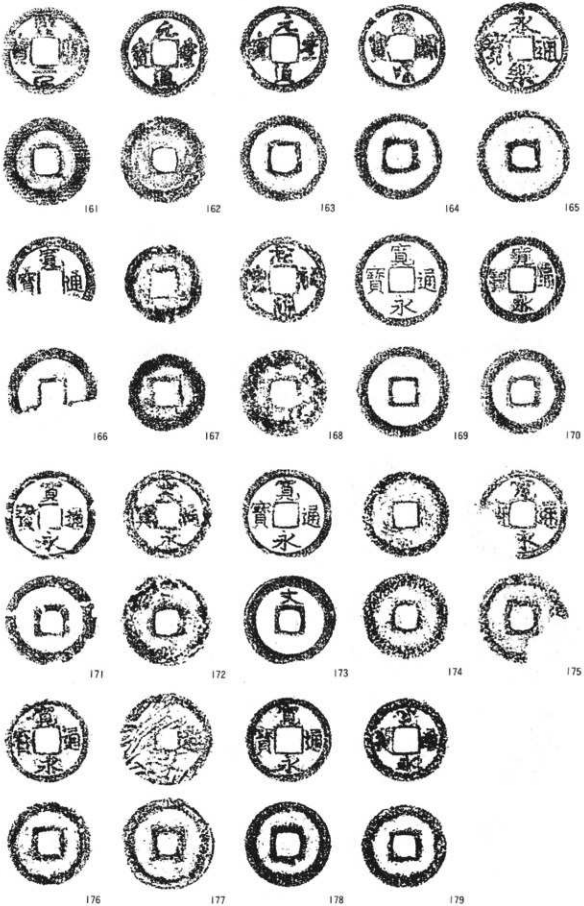




第97図　銭貨拓影図　その7　4・9区



第98図　銭貨拓影図　その8　9区



第99図　銭貨拓影図　その9　9・12・10・7・8区ほか

第2表　出土銭貨一覧表(1)

挿図番号	銭　名	グリッド　遺構	直径mm	重さ(g)
6区				
1	元祐通宝	SP613	23.0	2.17
2	祥符通宝	I4中世溝北側②～③	24.0	2.48
3	元豊通宝	I4②	25.0	2.98
4	皇宋通宝	I4②	23.0	2.61
5	寛永通宝	I4②	24.0	2.49
6	治平元宝	①精査	24.0	4.30
7	元豊通宝	①精査	23.5	3.55
8	元豊通宝	①精査	24.0	4.06
9	寛永通宝	①精査	25.0	3.21
10	熙寧元宝	①	23.0	2.06
11	熙寧元宝	①	24.0	2.82
12	元祐通宝	①	24.0	3.59
13	寛永通宝	①	24.0	3.15
14	寛永通宝	①	24.0	3.46
15	寛永通宝	①	23.0	2.77
16	皇宋通宝	①攪乱	24.5	3.12
17	皇宋通宝	①攪乱	24.0	2.71
18	元祐通宝	排土中	23.0	2.64
19	寛永通宝	K-3	23.5	2.67
20	寛永通宝	I4	24.0	3.24
21	寛永通宝	東側排水溝	22.5	2.03
22	寛永通宝	②	25.0	3.38
23	寛永通宝	J4	28.0	5.03
24	／	西側排水溝	21.0	1.41
1区				
25	至和元宝	ピット	23.0	2.80
26	大観通宝	ピット	23.0	3.03
27	寛永通宝	ピット	23.0	3.46
28	周元通宝	I7表土	24.0	3.27
29	皇宋通宝	I7表土	23.5	3.95
30	周元通宝	J6中央部	23.0	3.35
31	治平通宝	J6中央部	24.0	2.52
32	元豊通宝	J6中央部	23.0	2.28
33	景徳元宝	J5①	24.0	2.50
34	寛永通宝	J5①	25.0	4.18
35	寛永通宝	J5①	24.0	9.86
36	寛永通宝	J5①	～	
37	寛永通宝	J5①	28.0	(3個体)
38	寛永通宝	J5①	22.0	1.56
39	祥符元宝	I5南側排水溝	24.0	3.06
40	熙寧元宝	I5南側排水溝	23.0	2.36
41	祥符元宝	I5東側部分	23.0	2.41
42	宣徳通宝	I5東側部分	25.0	3.59
43	景祐元宝	H8中央部北側	24.0	4.06
44	元祐通宝	H8中央部北側	25.0	3.15
45	永楽通宝	H8中央部北側	24.0~	6.29
46	元祐通宝	H8中央部北側	25.0	(2個体)
47	熙寧元宝	I6表土	22.5	3.06
48	寛永通宝	I6表土	23.0	2.57
49	熙寧元宝	K8表土	23.0	3.50
50	元豊通宝	K8表土	23.0	3.17
51	寛永通宝	K8表土	24.0	2.78
52	宣徳通宝	H7①東側部分	24.0	2.95
53	元祐通宝	H7①東側部分	23.0～24.0	2.96
54	元祐通宝	K6①	23.0	1.93
55	寛永通宝	K6①	24.0	3.44
56	／	K6①	22.0	2.76
57	聖宋元宝	I6南側部分	23.5	2.08
58	寛永通宝	I6南側部分	24.0	3.08
59	聖宋通宝	J5①東側部分	23.5	2.85
60	永楽通宝	J5①東側部分	24.5	3.05
61A	寛永通宝	南側排水溝	21.0	2.12
61B	政和通宝	南側排水溝	23.0	2.06
62	洪武通宝	L4①	23.0	2.35
63	宣徳通宝	H7①東側部分	24.0	3.43
64	／	H7①東側部分	24.0	3.57
65	宣徳通宝	K6①東側部分	25.0	3.59
66	宣徳通宝	K6①東側部分	25.0	3.58
67	寛永通宝	K7①	24.0	3.70
68	寛永通宝	①西側部分	22.0	2.24
69	寛永通宝	①西側部分	22.0	0.79
70	開通元宝	H8表土	24.0	2.46
71	景徳元宝	I6東側部分	24.0	2.92
72	天禧通宝	J5表土	23.5	2.72
73	景祐通宝	K5南側排水溝	24.0	3.02
74	皇宋通宝	I6表土	24.0	2.85
75	皇宋通宝	I7東側部分	24.0	3.78
76	嘉祐通宝	J5表土	23.0	2.75
77	熙寧元宝	I6表土	24.0	3.87
78	熙寧元宝	J5南側排水溝	22.5	3.27
79	熙寧元宝	K7表土	24.0	3.56
80	元祐通宝	K5南側排水溝	24.0	3.15
81	永楽通宝	I6表土	24.0	2.77
82	寛永通宝	H6南側排水溝	24.0	3.69
83	寛永通宝	H6北側排水溝	24.0	3.09
84	寛永通宝	I6東側部分	24.0	2.98
85	寛永通宝	J7南側部分	22.5	2.76
86	寛永通宝	J7	25.0	2.78
87	寛永通宝	K8南側部分	24.0	4.16
88	寛永通宝	東側部分	25.0	2.94
89	寛永通宝	東側部分	23.0	2.54
90	寛永通宝	K5南側排水溝	24.0	3.33
91	寛永通宝	I5表土	19.0～24.0	1.99
92	寛永通宝	H7南側部分	23.0	2.19
93	寛永通宝	H7東側排水溝	22.0	2.00

出土銭貨一覧表(2)

通図番号	銭　名	グリッド　遺構	直径mm	重さgr
94	寛永通宝	H7北側排水溝	21.0	1.74
95	寛永通宝	K6表採	22.0	2.74
96	寛永通宝	H6①	24.0	2.26
97	寛永通宝	I7①	27.5	4.21
98	文久永宝	H7表採	26.0	3.61
3区				
99	元祐通宝	SF305	24.0	3.46
100A	乾元重宝	SX304埋土中	23.5	2.45
100B	熙寧元宝	SX304	23.0	2.53
101	嘉祐元宝	SX304	24.0	3.01
102	寛永通宝	H9c壺の中	22.0	2.48
103	寛永通宝	H9c壺の中	24.0	3.47
104	寛永通宝	H9c壺の中	23.5	3.89
105	寛永通宝	H9c壺の中	23.0	2.28
106	寛永通宝	H9c甕の中	24.0	4.12
107	元豊通宝	I9c	23.5	2.86
108	元豊通宝	I9c	23.0	1.74
109	元豊通宝	J10c	23.0	2.64
110	元祐通宝	J10a	23.0	2.03
111	寛永通宝	I9　たるの横	24.0	3.39
112	寛永通宝	I9	23.5	3.00
113	寛永通宝	J10	28.0	4.63
4区				
114	寛永通宝	SP426	22.5	2.03
115	寛永通宝	SX桶（西）内	23.0	3.15
116	元豊通宝	セクションベルト①	24.0	2.36
117	寛永通宝	セクションベルト①	22.5	2.22
118	寛永通宝	北半	23.5	2.63
119	寛永通宝	北半	25.0	3.00
120	寛永通宝	セクションベルト①	23.5	3.19
121	寛永通宝	セクションベルト①	23.0	2.52
122	寛永通宝	セクションベルト①	24.0	2.82
123	寛永通宝	南半②	23.0	1.51
124	寛永通宝	／	24.0	2.63
9区				
125	熙寧元宝	SF901	24.0	3.33
126	開通元宝	SX901	23.0	2.82
127	開通元宝	SP903	24.0	3.04
128	熙寧元宝	SP933	23.0	3.34
129	天聖元宝	東側一段下げ	24.5	3.45
130	天聖元宝	東側一段下げ	24.5	3.25
131	景祐元宝	東側一段下げ	24.0	2.21
132	熙寧元宝	東側一段下げ	24.0	3.39
133	元豊通宝	東側一段下げ	24.5	3.29
134	元祐通宝	東側一段下げ	24.0	0.73
135	紹聖元宝	東側一段下げ	23.5	2.58
136	永楽通宝	東側一段下げ	24.5	2.77
137	治平元宝	東側昇降口付近①	24.0	2.92
138	元豊通宝	東側昇降口付近①	23.0	3.42
139	口宋元宝	東側①（下）	22.5	4.80
140	／	①下東側	26.0	1.05
141	治平元宝	①東側段上	23.0	2.39
142	寛永通宝	①東側段上	23.5	2.43
143	寛永通宝	①西側	24.0	3.43
144	寛永通宝	①西側	23.0	1.47
145	文久永宝	①西側	26.0	3.67
146	文永通宝	南側排水溝	27.0	3.77
147	寛永通宝	南側排水溝	23.0	2.62
148	寛永通宝	南側排水溝	24.0	3.42
149	寛永通宝	南側排水溝	23.0	2.73
150	寛永通宝	南側排水溝	22.5	1.99
151	寛永通宝	①まで	28.0	5.63
152	寛永通宝	①まで	27.5	4.31
153	紹聖元宝	①まで	23.0	2.61
154	寛永通宝	①まで	23.5	3.23
155	寛永通宝	①まで	23.0	2.57
156	政和元宝	①まで	24.5	1.07
157	天聖元宝	①	24.0	2.62
158	皇宋通宝	①	24.5	2.80
159	開通元宝	①南側	23.0	2.44
160	治平元宝	南側中央部排水溝	24.0	3.50
161	熙寧元宝	南西中央部	23.5	3.02
162	元豊通宝	東側①上	23.0	2.41
163	元豊通宝	中央溝付近西側端	24.0	3.06
164	宣和通宝	①まで	23.0	1.78
165	永楽通宝	南側西①	25.0	3.07
166	寛永通宝	東側集石①	23.5	1.47
12区				
167	／	SP1221	21.0	1.62
168	元祐通宝	F5①	23.0	2.74
10区				
169	寛永通宝	SF10B01	25.0	3.32
170	寛永通宝	SF10B05	23.0	2.56
171	寛永通宝	SP10C21	24.0	1.87
172	寛永通宝	表土から①東側壁削りより	23.0	2.53
173	寛永通宝	南側集石①	24.0	3.34
174	／	／	23.0	2.82
7区				
175	寛永通宝	北半	24.0	1.55
176	寛永通宝	北半	22.5	1.86
8区				
177	寛永通宝	①～②	24.0	3.72
採集				
178	寛永通宝	／	22.5	2.75
179	寛永通宝	／	22.0	2.14

2．煙管

ほとんどが真ちゅう板1枚つくりで、折り曲げて造っている。出土状態についても遺構に伴う例はほとんどなく、わずかに伴出遺物から年代の提示できる煙管は27・28である。この煙管27・28はSF10B01出土で、出土した陶磁器から18世紀後半であろうと考えられる。

25は柱穴と考えられる。SP10B08からの出土で、あまり良好な出土資料とはいえないが、17世紀代と考えられるカワラケ小皿片が伴出している。

また雁首、吸い口、ラウの3部分の組合せが判明するものは煙管9・10である。

煙管については、すでに古泉弘氏によって分類、編年研究が提示されている(1)。この古泉氏の研究については、すでに異論もあるが(2)、考古学の立場で煙管研究を本格的に取り上げた専論でもあり、古泉氏の分類が江戸時代の煙管を通じて基準となるので、本文では古泉氏の分類にしたがっておく。 **煙管の分類**

煙管23は脂返しの部分で折れ曲がっているが、補強帯もあり火皿に陰刻で蓮華文を施す。またラウに接続する部分にも補強帯をつけ、陰刻の紋帯を刻んでいる。古泉分類では大きくはⅢ類に属するであろう。煙管30も火皿に補強帯を巡らすⅢ類であろう。鍍金されている。煙管2は雁首に肩を付けるが、補強帯は巡っていないタイプである。煙管は補強帯を巡らすⅢ類であるが、銅製で鍍金されている。煙管28は脂返しが極めて細く火皿部分はゆがんでいるものの縁を折り曲げ大きく広がっている。29は脂返しが短く肩部を付けるが、補強帯は巡っていない。肩部が付き補強帯が巡らないタイプでは煙管22がある。煙管3も鍍金されている。

24の吸口は肩部を持つⅡ類かⅢ類であるが、圏線の装飾を吸口上位に巡らす。18の吸口にも肩部がついている。13の吸口は狭義吸口端をわずかにふくらめている。

このほかについては古泉分類のⅣ類からⅥ類である。吸口に紋様の装飾を刻むタイプは9・19がある。

煙管3・5・30が銅製品である。銅板の接合が丁寧にかぶせ、すきまは認められない。

3．鉄・銅製品

鎌

鎌1は3区1面下部で出土した。草苅り鎌と推定される。目釘が斜めに打たれている。江戸時代の幅にはいるであろう。

包丁

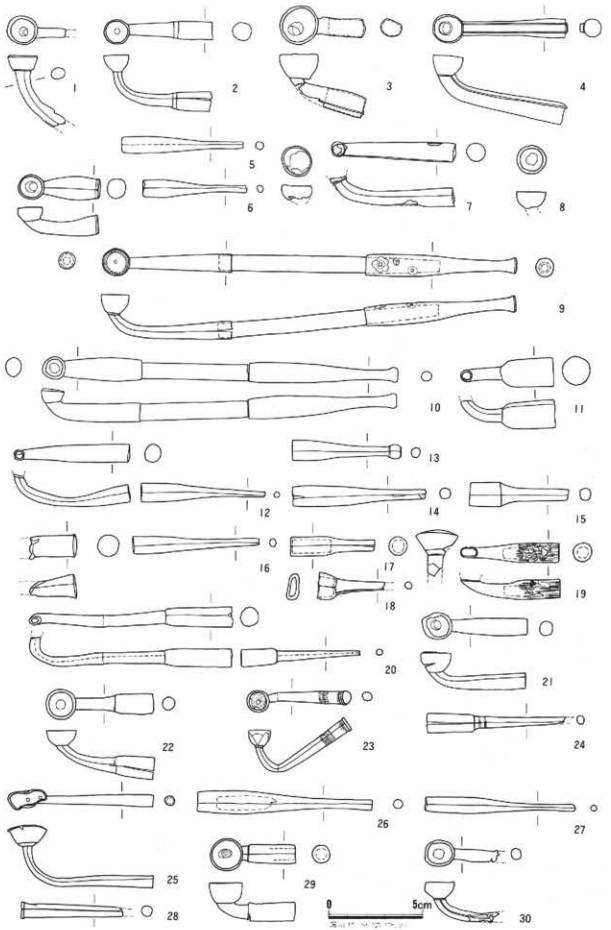
包丁2は両棟で、切先へむかって細くなる。残存長で29.6cm、柄部長13.2cmを測る。棟はないと判断される。菜切り包丁であろうか。4区3面から出土した。3面からは奈良時代以降幕末までの遺物が混在しているが、江戸時代の包丁と考えてよいだろう。

かんざし

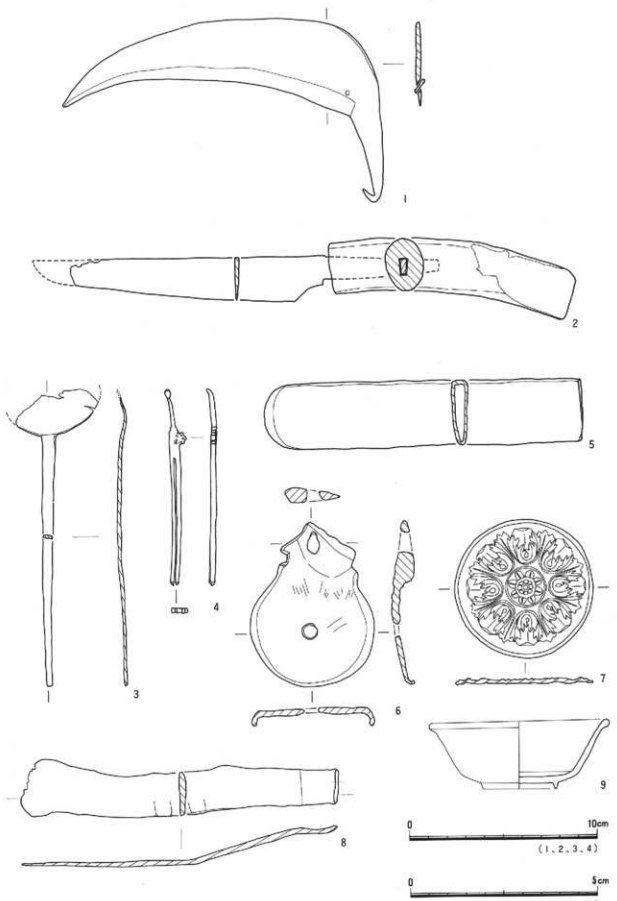
3は丸形の耳掻きを大きくした部分と胴部からなる。耳掻き部分は打ち延ばして大きくする平打ちかんざしの一種であろう。銅を主成分とするが、胴部には一部金を貼ったと考えられ、極一部に残っている。足は一本である。

4は耳掻きかんざしの一種で鏡から二の肩部にかけて花の意匠の飾り部分を造っている。銅を主成分とするが、本来、金を貼ったと考えられ、一部に残っている。足は二本である。4区の埋桶から出土した。遺失物であろう。

小柄



第100図　金属製品　その1　キセル



第101図　金属製品　その2

銅を主成分とする。形態から小柄の鞘と推定したい。

飾り金具

6は真ちゅう質で家屋内部や家具の飾り金具と推定される。1区のピットから出土した。7は円形の薄い真ちゅう質の飾り金具で細かい意匠を打っている。襖の引手ではないかと推定される。

不明金具

8は板状に打ち延ばして、屈曲させ先端をわずかに折り曲げている。銅を主成分とする材質である。単品で使う性格ではなく、何等かの部分であろう。

銅鉾

仏　器　9はSD1207から出土した真ちゅう質銅鉾で、古瀬戸後期から大窯期の遺物とともに出土した。仏器の一種であろう。全体にゆがんでおり、一部にススが付着する。廃棄品であろう。

注

(1) 古泉弘『江戸を掘る』1983
古泉弘『江戸の考古学』1987
(2) 港区芝公園1丁目遺跡調査団編『芝公園1丁目増上寺小姥群光学院・貞松院・源興院跡』1988

第4章　考　察

第1節　遺溝の変遷

原川遺跡の遺溝と遺物について概述した。本節ではこれらデータから原川遺跡の近世を便宜的に3期にわけ、さらに室町後期から幕末までの遺溝の変遷について述べてみたい。

1．原川遺跡第1期（15世紀～16世紀後半）

検出された遺溝の変遷を原川遺跡の北側から述べることとする。

9区から検出されたSD907・SD910など原野谷川の支流と考えられる流路が検出された。この流路は12区SD1206・SD1207に接続し、1区では下面を掘り下げていないのでこの流路の接がりは不明瞭ではあるが、さらに南側の6区SD601・SD602に連なるものと考えられる。3区から検出されたSD303についても同じ時期であり、蛇行した形状から流路と考えられ、やはり原野谷川の支流としてさしつかえないであろう。

原野谷川の旧流路

このようにみると、鈴木基之が『原川遺跡Ⅰ』「第1章　位置と歴史的環境」の中で推定したように原野谷川の旧流路（f）は海抜17.5mから16.0mの間、即ち原川集落の東側に存在する旧流路（b）・（c）方向に流下していた可能性は大きい。おそらく、今回、9区から6区までの支流が一部山茶碗を下部に含むところから、鎌倉時代から戦国時代の流路が現状の原野谷川より東側を流れていた可能性は極めて大きい(1)。

なお、蛇行した形状や覆土に砂礫層が少ないことから、比較的緩やかな流れであったと推定される。

集落を形成する当該期の掘立柱建物跡は、9区では流路をはさみ南北に、12区では流路西側に認められた。6区では流路の南北、1区では建物跡はSE101とSE102周辺に存在したと判断される。3区では流路以外認められなかった。4区・10区には当該期の遺構は認められず、全体に原川遺跡の西側が当時の集落域であったことをうかがい知ることができる。

西側が集落

なお、12区SF1207のように古瀬戸後期の瓶子、天目茶碗を埋納する土坑や1区SE102のような石積井戸を持つことなど、集落域でも中心部にあたるのであろう。またこれら流路には多くの生活遺物が投棄されていた。この点第2期、第3期においては井溜を掘削し処理していたことと大きく異なる。

また、旧東海道の下にも掘立柱建物跡が何時期かにわたって建替えており、中世の東海道がこの部分に存在しなかったと判断されよう。おそらく、1区の北側は建物跡が極めて希薄であり、中世の東海道がこの空間に存在したとしてもあながち無理な想定ではないであろう。

ほかに4区SD406の上部から宝篋院塔の破片が出土しており、周辺に当該期の墓地の存在が推定される。

2．原川遺跡第2期（16世紀末～18世紀）

9区・12区・6区で検出された原野谷川の支川は覆土の状況から埋め立てられたと考えられる。9区では建物跡がみられるが、おそらく集石墓がこの時期につくられており、18世紀までには廃棄されている。またのちに述べる『東海道分間延絵図』の時期には屋敷地もしくはその裏手となっている(2)。集石墓の集中状況からすれば惣墓とも考えられるが、阿

集石墓

弥陀寺に近接していることから寺院墓地の可能性も否定できない。おそらく、何らかの理由で墓地を移転し、この時期の終わり頃には9区は住居域に転化していったのであろう。12区では流路の上を埋め整地し、家屋が建てられている。いずれにしろ、前身建物を踏襲し、次々と建て替えられている。また江戸期の東海道も12区につくられている。遺構の廃棄の在り方や遺物の在り方からすればこの部分に東海道がつくられたのは17世紀中頃であろう。6区・1区の家屋も前身建物を踏襲し、次々建て替えられている。街道に沿った10区にも建物が建てられ、ほぼ近世の原川町が成立したものと判断される。

住居域

近世原川町の成立

なおこれら家屋のうち、掘立柱建物から石場立建物への転換はいつ頃から始まっていたのであろうか。1区の調査結果からすれば、ほぼ18世紀のうちと考えられるが、それ以上の細かい年代は不明瞭であった。

ところで「長溝村開発摘記」(『浅羽風土記』に採録)によれば[3]、1707年の宝永地震の際「石据の家々皆一同に倒れ其響也、空の曇は家々倒候時の煤にてありける。倒れざる家村中に二三軒ばかり残り候、掘立柱の家は、傾く迄にて倒れ申さず候」とあって、当時この地域の農村部においてもこの掘立柱建物と石場立建物の両者が存在し、さらに石場立建物が壊滅的な打撃を受けたことが判明する。なお「其後掘立小屋を作り住居致し候、其節は礎の家には必ず居るなと申事に候」とある。原川遺跡で検出された家屋を考える上で参考になるであろう。

掘立柱建物と石場立建物

また、6区出土の繊部向付や1区出土と明末の染付皿の存在からすれば、16世紀末から17世紀初めにはこれら調査区に居住した富豪層の存在を考えてもよいであろう。3区・4区屋敷地外にあっては、この時期の遺構は極めて少ない。街道に沿った住居域の内でも家屋の建てられる空間が固定化されたといえよう。

3．原川遺跡第3期（18世紀～幕末）

文化3（1806）年に完成した『東海道分間延絵図』(以下延絵図に略記)によれば[4]、当時の原川町の様子が細かく描かれている。原川町は一般の宿駅と同様、街道沿いに面して町並が並んでいた。おそらく、こうした『延絵図』に描かれた景観は2期からすでに成立していたことは、調査結果からも首肯される。

『延絵図』と原川町

『東海道宿村大概帳五』(以後大概帳に略記)によれば東海道「道幅3間」とあるが[5]、『延絵図』にはそれより広く描写されている。また、明治前半に作成された地籍図には5間以上を測る。

また、『大概帳』によれば「原川町田畑当分にて、用水は原野谷川より引取、流末は隣村田小川江落る」とある。SD405はこの用水であろう。

しからば飲料水はどこから汲み上げていたのであろうか。『大概帳』によれば、「呑水は川水又は掘井を用ゆ」とある。

原川の古老松浦氏によれば[6]、原川では、戦前のある時期まで各家庭にある井戸水は鉄分が多く飲料水には使わなかったという。そのかわり、阿弥陀寺境内の井水が良質であって、原川の各家庭ではこれを汲んで飲料水として用いたという。今回、各調査区で井戸の検出が少ないこともこうした理由に起因するかもしれない。

SE901は、旧阿弥陀寺の境内から西側にずれるが、『延絵図』の屋敷地の範囲から大きくはずれており、こうした共同井戸として考えてさしつかえないであろう。

先の松浦翁からの聞き取りとともに、『延絵図』と調査結果を比較してみたい。

『延絵図』では9区から12区にかけては当時、間口の広い建物が認められ、街道に面した12区には高札場があったことが『延絵図』から判明する。

高札場

ただし、発掘調査ではこの時代の遺構は表土除去とともに消失したと考えられ、比較できない。なおすでに述べたようにSE901は屋敷地外にあったものと推定できる。

また、9区東側で検出された石場立建物の礎石は、阿弥陀寺に抜ける小路から西側へ2列目に相当する屋敷地の建物であろうと推定されるが、『延絵図』に描かれた建物であるかは判明できない。

6区は立場の置かれた位置に当たる。『延絵図』では街道に面して屋根付きの門と駒寄の垣根があり、原川町では最も大きな敷地を占めている。また庭が大きく西側に大木（椎ノ木か）が描かれ、建物の位置は奥まっている。この建物は後に述べる安政・天保期原川町庄屋を勤め、椎ノ木茶屋（立場）を営む伊藤又左衛門の屋敷地の一部であったと推定される。

原川町の立場

発掘調査では、1区に2条の屋敷境が、街道に直行する形で認められているが、東側L－4グリッドの屋敷地の西側から6区が伊藤又左衛門の経営する立場に比定される。

なお6区の埋桶は、立場の庭、東側に相当すると想定される。

1区I－7・J－7グリッドでは前身建物を踏襲して次々と建てられたSH101・SH102・SH106が検出された。このことにより、永く同じ屋敷地を占めた、ある家族の存在が浮び上がってくる。この屋敷地は幕末名主を勤め「1に団兵衛」と有徳ぶりを言われた石川屋、石川団兵衛家の屋敷地の一部であったと推定される。この石川家は先の立場茶屋に次ぐ屋敷地面積を有していた。なお、地元では脇本陣であったという言伝えがあるが、本来、間の宿にこのような機能が考えられず、立場茶屋に次ぐ副次的機能を持っていたことが、こうした伝承を生むに至ったと考えられよう。

石川団兵衛

なお立場と石川屋の間には江戸後期から明治前期にかけて休場を営業していた金田屋が存在した(7)。

3区・4区では、街道に面した家屋部分ではなく、屋敷地の裏を調査したことになった。『延絵図』の描写とほぼ一致しているこれらの調査区では大きな廃棄坑が掘削され、埋め戻されていたが、これらの大型の廃棄坑は、18世紀後半以降、幕末と考えられる遺構が多い。

嘉永7（1854）年には「安政の大地震」で原川町は戸数48戸のうち焼失24戸・潰家24戸・土蔵潰1・死者2人・怪我人3人という被害をうけた(8)。もとより、焼失や潰家の破壊が壊滅的であったものか、あるいはささやかなものであったかは史料上判明しないが、こうした廃棄坑が、災害に伴う可能性は極めて大きい。第1期と異なり、ゴミ処理が整然となされている。

安政大地震と原川町

10区では、細い地境溝が検出された。なおこの10区は三浦藤兵衛の抱地であることが木札や墨書陶器から判明した。街道に面した部分にのみ次々と家屋が建替えられ、屋敷の裏は廃棄坑が多い状況が明らかになり、第3期の原川町の状況が把握された。

ところでこの10区の裏側は明治前期の地籍図によると水田・畑地になった部分でもある(9)。『延絵図』では垣根が巡らされ、家屋が粗になった部分と推定される。

今回、この地籍図と発掘結果を重ねあわせ、さらに江戸後期から明治期の店の位置を聞き取りによって記載してみた。

地籍図は本来、地番ごとの区画、地目、面積をいれ作成したものであるが、原川に関す

る限り図面上の方位、面積の精度はあまり正確とはいえなかった。しかしながら記載された各番地ごとの面積は正確なものと考え別表に掲げたが、この面積に基づくとすれば、むしろ発掘調査で検出された地境溝が地籍図の境界より実態に即したものと考えられる。

第3期に関して必ずしも発掘調査の結果は良好とはいえなかったが、他の資料を参考に概念図のように集落景観が推定された。

原川町は、16世紀末以降、急速に町形成が行われ、江戸期には、おそらく街道に面したごく限定された範囲に家屋が並ぶ状況であって、ほとんど明治以降の景観と大きな違いをみせない程になっていたと考えられる。

第3表　原川町地籍図面積一覧表

地番	面積	屋号・寺名	地番	面積	屋号・寺名
1	2畝8歩		34	4畝4歩	糀屋
2－1	3畝23歩		35	3畝20歩	油屋
3－1	4畝18歩		36	3畝28歩	
4－1	4畝29歩		37	4畝9歩	
5－1	4畝9歩		38	4畝28歩	
6－1	1畝18歩		39	3畝12歩	
72	3畝11歩		40	3畝1歩	
7	3畝23歩	阿弥陀寺跡	41	5畝5歩	鳥居屋
8	2畝25歩		42	3畝24歩	
9	2畝19歩		43	3畝17歩	
10	3畝2歩		44	4畝28歩	
11	3畝2歩		45	4畝2歩	
12	4畝4歩		46	4畝5歩	杉本
13－1	－	医徳寺跡	47	4畝0歩	
13－2	－	医徳寺跡	48	3畝29歩	
14	2畝26歩		49	6畝29歩	石川屋
15	4畝19歩		50	6畝12歩	金田屋
16	1畝6歩		51	4畝14歩	
17	1反1畝10歩	油屋	52	8畝24歩	椎ノ木茶屋
18	3畝23歩		53	6畝14歩	

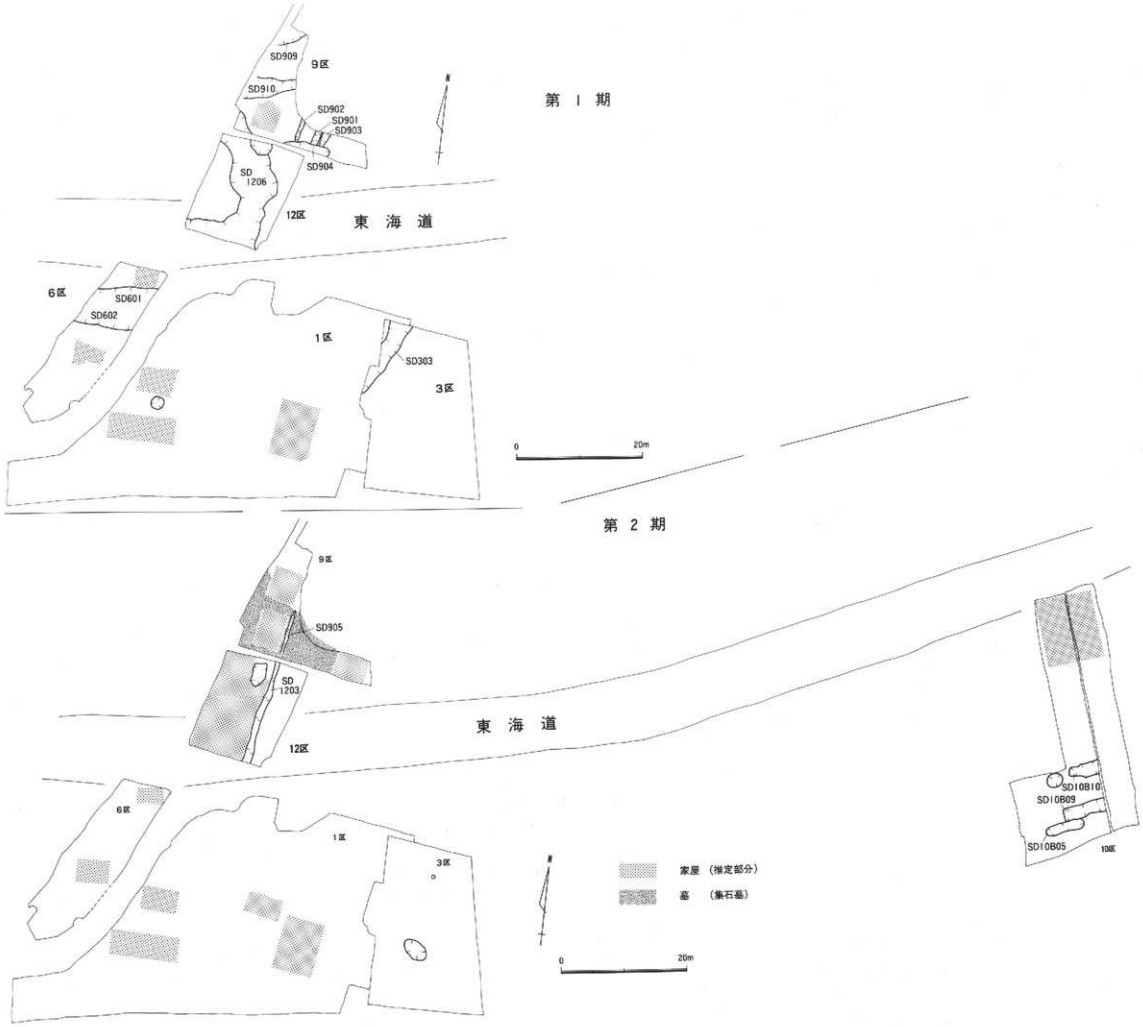
第2節　歴史の中の原川

1．戦国時代の原川

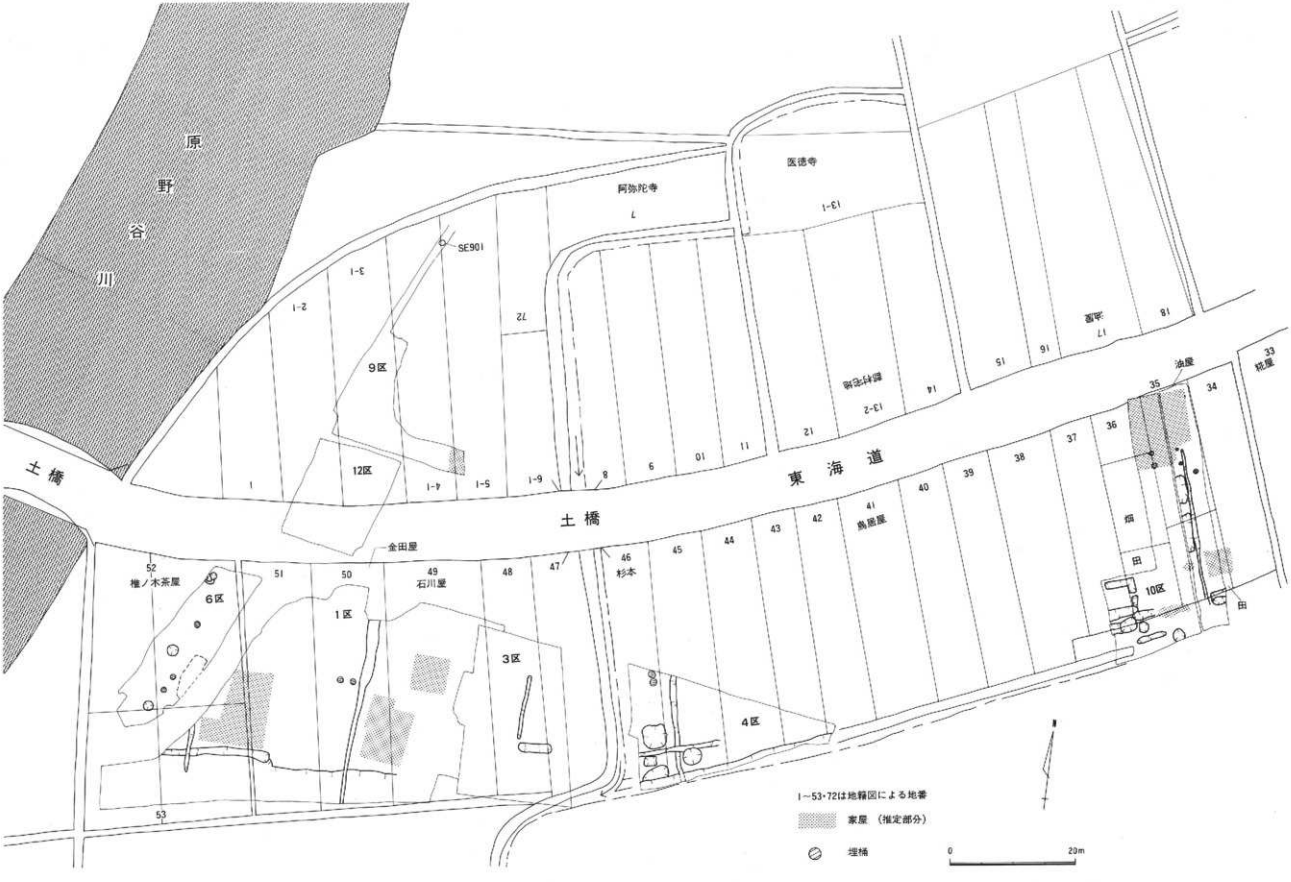
いわゆる文字資料による原川の初見は「原川や背川の水の底清み　すみけん人の心をぞしる」という歌から始まる[10]。その後『言継卿記』弘治3（1557）年3月9日の条に山科言継が駿府からの帰途「懸川より過一里はら川」という記述が認められる[11]。

ところで当時、原川とはどの範囲までさしていたのであろうか。

袋井市久津部『足立家系図』（足立家系図は分家にも数種あり）によると[12]、五郎右衛門藤原規長の条に、「実ハ原川大和守二男也・・・・中略・・・・随三男大和守城跡隠居、於原川元和二年丙辰四月八日卒」とあり、その三男五郎左衛門兼長の条に「・・・略・・・大和守之城跡住於原川・・・以下略」（別本には山名郡原川とある）とある。またこの大和



第 102 図　原川遺跡変遷模式図（第 1 ・ 2 期）



第 103 図　原川遺跡変遷模式図（第 3 期）

守の城跡とは現在の北原川、原川城跡にあたるが、同じ『足立家系図』源五郎安広の条によると北原川は寛永3（1626）年に久津部村の分村として成立したという。

原川浅間宮

現在、不入斗に所在する富士浅間宮鰐口には「原川浅間宮之鰐口大日本国東海道遠洲山名郡不入斗郷」（異体字は正字になおす）とあり、「時天正七己丑」（天正17年）には原川浅間宮なる神社は山名郡不入斗郷に存在した[13]。この原川浅間神社とは現在富士浅間宮境内杜原川神社であろう。そして原川浅間宮は天正18（1590）年に遷宮されたという。さらに同年富士浅間宮が造営されたことが棟札から判明するが、これは富士浅間宮の造営、遷宮にともなって原川浅間宮が浅間宮に合祀されたことを意味するものと推定したい。なお寛文2（1662）年には富士浅間神社には原川富士浅間の名称が使われている[14]。

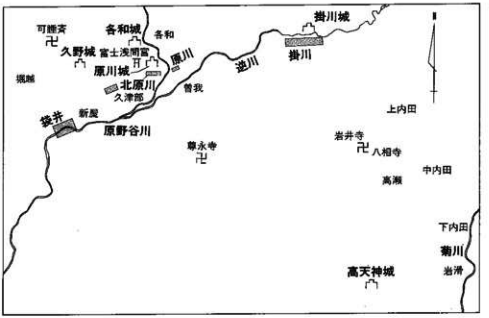
ところで文禄2（1593）年の検地には佐野郡原川村19石とあり、当時の郷村としては異例なほど小規模である。この村高は耕地の極めて少ない原川町にあっては屋敷高にのみあたるのであろう。そしておそらく、江戸時代を通じて23石程度の石高をもつ「原川町」の範囲をさすのであろうことは容易に理解できる[15]。

23石の原川町

では、先の系図や鰐口名にあたる山名郡原川と文禄2年以降の佐野郡原川の違いは、一体何を意味するのであろうか。

戦国時代原川遺跡に大いに関係するであろう原川大和守については後述するが、大和守の城跡が袋井市北原川に所在することは、すでに述べた。

先に結論を述べるとすれば、寛永6年に久津部村分村として成立した北原川村が山名郡原川に該当すると考えたい。その根拠は『足立家系図』の記載、「原川浅間宮」の存在、さらに今回の調査で明らかになった戦国時代の家屋が北原川に近い東側を中心に確認されたこと、さらに戦国末から江戸前期に原野谷川の支流を埋めて原川町が成立していることがあげられよう。おそらく天正18年の原川浅間宮の遷座が原川町の成立に大きくかかわっているだろうと推定される。想像をたくましくすれば、文禄2年以降の佐野郡原川とは慶長検地によって「原川町」として成立するような計画的につくられた在郷町、あるいは宿であり、それ以前の原川は原川大和守の居館を中心とした自然村であったと推定される。



第104図　戦国の原川とその周辺

当時、原野谷川の西岸から6区、1区、9区、12区などの区域に及んで存在したものと理解したい。

原野谷川の本流がどこを流れていたかという問題は、当時の集落景観や村境に大いにかかわってくるが、今回の調査データでは結論は提出できなかった。おそらく新しい原川町の成立にともない、山名郡と佐野郡の郡境にかかわって、かなりの規模の原野谷川の治水工事（流路変更も含む）が行われていることは想像できる。後考を持ちたいところである。

2．原川大和守とその周辺

原川大和守については戦前に伊井宮の宮司を勤めた山崎常磐氏の業績がある[16]。山崎氏以来の指摘であるが、『三河物語』（元和8（1622）年の城主）の永正5（1508）年の三河侵入に伴って遠江の国人衆に「原川」の記載が即ち原川氏の存在としてきた。ところが、『三河物語』は大久保彦左衛門の回想記であって、大久保自身が生まれる以前の永正3年の記事はそのまま事実を表すものとは言いがたい。

天文3年の今川氏輝判物写によると、氏輝は「原川又太郎」に「遠州城東郡内田三ヶ村之内岩鍋」を給している[17]。さらに弘治4（1558）年の今川義元判物写には「原川左馬助」に同じ「岩鍋」の地を安堵しており[18]、このことから又太郎と左馬助との系譜的つながりを想定しえる。

原川大和守の転戦

永禄11（1568）年の武田信玄、徳川家康の領国侵入によって、駿河府中を逃走した今川氏真は掛川城に入城する。これにともない今川方として、国人、地侍クラスが援軍として入城するが、その中に原川大和守とその弟原川讃岐入道が確認される。大和守は引佐郡刑部城に在番しており、弟讃岐入道はその留守中に掛川城に入城したことが判明し、その功を以って氏真は「由比美作分中村之内五十貫」の判物を与えている[19]。

さらに翌12年氏真は大和守には「為遠州本領之替代」として駿河「小田村松鳴分」を給している[20]。この本領には本貫の地原川も含まれると推定されるが、替地の規模が小さく、今川家臣団では中小クラスの被官と推定される。この大和守は掛川城落城後、武田信玄旗下に入っており、天正2（1574）年には武田勝頼から三百貫文を「為本領内田之替」し[21]、給されている。当時原川大和守の所領は三百貫位と評価されたこと、本領が内田であったことが判明しよう。

天正3年には武田氏は葛山三郎の上表をもって大和守に対して「近年以不知行」とし「駿州内長窪六拾貫文」の朱印状を与えている[22]。この間、小山城（吉田町）に籠城していたらしく、武田勝頼の朱印状が「原川又三郎」とともに与えられている[23]。このように大和守は内田岩鍋の原川又太郎と同一歩調をとっていること、大和守の長男が「又衛門」の名を持ち、同じ「又」を通字としていることなどから、両者に同族関係を想定しうる。天正6年以後大和守の名は史料に認められず、武田氏との関係はうかがい知ることはできない。大東町岩井寺に所在する八相寺に伝わる位牌には文禄4（1595）年に亡くなったとしている。なお、大和守は久野城主（袋井市）久野宗弘の妹を妻としたらしく、久野氏系図には「原川大和守則久妻」とあるが[24]、この則久とは年代的には永禄、天正の大和守の父の可能性が高い。なお、原川の地は掛川城攻防戦の勝利によって徳川方の手にあったと考えられ、元亀3（1572）年三方ヶ原の戦いの前哨戦である一言坂の戦いの功によって桜井勝次に「遠洲新谷、袋井、原川等三所の内」において領地を与えられている[25]。

3．江戸時代の原川町

原川村は文禄2（1593）年の検地において19石の石高が記録されている。つぎの慶長9

(1604) 年の検地については「資料調査巡村記」(名著出版刊本『掛川誌稿』付載以下「巡村記」に略記) に「原河町御検地帳」の抄録が記されている[26]。なお『掛川誌稿』の本文記述はこれに基づくと考えられる。この『掛川誌稿』では「原川町六十四人の宅地及び田畑の歩数を載せたり」としているが、先の抄録では宅地は62ヶ所である。そのうち同一人として2ヶ所の宅地所有が数え上げられているので、屋敷地の年貢を負担するものは60名であろう。「巡村記」によれば、うち5軒の屋敷地の面積を知りえるが、2畝から4畝で江戸時代としては平均的な規模である。

「資料調査巡村記」と原川町

原川町は慶長期、高23石1斗4升5合、屋敷合1町1畝18歩、上田1反23歩、上畑8畝23歩、下畑2畝4歩である。さらに庄屋2名、かち (徒歩) 1名、定使1名が置かれていたことが判明する[27]。

ところでこの時期、戸数に比べ屋敷地の範囲が狭いこと、したがって「巡村記」記載の4畝の屋敷地は原川町では大きな規模と推定される。慶長期の屋敷地総面積は、江戸後期に比較すると約半分である。それに反して田畑は約2反余みられ戸数の割に密集し、開発途上の様相を呈しているといえよう。さらに原川町は、戸数に比べ庄屋が2名任じられるなど特異なあり方を示している。なお残存する史料によれば、原川町の戸数は慶長期がピークを示しているといえよう。

さて、江戸時代原川町に大いにかかわった近世東海道との関係は如何なるものであったのであろうか。さきに遺構の変遷で述べたように、近世東海道は17世紀前半以降に位置を定めたようである。この点では『掛川市史　中巻』が『掛川誌稿』の「成滝村」を引き成滝村周辺の近世東海道の整備を寛永以後としたが[28]、今回の調査結果からも十分首肯できる。おそらく掛川周辺では近世東海道の整備は、寛永以後に行われたと考えておきたい。

鈴木泰山氏によれば、17世紀前半法多山仁王門の建立の寄進者の中に原川町安達姓を名乗る者が確認されたという[29]。当時、原川町周辺では久津部、北原川に足立姓の有力な一門が認められるところから、本来「安達」姓は「足立」であろうと推定される。なお、現在でも原川5番地に足立氏は居住している。

宝暦5 (1755) 年、北原川村の「年貢米払勘定目録」によると「原川平蔵渡り」とあり、この時期原川町には米商人かもしくは酒造業者に平蔵なる者が確認できる[30]。

ところで『延絵図』では原川町に阿弥陀寺、医徳寺 (『延絵図』では感徳寺となっているがイトクジと呼ばれており、医徳寺もしくは威徳寺であろう。) の寺院が認められている。医徳寺は掛川市各和永源寺末「黒印一石」曹洞宗で[31]、17世紀には成立していた。その後たびたび廃寺となったが、また再興されたらしい。ところが明治維新の廃仏棄釈で決定的となり、その境内の大半は北野天満宮に勧進されたが、一部は戦後まで残ったようである。なお本堂部分は各和村にあったためか「各和村御前帳」に記載されたと「巡村記」に述べられている。阿弥陀寺については掛川市神明町真如寺末 (曹洞宗) であって、廃仏棄釈で廃寺になったようである。

原川町の寺院

聞き取りによれば、原川町の檀家は医徳寺の方が多かったようであるが、他村の久津部などの檀家も多かったようで、近世檀家寺請制度のもと、概して原川町の住民は近隣の村々から移住した人々も多かったことをうかがわせる。また阿弥陀寺の寺名から本来、浄土系の寺院とも考えられ、のちに曹洞宗に改宗された可能性も高い。

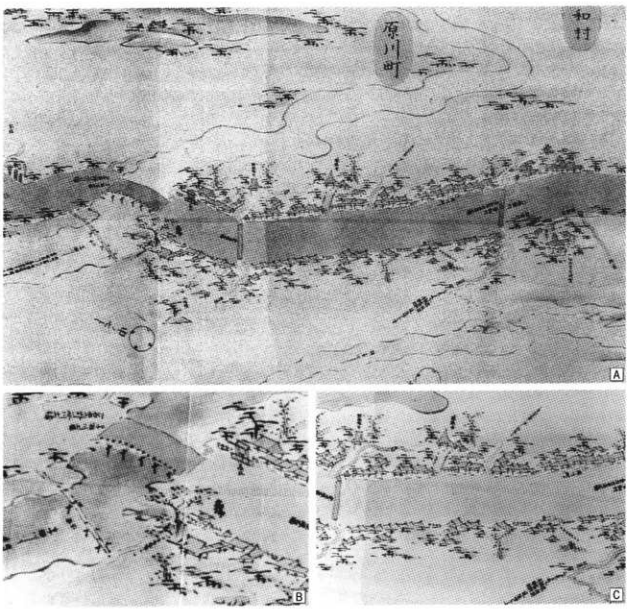
ところで江戸時代原川町の戸数はどのような変化をたどったのであろうか。

文化文政の『掛川誌稿』の段階では46軒、安政大地震の段階では48軒、明治22年頃には

51軒が存在した。文化３（1806）年に完成した『延絵図』では、原川町は街道に面して別屋をもった家屋と小さな家屋の家並が描かれている。したがってどこまでが１家屋を構成していたかの判断はできないが、全体で46から47軒と考え、50軒に及んでいない。『延絵図』をみる限り、いずれも平屋で屋根材は茅か板材であろう。

発掘調査の結果、ＳＥ901と10区から瓦が出土し、その周辺に屋根瓦を使用した建物が推定されるが、部分的に使われたと考えられその量は少ない。

掛川藩御用達　19世紀初頭段階では、掛川藩御用達には三浦家と高100石余の八左衛門が任じられている。天保・安政期には立場の経営にあたった伊藤又左衛門が、幕末には石川団兵衛が庄屋役を



第105図　『東海道分間延絵図』の原川町　A　全景　B　立場部分　C　寺院部分

任命されているが、一定の豪商の家に固定されることなく、明治の戸長制まで続く(32)。『五街道細見』(安政年間)によれば、原川町には休場として「金田や林蔵」の名が認められる。この「金田や」は各種案内記に明治15年まで登場し、明治14年の「五十三次道中記」には「鳥居や左源次」の名前がみられる(33)。この「鳥居や」とは江戸後期の『東海道人物誌』に記載のある鳥居左平次(植木　生花)の子孫であろう。立場(椎ノ木茶屋)、金田屋、石川屋など、いずれも6区から1区に居を構えた人々である。

金田屋と鳥居屋

また天保7(1837)年、森町の駿遠両国鋳物師大工職の山田家から鋳掛職を許された者に原川町・清兵衛の名前がある(34)。あるいは3区で出土した鍛冶鉄滓もこれに関連するかも知れない。

鋳掛職人

こうしてみると原川町では東海道に関係する生業は町の西側に集中し、立場以外、規模は小さい。原川町は間の宿ゆえ町場として成立していたというよりも、油屋、旅屋、鋳掛屋などが存在したことにより、物産の集中と売買が重なりあって成立していた町といえよう。

即ち原川町は、街道を媒介としながらも在郷町としての要素が強いと考えておきたい。

天皇の小休所

明治元年、掛川藩の手によって、原川1番地に天皇の小休所が造営され行幸を迎えた(35)。明治維新にかかわる原川町のエポックといえるでき事であった。

原川町は、江戸時代を通じて華やかな歴史の表舞台にかかわったことや一揆、水争いの記録もなく、また歴史の中に記録をとどめるような人物も登場しない、ごく普通の小さな町であった。そのため地域史の中でも忘れられた存在であった。しかし歴史の中でこうした町や村がほとんどを占めることも事実である。文書や記録は書かれるべきして書かれ、残るべきして残ったものが多い。

原川町のようなごく普通の村や町の記録されなかった歴史は、逆説的な意味で普遍的な歴史であり、江戸時代の標準的な姿を表しているかも知れない。

第3節　カワラケと内耳鍋について

1．カワラケについて

原川遺跡出土のカワラケ皿は、「第3章　出土遺物」の概述でふれたように、燈明皿としての使用痕や墨書の記されたものがあり、若干のコメントをつけておいた。

ところでカワラケは12世紀代に土師器の坏や皿に変わって出現したと考えられる中世土器の一種である。同時に大・中・小の規格をもって成立しており、その限りにおいてきわめて斉一性の高い土器であるが、成形や底部切り離し技法に地域色を有する点も興味深い。

原川遺跡では、古瀬戸後期から幕末の陶磁器に伴ってカワラケが出土している。本節では本地域の中であまり焦点の定まらなかったこの種の土器について、その編年的位置を考えてみたい。なお資料の性格上、戦国時代から幕末に限定して考えることをあらかじめことわっておく。

カワラケの成形は手捏ねとロクロ成形に大別される。さらに法量の点では、大・中・小・細小に分けることができるが、法量は時代とともに変化があるようである。主に儀式用や燈明皿として使用されたと考えられている。

カワラケの分類

第Ⅰ期

古瀬戸後期から大窯Ⅰ期の陶器を伴う時期で、原川遺跡ではロクロ成形のカワラケの中に該当資料が考えられるが、明瞭ではない。

手捏ねカワラケでは、天竜市笹岡城跡の例を参考に掲げた。法量は大（15cm前後）・中（14～13cm）・小形（10cm前後）の規格が認められる。量的には小形が多いが、中形も少なくない。大形は例外的にしか存在しない量である[36]。

中・小のカワラケは底部を粘土板に円形に造り、体部を折り曲げて成形するものが多い。このような手捏成形が主である。色調は白色系で、形態的には体部から口縁部にかけて大きく外反し、さらに口縁部を内側に折り曲げているものと、体部上位で屈曲させ傾斜変換点をつくりさらに外反させたものもみられる。底部から体部境界に指頭痕が多く残っている。

成形の違い

これらの特長をもつカワラケは県内では西遠地域に多い。一方、伊豆（県東部）の堀越館跡出土のカワラケは、原茂光氏が指摘したように前代以来ロクロ成形の赤カワラケ系である[37]。駿河のこの時期のカワラケがあまり明確になっていないので、ロクロ成形と手捏成形の境界はどの辺にあるのか明確ではないが、少なくとも東遠江の勝間田城跡ではロクロ成形が主体である[38]。この成形の違いについては遠江がキーになると推定される。比較的、資料の多く提出されている浜名湖西岸では、後藤健一氏の指摘通り[39]、手捏成形が主体である。近年では新居町城ノ前遺跡出土のカワラケが良好なあり方をしめしている[40]。ただし、天竜川東岸の笹岡城跡では手捏成形カワラケが圧倒的に多いなど複雑な様相を呈している。

第Ⅰ期

カワラケの編年

大窯Ⅰ・Ⅱ期からⅢ期の陶磁器を伴う時期であるが、原川遺跡では大窯Ⅰ期に純粋に併行するタイプは摘出できなかった。ほとんどが、大窯Ⅱ・Ⅲ期の陶器に伴うタイプを抽出した。成形はロクロ成形と手捏成形の両者が認められるが、前者が圧倒的に多くなる。カワラケにおける成形の違いは、この時期に入ると、後藤氏が指摘したように浜名湖を境界とし、成形に明瞭な違いをみせるようになる。

手捏成形のカワラケは量的にも少ないこともあって、詳細は不明な点が多いが、白カワラケ系で、法量による大・中・小の差がほとんど認められず、口径13～12cm前後のタイプに限られるようである。大・中の規格品がきわめて少なくなったものと思われる。

成形は底部を造り、粘土の接合痕が残るところから、体部を粘土を輪積みすることによって成形しているようである。ただし、輪積み痕は斜めになったり、ゆがんでいたりしており、かなり雑に造ったものと判断される。底部には指頭痕が残されているが、それを消すように指ナデしている。体部内外面は横ナデを施し、見込みには一方向ナデを施している。

一方、ロクロ成形のタイプは赤カワラケ質と白カワラケ質の両者がみられる。口径は11cm前後で、器高は2.5～2.2cm前後を測る。

底部にスノコ状圧痕が付くものもある。ただし、量は少ない。底部が小さく体部が大きく開くタイプとそれ程ではないタイプに細別が可能と考えられる。

第Ⅱ期

大窯Ⅲ期以降、初期登窯の製品が伴う時期と考えたい。

手捏成形は白カワラケ質で、口径10cm前後、器高2.5～2.2cm前後を測る。器形はⅡ期のカワラケとほとんど変化は認められない。見込みがわずかに凸底を呈するタイプがある。外面は口縁部周辺のみ横ナデ調整を施すが、内面はていねいに木口を使ったと考えられる調整具でナデている。見込み部には一方向ナデを施している。

ロクロ成形カワラケは、ＳＰ12130で、中形と小形のタイプが出土した。底部腰からゆる

やかなカーブで口縁部へつづくタイプである。新居町御殿遺跡の出土例にこのタイプが認められ、第Ⅲ期とした[41]。特に小形カワラケは器壁や底部が厚く造られている。焼成は甘い。色調は白カワラケ質と赤カワラケ質の中間的色彩を呈している。

このカワラケには内面に同心円紋の施されたタイプや硬質のタイプなど陶器窯製品と判断されるものも認められる。

第Ⅳ期

17世紀後半代と考えられる陶器を伴うカワラケである。法量の点では大はみられず、中形も少ない。

手捏ねカワラケでは全形をうかがえる資料が認められず、天竜市三蔵塚古墳群で出土し[42]、志野碗を伴った資料を掲げた。内外面に指頭痕を残し薄く造られている。やや深いタイプで指頭痕が明瞭でないタイプも認められた。焼成は甘く色調は白カワラケ質である。

ロクロ成形カワラケは底部脇が直線的で、大きく外反するタイプと底部脇がわずかに丸味をもつタイプがある。口径は10cm前後のもの、8cm以下でやや小振りのものが認められる。いずれも内外面、見込みを横ナデしている。器形は口径に比べ、底径が狭く器高の高い印象のものが増加する。焼成は硬質の陶器窯製品と従来の土師質の両者が認められる。

なお、Ⅱ期以降、ロクロ成形カワラケが多数を占める。

第Ⅴ期

宝永の噴火で埋没した永坂遺跡の石場立建物跡から、直径6cm前後、器高1.2cm前後を測る薄手の手捏成形カワラケが検出されている[43]。この種のタイプは原川遺跡では認められなかったが、時期の明確な資料であるので掲げておく。円形の粘土で底部を造りその端部を折り曲げて成形としていると観察できた。赤カワラケ質である。

ロクロ成形カワラケは口径が斉一的になり、口径が10cm以下で8cm以上、器高が4～3.5cm前後に収まるタイプに限定される。焼成は硬質のもの、甘いものの両者がみられる。

また器形は口径に比べ底径の狭いタイプで、器高の高い印象のものが多数を占める。ほかに18世紀中頃から後半の陶磁器を伴った森町観音堂21号墳の近世埋葬では[44]、底部が上底で、口径が7.9～7.5cm、器高3.8～3.5cmの薄手のカワラケが出土した。また、このタイプのみ底面に墨書記号が書かれており、他のカワラケと異なった用途を考えざるを得ないが、時期の判断できる資料なので掲げておく。

原川遺跡ではⅣ期・Ⅴ期にはロクロ成形カワラケがほとんどを占めており、後藤健一氏の指摘したカワラケの地域色では浜名湖東岸の様相と異なる点はない[45]。

ただし、カワラケに関して小規模生産が考えられ、その流通も地域的に狭いと推定される。さらに器形変化にとぼしいことから、カワラケの細分は注意が必要であり、さらに当該期の資料も極めて少ないことから、小論ではカワラケの変遷を大枠でしかとらえられておらず、後考を待つところが大きい。

2．内耳鍋について

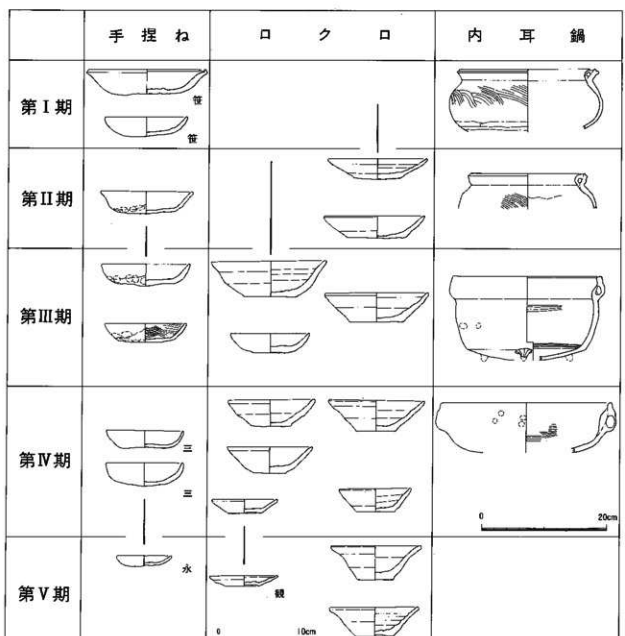
内耳鍋についてはすでに論じたことがあり[46]、その際、使用した分類基準に基づき先の小論の事実誤認を訂正しながら、原川遺跡出土の内耳鍋について述べてみたい。

遠江地域においては、内耳鍋は古瀬戸後期の陶器に伴って出現しているが、原川遺跡においては編年表1期のようなくの字型内耳鍋が古瀬戸後期併行期に成立している。この現象は大窯Ⅲ期併行期まで認められている。ところで原川遺跡では内湾型内耳鍋は大窯Ⅲ期以降に出現している。大窯Ⅱ・Ⅲ期の遺構から出土した内耳鍋は、くの字型と内湾型が同 内耳鍋の編年

系譜の違い　時併存していることも多く、両者について系譜の違いをうかがわせると理解している。ところが、大窯Ⅲ期以降の志野丸皿や初期登窯製品に伴う遺構出土の内耳鍋は、編年図のⅢ期のような内湾型内耳鍋がほとんどを占めており、すでにくの字型内耳鍋は認められない[47]。16世紀末から17世紀初頭に形態上、もしくは系譜に大きな変化があったことをうかがわせている。

ところで、くの字型内耳鍋は、古瀬戸後期のタイプと大窯期のタイプでは器形や調整にあまり変化が認められず、胴部の最大径の位置や口縁部のシアゲに若干、変化が認められるのみである。

17世紀前半に入ると内湾型内耳鍋は内耳付近の屈曲がなくなり、半胴形で底部が平底気味に大きく変化する。外面の細かいタテ方向のハケ目調整が2段以上あったものが、1段



参考出土例　笹＝笹岡城跡　三＝三蔵塚古墳群　永＝永坂遺跡　観＝観音堂21号墓

第106図　原川遺跡出土カワラケ・内耳鍋編年図

ないし2段に省略される。ただし、断面上向気味につけられた内耳の孔はそのままであるが、孔を取りつける際、強く外側におさえている。また底部から胴部下位のヘラ削り調整は、Ⅲ期のものが横ナナメに細かく調整しているのに比べ、省略されたり、タテ方向に荒く施されている。

なお、伴出した陶器から17世紀後半から末（強いていえば17世紀第4四半紀）の中には内耳鍋はほとんど認められなくなる(48)。

内耳鍋の画期

また、内耳鍋の変化とその分布域を重ねあわせると、その変化がどのような意味をもっていたのであろうか。内耳鍋の大きな画期の時期、16世紀後半から末にかけては今川氏が亡び徳川氏さらに豊臣系大名の移封があり、この動向がどのように内耳鍋製作集団に影響を与えたか興味あるところである。

さらに、17世紀後半においてみられた内耳鍋の消滅は、おそらく農村部においても鋳物師の中に鍋釜職人が分化して安定した供給を行ったことに要因があると考えられる。

注

(1) 鈴木基之「位置と環境」『原川遺跡Ⅰ』1988
(2) 東京国立博物館『東海道分間延絵図　第9巻』1980
(3) 原田和『浅羽風土記』1957
(4) 注2に同じ。
(5)「東海道宿大概帳　五」『近世交通資料　四』1970
(6) 掛川市原川12番地松浦友司氏（明治28年4月21日生）教示。
(7) 中川良一『掛川風俗史稿』1985
(8) 関七郎『史料にみる東海道大地震』1977
(9) 掛川市役所蔵。小論でも述べたが、方位、面積についてはあまり正確とはいえない。
(10) 宗碩『藻塩草』（安田章解題　古活字版）1979
　なお『夫木和歌抄　巻二十四』（静嘉堂文庫本）『新編国歌大観』1984には「遠江原かはといふ川を渡るに霧ふかくして」と承久の変に連座した光俊朝臣の詞書とつぎの歌がよまれている。「霧がれのはらの川霧うきてのみたびの空にもあるおもひかな」。これにより現在の原野谷川が「原かは」と呼ばれていたことが判明する。
(11)『言継卿記』（国書刊行会刊本）1914
(12) 袋井市久津部足立家所蔵　筆者実見。
(13) 袋井市国本　富士浅間神社所蔵。
(14) 本多隆成「幕藩体制の成立と袋井」『袋井市史』1983
(15)『掛川誌稿』（名著出版刊本）1972
(16) 山崎常盤「掛川城攻防戦と原川大和守関係者の顛末」『静岡県郷土研究第16輯』1941
(17)『浅羽本系図』『袋井市史　史料編1』1981
(18) (17) に同じ。
(19) (17) に同じ。
(20) (17) に同じ。
(21) (17) に同じ。
(22) (17) に同じ。
(23) (17) に同じ。
(24) (17) に同じ。
(25)「寛永諸家系図伝百十五」『袋井市史　史料編1』1981
(26) (15) に同じ。
(27) (15) に同じ。
(28) 谷村茂「掛川宿と日坂宿」『掛川市史　中巻』1984

(29) 鈴木泰山「法多山尊永寺の楼門とその寄進者」『磐南文化　第9号』1983
(30)「年貢納払勘定目録」『袋井市史資料　第6巻』1979
(31)「可睡斎配下寺院本末牒」『可睡斎史料集』1989
(32)『曾我村誌』1913
(33)「東海道人物誌」(1803刊)『近世人名集成　第2巻』1976
(34) 笹本正治「近世の鍋釜商人と鋳掛」『地方史研究　201』1986
(35) 静岡県『明治天皇聖蹟』(静岡県史蹟天然物調査報告　第十一集) 1937
(36) 足立順司「静岡県下における鹿城年代と陶磁器の年代観」『貿易陶磁研究　6』1986
(37) 原茂光『御所之内遺跡発掘調査報告書』1985
(38) 及川司『勝間田城跡Ⅰ』1986
(39) 後藤建一他『長谷元屋敷遺跡』1987
(40) 岡本聡『城ノ前遺跡発掘調査報告書』1989
(41) (39) に同じ。
(42) 足立順司『三蔵塚古墳群』1980
(43) 鈴木恒治「宮士宝永噴火と長坂遺跡」1963　『御殿場市史　別巻Ⅰ』1982
(44) 内藤晃　遠藤才文　足立順司『観音堂横穴古墳群』1979
(45) (39) に同じ。
(46) 足立順司「内耳鍋の研究」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅱ』1987
(47)　先の小論「内耳鍋の研究」では湖西市長谷元屋敷遺跡の第3c層および灰溜りの理解に事実誤認があり、くの字型内耳鍋の終末について17世紀後半まで続くと考えた。ところが、17世紀前半代の空白があり、良好な資料が得たれるところであったが、今回、原川遺跡の分析によって小論のように訂正しておきたい。
(48)　原川遺跡以外では磐田市長江崎遺跡のSK－5に17世紀中頃から後半の陶器に伴なって内耳鍋が出土している。
　この内耳鍋は小論の足立分類第Ⅳ期に比定される。ただし胎土に金雲母が含まれ、原川遺跡出土の内耳鍋の胎土と異なり、製作場所の違いをうかがわせる。
　佐口節司『長江崎遺跡発掘調査報告書』1987
　資料の実見にあたり、磐田市埋蔵文化財センターのおせわになった。

原川遺跡出土漆器資料の製作技法

（財）元興寺文化財研究所　北野　信彦

1．はじめに

原川遺跡からは、東海道脇の近世原川在郷町関係の遺物が多数出土している。その内には漆器資料も含まれており、今回これらの製作技法を自然科学的な手法を用いて調査する機会を得た。その結果を報告する。

2．調査方法

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり挽き物の形態にする木胎製作の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、装飾、研磨作業を行う様漆の工程から成り立っている。

本稿では漆器資料の製作技法に関する調査として、まず形態、漆塗り表面の状況を表面観察した後、（1）用材選択・（2）漆膜面の漆塗り構造・（3）色漆の使用顔料　等の項目別に自然科学的な手法を用いた分析を行なった。以下項目別に調査方法を記す。

（1）用材選択（樹種鑑定）

樹種の同定作業は、出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、遺物本体をできるだけ損傷しないように破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。切片は常法に従い脱水し、検鏡プレパラートに仕上げた。

（2）漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、簡易顕微鏡を用いて細部の観察を行なった。次に漆器資料の表面洗浄作業の際に出た1mm×3mm程度の漆膜剝落片を採取し、合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイトGY1252　JP．HY837）に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ、塗り重ね構造、顔料粒子の大きさ、下地の状態等について顕微鏡観察を行なった。

（3）色漆の使用顔料の定性分析

色漆に用いられた顔料の無機物に関する定性分析には、先の漆膜剝落片をカーボン台に取り付け、日立製作所S－415型の走査電子顕微鏡に掘場製作所EMAX－2000エネルギー分散型X線分析装置（X線マイクロアナライザー）を連動させてそれを用いた。分析設定時間は500SEC．分析ポイントは30倍スポット照射。なお分析チャートの補正には、Geochemical Journal vol8 p175-192 (1974)「1974 compilation of data on the GSJgeochemical reference sample JG 1 grandiorite and JB-1 basalt」Atusi Ando and othersのJG-1、JB-1サンプルを用いた。

3．調査結果

今回の調査で用いた漆器資料は合計16点である。これらの漆器資料について、前章で項目別に記した方法を用いて製作技法の調査を行なった。その結果を（第4表）に示す。

まず、本漆器資料の材の利用（用材選択）は、広葉樹5種類である。以下、同定理由を記す。

・クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.（ブナ科　FAGACEAE）

構成要素は道管要素、仮道管、木繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞の5種類である。環孔材の孔圏部の幅はかなり広く、孔圏外で急に道管の大きさを減じ、数個が複合して火炎状に配列する。穿孔は単穿孔。放射組織は平伏細胞のみからなる同性放射組織であり、単列、1－15細胞高が板目面に平等に分布する。

・ブナ　Fagus crenata Blume（ブナ科　FAGACEAE）

構成要素は道管要素、木繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞の4種類である。散孔材で、道管はほぼ均等に分布するが、孔圏外でその大きさや数を減じる。道管に接して繊維状仮道管や軸方向柔細胞が認められるほか、非常に列数の広い放射組織が認められる。穿孔は階段穿孔および単穿孔。放射組織はほぼ平伏細胞からなる同性で、単列、2－数列、広放射組織が認められる。

・ケヤキ　Zelkova serrata Makino（ニレ科　ULMACEAE）

構成要素は道管要素、木繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞の4種類である。環孔材で孔圏道管は大きく1－2列で単穿孔。孔圏外道管は、数多く不規則に複合し、大きさも急に減じる。小道管内壁にラセン肥厚を認める。放射組織は、異性で6－7細胞幅のものが多い。

・カツラ　Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.

（カツラ科　CERCIDIPHYLLACEAE）

構成要素は道管要素、木繊維、軸方向柔細胞ほぼ放射柔細胞の4種類である。散孔材で道管は単独かまたは2－3個不規則に接続し、年輪全体に均等に分布する。全体的に道管の占領面積が広く、道管中にチロース断面が多く認められ、階段穿孔。木繊維は壁が薄く小型の有縁壁孔を多数もつ繊維状仮道管である。放射組織は平伏細胞と方形もしくは直立細胞よりなる異性で、単列および多列の付文が交互にあり1－50細胞高にも達する。

・トチノキ　Aesculus turbinata Blum（トチノキ科　HYPOCASTANACEAE）

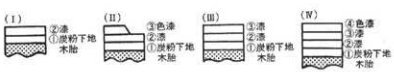
構成要素は道管要素、木繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞の4種類である。散孔材で楕円－長楕円形の道管がほぼ均等に分布する。孔圏外へ移行しても道管径はあまり変化しない。多くは孤立管孔であるが所により2－5個複合し放射方向に配列する。1－3細胞高のターミナル柔細胞を認める。穿孔は単穿孔で、道管壁にラセン肥厚を認める。放射組織は同性で、単列放射組織のみよりなる。層階状の配列が顕著。

第4表　出土漆器資料観察表

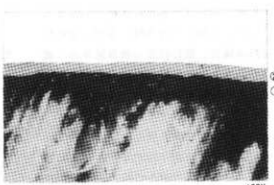
挿図No.	器形	樹種	文様の有無(色)	表面の塗り 内	表面の塗り 外	漆塗り構造 内	漆塗り構造 外	色漆の使用顔料 内	色漆の使用顔料 外	(外)の文様等
2	椀	ブナ	有-紋-黒	赤	赤	I	II	ベンガラ	ベンガラ	
6	椀	トチノキ	無	黒	黒	I	I			
7	椀	カツラ	無	黒	黒	III	III			
8	椀	カツラ	無	黒	黒	III	III			
9	椀	クリ	有-紋-赤	赤	黒	I	I	ベンガラ		朱
10	椀	ケヤキ	有-絵-赤	黒	黒	I	II			朱
11	椀	トチノキ	有-紋-金	赤	黒	I	II	ベンガラ		スズ
12	椀	ブナ	無	赤	黒	I	I	ベンガラ		
13	椀	ブナ	無	赤	黒	I	I	ベンガラ		
15	椀	トチノキ	無	赤	赤	I	I	ベンガラ	ベンガラ	
16	椀	トチノキ	無	赤	赤	I	I	ベンガラ	ベンガラ	
17	椀	トチノキ	有-紋-金	赤	黒	I	II	ベンガラ		スズ
18	蓋	トチノキ	無	黒	黒	I	I			
19	大皿	ブナ	無	黒	黒赤	III	IV		ベンガラ・朱	
21	中皿	クリ	無	黒赤	赤	I	I	ベンガラ	ベンガラ	
22	中皿	クリ	無	黒赤	赤	I	I	ベンガラ	ベンガラ	

次に漆器表面の漆塗り技法をみてみる。塗りは地と文様からなり、無文様で地塗りのみの漆器、家紋もしくは漆絵の文様を地外面に描く漆器に分類される。

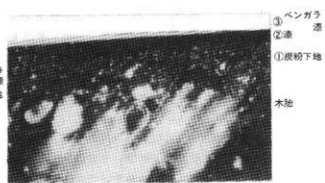
漆膜面の塗り構造、特に木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、いずれも無機物を含んでいないためピーク自体がほとんど見出されなかった。これらをさらに顕微鏡観察することにより、炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地（代用下地）と理解した。各漆器資料の漆塗り構造を分類してみると（第107図）に示すように地の漆塗り層は、1層塗り、2層塗り、3層塗りと分けられ、文様等の装飾はいずれも地の上塗り層の上に描かれていた。（第108・109図）



第 107 図　漆塗り構造の分類

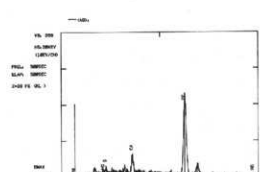


第 108 図　塗り構造（Ⅰ）（顕微鏡写真）

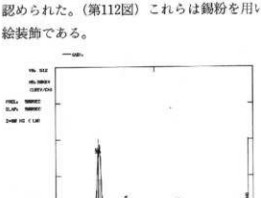


第 109 図　塗り構造（Ⅱ）（顕微鏡写真）

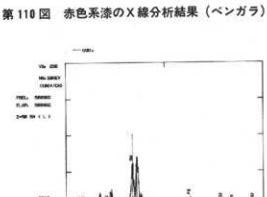
赤色系漆を定性分析してみると、Fe（鉄）のピークが強く認められる資料（第110図）Hg（水銀）およびS（硫黄）のピークが強く認められる資料（第111図）の2種類に分類された。これはそれぞれ、ベンガラ（酸化第二鉄 Fe_2O_3）、朱（辰砂もしくは水銀朱 HgS）等の赤色系顔料を用いた赤色系漆であると理解した。№11・17漆器資料の地外面の文様に用いられていた装飾蒔絵の定性分析を行なってみると、いずれもSn（スズ）のピークが強く認められた。（第112図）これらは錫粉を用いた代用金蒔絵装飾である。



第 110 図　赤色系漆のX線分析結果（ベンガラ）



第 111 図　赤色系漆のX線分析結果（朱）



第 112 図　金蒔絵装飾のX線分析結果（錫粉）

4．考察

以上の調査結果をふまえて、原川遺跡出土の漆器資料の製作技法についてみてみる。

まず、各漆器資料の用材には、広葉樹のクリ・ブナ・ケヤキ・カツラ・トチノキ等の材が選択されていた。末沢（1975）の研究によると、近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には、早晩材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくはケヤキ・クリ等の環孔材ではあるが靭性がある材が適材であるとしている。これらの木材の組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗り等を考慮に入れて分類してみると（第5表）に示すようになる[1]。これから考察すると本漆器資料は、良材であるケヤキ・クリ材と、加工や入手の容易さという大量生産の点からきわめて一般性が高いトチノキ・ブナ材などの2種類のグループに分かれた。いずれも挽き物の用材としては、一般的なものであることが分かる。

第5表　ろくろ挽き物の用材分類一覧表

A 環孔材	a．ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表われる。堅硬であるが靭性もあり、木皿など薄手物に適する。
B 散孔材	b．サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが、加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c．ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軟かくて加工は容易であるが、乾燥が難しくて狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d．エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白く軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目にもよく、彩色も し易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

橋本鉄男「ろくろ、ものと人間の文化史31」1979などを参考にして作成

次に、本漆器資料の漆膜面の塗り構造は、いずれも木胎と漆塗り層の間の下地層が炭粉下地（代用下地）であった。さらに漆塗り層まで含めた漆膜面の塗り構造をみてみると4種類の塗り技法に分類された。

このような近世漆器の製作技法のあり方を示す民俗事例の一つに、新潟県糸魚川市大所のナカジマ家小椋文助氏による実用に即した近世木地師、漆器椀の製作技法に関する口碑資料がある[2]。

それによると、［上品］布着せ（椀の欠けやすい縁や糸じりに麻布を巻く）～サビ下地（砥の粉を生漆に混ぜたサビを2回塗布）～下塗り（生漆）～上塗り（生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆）の工程をふみ人一代は持つ堅牢なもの。［下品］炭粉炭地（柳炭や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地）～上塗り（生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入して用いる粗悪な漆）。

［中品］下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したり、ミガキをていねいにしたりする。下品よりかなり持ちがよい。などとしており、各ランク別の工程をよく示している。この事例を参考にして本漆器資料の塗り構造をみてみると、いずれも一般的な日用漆器の塗り構造であるといえよう。

本漆器資料の赤色系漆の使用顔料をみてみると、ベンガラと朱の二種類の赤色系顔料が用いられていた。ベンガラ、朱ともに赤色系漆の顔料としての歴史は古いが、近世漆器資料の顔料としては朱に比較してベンガラの方が一般的であったとされている。この点について石川県輪島市の「住吉文庫文書」「高森辰巳家文書」等の文献史料には、幕府の統制物資であった朱の入手の煩雑さに関する記載がみられ、江戸時代当時の状況が理解される[3]。本漆器資料の場合ベンガラを用いる例が多いが、漆器内面にはベンガラを用い、外面の漆絵にのみ朱を用いる例（No.9・10）中塗りはベンガラ、上塗りは朱を用いる例（No.19）が見出され、朱の使用に関して興味深い結果といえよう。次に蒔絵装飾の成分には金粉（Au）を用いる例の他、真ちゅう粉（Cu＋Zn）、錫粉（Sn）、金粉と錫粉の混合（Au＋Sn）、石黄（As＋S）等の代用

金粉、銀粉（Ag）を用いる例が確認されている。本漆器資料の場合いずれも錫粉（代用金粉）が用いられており、漆器資料の性格を考える上で参考となる。

以上、項目別に原川遺跡出土漆器資料の製作技法をみてみた。その結果、若干の程度の違いはあるものの、原川遺跡出土の漆器資料は、いずれもきわめて実用に即した生活什器としての飲食器類であることがわかった。

一般に、生活什器の一つである漆器資料の形態や製作技法のあり方は、資料の製作年代、生産地、文化的な時代背景、その資料を所有していた階層、使用目的等の差によって、ある程度の傾向があったことは、十分に考えられることである。

近世、とりわけ江戸時代は、今日の各地の伝統工芸、物産、名産品の基礎をなす地方産業の多くが発達した時代でもある。本稿で取り上げたような日常生活で用いられていた漆器の生産に関しても、主要な大規模生産地から、きわめて地域色の強い小規模な地方生産地まで、数多くの生産地が発達した。そして、これらの生産地は、特に文化・文政年間以降、個人や、複数の組織による椀講などの需要に応じて、十人揃、二十人揃など、優品から廉価で大量生産的なものにいたるまで、さまざまな器形の漆器を複雑な流通経路で消費地に供給していたようである[4]。

原川遺跡出土の漆器資料の場合でも、№6・18、7・8、12・13、11・17、21・22などは、形態および製作技法の特徴からきわめて類似性の高い資料である。これらが、いわゆる先に記したような同一産地になる一括漆器資料である可能性も考えられる。

さて原川遺跡は、当時の物流の大動脈の一つであった東海道街道脇の近世原川「在郷町」を中心としている[5]。このような地域の人々の生活と密着していた出土陶磁器や漆器等の生活什器類は、江戸市中、名古屋城下町等の大消費地遺跡や、きわめて在地性が強い地方遺跡とはおのずと供給経路などの性格が異なっていたようである。この程に関する調査は、ここ数年来、都市域の発掘調査例の増加にともない、大消費地遺跡出土の陶磁器資料を中心にしてかなり行なわれるようになってきた[6]。しかし、取り扱いの困難さなどにより、出土漆器資料の調査は立ちおくれ、その実態は不詳な点が多い[7]。とりわけ原川遺跡は、当時の社会階層の大半をなす在地の人々の生活を知る上で、きわめて示唆的な遺跡の一つである。その意味でも、今回の調査結果をさらに細かく検討して他地域のそれとの比較を行なうなど、今後は資料の充実を図りたい。

本報告を行なうにあたり、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所の鈴木基之、足立順司氏をはじめ多くの方々のお世話になりました。記して謝意を表します。

なお本稿は、昭和63年度文部省科学研究費奨励研究（A）「近世漆器の製作技法に関する研究」同平成2年度「出土漆器の保存に関する基礎的研究」の成果の一部を含む。

注

（1）「近世以降木地師のロクロ製品製作技法の研究」（1975）宋沢春一郎　京都大学農学部林学科　卒業論文
「ろくろ　ものと人間の文化史　31」（1979）橋本鉄男　法政大学出版局
「日本人の生活と文化　⑤　暮しの中の木器」（1982）須藤　護　日本観光文化研究所編　ぎょうせい

（2）「木地師の習俗　民俗資料選集2」（1974）文化庁　文化財保護部編　国土地理協会

（3）「輪島市史　資料編第6巻」（1973）輪島市教育委員会

（4）「近世尾張における生活什器としての出土漆器資料」（1990）北野信彦　総合郷土研究所紀要35巻　愛知大学
「旧芝離宮庭園出土の草花文様漆絵皿」（1990）北野信彦　高山　優　研究紀要1　東京都港区港郷土資料館
「近世輪島塗の製作技法に関する一調査例」（1990）北野信彦　民具研究89号　日本民具学会

(5)『原川遺跡』袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査』説明会資料（1987）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
(6)『特集　近世陶磁器』(1988) 西田広子ほか　考古学ジャーナル№297　ニュー・サイエイス社
(7)「近世山土漆器に関する一調査方法」(1990) 北野信彦　考古学ジャーナル№322　ニュー・サイエンス社

付図　中世後半・近世遺構全体図（1：600）

原 川 遺 跡
Ⅳ
平成２年度袋井バイパス（掛川地区）
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成３年３月30日

編集発行　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所　株式会社　三　創
静岡市中村町166番地の1
ＴＥＬ（054）282－4031